太宰府市の文化財　第16集

筑前国分尼寺跡 II

1991

太宰府市教育委員会

筑前国分尼寺跡 Ⅱ

市道田中・松本線取付改良計画に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市が昭和63年度から平成２年度にかけて実施した市道田中－松本線拡幅工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書であります。調査地周辺は早くから筑前国分尼寺跡ではないかと推定されていた地区で、近くの水田の畦や民家の庭に今も礎石が残っておりますし、過去の周辺の調査でも鬼瓦や須恵器・土師器といった土器が多数発見されております。

ところが、昭和62年度に筑前国分尼寺跡の具体的な位置が知られるようになり、今回の調査では国分寺と国分尼寺との中間地点が如何なる状況になっていたのか、あるいは別の時代の遺跡が存在しているのかなどいくつかの問題点を抱えて開始いたしました。その結果、弥生時代の集落の一部を調査できたのをはじめとして、古代官道の一部ではないかと考えられる遺構の発見や国分尼寺が昭和62年度に発見された位置に何故おかれたのかもわずかながら解ってきたようです。

ささやかな一書ではありますが、本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助になれば幸いです。

最後になりましたが、技師と共に連日現場作業、整理作業に参加されました作業員の方々に心から御礼申し上げます。

太宰府市教育委員会
教育長　長野治己

例　言

1．本書は、市道田中・松本線取付改良計画に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．調査対象遺跡は筑前国分尼寺跡6地点、筑前国分寺跡1地点である。筑前国分尼寺跡6地点の全てが寺院本体を外れるという結果になったが、行政上の遺跡名称として考え調査遺跡名および本書の題名は「筑前国分尼寺跡」とした。

3．筑前国分寺跡の調査次数は、福岡県教育委員会が実施した調査に続けて番号化することとした。筑前国分尼寺跡における過去の調査は、すべて太宰府市教育委員会が実施している（第Ⅱ章 Tab.1）。

4．調査および整理は昭和63年3月16日から平成3年3月20日までの間で随時実施した。

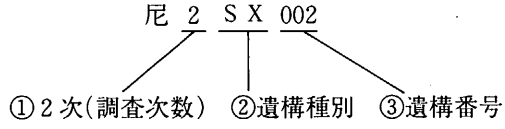
5．開発対象面積は、4600㎡、調査面積の合計は1824㎡である。

6．調査関係者および調査経過は第Ⅱ章に記した。

7．遺構の実測および写真撮影は各調査担当者が行ったほか、全体図の図化はアジア航測株式会社福岡支店に一部委託し、遺構の空中写真は（有）空中写真企画が行った。

8．遺構の実測は、国土調査法第Ⅱ座標系を利用している。よって本文中に示した遺構実測図の方位は、すべてG.N（座標北）である。

9．本書に掲載する遺構番号は、以下のように理解される。



10．遺物の実測・拓本および浄書は、狭川真一、城戸康利、緒方俊輔、山村信榮、中島恒次郎、境一美、古賀里恵子が行い、写真撮影はフォトハウス岡に委託した。

11．出土した金属器の応急処理は、狭川麻子が担当した。

12．本書の執筆は目次に記したとおりであるが、連名になる部分については、各区切りの文末に（　）で示した。

12．本書の編集は、狭川真一が担当した。

目　次

Ⅰ．周辺の遺跡とその調査……(狭川真一)… 2

Ⅱ．調査経過……(狭川・城戸康利)… 5

Ⅲ．調査の概要

(1)　筑前国分尼寺跡第 5 次調査

1．層位……(緒方俊輔)… 7

2．遺構……(緒方)… 7

3．遺物……(緒方・狭川・山村信榮)… 8

4．小結……(緒方)…10

(2)　筑前国分尼寺跡第 6 次調査

1．層位……(狭川)…11

2．遺構……(狭川)…12

3．遺物……(狭川)…12

4．小結……(狭川)…13

(3)　筑前国分尼寺跡第 7 次調査

1．層位……(城戸)…14

2．遺構……(城戸)…14

3．遺物……(城戸・狭川・山村)…17

4．小結……(城戸)…38

(4)　筑前国分尼寺跡第10次調査

1．層位……(緒方)…40

2．遺構……(緒方)…40

3．遺物……(緒方・狭川・中島恒次郎)…42

4．小結……(中島・緒方)…54

(5)　筑前国分尼寺跡第11次調査

1．層位……(狭川)…55

2．遺構……（狭川）…56
3．遺物……（狭川・山村）…57
4．小結……（狭川）…59

(6) 筑前国分尼寺跡第12次調査
1．層位……（狭川）…60
2．遺構……（狭川）…60
3．遺物……（狭川・山村）…61
4．小結……（狭川）…64

(7) 筑前国分寺跡第11次調査
1．層位……（緒方）…68
2．遺構……（緒方）…68
3．遺物……（緒方・狭川）…70
4．小結……（緒方）…73

Ⅳ．総　括……（狭川・山村）…74

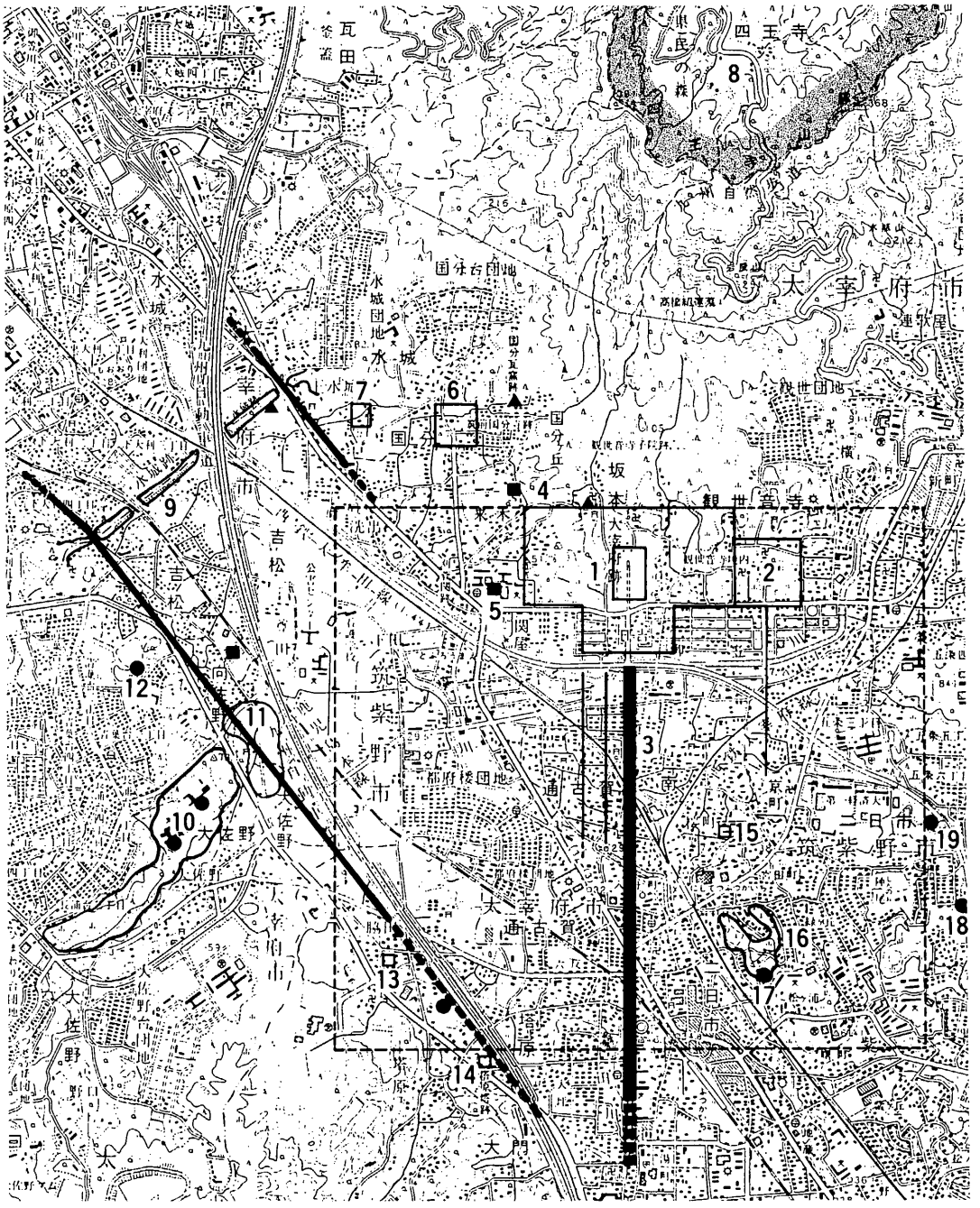


Fig.1 太宰府市周辺遺跡分布図（1/30000、主として奈良時代の遺跡に限った）

1．大宰府跡　2．観世音寺　3．大宰府条坊跡(破線は推定域)　4．御笠軍団推定地　5．遺賀軍団推定地　6．筑前国分寺跡　7．筑前国分尼寺跡　8．大野城跡　9．水城跡
10．宮ノ本遺跡　11．前田遺跡　12．篠振遺跡　13．杉塚廃寺　14．塔原廃寺　15．般若寺跡　16．峯畑遺跡　17．峯火葬墓　18．米噌火葬墓　19．結ケ浦火葬墓

Ⅰ．周辺の遺跡とその調査

筑前国分尼寺跡は貝原益軒の『筑前国続風土記』（1709年）に次のように紹介されている。

國分尼寺址

國分村の二町許西にあり、東西八間、南北六間、大きなる礎二十許猶のこれり。（中略）この寺もいつの時より廃絶せしにや。

この記事を補足するものとして『太宰府旧蹟全図』（1806年）が知られ、ここに礎石とみられる絵とともに「アマ寺ノアト」の記載があり（Fig.2）、具体的な位置の知られている筑前国分寺の西に尼寺跡の存在することが早くから知られていた。しかし『筑前国続風土記』に記されるような多くの礎石は『太宰府旧蹟全図』にはみられず、両者が製作された約百年間のあいだに礎石の大半は失われるとともに、具体的な位置も忘れ去られてしまったものと考えられる。



Fig.2 『太宰府旧蹟全図』にみられる国分尼寺

現代に至って歴史学、考古学、歴史地理学といった分野からの検討がなされるなかで、上記の資料に加えて現存の礎石位置と残存畦畔、古瓦採集地等の情報から今回実施した第７・10次地点付近を中心とする方1.5町の寺域が推定されるに至った。しかし、今回報告する各調査に先だって実施した第４次調査から、南門と推定される総柱の掘立柱建物跡が検出されたのを契機に、再度『筑前国続風土記』、『太宰府旧蹟全図』を検討し直し、先に推定されていた筑前国分尼寺跡の西約100mの地点に方一町程度の寺域を推定することが可能となった（山本信夫・狭川真一「筑前国分尼寺跡の調査」『仏教芸術』183号 1989）。この後、第８次調査（未報告）において寺域の東限を示すと考えられる南北溝が検出されるに至り、先の推定を補強してくれる結果となった。

この推定に従うならば今回の調査地は、その全てが寺域から外れることとなる。したがって国分寺と国分尼寺の中間地点の状況が如何なるものであったかが今回の調査の課題となった。しかし当初の推定も完全に否定されているわけではなかったため、両地点を国分尼寺跡と考えつつその確認と、従来の国分尼寺跡の範囲推定に至る有力な根拠となった現存畦畔の時期決定

も調査の焦点の１つに加えられることとなった。

次に筑前国分寺（国指定史跡）であるが、現在も国分寺と呼称される寺が存続しており、その西側には塔跡も現存している関係から具体的な位置は問題にならないが、その伽藍配置や規模といったことになると発掘調査の成果によらなければならなかった。

筑前国分寺の本格的な発掘調査は昭和51・52年度に実施され、伽藍配置が解明されただけでなく寺の東限を考える手がかりになる遺構も検出され、ほぼ方２町の寺域を推定されるに至っている。

その後国分寺周辺の調査を太宰府市教育委員会が３地点実施し、国分寺の前面にも平安時代の生活空間を偲ばせる遺構が広がっていることを確認するに至っている（未報告）。このような状況を踏まえて今回の調査では、開発地点の位置からこの寺域の西限を限る施設が検出される可能性が考えられた。

また、国分尼寺跡第12次調査地点西端付近を水城東門から大宰府に至る古代官道が通過していた可能性が考えられており、この官道の発見にも期待が注がれた。

さて、これら国分二寺を取り巻く歴史的環境を概観してみたい。

筑前国分二寺が建立された位置は、大宰府政庁の西後方、大野城跡（665年建設・国指定特別史跡）のある大城山（標高410ｍ）の南西山麓部分で、この山から派生する小丘陵に挟まれた形の谷部分に形成された小規模な扇状地上にあたる。

従来から国分尼寺に推定されていた地点の北側には、丘陵中位に陣ノ尾遺跡が展開し、なかでも陣ノ尾1号墳は太宰府市内における数少ない横穴式石室を保有する円墳である（太宰府市指定文化財）。また国分尼寺の南に広がる水田下には弥生時代後期頃の国分千足町遺跡がある。

大城山の西端には水城（664年建設・国指定特別史跡）が築かれ、博多湾から福岡平野に進入する外敵に備えている。この水城の両サイドを貫通する形で当時の官道が設営されていたものと考えられ、水城と官道との交点にはそれぞれ門が建設されていたらしく、現在も付近の民家などに礎石が散見される。

この水城の東門を通り抜け官道を大宰府に向かって進むと、左手に国分二寺の伽藍が展開するのを目の当たりにしながら、大宰府の都市へと入っていく景観が想定されるのである。古代人の雄大な都市計画構想が窺える。

ところが国分二寺を取り巻く多くの遺跡群の解明は、まだ途についたばかりである。しかし、太宰府市およびその周辺は近年の土地高騰と好景気による開発ラッシュで大きな変貌を遂げようとしている。その陰でこれらの遺跡は虫喰い的に破壊の危機に曝されているのが現状であり、詳細な調査と保護の手が差し伸べられねばならない時期にきているのもまた実情である。

次頁に過去周辺部で実施された遺跡調査一覧表（Tab.1）および位置図（Fig.3）を掲げるので参照されたい。

Tab.1 筑前国分尼寺跡周辺における発掘調査地点一覧表

番号	調査次数	所在地	調査期間	面積㎡	文献
1	筑前国分寺跡第1次	大字国分字堀田692他	1960. 1	−	1
2	2次	川添615.616	1973	−	2
3	3次	堀田	1976. 3 .10～ 3 .31	−	3
4	4次	堀田692.693	1976.10. 1 ～11.30	400	4
5	5次	堀田736-1	1977. 6 .21～ 7 .12	83	5
6	6次	川添639.653他	1977.11.19～1978. 1 .19	950	5
7	7次	堀田702-5	1977.12. 9 ～12.10	30	5
8	8次	川添645.648	1979. 6 . 5 ～ 8 . 9	252	6
9	9次	川添609他	1983.10.21～11.23	340	−
10	10次	堀田728-3.4.5	1985. 6 .18～ 7 .10	123	−
11	11次	田中74	1990. 3 . 8 ～ 4 . 6	248	本報告
12	12次	堀田655他	1990	200	−
13	13次	川添621	1991. 1 .28～	890	−
14	筑前国分尼寺跡第1次	大字国分字松本461-1.468-1他	1980. 6 . 3 ～ 6 .10	78	7
15	2次	松本457	1980. 7 .24～ 8 .28	53	7
16	3次	松本462-2	1983. 3 .17～ 4 .18	399	−
17	4次	松本449-6	1988. 3 . 1 ～ 3 .31	500	−
18	5次	田中80	1988. 3.16～ 4 . 6	67	本報告
19	6次	松本432-16	1989. 5 . 8 ～ 6 . 3	348	本報告
20	7次	松本471-1他	1989. 6.14～10. 3	420	本報告
21	8次	松本455-1	1989. 8 .21～ 9 .30	325	−
22	9次	松本449-1	1989. 9 .28～11. 8	280	−
23	10次	松本469-1他	1989.10.30～1990. 1.15	446	本報告
24	11次	松本450他	1989.12. 1 ～12.22	195	本報告
25	12次	松本428-2他	1991. 1 . 5 ～ 1 .20	100	本報告
26	13次	陣ノ尾140-1	1991. 1 .16～	−	−
27	陣ノ尾跡第1次	大字国分字陣ノ尾100他	1980. 6 . 5 ～ 7 .21	136	7
28	2次	妙見1030-4他	1981. 1 .21～ 3 .31	2900	7.8
29	国分千足町遺跡第1次	大字国分字千足町489-2	1985. 6 . 4 ～ 6 .15	281	−
30	2次	千足町495-23他	1990. 8 . 7 ～ 9 .30	600	−

文献

1	鏡山猛『大宰府都城の研究』	風間書房	1968
2	藤井功・亀井明徳『西都大宰府』	NHKブックス	1977
3	九州歴史資料館年報－昭和50年度－	九州歴史資料館	1976
4	筑前国分寺－昭和51年度発掘調査概報－	福岡県教育委員会	1977
5	筑前国分寺－昭和52年度発掘調査概報－	福岡県教育委員会	1978
6	史跡筑前国分寺跡および国分寺瓦窯跡－環境整備事業実施報告書－	福岡県教育委員会	1980
7	筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡－太宰府町の文化財第4集－	太宰府町教育委員会	1981
8	大宰府条坊跡－太宰府町の文化財第5集－	太宰府町教育委員会	1982

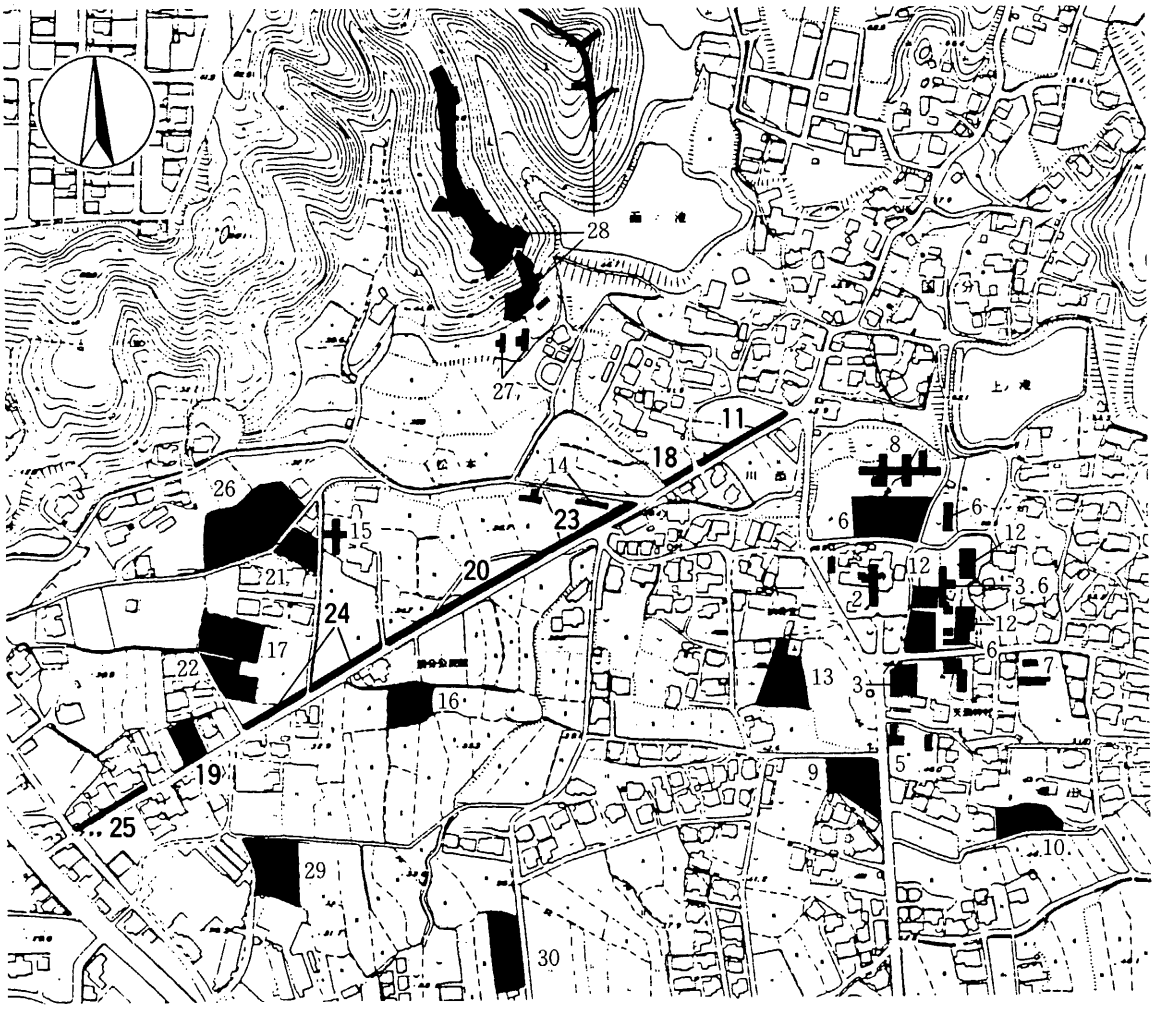


Fig.3 筑前国分尼寺跡周辺における既調査地点（1/5000）

Ⅱ．調査に至る経過

太宰府市大字国分の集落から国道３号線に取り付く市道田中・松本線は、昭和２年頃に蛇行する農道を直線に改良のうえ、幅員約２間（４ｍ程度）として建設されたものであるが、ここを通過する自家用車をはじめとする交通量は近年急激に増加し、また周辺の水田は次々に宅地へと変貌しつつある。この実態を踏まえて太宰府市では、約12ｍの幅員を有する道路（総延長575m）に改良しようとするのが今回の計画である。計画は、昭和58年度に詳細計画が立てられ、昭和59年度から市道田中・松本線取付改良計画として建設省に協議され、同年以降用地の確保および補償に取り掛かった。併せて社会教育課文化財係にも協議がなされた。この計画地点はⅠでも述べたとおり筑前国分尼寺跡の寺域推定範囲を含んでおり、改良工事に際しては事前に埋蔵文化財の調査を実施する必要があると判断されたため、改良工事関係の窓口である太宰府市建設課と協議を重ね、一部国からの補助を受けて発掘調査を実施する運びとなった。

調査は道路拡幅部分についてのみ実施した。拡幅幅は約６ｍで総延長575ｍが調査対称範囲として設定された。そのうち西側約半分はすでに宅地となっており、建物の移動した後試掘調査をし、その結果に基づいて本調査を実施することとした。

本調査は、調査に着手した順番に次数化することとしているため途中に民間の開発行為に伴う発掘調査が入ったため、一連の調査でありながら番号が離れてしまうという結果となっている。また、用地買収や水稲耕作時における調査の問題などの関係から一定の方向から順に調査を進めることができなかったため、調査次数がバラつく結果にもなってしまっている。

調査の結果、筑前国分寺跡第11次調査では平安時代の溝、土壙、ピット、筑前国分尼寺跡の各調査では弥生時代中期頃の竪穴、土壙、ピット、溝、奈良時代の溝、平安時代の井戸、溝、ピットなどを検出した。

この結果、当初予想した筑前国分尼寺に直接関係する遺構は、検出できなかったが、国分二寺の中間地点の様相をわずかではあるが知ることができたのは大きな成果であった。

調査は太宰府市教育委員会が実施し、昭和63年３月16日から平成３年３月20日までの間で随時行った。出土品の整理については平成２年度を主たる整理期間として実施した。

調査および整理関係者は以下のとおりである。

調査主体	太宰府市教育委員会		
総　括	教育長	藤　壽人（～平成元年６月）	
		長野　治己（平成元年８月～）	
庶　務	教育部長	西山　義則（昭和63年12月～）	
	社会教育課長	花田　勝彦（～昭和63年11月）	
		関岡　　勉（昭和63年12月～）	

文化財係長	鬼木富士夫
主事	岡部　大治
	白水　伸治
	川原　和典（昭和63年４月～11月）
技師	山本　信夫
	狭川　真一
	城戸　康利（平成元年４月～）
	緒方　俊輔
	山村　信榮（平成元年４月～）
技師（嘱託）	山村　信榮（～平成元年３月）
	中島恒次郎（平成元年４月～）
	狭川　麻子（平成元年４月～）

調査参加者は次のとおり。（順不同、敬称略）

中島タキノ	中島タカ子	中島ウメノ	中嶋はじめ	松島順子
萩尾万寿子	田原智恵子	徳永モモエ	白水イセノ	田中勝江
江西照子	南　美智子	平島優子	三上智久	城戸邦典
白水健雄	藤原重登	八柳健之助	佐藤正光	竹林義之
花園美千子	山下澤子	渡辺ひとみ	楠林静香	楠林トミキ
吉田正子	渡辺太郎	服部大介	岩男澄子	川原田美千代
早田ミツル	米原峰子	宮田恵子	中嶋幸子	中嶋さなみ
岸　邦子	田口美智子	内田文子	斉藤徳美	田部澄博
高原改良子	大迫フミ子	江島スミエ	近藤秋枝	戸渡ひろみ
白木ハルミ	西山雅子	大田茂子	太田ヤス子	大田敬子
古川トミ子	古川民子	古川ヨシ子	宮原圭子	宮原ハナエ
高鍋キミヨ	山本洋子	柴田ツキエ	大田八重子	中溝洋子
境　美佐子	高木宗代	田中平助	萩尾　昇	萩尾泰祐
柴田義雄	今崎良男	鬼木寅雄	萩尾須磨子	萩尾カネ子
田中テル子	梶山さつき	納富明美		

整理参加者（順不同、敬称略）

原野正子	吉田勝子	横山美津子	田中典子	林美知子
中村房子	野田美子	境　一美	古賀里恵子	塩地潤一

Ⅲ．調査の概要

(1) 筑前国分尼寺跡第５次調査

調査地は太宰府市大字国分80、84-1の各一部である。東西２区に分けて調査したが、西区のトレンチ(Pla.6)では昭和48年に起きた水害の際にかなり乱れており、詳細な調査はできず、東区についてのみ本調査を実施した。調査面積は東区で67㎡、調査期間は昭和63年３月16日～昭和63年４月６日まで実施し、緒方俊輔が担当した。以下の報告は東区についてのものに限った。

１．層位

表土除去後、茶灰色土層があり、その下で上・下２面の遺構面を検出した。上層遺構面と下層遺構面の間の包含層は土色により２層に分層して遺物を取り上げた。上層を明茶色土層、下層を暗茶色土層とした。地山は明灰色粗砂層である。後日、西側に一部トレンチを入れ、茶灰色土層の下層に礫層を検出した。5SD030との関係は不明である。西側トレンチの地山は花崗岩風化土であった。(Fig.4)

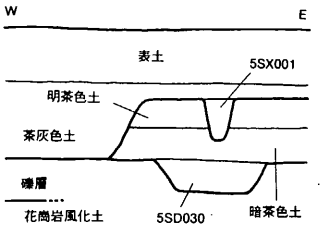


Fig.4 土層模式図

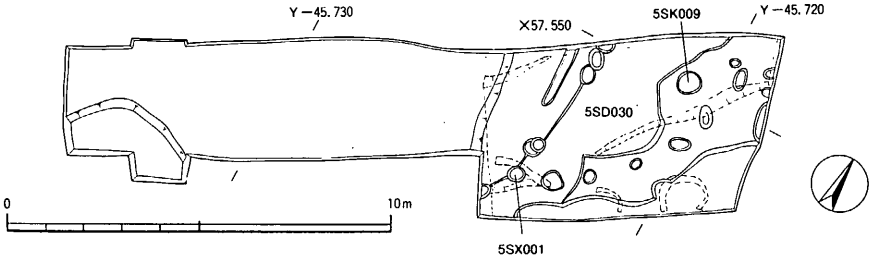


Fig.5 筑前国分尼寺跡第５次調査遺構配置図（1/200）

２．遺構

上層遺構（Fig.5 Pla.6）

土壙

5SK009　径0.6ｍ、深さ0.2ｍを測る土壙。土師器小皿ａ片、黒色土器Ｂ類椀ｃ片、瓦片などが出土している。

その他の遺構

5SX001　径0.4ｍ、深さ0.3ｍを測るピットである。

下層遺構（Fig.5 破線表示分 Pla.7）

溝

5SD030　幅６ｍ、深さ0.3ｍの南北方向の流路。排土置き場の関係上、調査区の東側のみ

しか掘ることができなかった。長さは南岸で9ｍ分検出（北岸は2ｍ分検出）した。溝の方向はおよそN-38°-Eである。

3．遺物

5SD030出土土器（Fig.6 Pla.8）

土師器

坏a(1)　底径8.4cmを測る。内・外面にススが付着する。底部はヘラ切りされる。

椀c(2)　高台径7.4cmを測る。底部は風化のため不明確であるがヘラ切りと考えられ、外底面にかすかに板状圧痕が遺る。

5SX001出土土器（Fig.6 Pla.8）

土師質土器

脚付盤(3)　幅2.5cm、厚さ1.3cm、高さ1.4cmを測る脚部破片である。胎土はやや粗く、径1～3㎜の石英・長石・金雲母を多く含む。ナデによって丸く仕上げている。

白磁

椀(4)　Ⅳ-2類。高台径6.5cmを測る。高台は幅広く削り出しが浅い。見込みに段を持つ。胎土は灰白色を呈し、黒色細粒をわずかに含み、やや粗目で気泡がある。釉は明灰白色で高台を除く全面に施される。

暗茶色土層出土遺物（Fig.6 Pla.8）

土師器

椀c(5)　現存高3.0cmを測り、体部に丸味を有する。

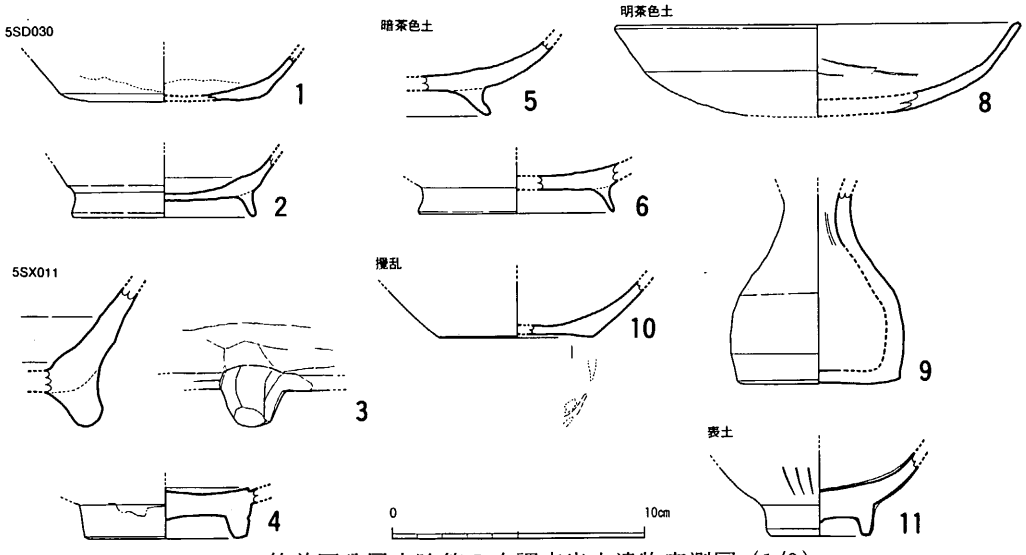


Fig.6　筑前国分尼寺跡第5次調査出土遺物実測図（1/3）

黒色土器A類

椀c(6)　現存高1.9cm、高台径7.8cmを測る。底部はヘラ切りされ、摩滅のため内面の調整不明である。

石製品

砥石（Pla.9-7）　長さ12.5cm、幅8.5cm、厚さ3.5cmを測る砂岩製の砥石である。底辺がややへこむ台形状を呈する。片面の中央部と撥形に開く端部に幅1～3㎜の溝があり、なかでも中央部にある溝は「×」形に交差する。四隅は自然風化面のままでその他は全面に研磨痕が認められる。

明茶色土層出土土器（Fig.6 Pla.9）

土師器

丸底坏a(8)　口径16.2cmを測る。内面にミガキbのコテあて痕が遺り、底部はヘラ切りされる。

小壺(9)　現存高7.6cm、底径6.5㎜を測る。底部はヘラ切りで、後に面調整を行っている。体部外面はヨコナデで、とくに体部下位は強いヨコナデを施す。頸部内面は未調整で、しぼり痕がある。色調は淡黄灰色。胎土は密で、径1㎜程度の石英・長石所々含む。

その他の出土遺物（Fig.6 Pla.9）

越州窯系青磁

坏(10)　Ⅰ-1類。底径6.0cmを測る。底部外面周縁部に目跡が遺り、部分的に赤褐色に変色している。底部は若干上げ底風である。胎土は暗茶灰色を呈し、気泡が見られるが精良で、混入物は極わずかに径1㎜ほどの石英を含む程度である。釉は暗黄緑色に発色する。施釉範囲は外底周縁部以外の全面である。撹乱出土。

龍泉窯系青磁

小椀(11)　Ⅴ類。現存高3.4cm、高台径4cmを測る。外面に鎬のない蓮弁文がめぐる。胎土は濃灰色～明灰色で、硬質。底部外面の露胎部は明橙色を呈し、一部目跡状のものが遺る。釉は淡緑色で外底面以外の全面に施されており内外面ともに貫入が見られる。表土出土。　（緒方）

瓦類（Fig.7）

1は中心飾りの位置に縦方向の突線を配した均整唐草文軒平瓦とみられる。明茶色土層出土。2は「介」と刻した文字瓦で、Ⅻ類。明茶色土層および礫層出土。3は「佐瓦」の左字を刻した文字瓦で、Ⅱ-7-a類。表土出土。この他に「平井」と推定される文字瓦（Ⅰ-6類）が5SX009から出

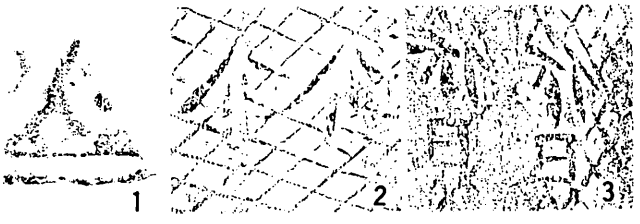


Fig.7　筑前国分尼寺跡第5次調査出土瓦類拓影（1/2）

土している。　　（狭川）

石製品（Fig.8）

管玉(3)　長さ0.9cm、幅0.4cm、孔径1.5～1.8mmを測る碧玉製管玉である。茶灰色土層出土。（緒方）

石器（Fig.8）

磨製石剣(1)　シルト岩を用いたもので刃部と茎部の境部分に該当し、鎬を作らないタイプである。境目の両端には打ち欠きが有り、柄との装着のために成されたものと思われる。弥生中期以降の所産であろう。5SD030 出土。

打製石鏃(2)　安山岩の不定形剝片を用いた平基形のものである。剝離には一定のパターンはなく、技術的の後退した時期のものであることを示している。先端はステップ気味に欠け、さらに摩耗している。弥生時代中期以降のものであろう。5SD030 出土。　（山村）

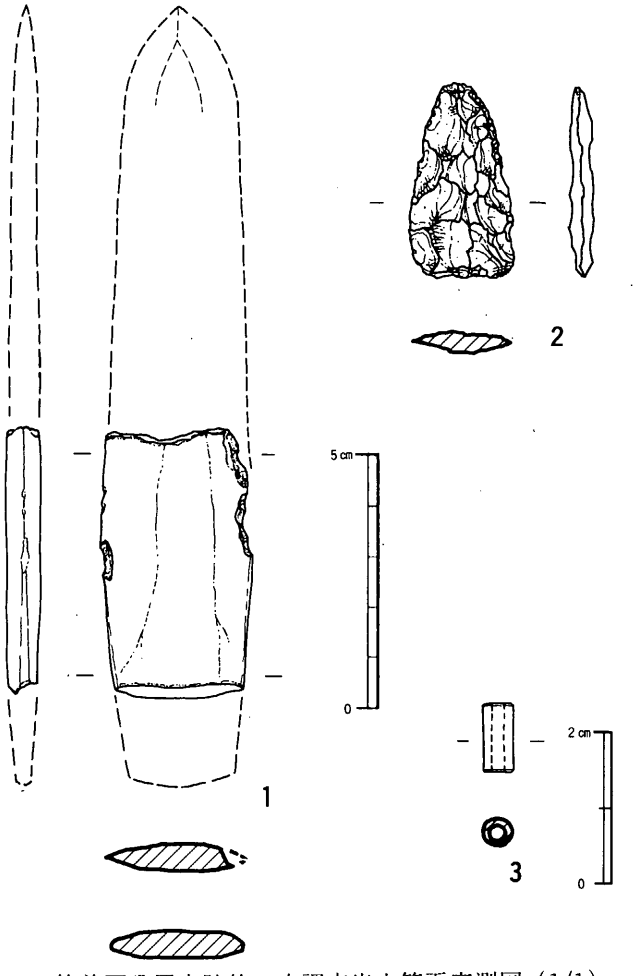


Fig.8　筑前国分尼寺跡第５次調査出土管玉実測図（1/1）
石器実測図（2/3）

４．小結

上層遺構の年代は 5SX001 出土土器から大宰府 XII ～ XIII 期、下層遺構は 5SD030 出土土器から大宰府 VIII 期（大宰府史跡第35次 SK678）頃と考えられる。明茶色土層は出土土器の年代から大宰府 XII 期頃とみられる。

(2) 筑前国分尼寺跡第6次調査

調査地は、太宰府市大字国分432-16の一部である。調査の関係から残土置き場として利用できる部分についても一部調査を実施する機会が得られたので併せて行うこととした。現地での調査は昭和63年4月13日から6月2日まで実施し、調査面積は348㎡で、狭川真一が担当した。

1．層位

北隅の一部を除いて耕作土を除去するとすぐに遺構面（黄色粘土の地山）が検出され、包含層および遺構の上面は削平されているものと思われる。北隅では僅かに遺物を含む黄茶色土が残存しておりさらに北へと広がっている状況が観察された。

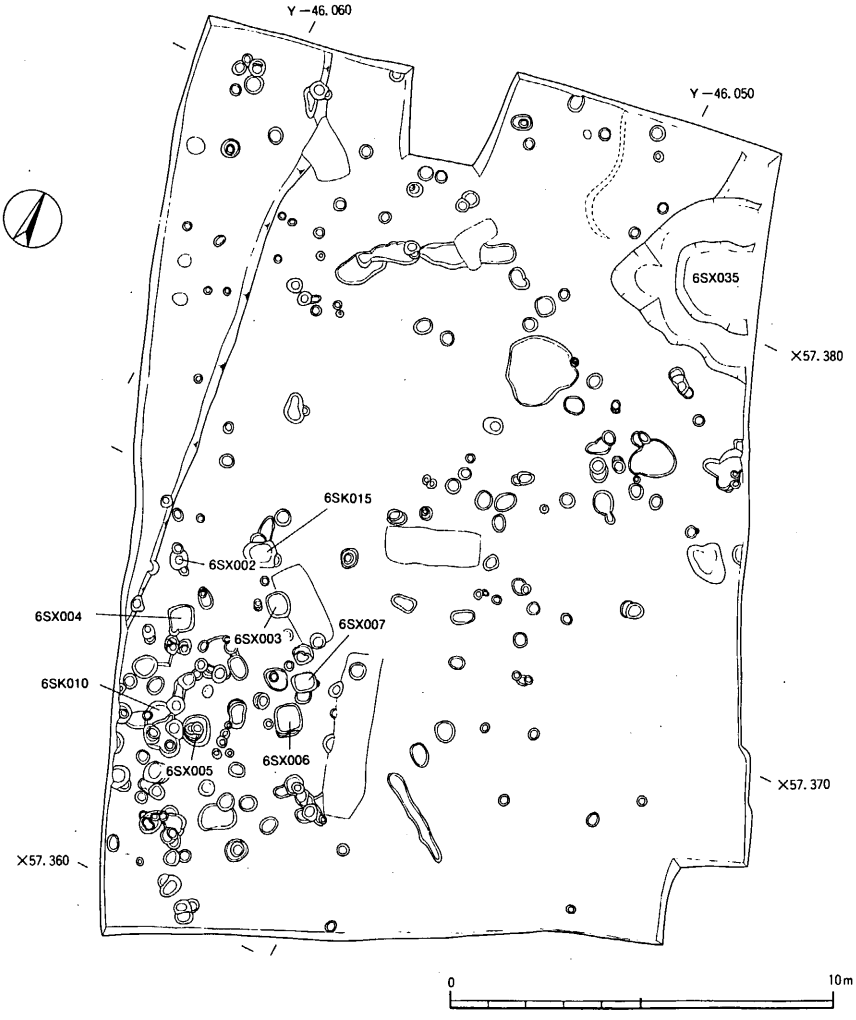


Fig.9 筑前国分尼寺跡第6次調査遺構配置図（1/200）

2．遺構（Fig.9 Pla.10・11）

土壙

6SK010　長さ1.25m、幅0.7m、深さ0.15mを測る楕円形を呈している。埋土は黒褐色土の単一層である。

6SK015　径0.7m内外、深さ0.15mを測るいびつな円形を呈する。

窪状遺構

6SX035　今次の調査では全体形を知るには至らなかったが、検出長5.7m、検出幅3.6m以上、深さ0.5mを測る。埋土は黒褐色土からなる。

その他の遺構

6SX001　砥石が出土したピットである。

6SX003・004・005・006・007　一辺が約0.6m～0.7m、深さ約0.3m～0.4mの隅丸長方形を呈するピットである。形状や規模の上からこれらは近似する性格のものと考えられ、掘立柱建物の一部である可能性もある。003～006でまとまる可能性も考えられるが、ここでは可能性の提示にとどめておきたい。

3．遺物

6SK010出土土器（Fig.10 Pla.13）

ミニチュア土器

高坏形土器(5)　口径10.4cm、高さ8.2cm、脚部径7.4cmを測る。体部外面は指圧により成形され、体部内面はナデによって調整される。胎土中に砂粒を多量に含む。

この他に弥生中期の広口壺片（丹塗り）や、甕片などが出土している。

6SK015出土遺物（Fig.10 Pla.12）

土製品

投弾(7)　長さ4.0cm、径2.1cm。

これ以外に弥生中期の甕片、広口壺片、安山岩製フレイクなどが出土している。

6SX035出土土器（Fig.10 Pla.13）

土師器

壺形土器（1・4）　1は小型の壺で頚部の復原径9.6cm、現存高7.8cm。体部外面に横方向のヘラミガキを施す。4は二重口縁の壺または甕の一部分とみられる。突帯以下の外面はヘラ状のもので斜め方向の文様を配し、内面はヘラミガキを施す。

甕形土器（2・3）　わずかに内湾する「く」字状口縁を有するもので、口径14.0cm、16.5cmを測る。体部内面はヘラケズリ、他はヨコナデである。

6SX005出土土器（Fig.10 Pla.13）

弥生土器

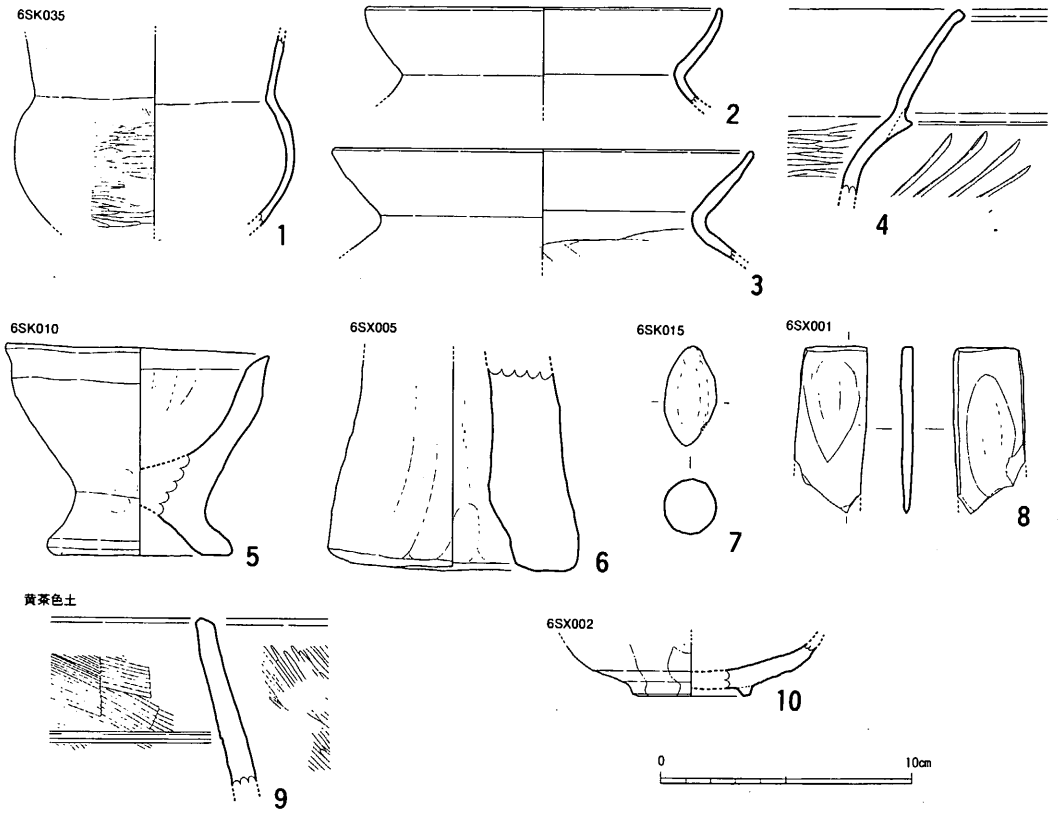


Fig.10 筑前国分尼寺跡第５次調査出土遺物実測図（1/3）

器台形土器(6) 底径10.0cmで指圧により成形される。

6SX001 出土遺物（Fig.10 Pla.13）

石製品

砥石(8) 最大幅2.8cm、現存長6.7cm、厚さ0.5cmの桂化木製である。両面とも使用による窪みが認められる。

その他の出土土器（Fig.10 Pla.12・13）

９は内傾する口縁部を有する鉢形を呈するものと想像される。外面は斜め方向のミガキ、内面はハケ目である。口縁端部にススが付着している。時期不詳。黄茶色土中出土。10は唐津焼の椀の底部である。高台径2.4cmで削り出しによる。内面に目跡状のものが遺っている。釉は明緑灰色に発色する。6SX002 出土。

４．小結

第６次調査地は、他の調査地に比べて安定した地盤であり遺構の大半は弥生時代中期のものと判断される。周辺における過去の調査でも同時期の遺構が若干検出されており、当該期の集落の一部であることは疑いない。また、古墳時代に含まれる遺構・遺物も検出されており、今後の周辺の調査に期待される。

(3) 筑前国分尼寺跡第７次調査

調査地は、太宰府市大字国分462-6、475-2、471-1、の一部と473、470-2である。調査面積は、約420㎡で、調査は、平成元年６月14日から10月３日まで実施した。標高は、東側で約35.00m、西側で約33.5mである。特に西端部では、後世の耕地改良のため削平をうけており、また湧水が激しかったために排土置き場として利用することとした。調査は、城戸康利、緒方俊輔、中島恒次郎が担当した。

１．層位

耕作土を除去すると、まず近世に行われたと思われる田普請の痕跡があらわれた（7SX002）。この面からは、近世の染付とともに鬼瓦片および瓦片が出土している。この下には、茶色土が約50cm、さらに灰色粘質土層、茶褐色土層が堆積し包含層を形成している。灰色粘質土層には、一部分で瓦片が多量に出土している（7SX015）。茶褐色土層は、Ｙ＝-45,848m以西、Ｙ＝-45,855m以東付近に分布しており、特に東端部で遺物が多く出土している（7SX011）。これらの包含層下に遺構面である灰色砂礫層を検出した。この灰色砂礫層は扇状地形により形成されたものと考えられる。また7SD023から7SD030にかけては黄色の粘土地盤が一部残っている。(Fig.11)

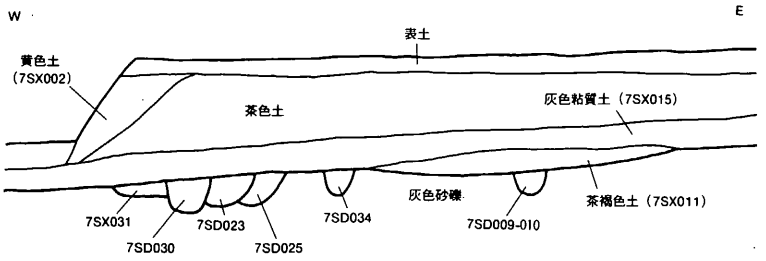


Fig.11　土層模式図

２．遺構（Fig.10 Pla.14・15）

溝

調査区を横断するかたちで7条のほぼ同一方向の溝が検出された。東から順に7SD001・7SD009・7SD010・7SD034・7SD027・7SD035・7SD030である。

7SD001　調査区東端で約６ｍにわたり検出した幅６ｍの２段掘りの溝である。深さは１段目が0.1m、２段目が0.45mほどである。方向はおよそN-5°30′-Wである。壁はかなり乱れており、床面も凹凸が激しく自然流路の可能性もある。埋土は拳大の礫を含む灰色砂である。出土遺物は奈良時代の土器を中心に弥生土器、瓦片がある。

7SD009　幅２ｍ、深さは最深部で0.7mを測る。およそN-6°20′-Wの方向で約６ｍにわたり検出した。床面は北側が１段深くなっており灰色粘質土が堆積している。上層は茶灰色土の堆積である。遺物は上下層とも時期的な差はなく８～９世紀の土器を中心としている。

7SD010　幅２ｍ、深さ0.2mを測る。ほぼ真北方向に5.7mにわたり検出した。埋土は茶灰色土の単一層である。床面は凹凸が激しい。7SK018を切る。遺物は須恵器、土師器、瓦、緑

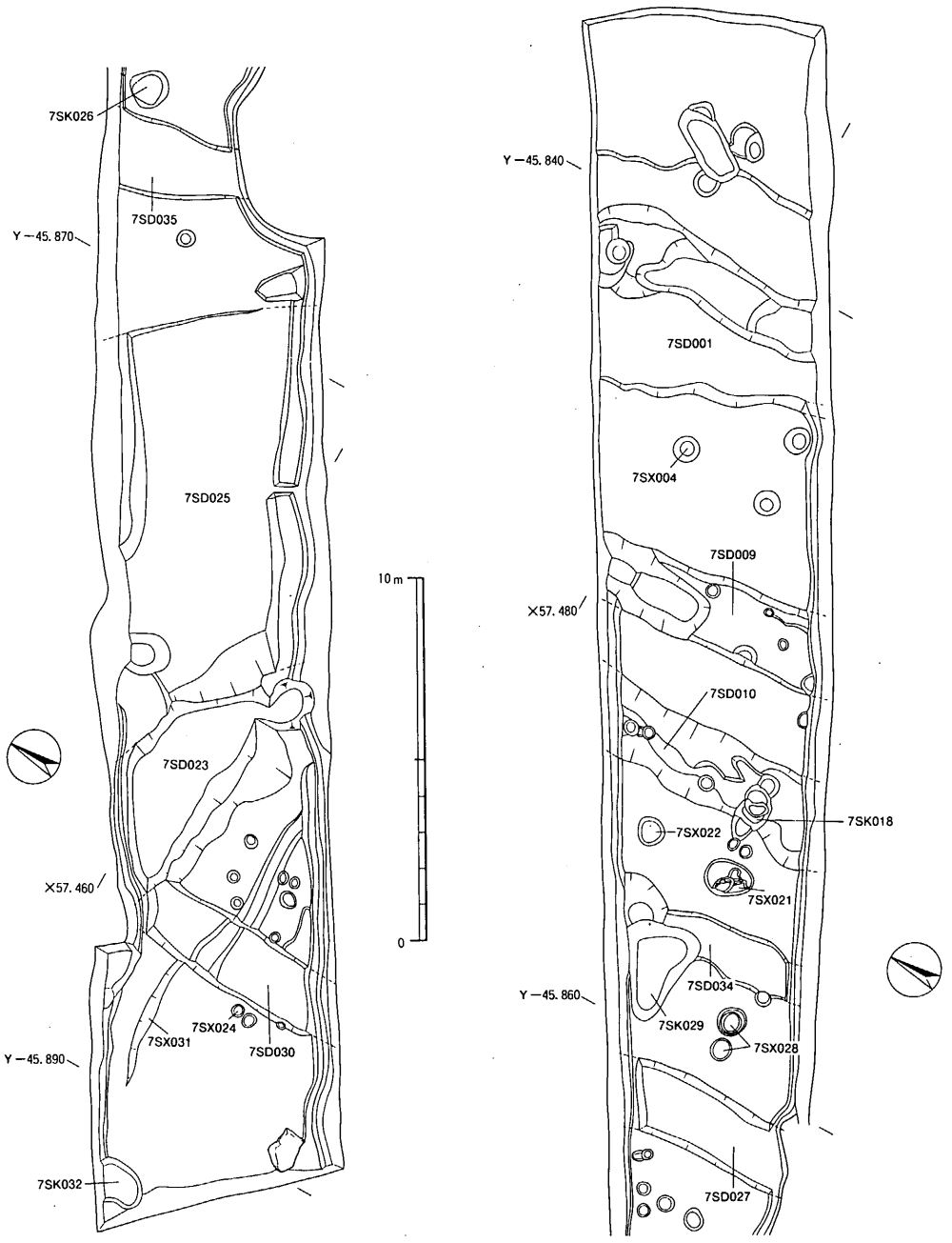


Fig.12　筑前国分尼寺跡第７次調査遺構配置図（1/200）

釉陶器、黒色土器のほか弥生時代の鋳型片を出土した。

7SD023　調査区西部で検出した自然流路である。幅は約13.8ｍである。深さは最深部で0.5ｍを測る。方向は検出距離が短く不明であるが床面の傾斜などから考えて、おおよそ北西方向に流れていたと思われる。埋土は上層が暗茶色土、下層が灰色砂層に分けられるが、出土

遺物からは時期差は認められない。遺物は須恵器、土師器であり8世紀中頃に考えられる。

7SD025　7SD023にほぼ重なるようにして検出された自然流路である。幅約10.5mであり、深さは0.2～0.3mである。壁面は床面から緩やかに立ち上がっており不明瞭である。方向は7SD023同様不明であるが、おおよそ北西方向と思われる。埋土は角礫の混じる茶黒色土であり、遺物も大きな破片を含むことからかなりの流速を持った氾濫の流れと考えられる。出土遺物は弥生時代中期のものである。

7SD027　幅1.9m、深さ0.35mである。ほぼ真北方向で4.3mにわたり検出した。埋土は上下2層に分けられ上層は黒茶色土で須恵器坏片、高坏片、瓦片が、下層は角礫を含む灰色砂層で須恵器片、軒丸瓦片、鬼瓦片を出土している。

7SD030　幅1.9m、深さ0.3mを測る。およそN-4°20′-Wの方向で約5.5mにわたり検出した。プランは黄色の粘土地盤に掘り込まれているためか明瞭で、壁も直線的に立ち上がっている。埋土は暗茶色土である。北側では7SD023を切っている。遺物は須恵器片、土師器坏片、瓦片を出土している。

7SD034　幅1.5m、深さ0.1mを測る。およそN-9°50′-Wの方向で4.5mにわたり検出した。西側壁のプランは乱れており、7SK029を切る。床面は北側に向かってやや低くなるが、ほぼ平坦である。埋土は茶灰色砂質土の単一層からなる。遺物は出土しなかった。

7SD035　幅1.9m、深さ0.2mである。およそN-9°30′-Wの方向で約3.2mにわたり検出した。西側壁はなだらかであり立ち上がりは明瞭でない。埋土は茶灰色土の単一層からなり、遺物は出土しなかった。

土壙

7SK018　7SD010の床面で検出した。2m×0.8m、深さ0.5mの楕円形をしている。床面は凹凸が激しい。遺物は須恵器片が少量出土しただけである。

7SK026　7SD035の東側で検出した。径1mの略円形をしており深さは0.4mである。遺物は弥生時代中期の甕、壺、器台片が出土した。

7SK029　調査区中央で検出した。7SD034に一部切られている。規模は長さ2.7m、検出幅2m、深さ0.3mであり隅丸の略三角形をしている。

7SK032　調査区西端で検出した。長さ1.2m以上、幅1.2m、深さ0.2mである。一部しか検出しておらず詳細は不明であるが、楕円形になるものと思われる。出土遺物は弥生時代中期の甕片が少量である。

その他の遺構

7SX002（Pla.16）　調査区西側で現耕作土の直下から検出した。40cmほどの石を並べ土手を造成している。この石列の延長は現在の段落ちに一致し、近隣の人の話によると段落ちは近世に田普請を行ったときのものであると言うことから、この石列はこの時のものと思われる。出

土遺物は近世陶器と瓦片で、瓦片は田普請の際に下層の遺物が巻き上げられたと考えられる。

7SX011　調査区東側に検出された包含層の一部で遺物が集中して出土した地点を指す。遺物は８～９世紀前半代のものを出土したが、切り合い関係からやや下るものと思われる。

7SX015（Pla.16）　調査区西側Ｙ＝-45,880～-45,885ｍにおいて、包含層である灰色粘質土のから瓦溜り様のものを検出した。瓦片とともに白磁が出土した。平安時代後期以降に廃棄されたものと考えられる。

7SX031　調査区の西側で 7SD030 に切られて検出された黒茶色土の薄い包含層である。7SD030 の東側には伸びない。出土遺物は８世紀代の須恵器を中心とし、他に弥生土器、鎌と思われる鉄製品がある。

7SX004・021・022・024・028・036　いずれも奈良～平安時代のピットである。

３．遺物

7SD009出土土器（Fig.13 Pla.17）

須恵器

坏蓋３(1)　復原口径15.2cm、現存高1.3cmを測る。天井部はヘラ切り後、ナデ調整を行う。

壺(6)　口径22.2cm、現存高8.0cm、体部最大径は口縁部近くにあり23.4cmを測る。口縁は短く大きく開き、内面に薄い灰かぶりがある。調整はヨコナデである。体部の凹凸は粘土紐の継目の可能性がある。焼成は良好。

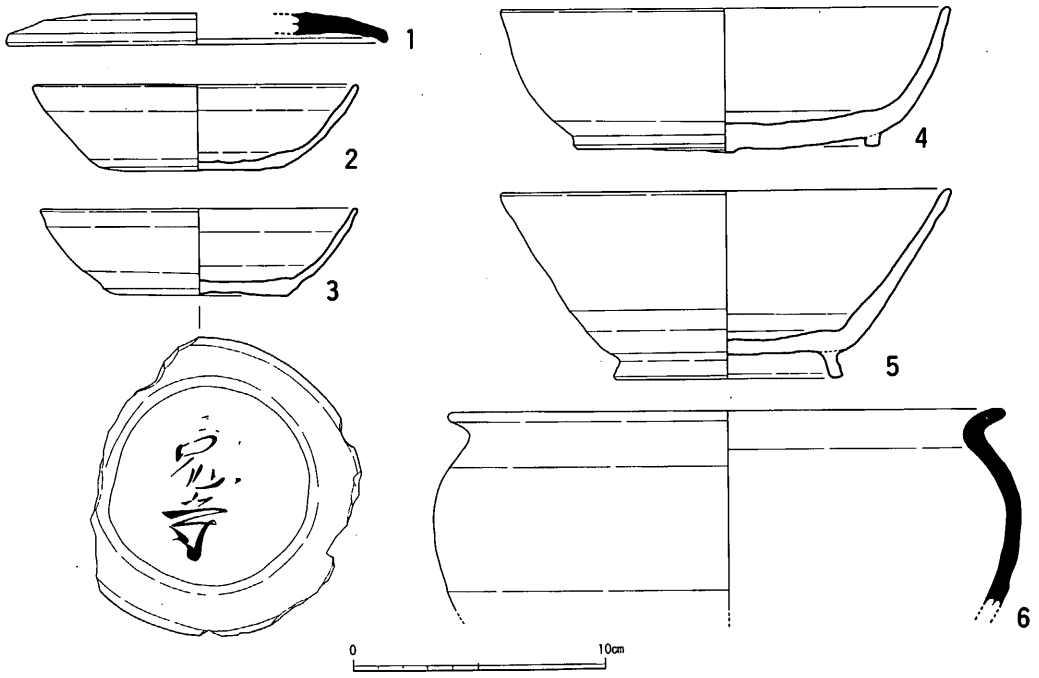


Fig.13　7SD009 出土土器実測図（1/3）

土師器

坏ａ（２・３）　２は口径13.0cm、器高3.5cmを測る。体部は少し内湾しつつ立ち上がる。焼成はあまく、風化が激しいため調整は不明である。３は口径12.5cm、器高3.6cmを測る。体部はやや内湾しつつ立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。体部はヨコナデ調整、底部外面はヘラ切り未調整である。底部外面には墨書がある。消えかけており文字は判読できないが「□寺」の可能性がある。

椀ｃ（４・５）　４は口径17.8cm、器高5.8cmを測る。底部の境は明瞭でなく丸みを持って体部につながる。全体に器壁は厚く、短い断面四角形の高台が付く。内面は粗いナデ、外面はヨコナデ調整である。焼成はややあまく、風化が進んでいる。５は口径18.0cm、器高7.6cmである。体部は直線的に立ち上がり、深い。体部内面はナデ調整、外面下半には回転ヘラケズリを施す。焼成はあまい。

他に古墳時代前期の土師器高坏、甕片などがある。

7SD010 出土土器（Fig.14・15 Pla.18～20）

須恵器

坏蓋３（１～４）　１は口径13.2cm、現存高2.0cmを測る。体部から天井部は丸みを持ち、口縁端部は三角形につくる。天井部外面は広い範囲にヘラ切り跡が遺る。２は口径12.2cm、現存

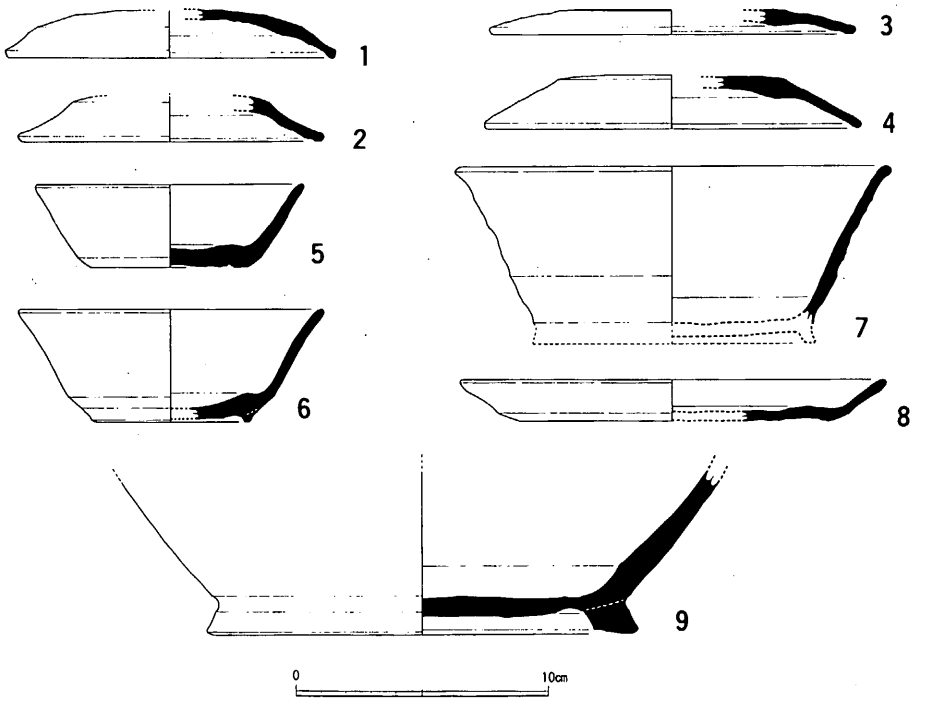


Fig.14　7SD010 出土土器実測図（Ⅰ）(1/3)

高1.8cmを測る。丸い口縁から体部は、緩く外反しながら天井部へ接続する。口縁端部の屈曲は退化しており内面に凹線を入れる。天井部外面はヘラ切り、他はナデ調整である。3は口径14.6cm、現存高1.0cmである。かなり偏平であり、口縁部の屈曲はほとんど遺らない。口縁内部に緩い凹線を巡らす。天井部はヘラ切り、他はナデ調整である。4は口径15.0cm、現存高2.1cmである。丸い口縁から直線的に天井部へつながる。天井部はヘラ切り未調整で平坦である。他はナデ調整である。

坏(5)　口径10.8cm、器高3.3cmを測る。体部は直線的に立ち上がる。底部外面端には粘土の乱れがあり高台が付いていた可能性を窺わせる。

坏c(6)　口径12.2cm、器高4.5cmである。やや外反する体部に小さな高台が付く。体部外面から内面はナデ調整である。

椀c(7)　口径17.4cm、現存高6.4cmを測る。体部は直線的に開き、口縁部は肥厚して丸くつくる。調整はヨコナデを施す。

皿a(8)　口径17.0cm、器高1.7cmを測る。底部から大きく開く短い体部を持ち、口縁部で少し肥厚しながら丸く収まる。調整は底部外面がヘラ切り後ナデ、底部内面が不整方向ナデ、他はヨコナデを施す。

壺(9)　現存高6.5cm、高台径16.5cmを測る。外側に開く幅広の断面四角形の高台が付き、体部は大きく開く。体部外面は回転ヘラ削りを施す。内面は暗黄緑色の釉が厚くかかっており、調整は不明である。この釉が人為的に施されたものか否かは不明である。内面の釉から鉢に復原することもできると思われる。また胎土、釉の掛かりから搬入品の可能性も考えられる。

土師器

坏a（10～15）　10～12は口径12.1～12.9cm、器高3.4～3.7cmを測る。底部の境には明瞭な段は形成されず、少し丸みを持つ。体部は緩やかに外反し開き気味である。13・14は口径13.8～14.4cm、器高3.1～3.5cmを測る。直線的に開く体部を持ち、底部との境は明瞭でない。15は復原口径14.2cm、復原器高3.7cmである。開き気味の体部と底部の屈曲は緩く、底部は外側にやや張り出している。調整はすべて、底部外面にヘラ切り後ナデを施し、体部にヨコナデを施す。

坏c(16)　高台径7.8cmを測る。先端が丸い高台を持ち、体部には高台貼付け時の粘土かすが遺っている。調整は体部がヨコナデ、底部外面はヘラ切り後ナデを施す。

椀c（17～19）　高台径8.8～9.0cmを測る。細く、高い高台が丸みを帯びた底部の境に付く。底部外面にはヘラ切り後ナデ、体部外面にはヨコナデを施す。19は高台径10.1cmを測る。器壁、高台共に厚い造りで、丸みを帯びて立ち上がる体部は中程で僅かに外反する。

皿a(20)　口径15.6cm、器高1.5cmを測る。体部内外面はヨコナデを施し、底部外面にはヘラ切り痕を遺す。口縁端部は肥厚し、外に引き出すようにしている。

皿c(21)　口径16.7cm、器高3.4cmを測る。器壁は全体に厚く、体部には口縁に垂直方向に粘

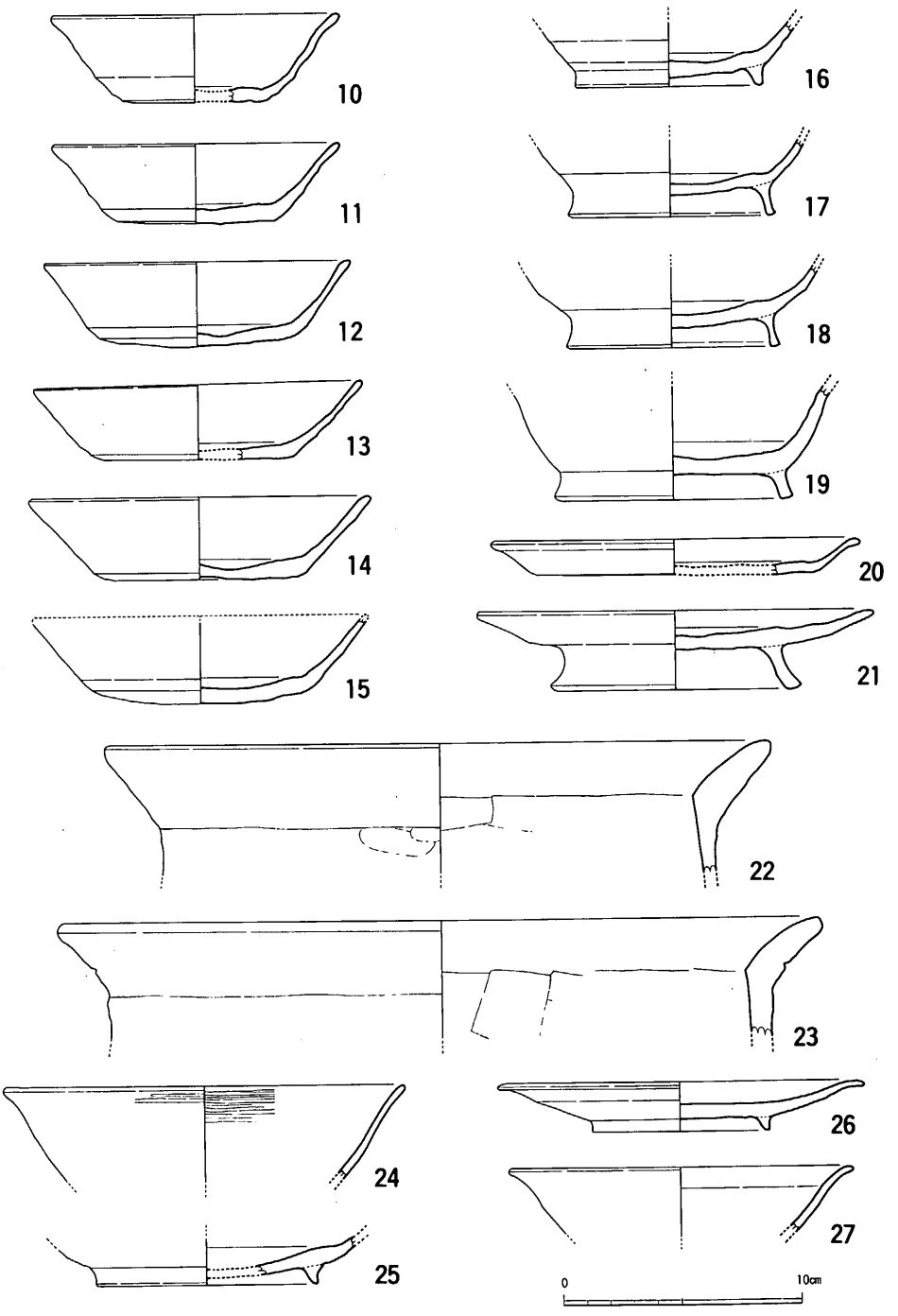


Fig.15 7SD010 出土土器実測図（Ⅱ）(1/3)

土の継ぎ痕がみられる。これは粘土板の継目か補修痕かであろうが、どちらかは不明である。調整は体部外面がヨコナデ、内面はナデを施す。焼成は良好で赤味を帯びた明橙色を示す。

甕（22・23） 口径は22が28.2cm、23が32.3cmである。どちらも内面の屈曲部には明瞭な稜をもつ。22は外面に指押えと粗いナデ、内面体部には粗いヘラ削りの調整、23は外面にナデ、内面体部には粗いヘラ削りを施す。

黒色土器A類

椀（24・25） 24は口径17.0cmを測る。内面と口縁部外面には横方向のミガキを施し薄く仕上げる。細部については風化しており不明である。25は底部片である。高台径9.4cmを測る。高台の形状は断面三角形をしている。外面は回転ナデ、内面はミガキを施すが摩耗しており方向などは不明である。

緑釉陶器

皿c(26) 口径15.4cm、器高2.1cmを測る。外面は体部がヨコナデ、底部が回転ヘラ削りである。底部の境には明瞭な稜があり、そこに高台を貼付けている。口縁は強く外側に引き出されている。焼きは土師質である。釉は全面に薄く施し、黄色に近い淡緑色を呈する。

椀c(27) 口径は14.6cmを測る。釉は全面に施してあり透明感のある黄緑色をしている。また内面には2箇所釉の濃いところがあり緑釉緑彩の可能性もある。焼きは土師質で胎土は乳白色を示す。

aは緑釉陶器の皿の底部とみられ、器壁はヘラミガキされる。胎土は土師質である。bは緑釉陶器の椀とみられる口縁部片で須恵質の胎土を持ち、釉はハケで薄く塗っている。cは灰釉陶器の甕の胴部片と考えられる。外面には暗緑色の釉がかかる。

7SD023出土土器（Fig.16 Pla.20・21）

須恵器

坏蓋3（1～3） 順に口径13.5cm・16.2cm・19.3cm、現存高2.0cm・1.6cm・1.6cmを測る。調整は全て外面天井部には回転ヘラ削りを施し、他はヨコナデを用いている。口縁部は屈曲を持つ。1は直線的な体部から平坦な天井部へつながる。ボタン様の摘みが付くと考えられる。2は天井部が低く、偏平である。3は丸みを持つ体部に平坦で広い天井部がつく。

壺蓋c(4) 口径14.2cm、器高3.3cmを測る。平坦な天井部と直線的に錘る体部を持ち、口縁端部は平坦に造る。天井部は回転ヘラ削りを施し、中心よりやや外れて摘みを付ける。体部から口縁部は内外ともヨコナデである。

坏a(5) 口径14.0cm、器高3.1cmを測る。底部の境は丸みを持ちながら体部に続き、口縁は僅かに外反する。底部外面はヘラ切り後ナデを施し、繊維状の圧痕が付く。体部内外面はヨコナデ、底部内面はナデを施す。

坏c（6～12） 6・9は直線的に立ち上がるもので口径12.0～14.2cm、器高4.7～5.2cmを

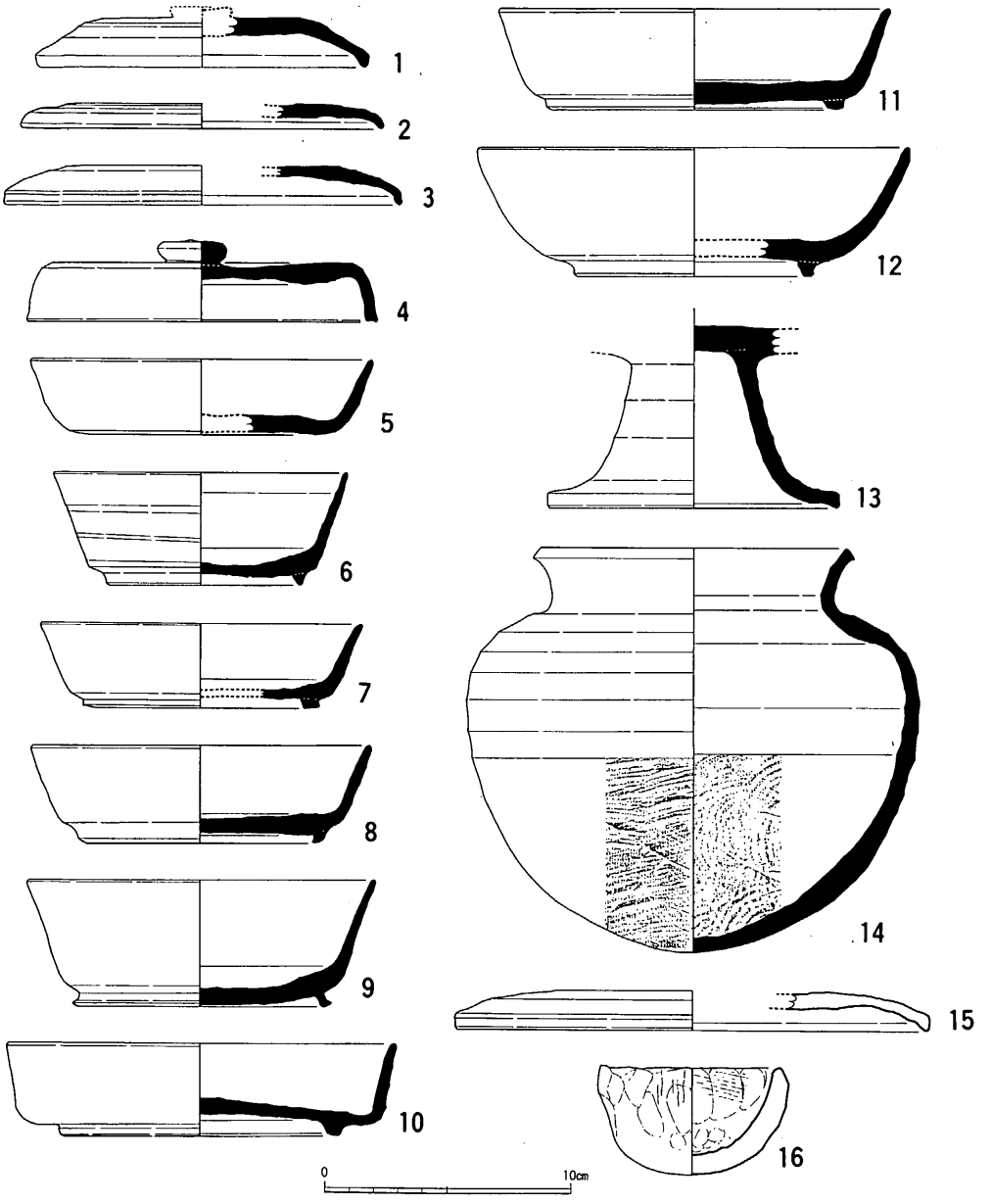


Fig.16 7SD023出土土器実測図（1/3）

測る。底部外面はヘラ切り後ナデを施す。体部は薄く仕上げられヨコナデを施す。高台は6が小さめの三角形、9が外側に踏張る形をしている。7・8は口径に対して体部が短いものである。口径は13.0～13.8cm、器高が3.5～4.0cmである。底部外面はヘラ切り後ナデを行い、体部はヨコナデを施す。10・11は大型で、口径に対して体部の短いものである。口縁端部は僅かに

外反する。口径は15.7～16.0cm、器高が3.8～4.1cmである。底部外面はヘラ切りのままである。体部にはヨコナデを施し、底部内面には不整方向のナデを行う。12は大型品で体部と底部の境が丸くカーブを持つものである。口径17.6cm、器高5.3cmを測る。全体に器壁は厚く体部は回転ナデ、底部内面には不整方向のナデを行う。形態として椀の範疇に含まれるとも思われる。

高坏(13)　底部から脚部の破片である。底部径11.9cm、現存高7.4cmを測る。調整は坏部の貼付けを除いてヨコナデである。

壺(14)　口径13.0cm、器高16.5cm、最大径18.4cmを測る。最大径は胴部上位にあり、底部は丸底である。外面は下半を平行タタキ、上半をヨコナデ、内面は外面に対応して下半を同心円タタキ、上半をヨコナデの調整を行う。口縁部外面から底部まで約1/2にわたって薄い灰かぶりが認められる。

土師器

坏蓋３(15)　口径19.3cm、現存高1.6cmである。天井部外面は回転ヘラ削り、他はヨコナデを施す。口縁端部の屈曲は退化している。

16は手捏ね土器である。口径7.2cm、器高4.4cmを測る。指による調整がほとんどであり、指頭圧痕が明瞭に遺る。内面には一部ハケ目の痕跡がある。

7SD025 出土土器（Fig.17・18 Pla.21）

弥生土器

壺形土器（１～３）　１は口径28.3cmを測り、鋤先形の口縁部を持つ。外面から内面にかけて丁寧なヨコナデを施す。２は口径38.0cmを測り、口縁が外側に大きく開く。外面には細い縦方向の、内面には細い横方向のヘラミガキを施す。内外面共に赤色顔料を塗布している。３は樽状をした壺に復原されると思われる。体部から口縁部に向けて大きく内傾する。口縁端部はナデで仕上げているため若干窪むが平坦である。口縁部下には台形の高い突帯が付いている。調整は内外ともに丁寧なナデで仕上げられている。赤色顔料は外面から口縁部の内面に入ったところまで塗られており、内面には一部顔料が垂れている。

甕形土器(4)　口径31.0cmの口縁部片である。口縁部直下に１条のM字状の突帯を持ち、口縁端部には刻み目を巡らせている。赤色顔料は全体に塗られているが、突帯以下は濃く他は薄い。また突帯と口縁の間には暗文が施される。口縁平坦部にも縞状の文様を入れる。

高坏形土器(5)　口径27.0cmを測る。長い脚を持つものである。調整は器壁の風化が激しく明瞭ではないが、内面を横方向のヘラミガキ、外面にはヨコナデを施していると思われる。また、口縁平坦面には縦方向に筋状の暗文が約1.7cm以上を一単位として入れているが、破片であるため全体の間隔などは不明である。赤色顔料が全面に塗布されていたとみられるが、外面にはほとんど遺らない。

蓋形土器(6)　口縁部を欠く資料である。現存高8.3cmである。天井部から一度つぼまりさら

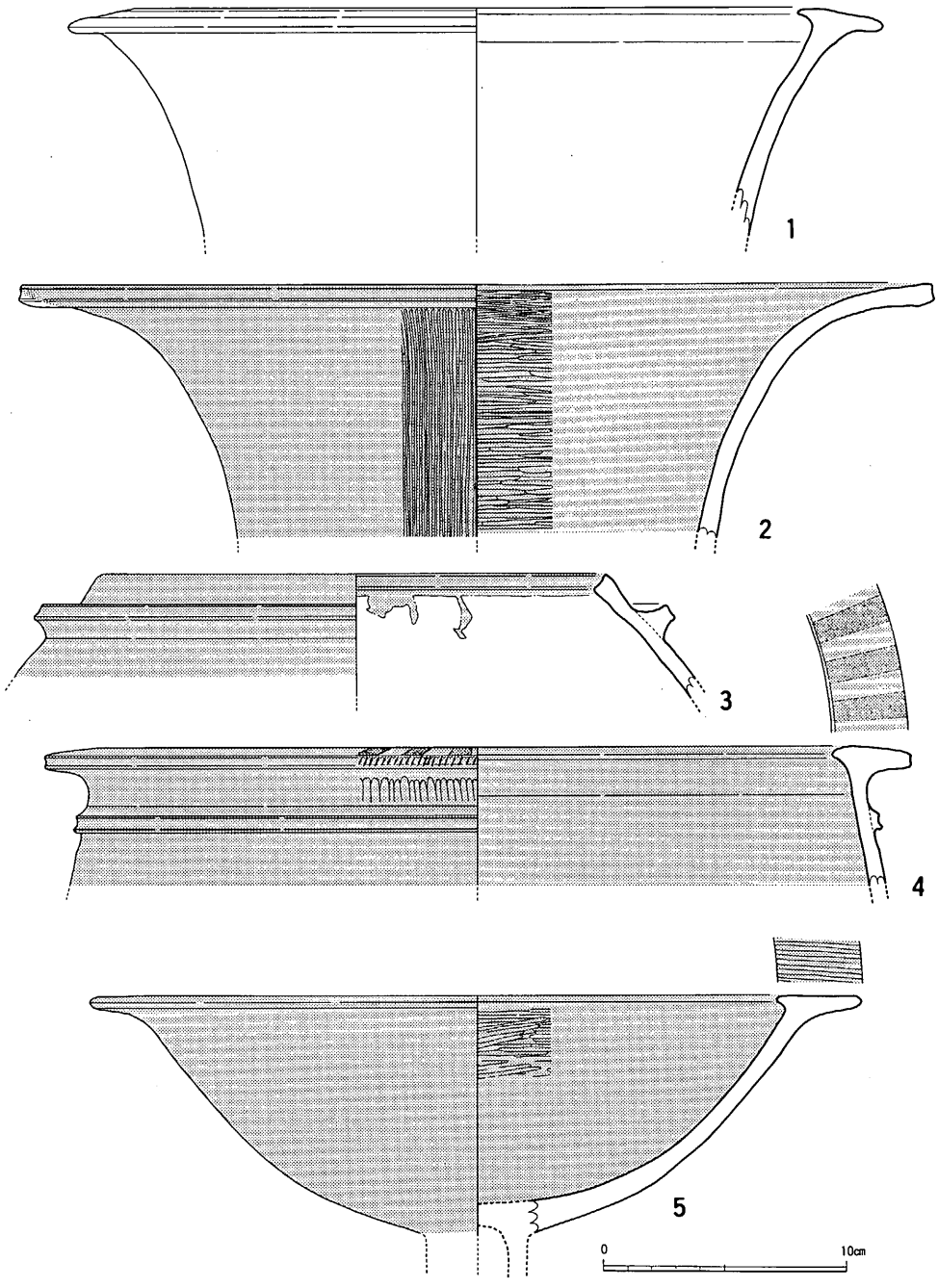


Fig.17 7SD025 出土土器実測図（Ⅰ）(1/3)

に大きく開く。調整は外面が粗いハケ目、内面はナデ、指押えである。

7～9は壺または甕の底部片である。7は底径6.0cmでやや上げ底気味で底部から一気に開

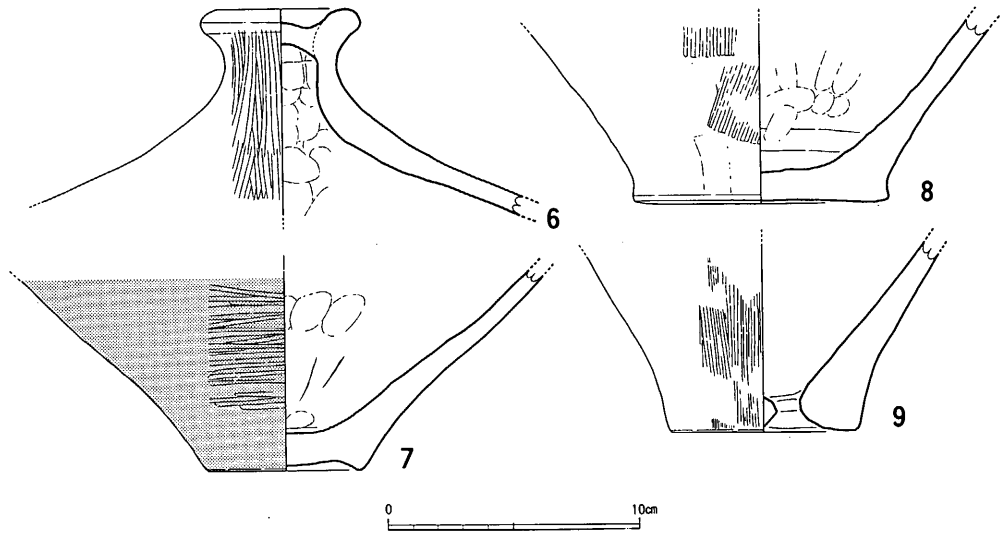


Fig.18 7SD025 出土土器実測図（Ⅱ）(1/3)

く形態を示す。外面は横方向のヘラミガキを施し、赤色顔料を塗布する。内面は指押えとナデにより調整されている。8は底径10.1cmで平底である。外面は下から上へ工具によるナデの後ハケ目を施す。上位はさらにハケ目を粗く撫で消している。内面はヨコナデと指押えにより調整されている。底部外面は指押えとナデによる。9は底径7.5cmを測り平底である。底部外面および内面はナデ、外面は縦ハケ目後ナデを施す。底部には外面から開けたと思われる焼成後の穿孔がある。

7K029 出土土器（Fig.19 Pla.22）

土師器

坏a(1) 口径13.8cm、器高4.0cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部をわずかに外反させる。底部と体部は丸みを持ちつつ接続される。底部外面はヘラ切り未調整、体部内外面はヨコナデ、底部内面は不整方向のナデを施す。

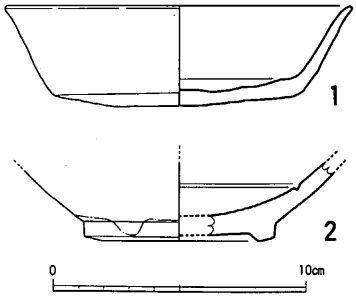


Fig.19 7SK029・7SX015 出土土器実測図（1/3）

7SX011 出土土器（Fig.20・21 Pla.22・23）

須恵器

坏蓋3（1～5） 口縁端部の形態はわずかながら端部の下への摘みだしのあるもの（2・3）、端部内面に凹線のあるもの（1・5）、ごく緩い凹線を端部内面に持つもの(4)に分かれる。2は口径14.0cmを測り体部は外反気味に天井部へ取り付く。調整は天井部外面が回転ヘラ削り、体部内外面がヨコナデ、天井部内面を不整方向のナデを行う。口縁部外面から体部内面に欠けて薄い灰かぶりがある。3は口径16.1cmを測る。口縁部の摘みだしは殆ど退化しており、口縁

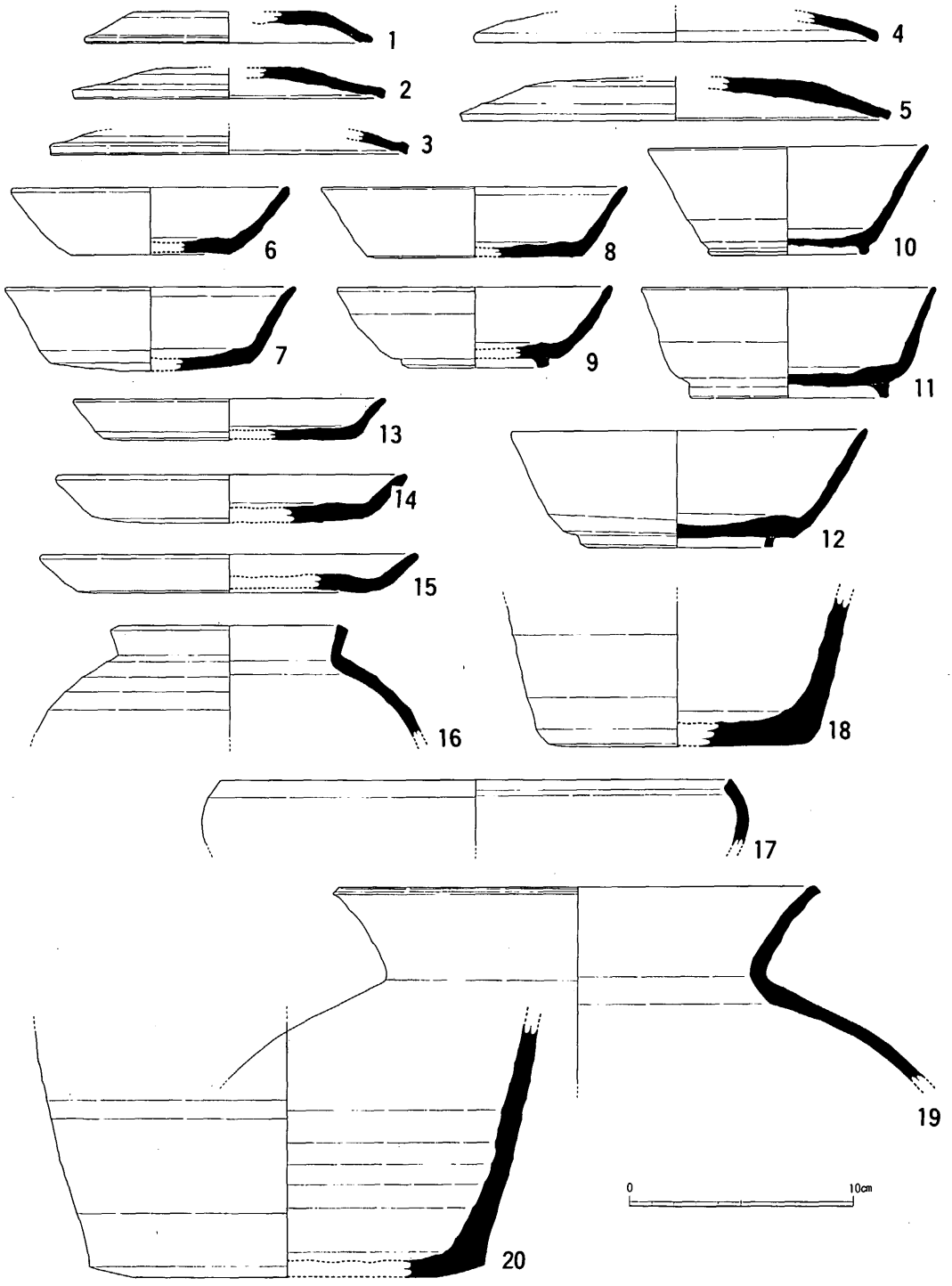


Fig.20 7SX011 出土土器実測図（Ⅰ）(1/3)

部全体の屈曲により下への摘みだしを表現している。調整はヨコナデである。1は口径13.1cmである。体部は直線的に天井部へつながり、天井部は平坦である。調整は天井部外面がヘラ切り後ナデ、体部内外面がヨコナデ、天井部内面が不整方向ナデのである。5は口径19.2cmである。器壁は厚く口縁端部は平坦に仕上げ、端部内面に緩い凹線が入る。天井部には回転ヘラケズリ、他はヨコナデを施す。4は口径18.2cmに復原できる。体部は少し丸みを持つ口縁部から天井部へ内湾気味に伸びる。口縁部外面付近には重ね焼きの跡が認められる。調整はヨコナデ。

坏a（6～8） 6は口径12.6cm、器高3.0cmを測る。体部は少し内湾気味に立ち上がり口縁端部は丸く収める。底部の境は明瞭である。調整は体部内外面はヨコナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ、内面は不整方向のナデである。色調は灰色であるが、口縁部外面だけ暗灰色である。7は口径13.0cm、器高3.7cmである。直線的に立ち上がる体部を持ち、口縁部は若干外反する。底部の境は少し丸みを持つ。底部外面はヘラは切り未調整、体部はヨコナデ、底部内面は不整方向ナデを施す。8は口径13.7cm、器高3.2cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は少し外反する。底部の境は明瞭である。底部はヘラ切り後ナデを行い、板状圧痕と思われるものがつく。体部はヨコナデ、底部内面は不整方向のナデを施す。色調は灰色であるが、口縁部外面のみ黒灰色になる。

坏c（9～12） 9は口径12.3cm、器高3.6cmを測り、やや内湾気味に立ち上がる体部を持つ。高台は短い台形のものを貼り付ける。調整は底部外面がヘラ切り後ナデ、体部がヨコナデであるが体部下半には指頭圧痕が遺る。底部内面と口縁端部には重ね焼きの溶着痕がある。底部の境付近には薄い灰かぶりがある。成形時のものと考えられる歪みが認められる。10は口径12.6cm、器高4.8cmを測り、体部は直線的に立ち上がり深い。小さな高台が底部の境につく。底部外面はヘラ切り未調整、体部はヨコナデである。16・17は台形の高台を持ち体部は直線的に立ち上がる。調整は底部外面をヘラ切り後ナデ、体部にヨコナデ、底部内面に不整方向のナデを施す。口径は13.3～16.1cm、器高5.0～5.2cmを測る。

皿a（13～15） 口径は14.2～17.0cm、器高は1.7～2.2cmを測る。調整はどれも底部外面がヘラ切り後ナデ、体部がヨコナデ、底部内面が不整方向のナデである。13は口縁部が外反している。14・15は器壁が厚い。

壺⑯ 口径10.7cmを測る。丸い胴部に短くやや外反する口縁が付く。調整はすべてヨコナデである。外面には黒青色の灰かぶりが認められる。

甕⑲ 口径は22.0cmを測る。口縁部は外反しながら開く。端部は外側に摘みだす。体部が内外面とも細い平行叩き、口縁部がヨコナデの調整を施す。

鉢⑰ 鉄鉢形のものである。口径は23.0cmを測る。口縁端部を若干つまみ上げている。内湾しつつ体部へつながる。調整は丁寧なヨコナデである。

18は底径11.7cmを測る。調整は体部と内面がヨコナデ、底部外面が回転ヘラ削りである。回

転ヘラ削りの回転軸は２つ認められる。壺または鉢の底部と考えられる。20は底径17.8cmを測る。底部は若干丸みを持ち直線的な体部に明瞭な稜を持って接続する。底部はヘラ切り後ナデ、他はヨコナデにより調整を施す。外面は灰かぶりにより黒青色を示す。鉢または壺の底部と考えられる。

土師器

坏ａ（21・22） 22は口径14.2cm、器高3.9cmを測る。どちらも底部と口縁部の境は緩やかなカーブを持つ。底部は21がヘラ切り後ナデ、22がヘラ切り未調整である。体部はヨコナデを施す。

坏ｃ(23) 高台径7.8cmを測る。台形の高台はやや外を向く。底部はヘラ切り未調整、体部は回転ナデ、底部内面は不整方向のナデである。

皿ａ(24) 口径14.0cmを測る。底部の境は不明瞭で、大きく開く体部につながる。風化が激しく調整は不明である。

大皿ｃ(26) 口径25.2cmに復原される。口縁は外側に屈曲して開く。体部内外面にはミガキａが、口縁部にはヨコナデが施される。

黒色土器Ａ類

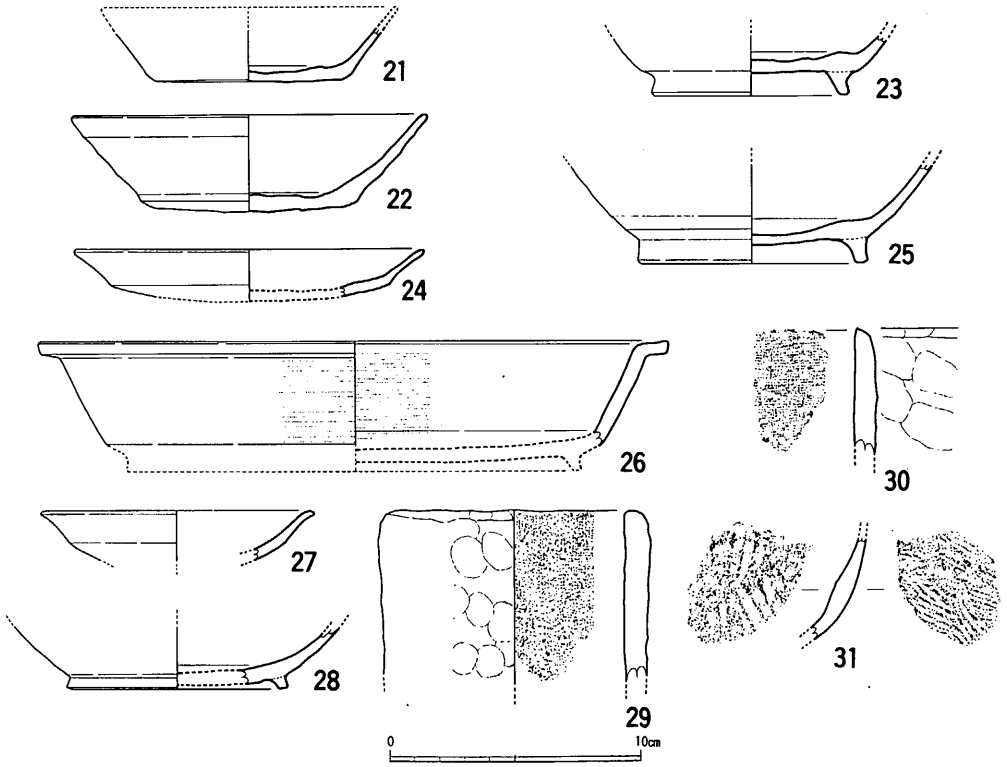


Fig.21 7SX011 出土土器実測図（Ⅱ）(1/3)

椀ｃ(25)　高台径9.1cmを測る。体部下反には回転ヘラ削りを施し、丸く立ち上がる。高台は台形のしっかりしたものが付く。底部はヘラ切り後、粗い削りを施す。内面はヘラミガキをしているが、風化しており方向や単位は不明である。

製塩土器（29～31）

29・30は丸底の円筒形に復原されると思われる。内面には布目痕が、外面には粗い指頭圧痕がある。口縁端部は指押えを施す。胎土は粗く29が金雲母・砂粒を、30が白色の粒子を多く含む。色調はどちらも赤褐色であるが29は茶～紫色の斑点がある。口径10.4cmを測る。31は玄海灘式製塩土器の甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は粗いハケ目を施す。色調は外面が明赤色、内面が灰褐色を示す。両面とも風化が激しい。

越州窯系青磁

皿(27)　口縁部の破片で口径11.0cmを測る。口縁端部に向かい外反しながら開く。胎土は緻密で灰色を呈する。釉は透明感のあるくすんだ緑色で、薄く施釉する。

灰釉陶器

椀ｃ(28)　高台径は8.4cmである。丸い坏部に断面四角形の高台が付く。体部外面は回転ヘラ削り後ナデを、内面はヨコナデを施す。施釉は内面のみ薄く灰緑色の釉を施す。胎土は硬く白色粒子を含む。

7SX015 出土土器（Fig.19 Pla.23）

白磁

椀(2)　Ⅳ-2類の底部片と考えられる。外面は回転ヘラ削りを施し、内面に横沈線を持つ。胎土は灰味を帯びた白色で黒色粒子を少し含む。施釉は外面が高台部直上まで掛かり一部が高台に垂れる。（城戸）

その他の出土遺物

瓦類

軒丸瓦（Fig.22 Pla.24 Tab.2）

1は複弁八葉蓮華文で弁の一つを単弁とする。今回の調査で最も多く検出された型式である。丸瓦と接合のための支持土は少ない。明灰色および明茶色を呈しているものが多く、焼成は全体的にあまい。2は鴻臚館式で複弁八葉蓮華文である。焼成はあまく、暗灰色である。3は複弁八葉蓮華文として捉えられるが、ほとんど単弁化している。蓮子や珠文も退化し、太く大きい。明灰色を呈し、須恵質に焼成されるものが多い。

軒平瓦（Fig.22 Pla.24 Tab.2）

4は均整唐草文で中心飾りから左右に派生する唐草は2回反転する。上外区は珠文帯、下外区は突鋸歯文帯である。鴻臚館系。5は扁行唐草文で老司Ⅰ式。瓦当に接合される平瓦は厚さ約4.0～4.8cmと厚い。突面の叩きは縄目叩きであるが、観世音寺境内から出土する同笵とみら

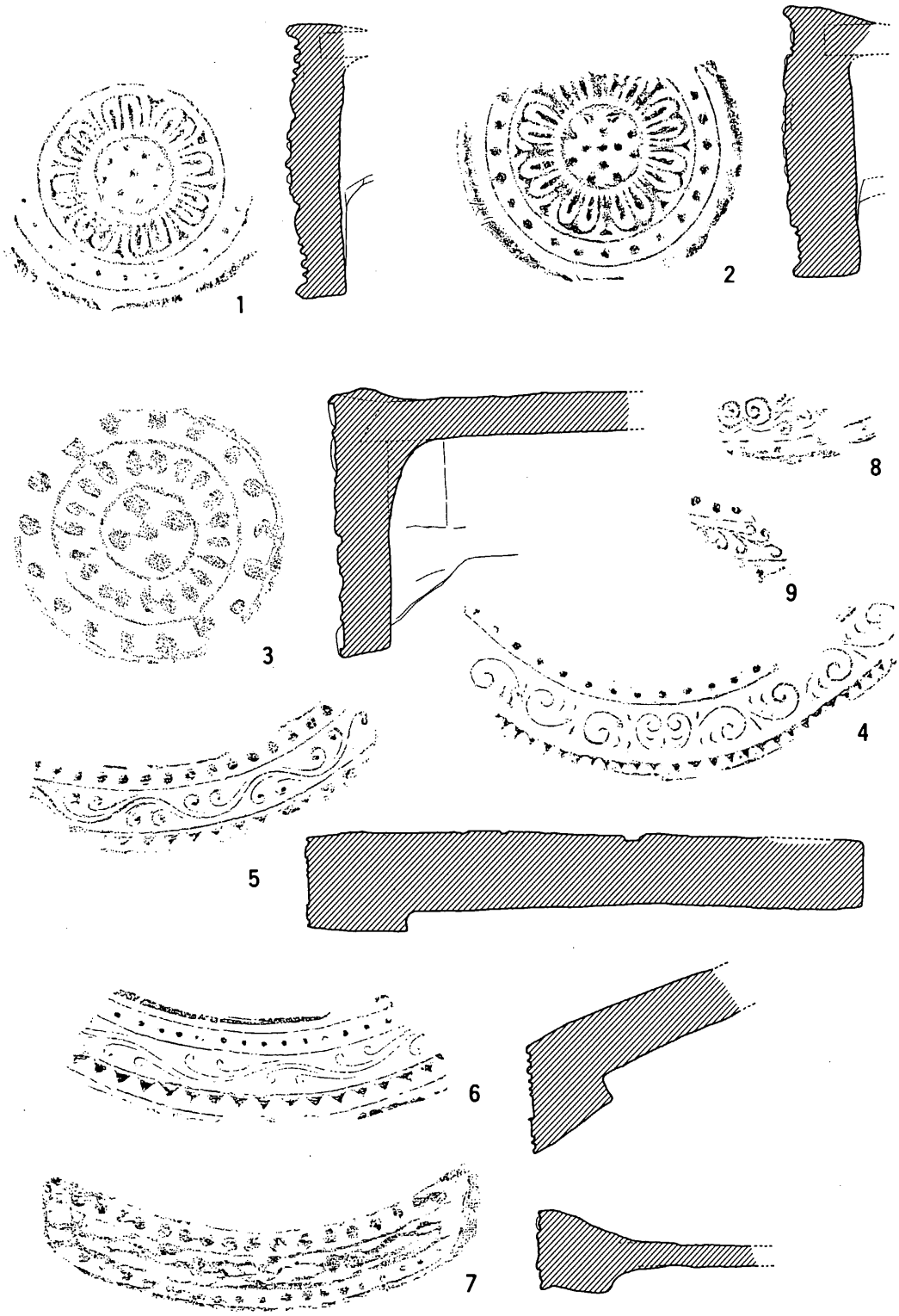


Fig.22　筑前国分尼寺跡第７次調査出土軒瓦実測図（1/4）

Tab.2　第７次調査　軒瓦・道具瓦出土地点一覧表（図版番号は Fig.22 に対応）

遺構番号＼図版番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	鬼瓦(大)	鬼瓦(小)	無文塼
7SX002	1			2								
7SD009 上層	1			1								
7SD009 下層									1			
7SD010	7			1	1							5
7SX011	10			3	1		3				1	1
7SX015	2		7				18					
7SX022	1											
7SD023						1						
7SD027 下層	1										1	
茶色土	1			1								1
表土	12	1	2	3	1		1	2	1	1	1	
合計	36	1	9	11	3	1	22	2	2	1	3	7

※　数値は判別できる限りかなりの小片まで含めている。

れる老司Ⅰ式は正格子の叩きである。6 は扁行唐草文で瓦当面に対してかなりの角度をもって平瓦が取り付く。老司Ⅱ式。7 は扁行唐草文である。文様は退化し線も太く、単位も明確ではない。平瓦との取り付きは「包み込み技法」と呼ばれるものであろう。8 は均整唐草文である。平安京大極殿から出土するものに近似する資料で、過去大宰府では観世音寺（大宰府史跡第64次調査）、般若寺跡（採集品）、陣ノ尾遺跡（第2次調査）の 3 点が知られるのみであった。9 は均整唐草文で、左右両端から中心に向かって派生する。中心飾りはない。

平瓦・丸瓦（Fig.23～25 Pla.24・27 Tab.3.4）

調査地内からは大量の平瓦、丸瓦が出土しているが、完存する形で検出されたものはない。特に平瓦は、Pla.24-a が出土資料中最も良好な資料で、長さ28.0cm以上、幅28.5cm以上を測る。桶巻作りで表面の格子叩き目は Fig.23-1 である。7SX015 出土。丸瓦は Pla.27-b～d が良好な資料で、すべて玉縁式のものである。b は長さ33.5cm、幅16.0cmで、格子叩き目は fig.23-5 である。c は長さ32.5cm、幅14.5cmで、格子叩き目は fig.23-11 である。d は長さ31.5cm、幅15.1cmで、格子叩き目は fig.23-2 である。すべて 7SX015 出土。

なお、丸瓦および平瓦に遺された叩き目について将来の定量化を目指し、7SX011 と 7SX015 から出土した資料の数量を数えてみたのが、tab.3.4 である。小片となっているものが多いことから、同一の叩き目で部位の異なる部分を別々な個体として捉えている可能性もあるため、今回は型式分類を行うまでには至っていない。また、残存部位による選別や平瓦、丸

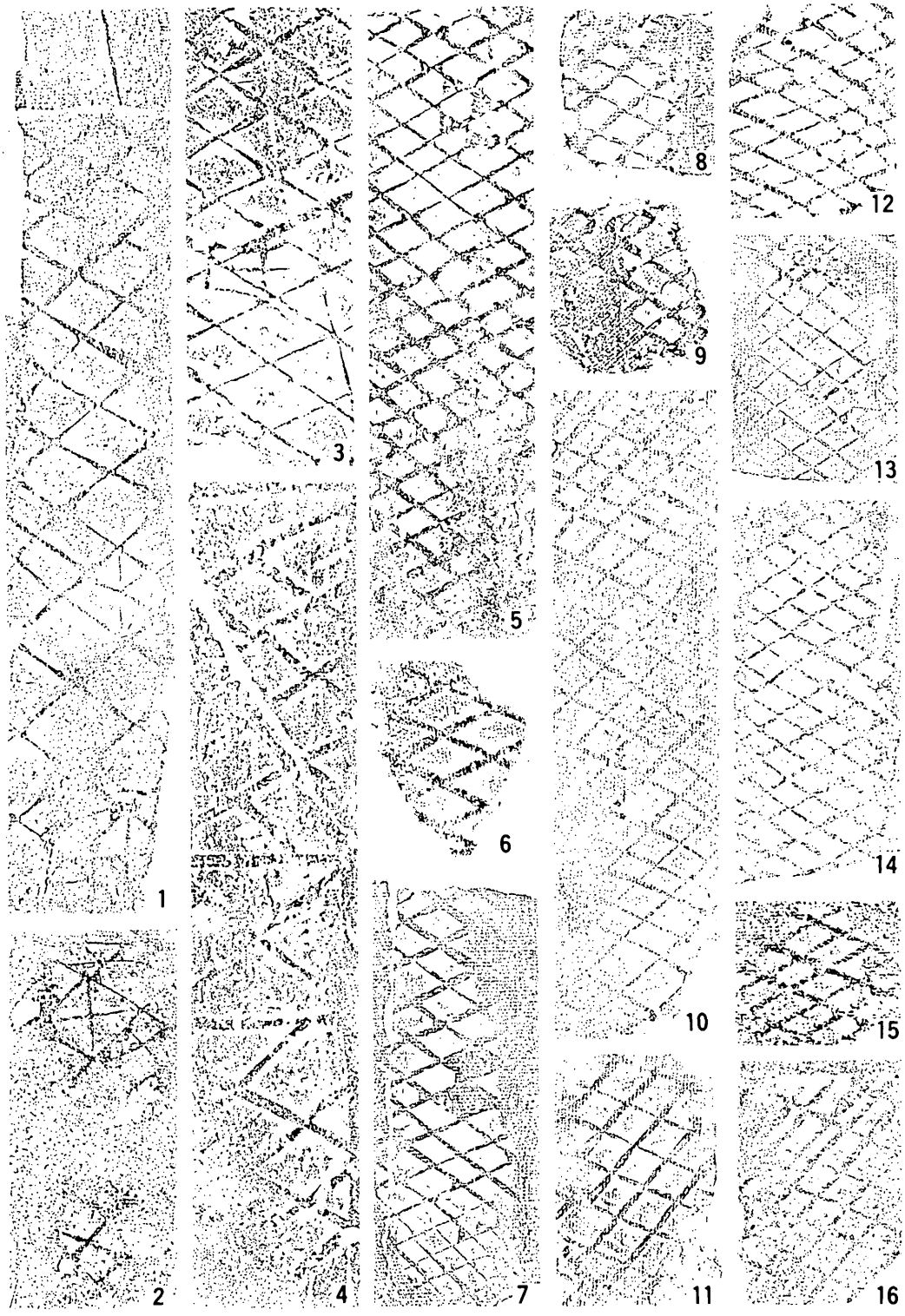


Fig.23 筑前国分尼寺跡第７次調査出土瓦格子叩き拓影（Ⅰ）(1/2)

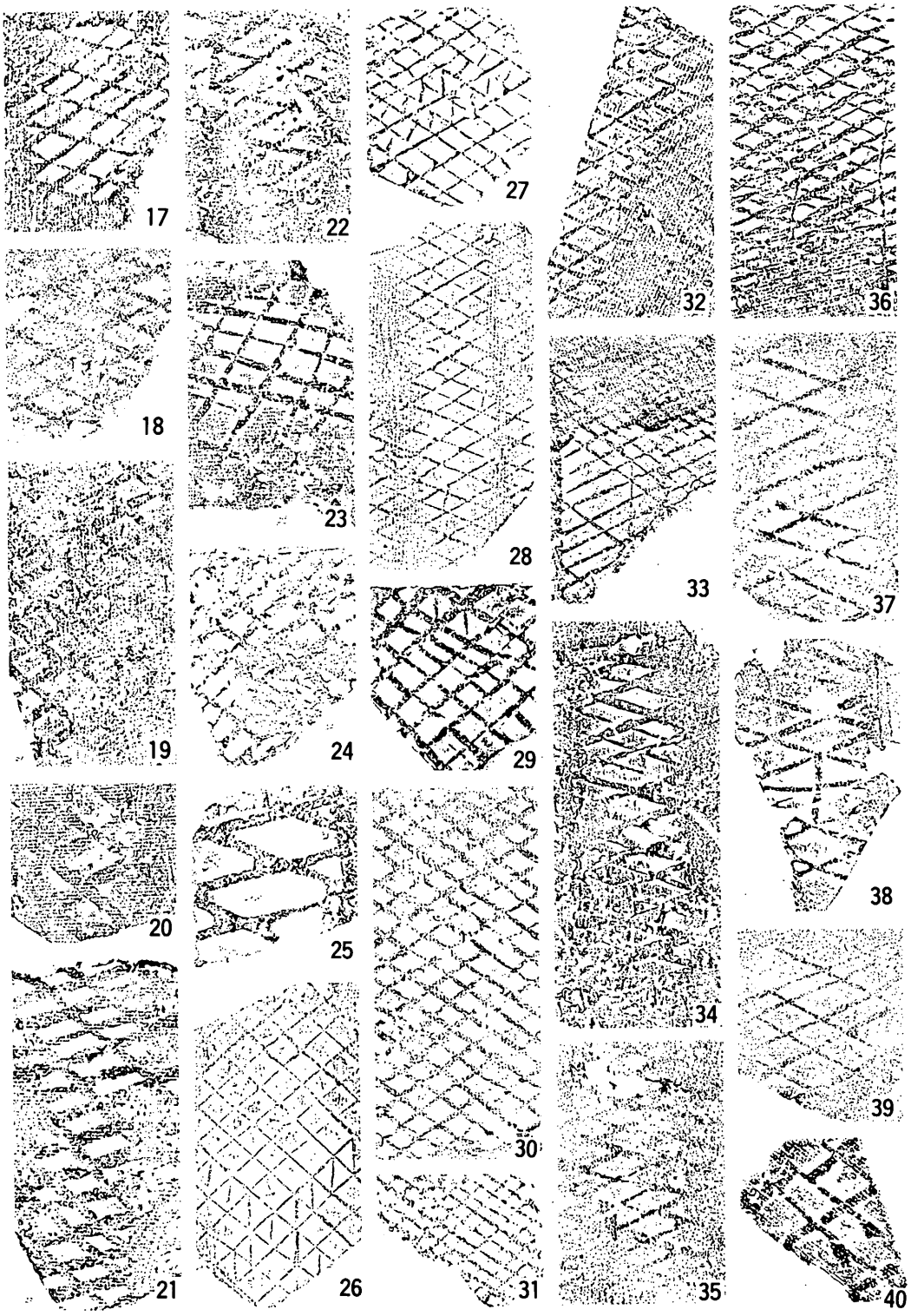


Fig.24 筑前国分尼寺跡第７次調査出土瓦格子叩き拓影（Ⅱ）(1/2)

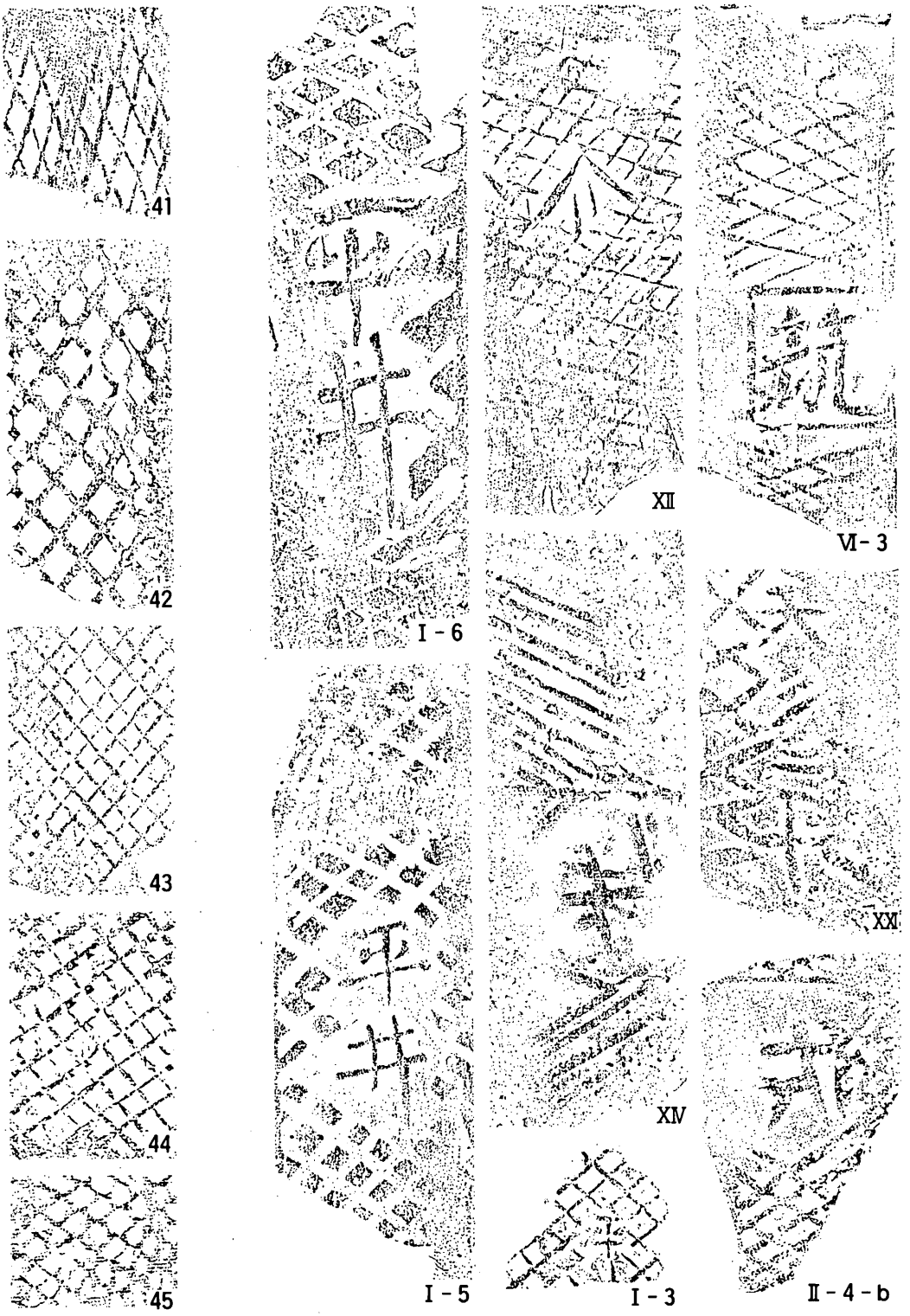


Fig.25　筑前国分尼寺跡第７次調査出土瓦格子叩き拓影（Ⅲ）・文字瓦拓影（1/2）

Tab.3 7SX011 出土瓦叩き目別数量表(図版番号はFig.23～25に対応)

図版番号	点数	図版番号	点数	図版番号	点数	図版番号	点数
1	48	15	3	29	—	43	—
2	—	16	—	30	6	44	7
3	6	17	—	31	2	45	8
4	9	18	4	32	—	文字瓦型式	点数
5	25	19	—	33	1	Ⅰ-5	—
6	2	20	—	34	—	Ⅰ-6	4
7	—	21	2	35	—	Ⅱ-4-a	1
8	2	22	—	36	4	Ⅵ-3	—
9	—	23	3	37	—	Ⅻ	1
10	—	24	—	38	—	ⅩⅣ	1
11	—	25	—	39	2	ⅩⅩⅠ	4
12	—	26	2	40	—	文字瓦小計	11
13	—	27	—	41	—	格子合計	148
14	—	28	—	42	1	縄叩き目	976

破片総数3369（軒瓦、道具瓦を除く）　判別不詳2245

瓦の別などを含めて詳細に報告しなければならないが、各々見分け難い資料も多くここでは併せた形で報告しておく。将来の細分化が必要であることは言うまでもない。

この表からも分かるように、7SX011と7SX715ではその出土傾向に大きな差が認められる。両者とも包含層中における瓦溜りからの出土であるが、7SX011は土器では9世紀前半～中頃のものを主体としてるが、天延3年(975)銘の文字瓦が共伴しており、少なくとも10世紀後半までおとす必要がある。7SX015は白磁椀Ⅳ類から11世紀後半頃を上限とする年代が与えられる。これを1つの指標としてtab.3・4を見ると7SX011では圧倒的に縄叩き目（厳密には2種類以上存在する）が優位にあり《縄÷（縄＋格子）＝86.8%》、7SX015では逆に格子叩き目が優位にあることが分かる《縄÷（縄＋格子）＝34.6%》。また、7SX015に至って見られる叩き目も存在する。この2つのデータのみでの結論づけは慎重にならなければならないが、後述の10SD016出土資料も含めてみると、傾向として縄叩き目が奈良時代或は平安時代前期の主流を成し、或段階で各種の格子叩き目（老司Ⅰ式や忍冬唐草文軒瓦にみられる正格子叩き目を除く）に転換されたものとみられる（P.52の第10次調査報告参照）。こうしたデータの蓄積されることが望まれる。

文字瓦（Fig.25 Pla.26 Tab.3.4）

「平井」（Ⅰ-3、Ⅰ-5、Ⅰ-6類）「佐」（Ⅱ-3、Ⅱ-4-a類）「筑」（Ⅵ-3類）「介」（Ⅻ類）「未」（ⅩⅣ類）「天延三年七月七日」（ⅩⅩⅠ類）などが検出されている。このうちⅩⅩⅠ類は国分寺蔵品が知られる程度で、塔跡や講堂跡の調査では出土していなかった。Tab.3.4参照。なお格子叩き目の3も文字瓦で扱った方が望ましいかもしれない。

無文塼（Pla.25 Tab.2）

7点出土した。eはほぼ完形で長さ27.7cm、幅19.0cm、厚さ7.6cmを測る。明茶白色で焼成はややあまい。他の資料も基本的には同様のものであるが、須恵質に焼成されるものもある。

Tab.4 7SX015 出土瓦叩き目別数量表(図版番号は Fig.233～25 に対応)

図版番号	点数	図版番号	点数	図版番号	点数	図版番号	点数
1	352	15	—	29	—	43	—
2	1	16	—	30	25	44	4
3	99	17	6	31	—	45	4
4	33	18	4	32	—	文字瓦型式	点数
5	82	19	3	33	—	Ⅰ-5	7
6	4	20	3	34	14	Ⅰ-6	1
7	4	21	5	35	10	Ⅱ-4-a	—
8	—	22	—	36	11	Ⅵ-3	9
9	—	23	—	37	—	Ⅻ	—
10	—	24	—	38	—	ⅩⅣ	18
11	—	25	—	39	—	ⅩⅪ	3
12	—	26	13	40	—	文字瓦小計	38
13	8	27	—	41	—	格子合計	752
14	16	28	6	42	7	縄叩き目	398

破片総数3457（軒瓦、道具瓦を除く）　判別不詳2307

鬼瓦（Pla.25 Tab.2）

4点出土した。このうち大宰府政庁出土のものと同様で大型のものはaで顔面中位の約半分を遺している。現存長28cm、幅18cm、最大厚は頬の付近で11.3cmを測る。暗灰色を呈し、焼成はややあまい。表土出土。b～dは小型のものである。bは下端部の約半分で、現存長15.6cm、幅11.7cm、厚さは縁の部分で3.4cmである。明灰色を呈し、焼成は良好で固く焼き締まる。珠文や顎髭の状況がよく観察される。7SD027 下層出土。cは頭部の約半分で現存長13.0cm、幅16.3cm、最大厚は眉間部分で8.8cmを測る。7SX011 瓦溜りから出土した。dは顔面中位の約半分で、現存長17.5cm、幅15.5cm、最大厚は7.8cmである。目の部分を欠失する。表土出土。

Pla.25-f は瓦質の用途不明品である。長さ14.3cm、幅6.0cmで下部を欠失する。裏面はナデとみられる痕跡を遺すが、剝離したような形跡がある。この個体のみで製品と考えるのではなく、中世後期に出現する鬼瓦の角や、鯱（鉾）の部分などの造形物の一部と想定しておきたい。（狭川）

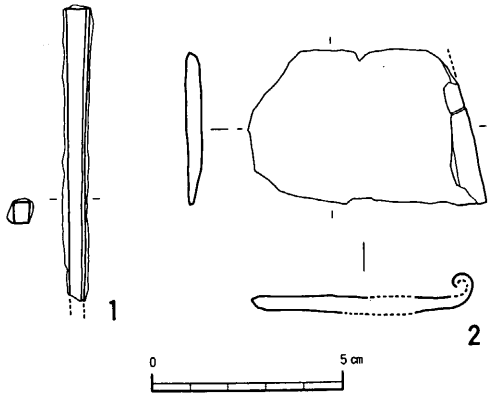


Fig.26 筑前国分尼寺跡第7次調査出土鉄器実測図（1/2）

鉄製品（Fig.26 Pla.27）

1は両端を欠損した釘と思われる。残存長7.7cmである。7SX011 からの出土である。

2は錆が激しく本来の法量は不明であるが現存の長さ6.2cm、幅4.0cm、厚さ0.5cmを測る。1辺は丸く巻き込むように折り曲げられている。鎌と考えられるが、刃部に当たる部分には刃の痕跡を見つけることができず断定できない。7SX031 から出土した。

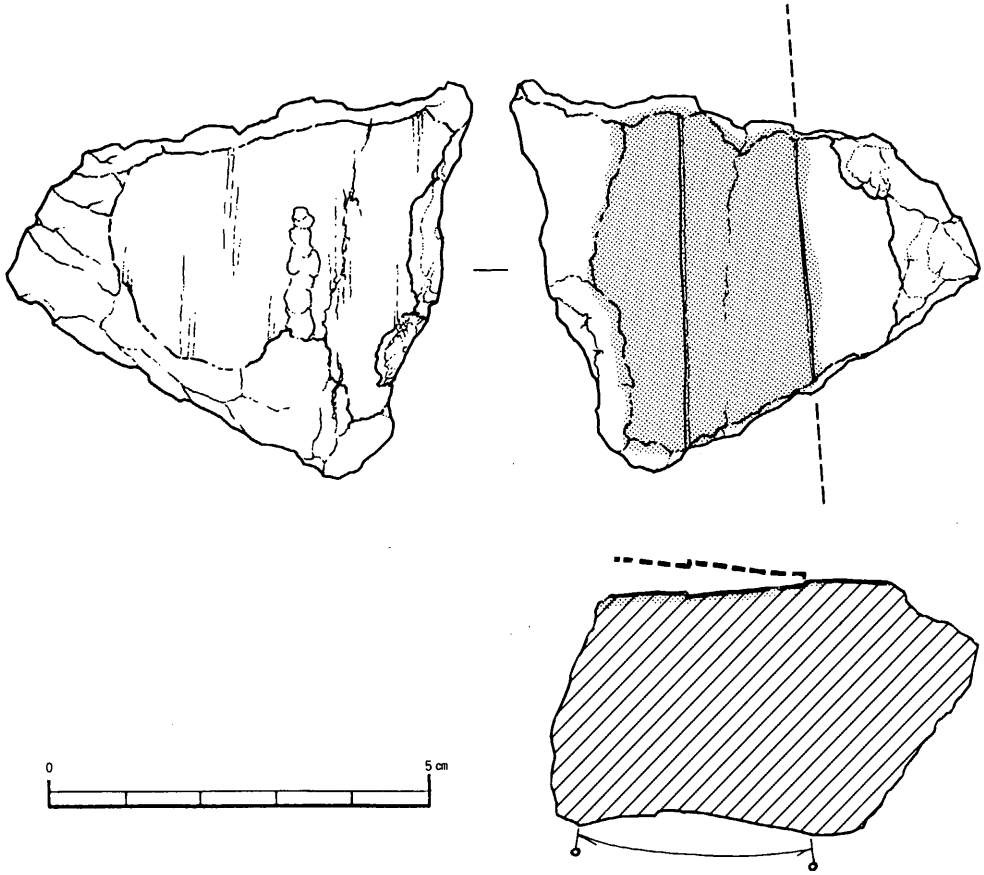


Fig.27　筑前国分尼寺跡第７次調査出土鋳型実測図（1/1）

石製品（Fig.27 Pla.27）

鋳型　利器の鋳型と思われる。刃部から樋の部分に相当すると思われる。パウダー状の乳白色を呈する砂岩製である。鋳造面が遺るのは、長さ4.5cm、幅4.0cmであり、黒く変色している。裏面は砥石に転用されており、窪んでいる。7SD010 から出土したが、弥生時代のものの流れ込みと考えられる。（城戸）

石器（Fig.28 Pla.28）

石庖丁（１～４）　１はシルト岩製の石庖丁で紐穴芯間の距離が2.3cm、背までが1.3cmを測る。刃は両刃で実測面側に紐穴と刃稜部間が刃の反りに沿う窪みを有す。紐穴は両側からほぼ均等に回転を利用した穿孔具によって穿たれる。7SD023 出土。２は輝緑凝灰岩を用いた石庖丁で、紐穴芯と背部間が1.9cmを測る。形状は刃の砥減り分を考慮しても横長の部類に属するものと思われる。刃は片刃に近い両刃で、紐穴は敲打後粗い穿孔（きれいな円を描いていない）を行い、中央部に径３mmほどの穴を鋭く穿っている。穿孔には２種の異なるものを想定し得る。調査区内採集。３～５は輝緑凝灰岩を用いた石庖丁である。３は紐穴と背部間は2.0cm

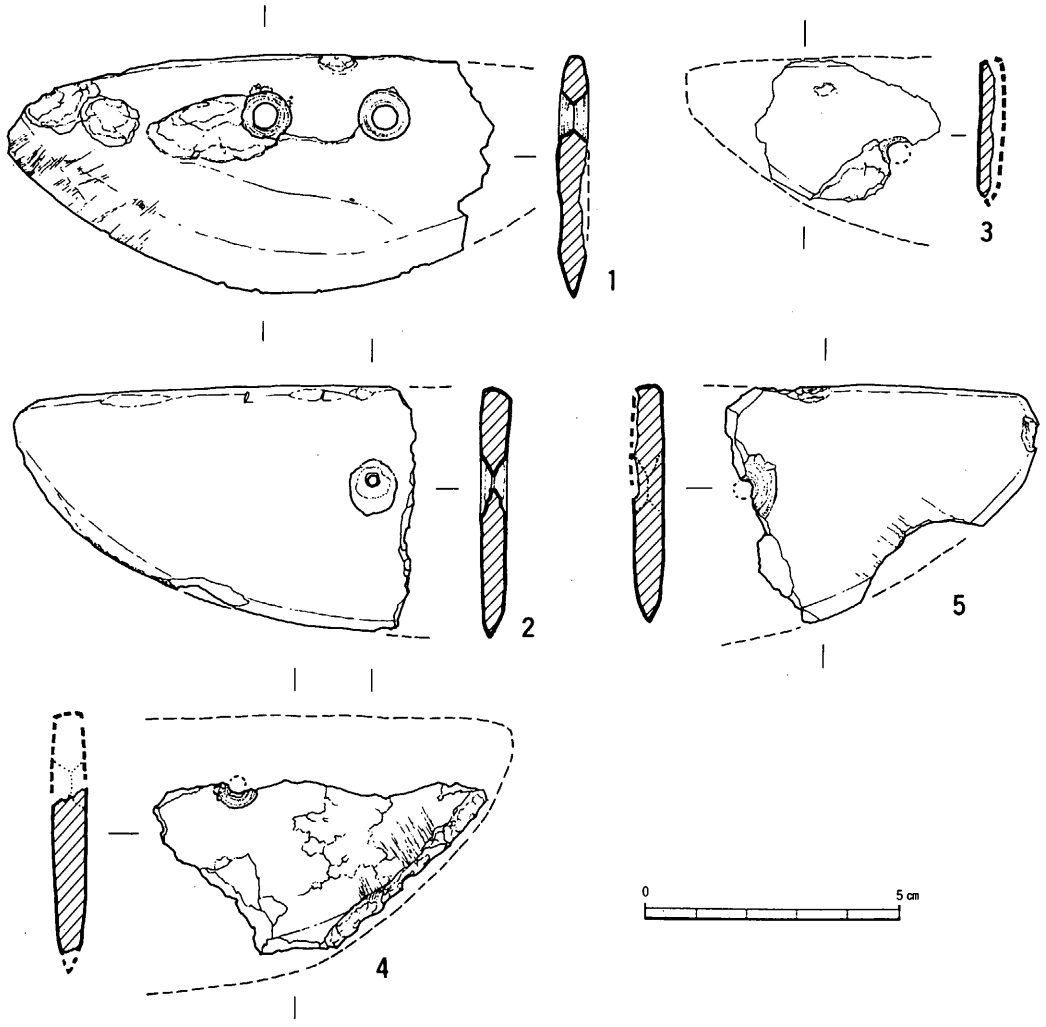


Fig.28　筑前国分尼寺跡第７次調査出土石器実測図（2/3）

を測る。刃部は片刃に近い両刃。7SD025 出土。４は、欠損が著しく部位を決めるのに多少難がある。7SD009 灰色粘質土層出土。５は紐穴と背部間が1.9cm。刃部はかなり砥減りしており、全体に剝離欠損している。7SD025 出土。　（山村）

４．小結

今回の調査では国分尼寺に直接関連する遺構は検出できなかったが、弥生時代中期の流路や８～９世紀代の溝を検出できた。弥生時代の流路は遺物から中期の中頃から後半のものと考えられる。これまでの周辺の調査でも国道3号線より山側には弥生時代中期を主とする遺構が散在している。また、水城堤防の版築の中からも弥生土器は出土しており、版築の土取りを水城の東側丘陵に求めたと考えるならば、この際にかなりの弥生時代の遺構は破壊されたと思われ

る。このことを含めて考えるならば、かなりの規模の集落の存在を想定できる。さらに利器と思われる鋳型が、混入としてであるが、出土したことはこの地域の集団が金属器を生産する力を持っていたと考えられ、かつて水城東門付近の東側で銅戈1口が採集されたことと矛盾しない。太宰府市の弥生時代については不明なところも多いが、今回の調査も含めこの周辺が弥生時代中期のまとまった集落であったことはおぼろげながら想定できよう。

(4) 筑前国分尼寺跡第10次調査

調査地は太宰府市大字国分469-1,468-1の一部である。調査面積は446㎡である。調査は平成元年10月30日～平成２年１月15日まで実施した。なお調査区東端で第１次調査の第４トレンチと重複する部分があった。調査は城戸康利・緒方俊輔が担当した。

１．層位

表土を除くと灰色砂礫層(調査区東側の 10SD001･10SD002 の上を覆う層）および灰茶色砂層（10SD001・10SD002 以西の遺構面に被る層）があり、その下は淡灰色粘質微砂の地山となる。遺構はこの地山面から切り込んでいる。調査区西側では 10SD020 と 10SD016 に切られる黄灰色砂層と暗黄色土を検出した。花崗岩風化土の地山は、調査区東側と西南の一部にのみ確認された。(Fig.29)

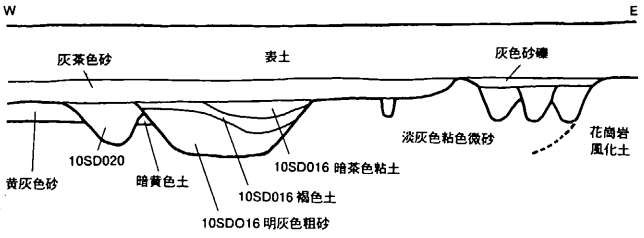


Fig.29 土層模式図

また、現存する水田畦畔について土層観察による調査を行った。その結果、現況畦畔は灰茶色砂層上面に形成され、この層以下に畦畔を推定させるような遺構はなかった。

２．遺構（Fig.30 Pla.29・30）

溝

10SD001　幅0.6m、深さ0.4mを測る溝で6.5m分検出した。溝の方向はおよそ N-10°50′-E 振れる。筑前国分尼寺跡第１次調査の 1SD001 と同一のものである。溝の中位に段があり、これを境に上・下２層に分けた。

10SD002　幅0.3～0.6m、深さ0.25～0.5mを測る溝で、６m分検出した。方向はおよそ N-0°45′-E 振れる。10SD001 を切る。筑前国分尼寺跡第１次調査第４トレンチの暗灰色砂礫と同一のものである。

10SD004　幅0.7～0.85m、深さ0.25～0.3mを測る溝で、5.5m分検出した。方向はおよそ N-10°30′-W 振れる。10SD002 に切られる。埋土は茶白色砂土である。

10SD007　幅0.5m、深さ0.25mを測る溝で7.5m分検出した。方向はおよそ N-9°50′-E 振れる。10SX012 を切る。

10SD016　調査区中央を東から蛇行して流れる溝である。幅1.6～10m、深さ0.8mを測る。埋土は大きく３層に分けられ、下から明灰色粗砂層、褐色土層、暗茶色粘土層の順に堆積する。暗茶色粘土層と褐色土層は流れの内側に堆積していた。

10SD020　幅６m、深さ1.1mを測る弥生時代の流路で、11m分検出した。埋土は灰白色砂質土である。

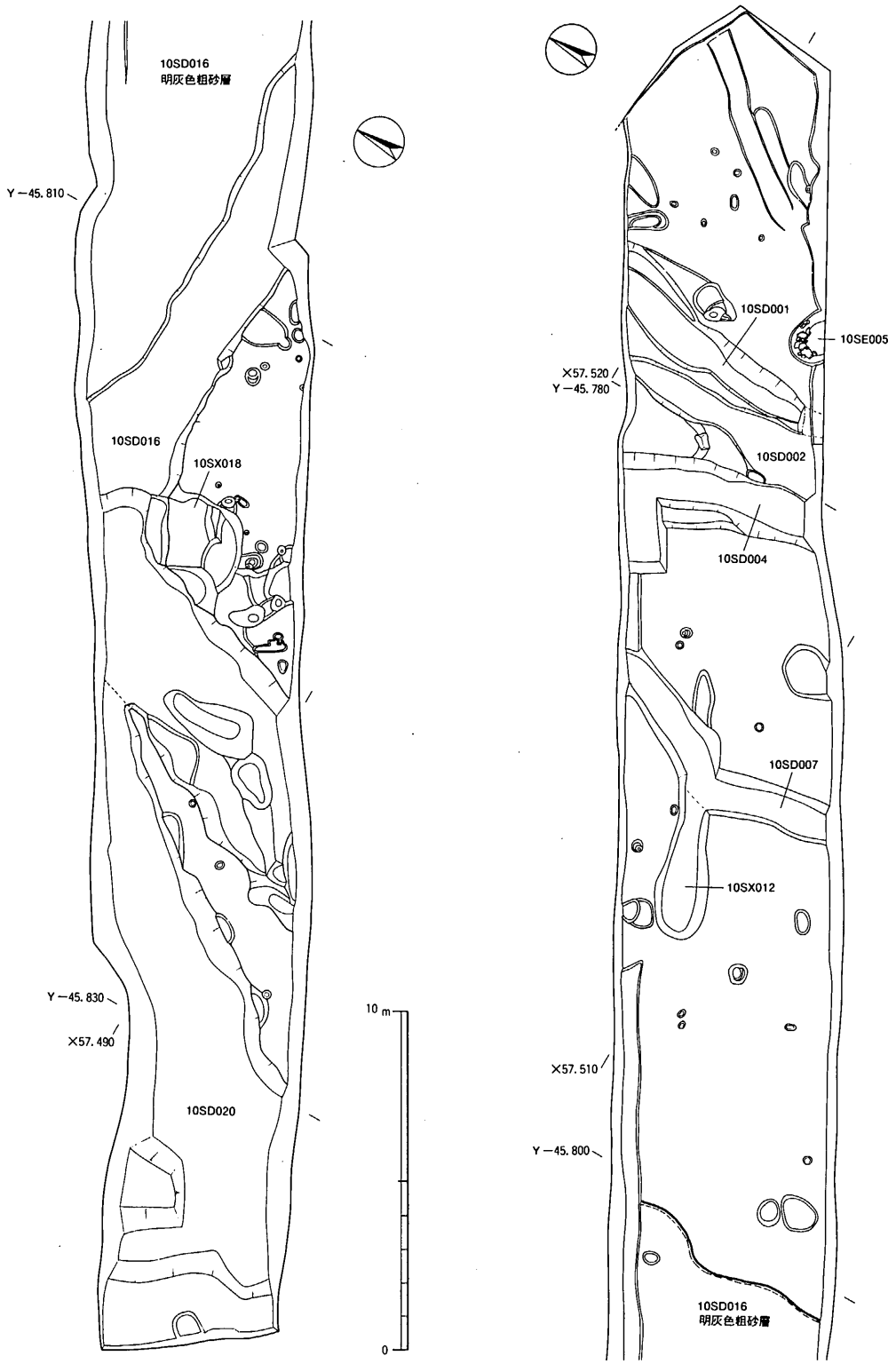


Fig.30　筑前国分尼寺跡第10次調査遺構配置図（1/200）

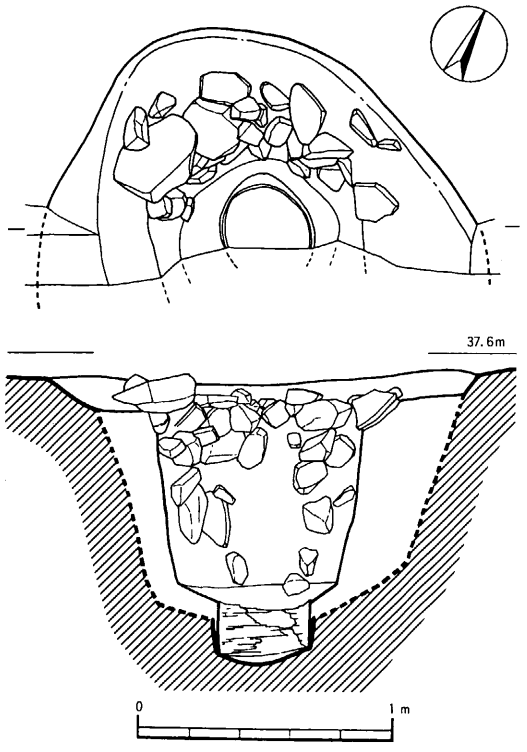


Fig.31　10SE005 実測図（1/30）

井戸（Fig.31 Pla.29）

10SE005　掘方の上面は直径1.7mの円形で深さは1.1mである。井戸枠は遺存状態が悪く検出されなかったが、水溜は腐植が著しいながらも直径0.34m、高さ0.19mの曲物が残っていた。裏込めには径0.2～0.3mほどの石が投げ込まれており、平面プランから1辺約0.6mの方形枠であったと推定される。

その他の遺構

10SX012　長さ9.6m、幅1.5m、深さ0.3mを測る細長い窪みである。10SD007に切られる。

10SX018　検出長5m、検出幅1m、深さ0.2mを測る窪み状の遺構で10SD016に切られる。

3．遺物

10SD001 上層出土土器（Fig.32 Pla.31）

須恵器

坏c(1)　口径14.2cm、器高4.1cm、高台径9.0cmを測る。底部から直線的に立ち上がる体部を有し、下位に稜がつく。高台は断面四角形で低く作られており、底部外面はヘラ切り後未調整である。底部内面はナデを施す。

壺(2)　体部最大径は28.0cm、現存高11.8cmを測る。肩部と体部最大径部に突帯を巡らせる。体部中位内面には同心円のあて具痕が残り、後にヨコナデを行う。体部中位外面の突帯下は格子叩きの後、ヨコナデを施す。外面中位以下では回転ヘラ削り、その他はヨコナデである。外面が暗茶褐色、内面が淡茶白色でやや褐色味をおびる。焼成は良で、胎土に白色粒および黒色小斑を含む。御笠川南条坊遺跡第5次調査SK546出土の長頸壺に似た形状に復原されるものと考えられる。

10SD001 下層出土土器（Fig.32 Pla.31）

須恵器

坏蓋c 3（3～5）　口径14.2～18.8cm、器高2.5～2.9cmを測る。端部はすべて三角形を成す。3、5は端部がやや丸みを帯びており、端部内面がわずかに沈線状を呈する。4は、つま

みを欠損するものの天井部中央付近にヨコナデが認められ、つまみの存在を推定できる。

坏ｃ(6)　口径20.0cm、器高6.5cm、高台径11.2cmを測る。体部は直立気味で、断面が四角形の低い高台がつく。底部外面はヘラ切り後、ナデを施す。

土師器

皿ａ（７・８）　７は口径18.4cm、器高2.5cm、底径14.0cmを測る。底部外面は回転ヘラ削り、内面および体部外面にミガキａが施される。８は口径20.4cm、器高2.4cm、器高16.5cmを測る。

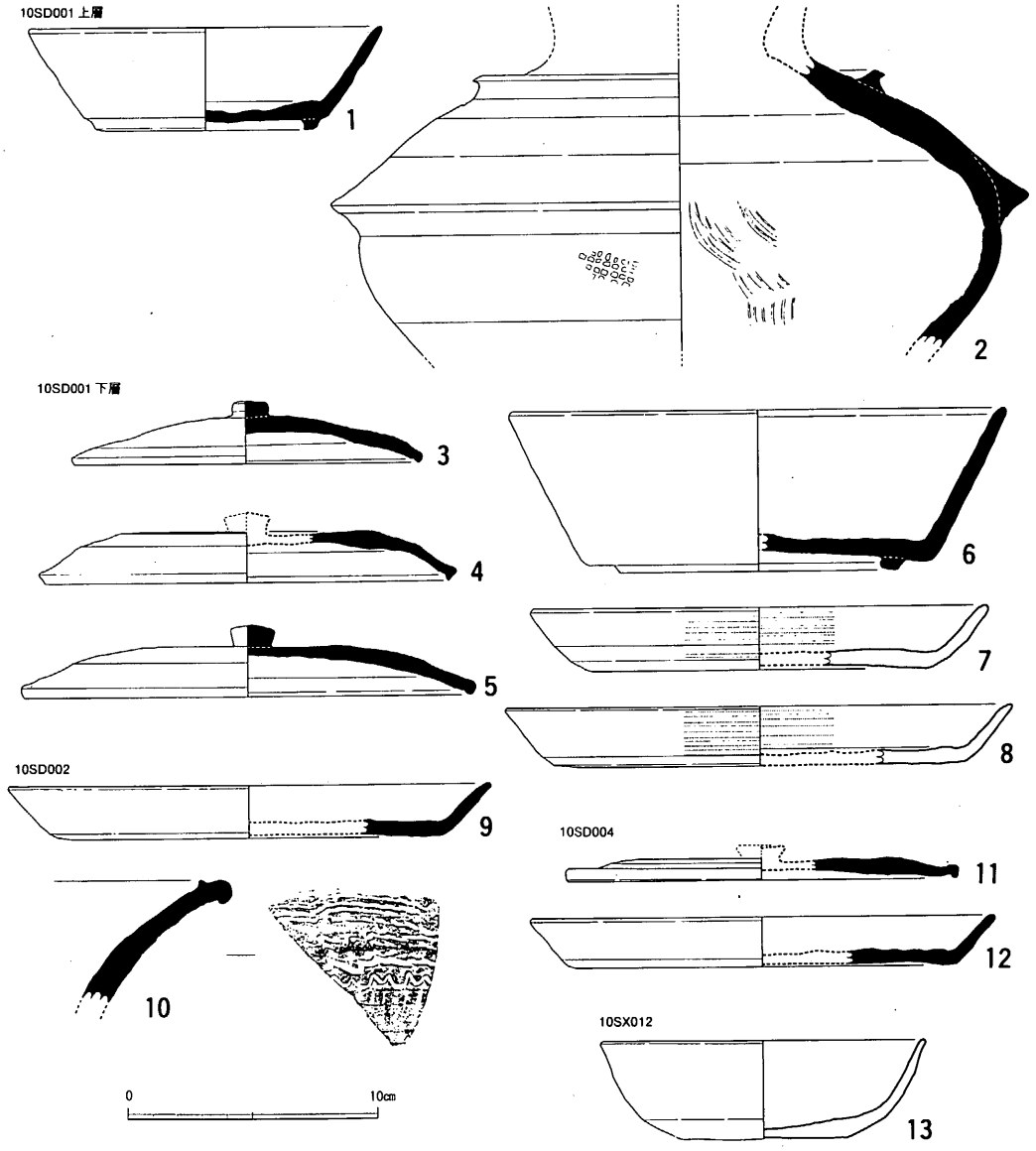


Fig.32　10SD001・002・004・10SX012 出土土器実測図（1/3）

底部外面は回転ヘラ削り、内面および体部外面にヨコナデ後、ミガキａが施される。

10SD002 出土土器（Fig.32 Pla.32）

須恵器

皿ａ(9)　口径19.4cm、器高2.1cm、底径16.1cmを測る。底部はヘラ切り後、簡単な面調整を行う。

甕(10)　頸部外面に粗雑な波状文を施す。口縁端部は厚く、丸味を帯びて口縁上部内面に突帯を巡らせる。ヨコナデで仕上げられる。

10SD004 出土土器（Fig.32 Pla.32）

須恵器

坏蓋３(11)　口径16.2cmを測る。口縁端部は小さい三角形をなす。天井部外面中央付近にヨコナデが見られることからつまみがつくものと考えられる。

皿ａ(12)　口径18.7cm、器高2.0cm、底径15.6cmを測る。底部外面はヘラ切り後、簡単な面調整を行い、体部外面下位は回転ヘラ削り痕が見られる。

10SD016 暗茶色粘土層出土土器（Fig.33 Pla.33・34）

須恵器

坏蓋ｃ３(1)　口径1.6cm、器高1.2cmを測る。口縁端部の断面は三角形を呈し、焼け歪みがある。

坏ａ（２～３）　２は口径13.2cm、器高4.0cm、底径9.2cmを測り、底部はヘラ切りされる。３は口径13.8cm、器高3.6cm、底径9.3cmを測る。底部はヘラ切りされ、底部外面に３～４方向の板状圧痕が残る。内面と外面の一部に漆と思われる付着物がある。

坏ｃ(4)　口径13.6cm、器高13.6cm、高台径8.6cmを測り、底部はヘラ切り後未調整である。高台は断面四角形を呈している。

皿ａ(5)　底部はヘラ切りで、後に若干の面調整を行う。

土師器

坏ａ(6)　口径13.3cm、器高3.6cm、底径8.4cmを測る。底部はヘラ切りされる。

坏ｃ（Pla.34-a）　高台部を欠損するが、復原高台径約10.1cmを測る坏ｃの底部破片である。底部外面に墨書が見られるが、判読不明である。底部外面はヘラ切りされ、底部内面はナデ調整される。

坏ｄ(7)　口径14.6cm、器高3.4cm、底径7.6cm。内面および体部外面に粗いミガキａが施される。底部～体部下位は、回転ヘラ削りが認められる。

皿ａ（８・９）　８は口径15.2cm、器高2.0cm、底径12.6cmを測り、底部に回転ヘラ削りを行い、内面に粗いミガキａを施している。９は口径15.2cm、器高1.9cm、底径11.5cmを測る。底部はヘラ切りで、器肉がやや厚く、口縁がわずかに外反する。

椀ｃ(10)　高台径8.4cm。底部外面に墨書があるが判読できない。底部はヘラ切り。

甕 a (11)　口径18.0cm、現存高8.5cmを測る。体部外面に縦位の刷毛目調整(6 条/cm)を施す。体部内面はヘラ削りの後、左上がりのナデを施している。口縁部は外反し、内面にゆるやかな屈曲を残す。外面にはススが付着している。

鉢(12)　口径24.9cm、現存高4.3cmを測る。口縁はラッパ状に立ち上がって開き、端部は上方につまみ上げ、断面形は三角形をなす。調整は内外面ともヨコナデの後、粗いミガキ a を施す。色調は明茶白色～明茶色。焼成はややあまく、胎土は精良で白色粒および白色小粒子を若干含む。

10SD016 褐色土層出土土器（Fig.34 Pla.35）

須恵器

坏 a (1)　口径12.6cm、器高3.5cm、底径8.5cmを測る。底部はヘラ切り後、簡単なナデを部分的に行い、体部下位の一部にヘラ状工具の当たりが残る。

土師器

坏 c (2)　高台径9.6cmを測り、底部はヘラ切りされる。摩滅のため内面は調整不明で、体部

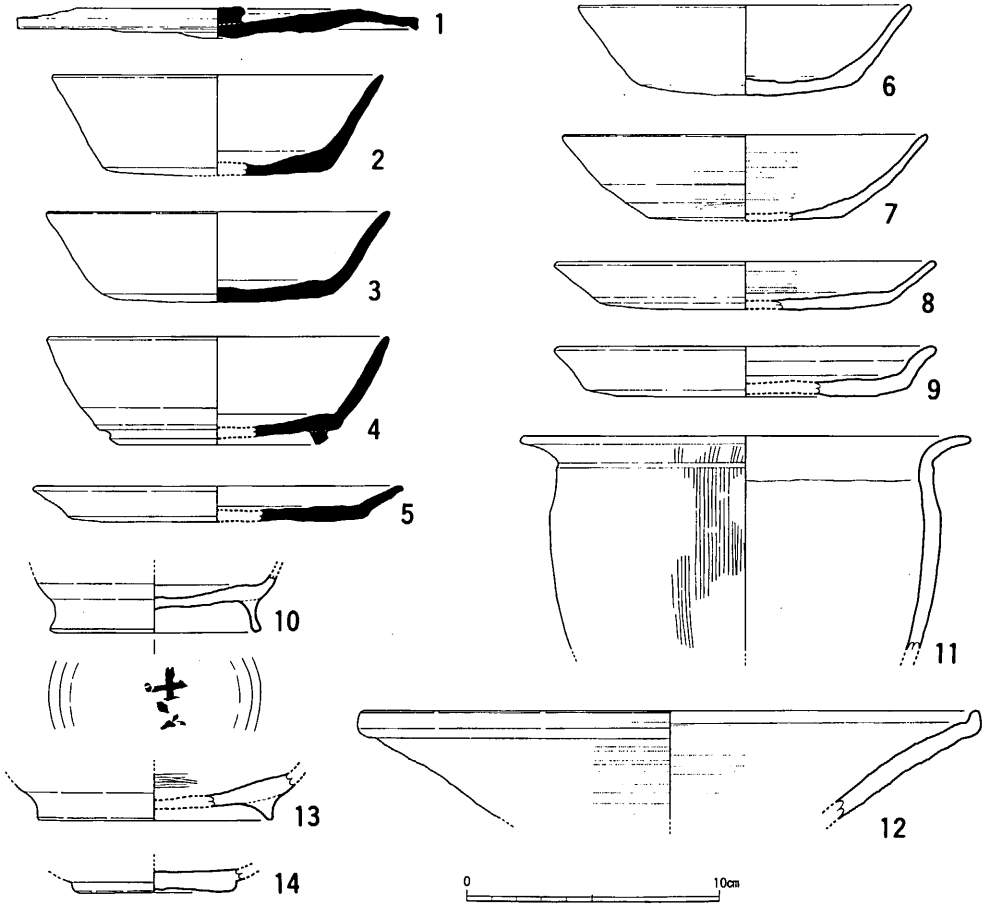


Fig.33　10SD016 暗茶色粘土層出土土器（1/3）

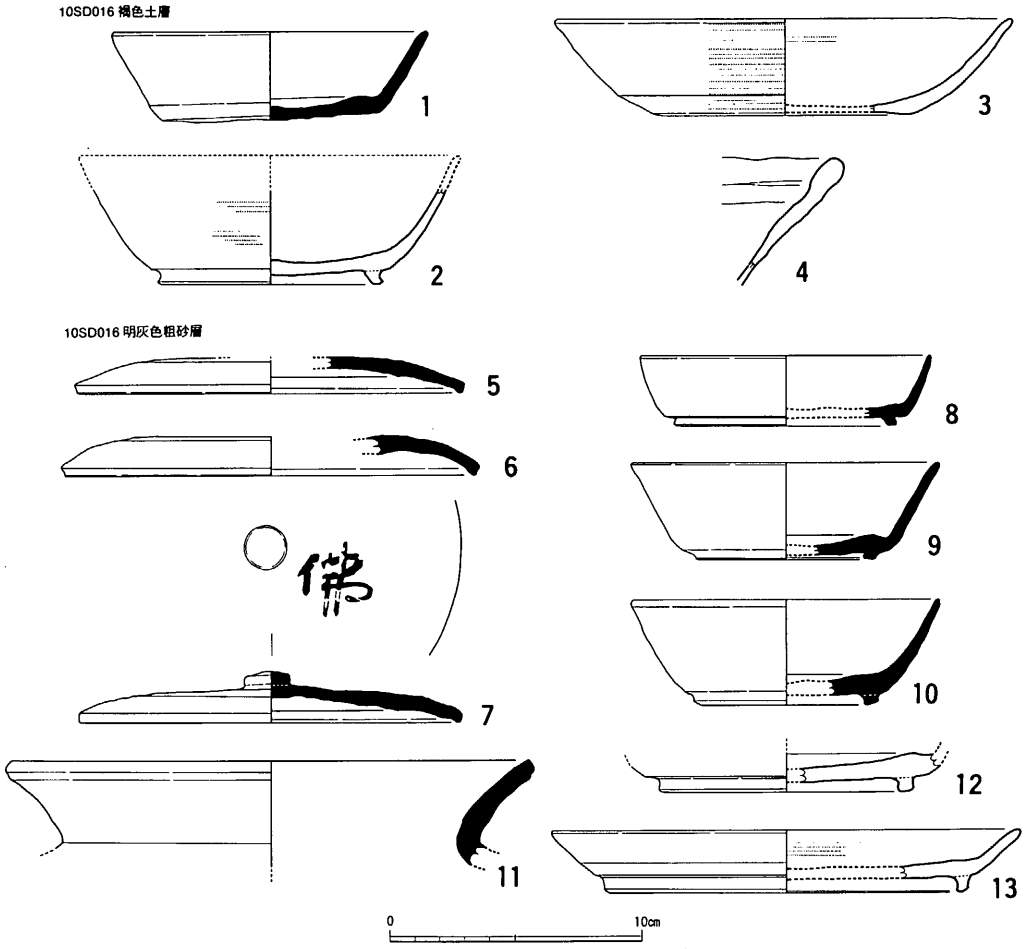


Fig.34 10SD016 褐色土層・明灰色粗砂層出土土器実測図（1/3）

外面もミガキａがわずかに残る。

坏ｄ(3)　口径18.4cm、器高3.9cm、底径9.6cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がる。底部と体部下位は回転ヘラ削りののち、内面と体部外面にミガキａを施す。

製塩土器

焼塩壺(4)　円錐形に復原され、外面に指圧痕が残る。風化のため内面の調整は不明。口縁端部はやや厚い。森田分類のⅡｂ型。（森田勉「塩壺考」『大宰府古文化論叢下巻』1983年）

10SD016 明灰色粗砂層出土土器（Fig.35 Pla.35）

須恵器

坏蓋３（５・６）　５は口径15.6cm、現存器高1.5cm、６は口径16.7cm、現存器高1.6cmを測る。５・６とも端部は断面三角形を呈し、天井部外面は回転ヘラ削りされる。

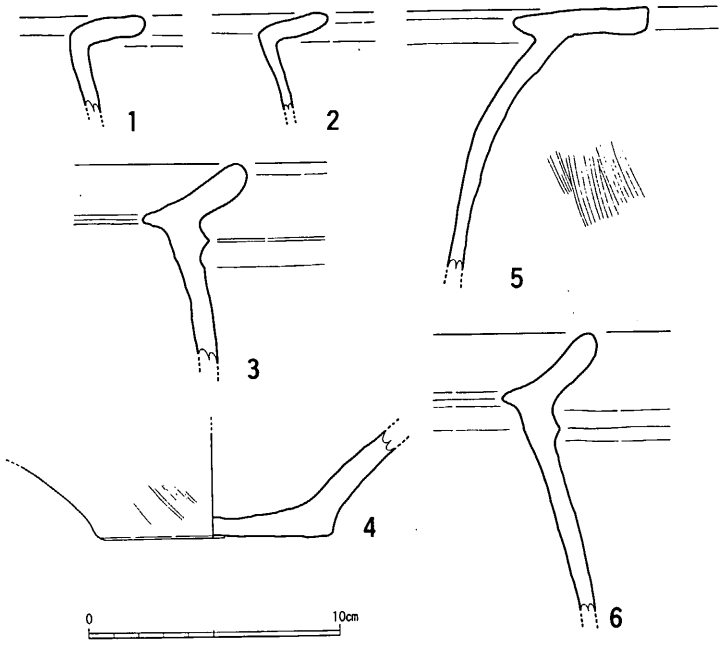


Fig.35　筑前国分尼寺跡第10次調査出土弥生土器実測図（1/3）

坏蓋ｃ３(7)　口径15.4cm、器高2.1cmを測る。端部の断面は小さい三角形を呈する。天井部外面はヘラ切り後、粗いナデ調整を施す。天井部外面に「佛」の墨書を有する。

坏ｃ（８～10）　口径11.6～12.4cm、器高2.8～4.2cm、高台径7.2～8.9cmを測る。底部から直線的に立ち上がる体部を有し、断面四角形の低い高台がつく。

甕(11)　口径21.0cmを測り、内外面ともヨコナデ調整を施す。

土師器

坏ｃ(12)　高台径10.2cmを測り、断面四角形の低い高台がつく。

皿ｃ(13)　口径19.6cm、器高2.5cm、高台径14.5cmを測る。底部～体部下位に回転ヘラ削りを施す。内面はヨコナデ後、ミガキｂを施す。

10SD020 出土土器（Fig.35 Pla.38）

弥生土器

壺形土器(5)　須玖式の鋤先状口縁を有する壺形土器で、口縁上面はほぼ水平である。頸部内外面に刷毛目(6条/cm)を施す。現存部全体に丹塗を認める。色調は乳黄橙色を呈する。（緒方）

10SE005 出土土器（Fig.36 Pla.32 Tab.5）

土師器

坏ａ（１～５）　口径11.3cm～12.3cm、器高3.2cm～3.7cmを測り、いずれも平底の底部より直線的に外上方へ開く体部形態を有している。底部と体部の境界はやや不明瞭であり、いずれも体部下半においてわずかながら屈曲を形成している。１は、底部内面にスス状炭化物の付着が看取でき、灯火具として利用された可能性が窺える。また１～３と４・５においては、色調に差異があり、前者は明白茶色を基調とする色調を示しているのに対し、後者は明橙色を基調とした色調を呈している。底部外面の処理は、いずれも回転ヘラ切り未調整である。

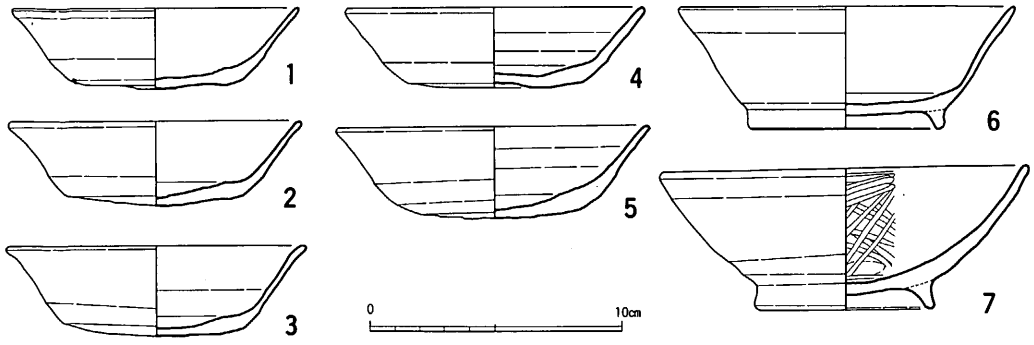


Fig.36 10SE005 出土土器実測図（1/3）

椀ｃ１(6) 口径13.3cm、器高4.9cmを測り、平底の底部から直線的に外上方へ開く体部形態を有する坏に、やや外方へ張り出す高台を貼付している。坏ａと同様に体部下半においてわずかながら屈曲を示している。底部外面の処理は、回転ヘラ切り未調整であり、板状圧痕をとどめている。

Tab.5 10SE005 出土土器計測表

A．番号　B．挿図番号　C．内底のナデの有無 ○×　D．板状圧痕の有無 ○×
㊕．黒色土器　単位cm

器　種	A	B	口径	器高	底径	C	D
坏ａ（ヘラ）	1	1	11.3	3.2	6.9	○	
	2	2	11.5	3.4	7.0	○	○
	3	3	11.6	3.6	7.2	○	
	4	4	11.7	3.2	6.9	○	
	5	5	12.3	3.7	6.6	○	
椀ｃ１	1	6	13.3	4.9	7.4	○	○
㊕Ａ 椀ｃ１	1	7	14.6	5.7	6.9	×	

黒色土器Ａ類

椀ｃ２(7) 口径14.6cm、器高5.7cmを測り、底部より体部へ緩やかに移行する形状を示す坏に、やや外方へ張り出す高台を貼付している。底部内面において凹凸が観察でき、底部から体部への移行状況を加味すると、底部押し出しが想定できる。また内外面共にヨコナデ後、内面のみミガキｃによって仕上げられている。黒化部位は、口縁端部内面までにとどまっている。底部処理は、回転ヘラ切りが行われており、後処理に関しては摩耗のため不明確である。（中島）

10SX012 出土土器（Fig.32 Pla.32）

土師器

坏ａ(13) 口径13.0cm、器高4.0cm、底径6.7cmを測る。

灰茶色砂層出土土器（Fig.37 Pla.36・37）

須恵器

坏蓋ｃ３（１・２） 端部は小さい三角形をなし、天井部外上面をヘラ切り後、粗い面調整を行う。１は口径18.2cm、現存高0.8cmを測る。つまみを欠損するが、天井部外面中央部につまみに伴うと考えられるヨコナデが認められる。２は口径19.4cm、器高3.0cmを測る。器高がやや高く、端部は軽くつまんだ程度である。

坏ａ(3) 口径11.7cm、器高2.1cm、底径7.8cmを測る。底部をヘラ切りし、後に粗いヨコナデを施している。

坏ｃ（４～６） 口径12.3cm～16.0cm、器高4.4cm～5.1cm、高台径8.0cm～9.5cm。４・５は体部がまっすぐ斜めに立ち上がるが、６は口縁が若干開く。高台はやや低い断面四角形である。４と６は底部がヘラ切りで、後に粗いナデを施す。

坏ｄ(a) 底部外面に墨痕があるが、判読できない。

皿ａ(7) 口径16.8cm、器高2.3cm、底径14.0cmを測る。底部はヘラ切りで、後に粗いナデを行っており、板状圧痕が認められる。

壺(8) 口径7.8cmを測る直口壺の口縁部片と考えられる。口縁端部は平らで外方に屈曲する。胎土に砂粒と黒色斑を若干含む。

土師器

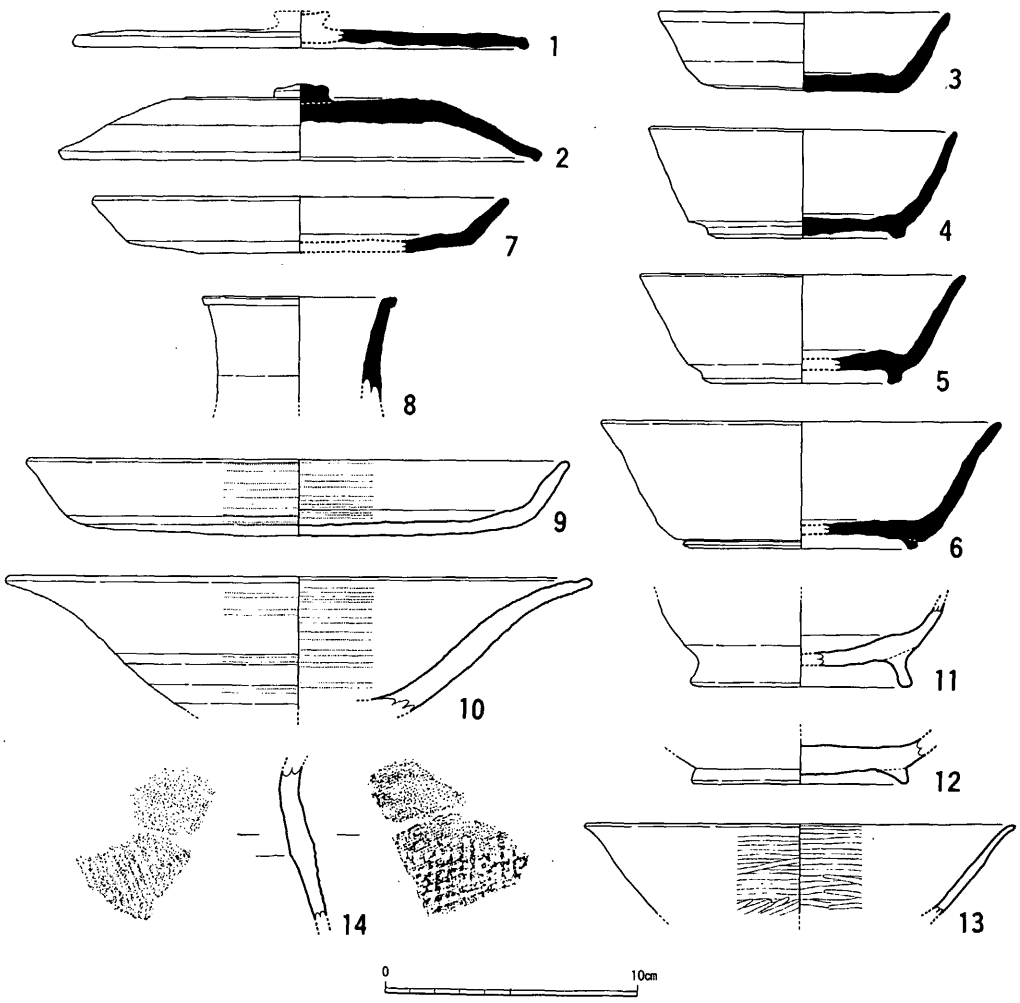


Fig.37 灰茶色砂層出土土器実測図（1/3）

皿 a (9)　口径21.8cm、器高3.0cm、底径19.5cmを測る。底部～体部下位は回転ヘラ削りを行い、内面及び体部外面にミガキ a を施す。

鉢(10)　口径23.5cm、現存高5.3cmを測る。体部は下位が内湾気味で中位～上位にかけて大きく外方に広がる。端部内面に意識的な強いヨコナデによる沈線が巡る。体部外面下位は回転ヘラ削りされ、内外面にミガキ a を施す。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良。胎土は白色粒子を若干含むが、精良である。類例としては大宰府史跡第43次調査 SK1106 や大宰府史跡第77次 SK2070 出土の大形高台付き皿などがあり、蓋の可能性も指摘されている。

椀 c (11)　現存高3.4cm、高台径7.8cmを測る。

黒色土器A類

椀 c (12)　現存高1.9cm、高台径9.4cmを測る底部の破片である。

緑釉陶器

皿(13)　現存高0.9cm、底径6.5cm。内外面ともミガキ a を施す。釉は明緑白色に発色し、光沢がある。釉厚はうすく剝離が目立つ。胎土は精良で明茶白色を呈し、白色粒子を若干含んでいる。焼成はあまい。

Pla.37-a は灰釉陶器の壺と考えられる断片である。

製塩土器

甕(14)　体部外面に木目と直行する平行刻みの叩き目が縦位に施されている。体部内面には円弧状で平行刻みの当て具痕が残る。色調は暗茶灰色で、焼成は良である。胎土は砂粒および白色粒子を多く含む。玄海灘式製塩土器の鹹水の煎熬用甕で製塩土器Ⅰ類と分類されているものに該当する。(市橋重喜「製塩土器」『海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第87集 1982年)

黄灰色砂層出土土器（Fig.35 Pla.38）

弥生土器

甕形土器（１～３）　１・２は、口縁内面に不明瞭な稜線をもって屈折する「く」字形口縁を有する甕形土器である。１は色調が淡褐色～淡黄褐色を呈し、２は色調が外面が淡黄褐色、内面が淡赤褐色を呈している。３は、口縁が「く」字状で内湾し、内側の稜が明瞭なもので、外面口縁直下に１条の断面が三角形を呈する突帯を巡らせる。色調は外面が淡橙褐色、内面が乳橙色、断面が暗黒灰色を呈する。

壺形土器(4)　底径9.2cmを測る壺形土器の底部破片である。摩滅が著しいが、体部外面に丹塗が残り、色調は淡黄橙色を呈している。

暗黄色土層出土土器（Fig.35 Pla.38）

弥生土器

甕形土器(6)　口縁が「く」字状で内湾し、内側の稜が明瞭なもので、外面口縁直下に１条の

断面三角形突帯を巡らせる。色調は淡黄橙色を呈する。（緒方）

その他の出土遺物

瓦類

軒丸瓦（Fig.38 Pla.39 Tab.6）

1は1葉のみ単弁とする複弁八葉蓮華文である。第7次調査と同様に出土量が最も多い。2は鴻臚館式の複弁八葉蓮華文。3は単弁蓮華文である。弁数は18葉程度に復原され、間弁も表現される。中房には1＋8＋12と推定される蓮子が配されるものとみられる。外区には珠文帯がみられ均等に割り付けられていれば、54個程度に復原される。明灰色で焼成はあまい。

軒平瓦（Fig.38 Pla.39 Tab.6）

4は均整唐草文。鴻臚館系。5は鴻臚館式の均整唐草文。6は均整唐草文であるが、かなり簡略化されている。7は老司Ⅰ式の扁行唐草文。8は老司Ⅱ式の扁行唐草文。9は両端から派生する均整唐草文であるが、中心飾りは無い。

平瓦・丸瓦（Pla.39 Tab.7）

出土量はかなり多いが、計測できるものはほとんど無い。そのなかでもdは行基式の丸瓦で

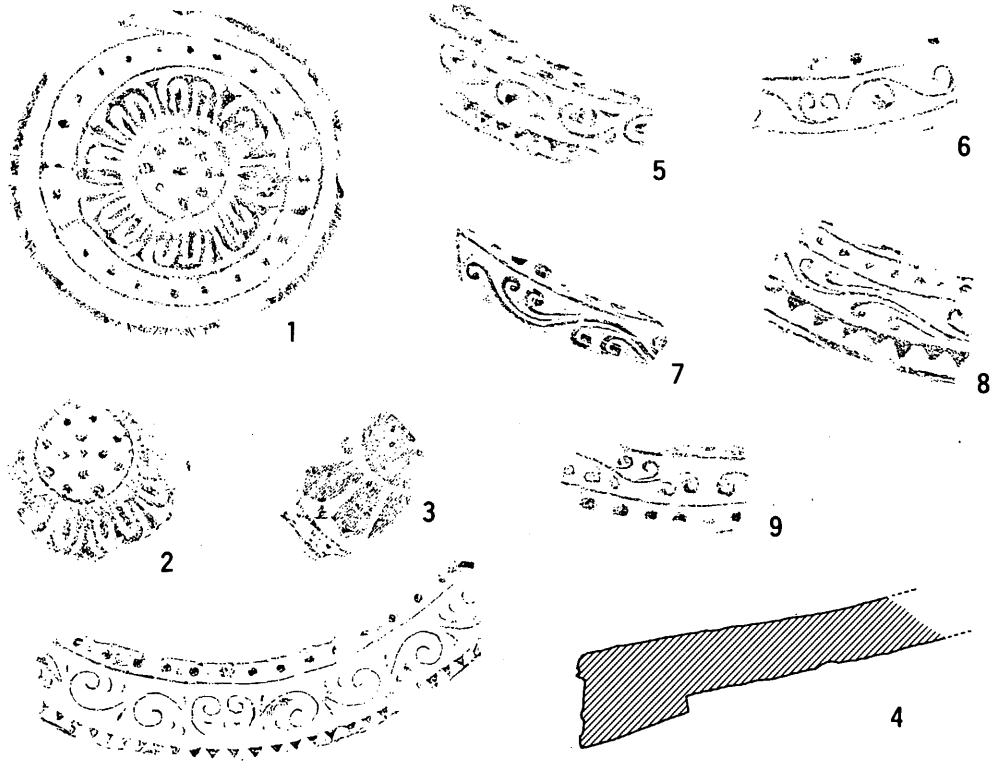


Fig.38　筑前国分尼寺跡第10次調査出土軒瓦実測図・拓影（1/4）

Tab.6 第10次調査　軒瓦・道具瓦出土地点一覧表（図版番号は Fig.38 に対応）

遺構番号＼図版番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	鬼瓦(大)	鬼瓦(小)	無文塼
10SD001 上層	1											
10SE005					1				1			
10SD016 暗茶色粘土	5	2		4	1		5					4
10SD016 褐色土				3								1
10SD016 灰色粗砂								1				
10SX018	1											
灰茶色砂	3		1	6	1	1	5			3	1	1
灰色砂礫				1			1					
表土	1			1						1		1
合計	16	2	1	15	3	1	11	1	1	4	1	7

※　数値は判別できる限りかなりの小片まで含めている。

現存長30cm、末端部の幅12.5cmを測る。縄叩き目が若干のこるが、縦方向のケズリによって消されている。

平瓦、丸瓦は第7次調査出土資料と同様に、10SD016 において出土点数を数えてみた（Tab.7）。10SD016 の出土土器はその大半が8世紀代のもので、上層の一部に平安期のものが若干入っている状況であった。瓦の出土傾向は、わずか2点の格子叩き目を出土した他は、縄叩き目であった。土器の様相と合わせた場合、平安期の土器の量がひじょうに少ないことと共通しているように思われる。平安期の土器と格子叩き目瓦片は 10SD016 掘り下げ段階で上層の包含層中から混入した可能性も考えておく必要があろう。

Tab.7 10SD016 出土瓦叩き目別数量表
（図版番号は Fig.23～25 に対応）

図版番号	点　数
14	1
43	1
格子合計	2
縄叩き目	764

破片総数　1127(軒瓦、道具瓦を除く)
判別不詳　361

この成果と先の 7SX011 の傾向とを併せてみると、8世紀代の主流が縄叩き目であり、格子叩き目（老司Ⅰ式、忍冬唐草文に付随するものを除く）は8世紀代には出現していない可能性が強いと考えられる。個々の叩き目の出現時期や出土量などの問題については、今後の良好な資料の検出を待って再検討する必要があるが、1つの方向性は見いだせたのではなかろうか。

なお 10SE005 から格子叩き目の平瓦が2点出土している。Fig.24・25 の31と44である。10SE005 は9世紀中頃から後半に位置づけられ、参考となる。

文字瓦（Tab.6）

「介」（Ⅻ類）が、灰茶色砂質土層から１点出土したにとどまる。

無文塼（Pla.39 Tab.6）

破片も含めて７点検出された。ａはこのうちで最もよく遺存するもので、長さ21.0cm、幅15.7cm、厚さ5.1cmを測る小型のものである。明灰色、明茶白色を呈し、焼成はあまい。残る資料も同様な状況にある。

鬼瓦（Pla.39 Tab.6）

大宰府政庁跡から出土しているものと同型と考えられる大型のものと、筑前国分尼寺跡第２次調査で出土したものと同型とみられる小型のものの２種類が出土した。大型のものは４点出土した。ｃは鬼瓦下端部で現存長14.5cm、幅15.5cm、最大厚7.5cm、ｂは隅部分で現存の長さ11.5cm、幅7.7cm、最大厚5.0cmである。暗灰色、明茶白色を呈するが、いずれも焼成はあまい。小型のものは長さ10cm程度の破片で、珠文帯部分の一部を遺すのみである。

土製品

生産用具（Pla.38） 鞴羽口とみられる破片で、ａ～ｄは10SD016、ｅは灰茶色砂層から出土した。

（狭川）

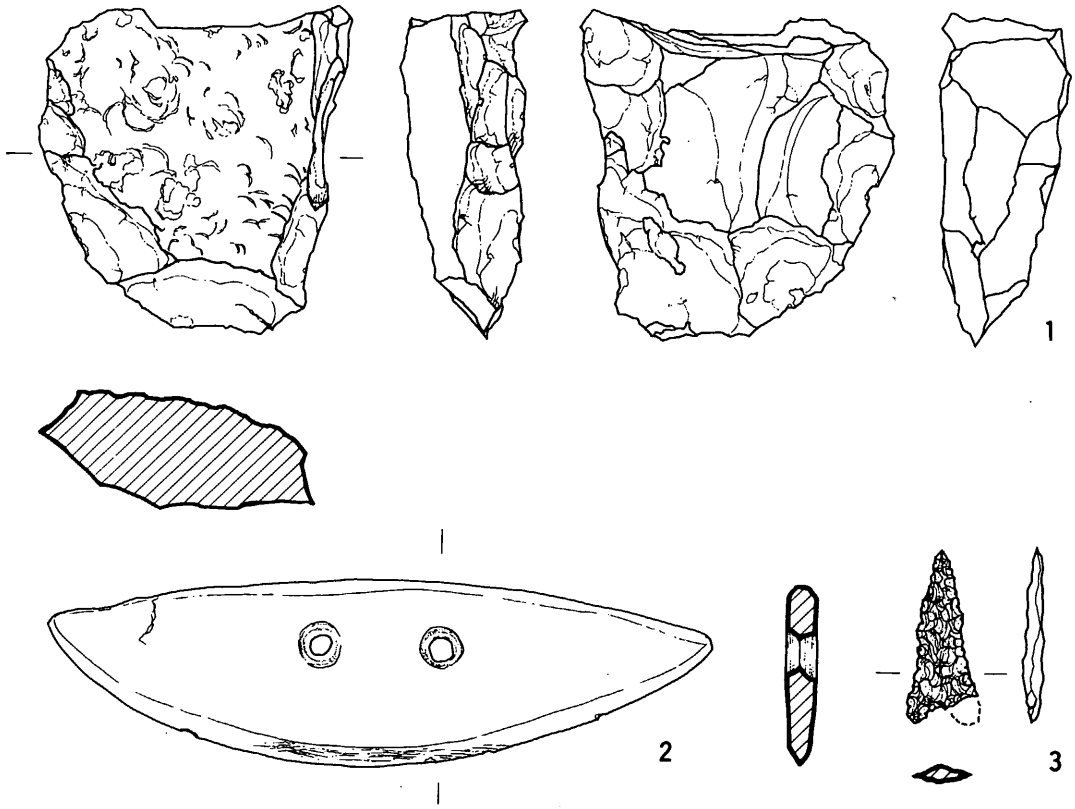


Fig.39 筑前国分尼寺跡第10次調査出土石器実測図（2/3）

石器（Fig.39 Pla.40）

石庖丁(1)　杏葉形を呈する泥岩製の石庖丁で、紐穴芯間が2.4cm、紐穴芯と背部の間が1.3cmを測る。刃部は両刃で鎬も明瞭。紐穴は回転運動を利用する穿孔具で両面から穿たれる。

打製石鏃(2)　安山岩製の打製石鏃である。長身で抉りは浅く、身の中ほどが狭くなる。先端は欠損していないが、表面は多少風化している。縄文時代でも古い時期の所産か。

チョッピング・トゥール(3)　安山岩の表皮部分を除去した際に出た剥片（横長形か？）を用い、周辺から両面に刃部を作り出したと考えられるチョッピング・トゥールである。器面の風化が著しく灰色を呈する。剥離背面には原石表皮部分を残す。旧石器時代の所産であろう。

（山村）

4．小結

10SD016 明灰粗砂出土の「佛」の墨書土器のはこの周辺での寺院の存在を示唆する資料として注目される。10SD016 の埋没時期は土師器の坏 a の法量などから考えて大宰府Ⅴ期頃であろう。（緒方）

10SE005 出土資料の時間的位置づけ

出土資料中において主体を成している坏 a の各属性を基準とし、さらに出土資料の組成を考慮すると、大宰府史跡第70次調査 SK1800 出土資料の傾向に最も近似しているものと考えられる。したがって、SK1800 埋没推定年代として 9 世紀中頃の時期が付与できるものと考える。

なかでも坏 a（Fig.36 1～5）とした資料に関しては、法量ならびに形態において全ての資料が近似しており同一型式の範疇で把握できるものである。しかし SK1800 出土資料と同時代資料として抽出した場合、10SE005 出土資料の 4 、 5 に関しては、色調が異なる特徴を有している。この特徴をもって別型式として認定できなくもないが、他の諸属性がすべて近似していることから、焼成環境の差異から生じたものと解することも可能である。今後、時空間軸上での位置づけを含めて検討を要する資料であろう。（中島）

(5) 筑前国分尼寺跡第11次調査

東西２区に分けて調査した。調査地は太宰府市大字国分451-1の一部（東区）と450、432-7の一部（西区）である。調査面積は両地点併せて195㎡である。調査は平成２年12月１日～22日まで実施し、狭川真一が担当した。

１．層位

東区では表土を除去すると瓦の小片を多量に包含した黒灰色土があり、その直下に遺構面である砂礫層あるいは黄色砂質土の地山が検出された。この下層には暗茶色粘質土、あるいは茶色砂層などがあり、さらにその下に黒灰色粘土が存在することを確認した。この黒灰色粘土は、肉眼観察によるかぎりでは太宰府市向佐野所在の原口遺跡下層で検出された姶良 Tn 火山灰を含む土層に近似しており、今後分析調査を行う必要がある。ただし、この土層の残存状況は決してよいといえるものではなく、調査区内でも部分的にしか残存しておらず、またこの上層に砂礫層が被るとともに土層上面は起伏が著しいことから黒灰色粘土形成後、弥生時代に至る間にかなりの規模で同層が流出しているものと考えられる。

また、試掘調査の結果から西区と東区の間は大きな段落ち（後世の水田造成によるものらしい）になっており、遺構は残存していなかった。

西区では表土直下で遺構面である黄色粘土の地山が検出された。西区は調査区西端にある現

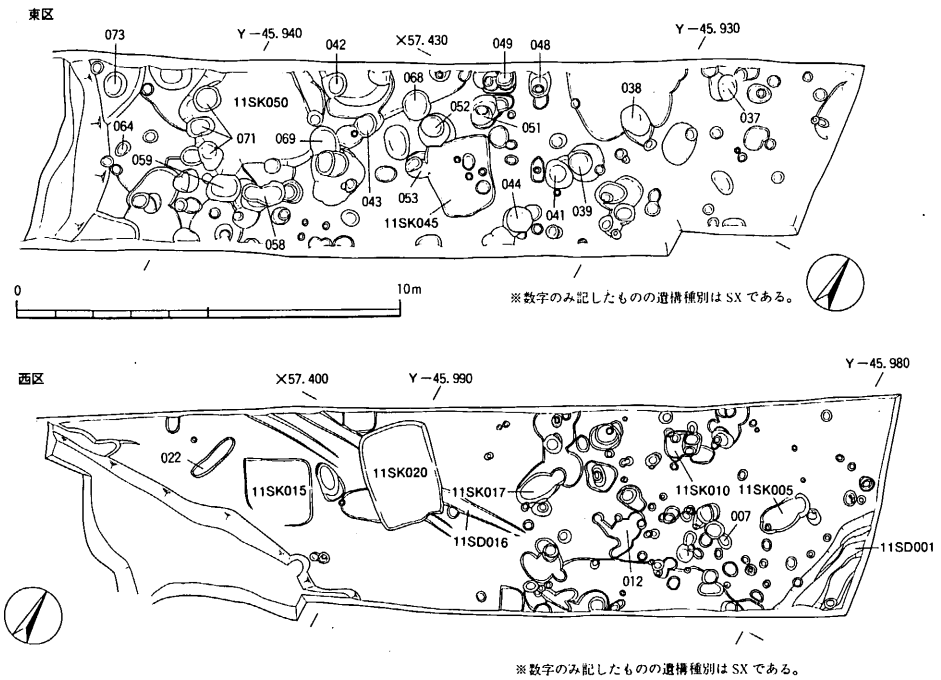


Fig.40　筑前国分尼寺跡第11次調査遺構配置図（1/200）

在の畦畔直下で段落ち（東区に同じ）になっており、さらに西側に試掘トレンチを延ばしたが遺構は検出されなかった。地山以下は西区に近い状況を呈していたが、黒灰色粘土層は確認し得なかった。

2．遺構（Fig.40 Pla.41・42）

竪穴（土壙）（Fig.41）

11SKO15　西区で検出した。1.75m×1.7m、深さ約6cmの方形竪穴状土壙である。壁は南隅でその一部を欠いている。床面は南側がわずかに深くなっている。埋土は床面上にに薄く灰白色土が堆積し、それ以上は茶黄色土である。出土遺物は弥生中期頃の甕小片を検出した程度である。

11SK020　西区で検出した。2.65m×1.9m、深さ約0.2mの長方形竪穴状土壙である。後世の溝（11SD016）に切られるがよく遺存している。壁はわずかに外方に開き気味に立ち上がり、床面は中央が若干くぼんでいる。埋土は床面から黒褐色土、灰白色土、茶黄色土の順に堆積するが人為的なものではなさそうである。遺物は各層から散在的に検出され、弥生中期頃の甕小片を若干検出したにとどまる。

11SK045　東区で検出した。2.05m×1.65m、深さ約0.1mを測る。前記2例に比べてその形状は大きく崩れている。壁はやや開き気味に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色土の単一層であった。床面にピットが検出されたがこの遺構とは直接関係するものではない。遺物は弥生中期頃の甕、鉢などの小片を若干検出したにとどまる。

土壙

11SK005・010・017　西区で検出した土壙である。規模は0.9～1.0m×0.6～0.7m、深さ0.1～0.2m程度のもので弥生中期頃の遺物を若干検出した。

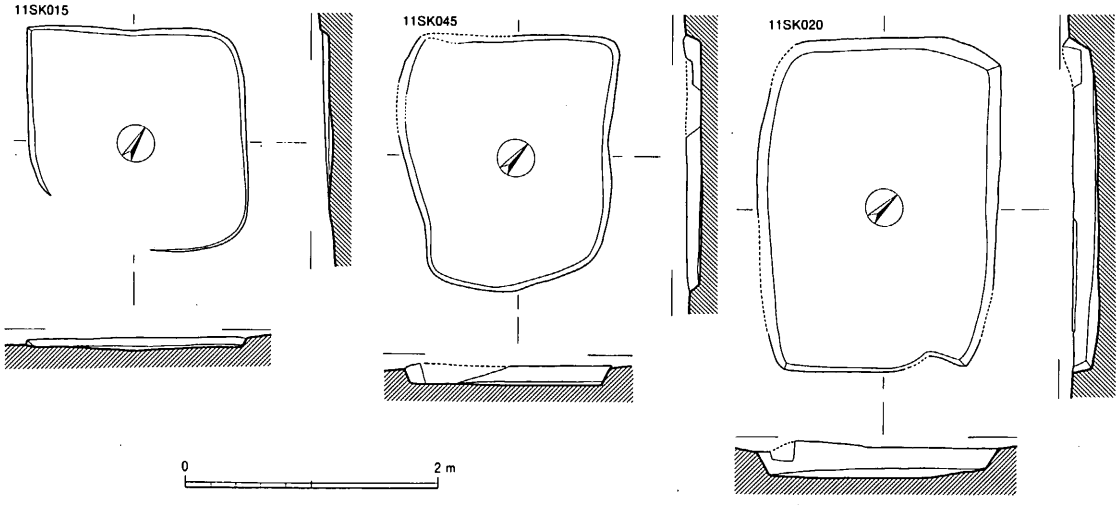


Fig.41　11SK015・020・045実測図（1/30）

11SK050　東区で検出した。3.7m×2.5m、深さ約0.2mを測る不定形な土壙で、一部は調査区外に広がる。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土層中から散在的に検出された。

その他の遺構

11SX037・038・039・041・042・043・044・048・049・051・053・058・059・068・069・071・073　すべて東区で検出した柱穴である。今回検出した遺構の中でここに番号化したものは、土壙や他のピットに比べて直径が0.6～0.8m、深さ0.5m内外で一際深くしっかりしたものである。柱の明確な痕跡は検出されなかったが、これらは倉庫などの掘立柱建物の柱穴として捉えられる可能性がある。しかし、調査範囲が狭く今回の所見だけでは纏めることができないため、遺構の番号とその位置のみを報告しておく。なお埋土は黒褐色土で構成され、各遺構中から検出された遺物は、弥生中期頃の土器片若干量である。

11SX007・012・064　弥生期のピットで、007からは石庖丁、012からは砥石、064からは柱状片刃石斧が検出された。

11SD001　南北方向の溝でやや粗めの砂層からなる。奈良・平安期の瓦を若干包含していたが、すべて摩滅が著しく開削の時期は大きく下るものと思われる。11SD016は現在の水田に伴うもの。

なお11SX022（西区）は埋土の状況から上記溝の時期に近いもの、11SX052（東区）は埋土が他の遺構に近似するものの須恵器片を含んでいるところから奈良時代以降と判断される。

3．遺物（Fig.42 Pla.43）

11SK005出土土器

弥生土器

甕形土器(4)　口径18.2cmで、頸部に突帯を有する。

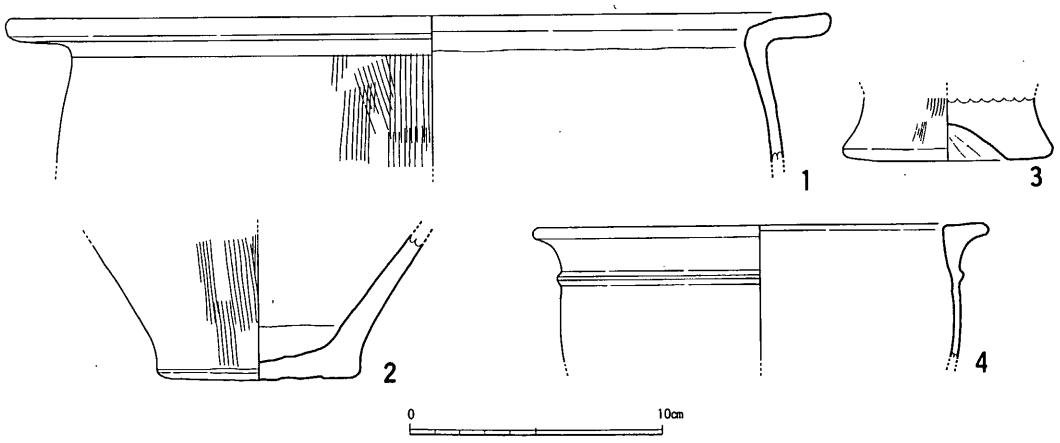


Fig.42　筑前国分尼寺跡第11次調査出土土器実測図（1/3）

11SK017 出土土器

弥生土器

甕形土器(3)　底部径8.3cm、外面をハケで調整する。

11SK050 出土土器

弥生土器

甕形土器（１・２）　１は口径34.0cm。外面の頸部以下はハケ目である。２は底部径8.2cm。底部の製作は内側から粘土円盤をはめ込み接合したものとみられる（底部ｅ手法－田崎博之「須玖式土器の再検討」『史淵』122号）。（狭川）

その他の出土遺物

石器（Fig.43 Pla.40・43）

石庖丁（１・２）　１は泥岩製で、器表面は風化し部分的に剥離している。刃部は両面から均等に砥出されるが中央に寄るほど鈍化している。紐穴の穿孔は両面より行われているが、敲打痕跡などは見られない。背孔間は2.2cm、孔端6.3cmを測る。11SX007 より出土。２は輝緑

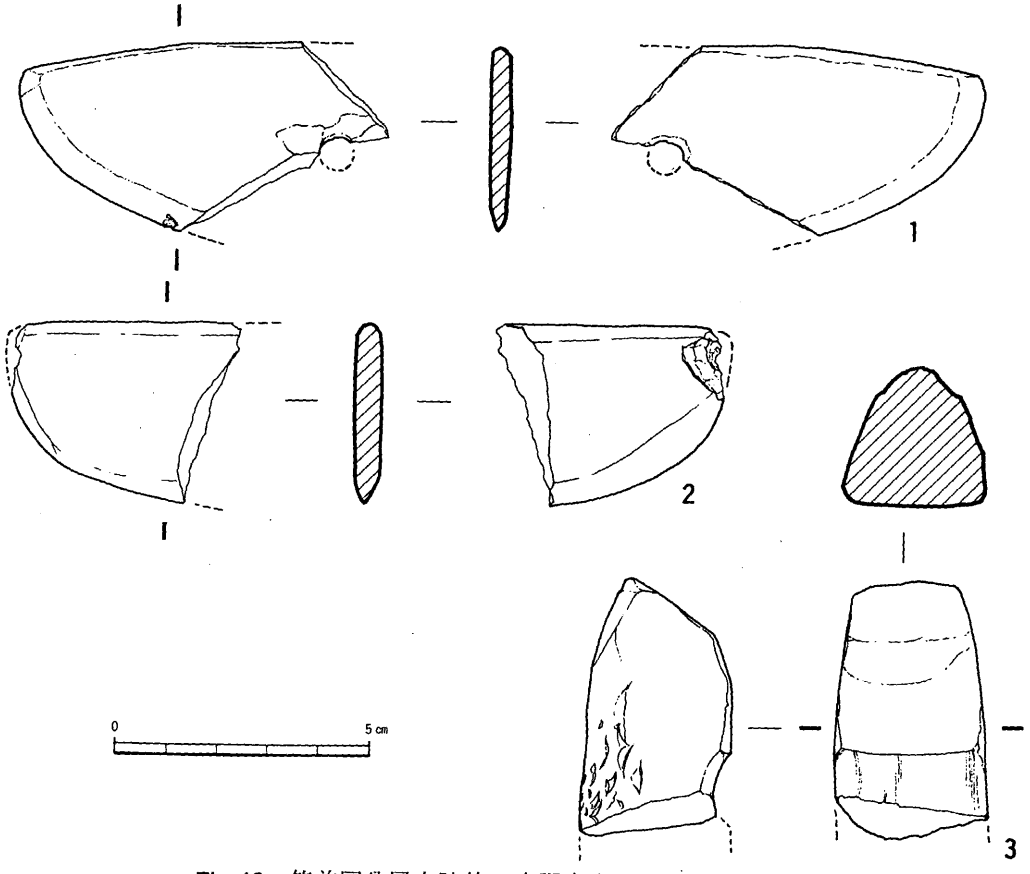


Fig.43　筑前国分尼寺跡第11次調査出土石器実測図（2/3）

凝灰岩製で、幅が4㎝足らずの細身のものである。紐穴部分は欠損して無い。刃部の作り出しは右面に強い。左面横の刃部の砥出しは顕著である。切っ先は中央によるほど鋭い。右面は刃部を除く全体に光沢があり、特に原石に含まれる不純物の上面で顕著である。それに対し裏面の光沢ははそれほどでもなく、色調も右面が湿感のある小豆色を呈すのに対し、左面は乾燥した灰色味を帯びた小豆色を呈す。この状況が埋没環境によって生じたものか、稲科植物をカットしたこよによって生じた使用痕（コーン・グロス）か、はたまた、ほかの物理的作用に依るものなのかは顕微鏡レベルの観察研究を必要とする。東区黒灰色土出土。

柱状片刃石斧(3)　3はU字形の抉りをもつ柱状片刃石斧である。抉りの対面には無数の敲打による小剝離が残されている。欠損面は他の使用面と同様に風化しており、使用時に折れて形成された可能性がある。現存長5.1㎝、幅3.0㎝、厚さ2.9㎝。ケイ質泥岩製。11SX064より出土。

砥石（Pla.40-a）　砂岩製で11SX012出土。　（山村）

4．小結

今回の調査では弥生時代中期前半から後半に及ぶ遺構・遺物を検出したが、出土遺物の傾向では中頃から後半にその主体があるようである。また、竪穴状遺構および掘立柱建物を想定できるような遺構を検出できたことは、この筑前国分尼寺跡周辺でははじめてであり、太宰府市内における弥生時代中期集落解明の糸口を摑めた点は重要である。今後の近隣の調査に期待したい。

(6) 筑前国分尼寺跡第12次調査

東西２区に分けて実施した。調査地は太宰府市大字国分428-2･4･8の一部である。調査は平成３年１月５日から１月20日まで実施し、狭川真一が担当した。調査面積の合計は100㎡である。

１．層位

東区は、表土(現代の盛土などを含めて約1.5ｍ)を除去すると若干の遺物を含む暗灰色土層があり、そのすぐ下が地山である。しかしこの地山は第11次で検出した黒灰色粘土層およびその下層の灰白色粘質土層であり、遺構面として捉えられる黄色粘土層はこの調査区内では検出されていない。さらに調査区の北半分は暗灰色土の落込みになっており、残る一部も攪乱を受けていた関係から顕著な遺構は検出されなかった。なお、本調査区と第６次調査区の間は調査し得ていないが、第６次調査区西端が段落ちになっていることと今回の東調査区が上記のような状況であったことから、遺構の残存している可能性は低いものと判断して調査は見合わせた。

西区は表土を除去すると特に目立った包含層もなく、地山が検出されるという状況であった。地山は北側約半分が黄色粘質土、南半分および北側の一部がが灰色砂土であった。この灰色砂土の下層はやや粗目の砂が堆積したものである。この地山から切り込む形で若干の遺構が検出された。以下遺構については、西区のみ報告することとする。

２．遺構（Fig.44・45 Pla.44～47）

溝

12SD001　北側を攪乱で壊されているが、検出長約4.1ｍ、最大幅1.6ｍ、深さ0.2～0.3ｍのやや蛇行する南北溝である。埋土は下層が各種の砂が堆積している状況で、かなり早い流れを想定できる。上層は灰色粘質土が堆積している。この溝を境として地山が東側で黄色粘質土、西側で灰色砂土に分かれている。地形に対してやや不自然であるが、自然流路の可能性も考えておきたい。

12SD005　検出長4.2ｍ、最大幅1.9ｍ、深さ約0.4ｍの人為的に穿たれた南北溝である。埋土の状況は 11SD001 に近似して、下層が砂の堆積、上層が灰色粘質土である。かなり早い流

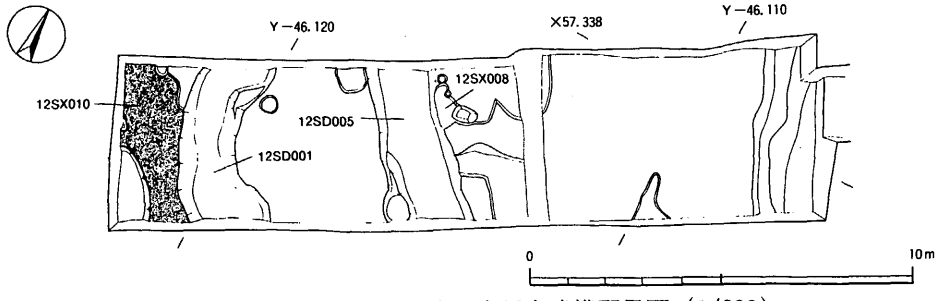


Fig.44　筑前国分尼寺跡第12次調査遺構配置図（1/200）

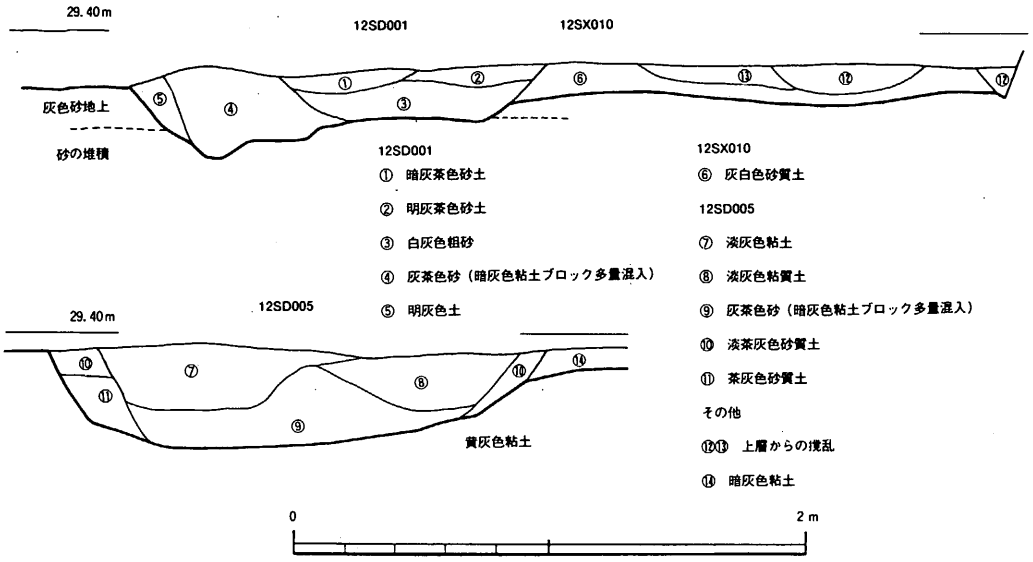


Fig.45　12SD001・005・12SX010 土層実測図（1/30）

れを想定できる。検出範囲が狭いため正確さを欠くが、溝の振れはおよそ N-42°20'-W 程度である。

整地層

12SX010　12SD001 を境に西に広がる灰白色砂土のかなりよく締まった積み土である。南北方向の広がりは追えなかったが、東西幅約1.5m、厚さ0.1～0.15mであった。この積み土の下層は灰色砂土の地山である。地山上面の標高は、12SD001 以東で検出される地山の標高と同じであり、東側は削平を受けた可能性もある。西側についてはトレンチにより観察したが、積み土以西は東側と同様に地山が露呈しており、削平されている可能性が考えられる。トレンチの範囲には遺構は検出されなかった。

その他の遺構

12SX008　12SD005 に切られるピットで、瓦片が出土した。

3．遺物

12SD001・12SD005 出土土器

最も多く出土したのは弥生土器であるが、それに混じって須恵器が若干出土している。あまりに小片であり図示できないが、8 世紀頃の坏片や甕片、瓦片などである。摩耗の進行しているものが多い。

12SX010 出土土器

溝出土土器とほとんど同じ傾向を示す。積み土中に包含される土器の量は多いが、小片化し、且つ摩耗が進行している。

暗茶色土層出土土器（Fig.46 Pla.48）

弥生中期頃の土器が大半を占めるが、それに混じって８世紀後半頃の須恵器坏ｃや平安期の白磁椀、底部を回転糸切りされる土師器坏片などがみられた。

白磁

椀（１・２）　１は口径17.9cm、現存高3.8cmを測る。２は口径19.2cm、現存高3.7cmを測る。両者ともV-4-a類。（狭川）

弥生土器

甕形土器（３－７）　３はＬ字形の口縁を持つもので、胴部上位に隆起の小さい三角突帯を持つ。４もＬ字形の口縁であるが、口縁端部が跳ね上がる特徴を有する。5～7は底部片でともに上げ底状を呈するが、６はその度合が著しい。すべて内面には茶褐色を呈する沈着がみられる。

蓋形土器(8)　体部の開き具合いから蓋形を呈するものとみられる。頂部は緩いカーブをもってくぼんでいる。内面はナデによって平滑化されている。

これら中期前半の所謂城の越式を主体とした土器群は、この層位中における弥生時代関連遺物の主体を占めるもので、この国分尼寺跡周辺に広がる弥生時代集落の始源期を示すものと考えられる。

その他の出土遺物（Fig.47 Pla.49）

石器

石庖丁(1)　泥岩を用いた石庖丁である。紐穴は小さめのものだが、両側から回転動作によるきれいな穿孔作業を行っている。紐穴と背部間は1.8cmを測る。刃部は片刃に近い両刃形を呈

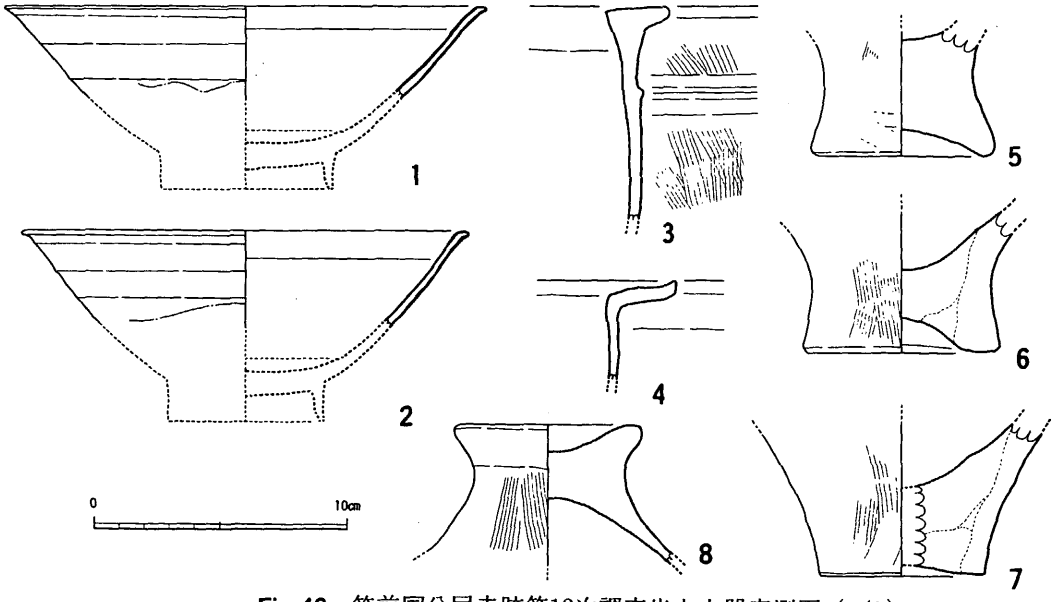


Fig.46　筑前国分尼寺跡第12次調査出土土器実測図（1/3）

する。東区暗茶色土層出土。

打製石斧(2)　剝片を利用するもので、剝離による調整は縦方向に大きく、両側からのものは細かい所作によっている（剝離が小さい）。刃部などの摩耗は顕著ではない。玄武岩を用いているが、風化が著しく灰色を呈している。西区 12SX008 出土。

打具(3)　緑色片岩の円礫を用いた打具で、6.5cm×5.5cm×5.0cmを測る。使用されたのはA・Bの2面で、Aはあばた状の面荒れ部分と平滑面からなり、B面はあばた状の使用痕跡のみか

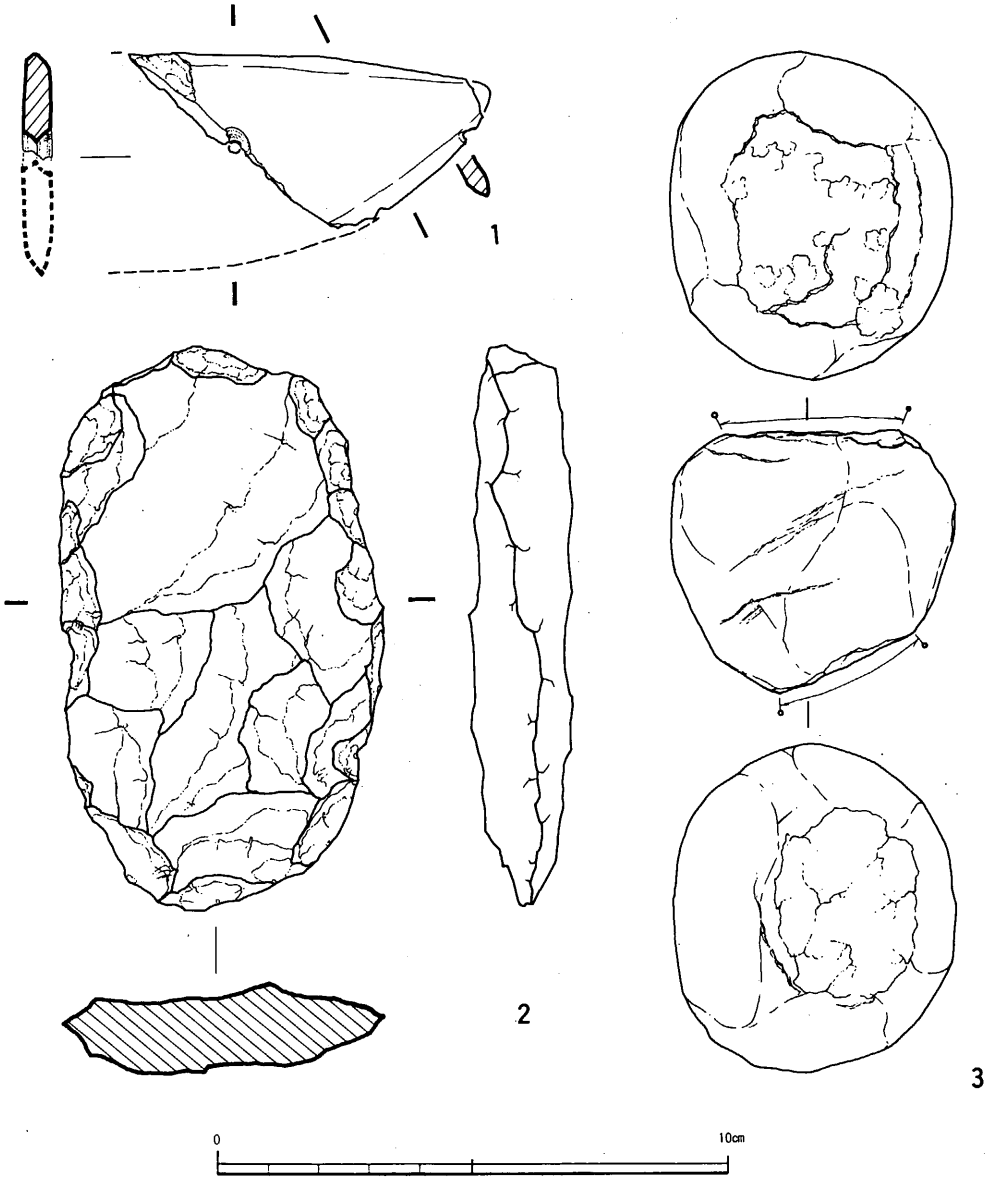


Fig.47　筑前国分尼寺跡第12次調査出土石器実測図（2/3）

らなる。A面は敲打、擦過の両目的に使用された可能性がある。東区暗茶色土層出土。（山村）

4．小結

まず12SX010について述べることからはじめたい。12SX010は12SD001西肩までしか広がりを追えていないが、12SD001東肩から12SD005西肩までの標高と12SD005東肩付近の標高を比較してみると、前者の方が低いことが分かる。後者は地山が露出しているものの12SX010の検出上面よりも若干標高は高く、前者の空間が後世に削平を受けたことは明らかである。灰色砂土の地山上面を追う限り、前者の空間には12SX010の積み土が広がっていた可能性も充分考えられるところである。現実に整地が残存していないため消極的な意見ではあるが、12SD005西肩付近まで整地が広がっていた可能性を考えておきたい。

次に12SD001および005は、8世紀代に埋没した南北溝であると判断される。どちらの溝が先行したのか、或は両者とも同時に存在したのかという問題は、直接それを証明してくれる資料を得られなかった。ただ12SD001が自然流路の可能性も考えられることと、先述したように12SD005付近まで広がっていたと想定される整地層（12SX010）の東端が、12SD001に切られていることなどを合わせ考えると、12SD005が先行して存在していた可能性が想定できる。地山の状況から想定すると、12SD005が埋没した後、同一方向の早い流れがあって硬い地山を避けて流れを作ったものであろうか。前後の調査に期待したい。

さてこの12SX010整地層と12SD005との関係であるが、先述のとおり同時存在の確実な裏付けは得られていない。しかし、先にも指摘したように12SD005東肩まで整地が広がるならば、両者は一連のものである可能性が強くなってくる。出土遺物を見てもかなり近似したあり方を示しており、時期的に近接するものであることは疑いなかろう。

こうした遺構は、道路遺構のあり方に類似するものを見いだし得る。この点に注目して調査区西側にトレンチを設定して整地の広がりと12SD001と対になるであろう溝の検出に努めたが、報告したとおり、今回開削できる範囲では溝および整地の広がりを検出し得ていない。これを道路とした場合、遺構の位置と方向性（水城東門推定地を通過する官道はN-40～42°-Wの方向で推定されるのに対して、12SD005はN-42°20'-Wの方向で検出された）や時期などから水城東門を通過する官道の側溝とその路面である可能性が考え



Fig.48　前田遺跡の古代官道

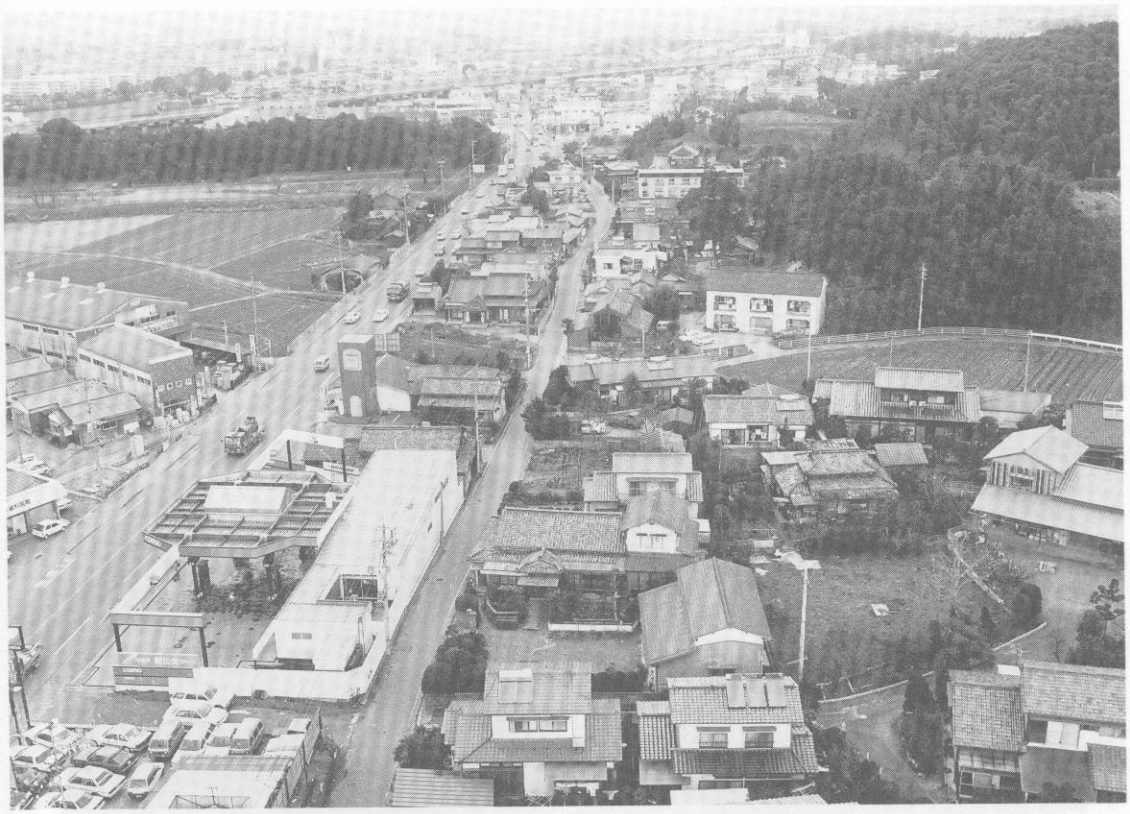


Fig.49　水城東門と旧街道（第12次調査地点上空から）



Fig.50　大宰府へ通じる旧街道（第12次調査地点上空から）

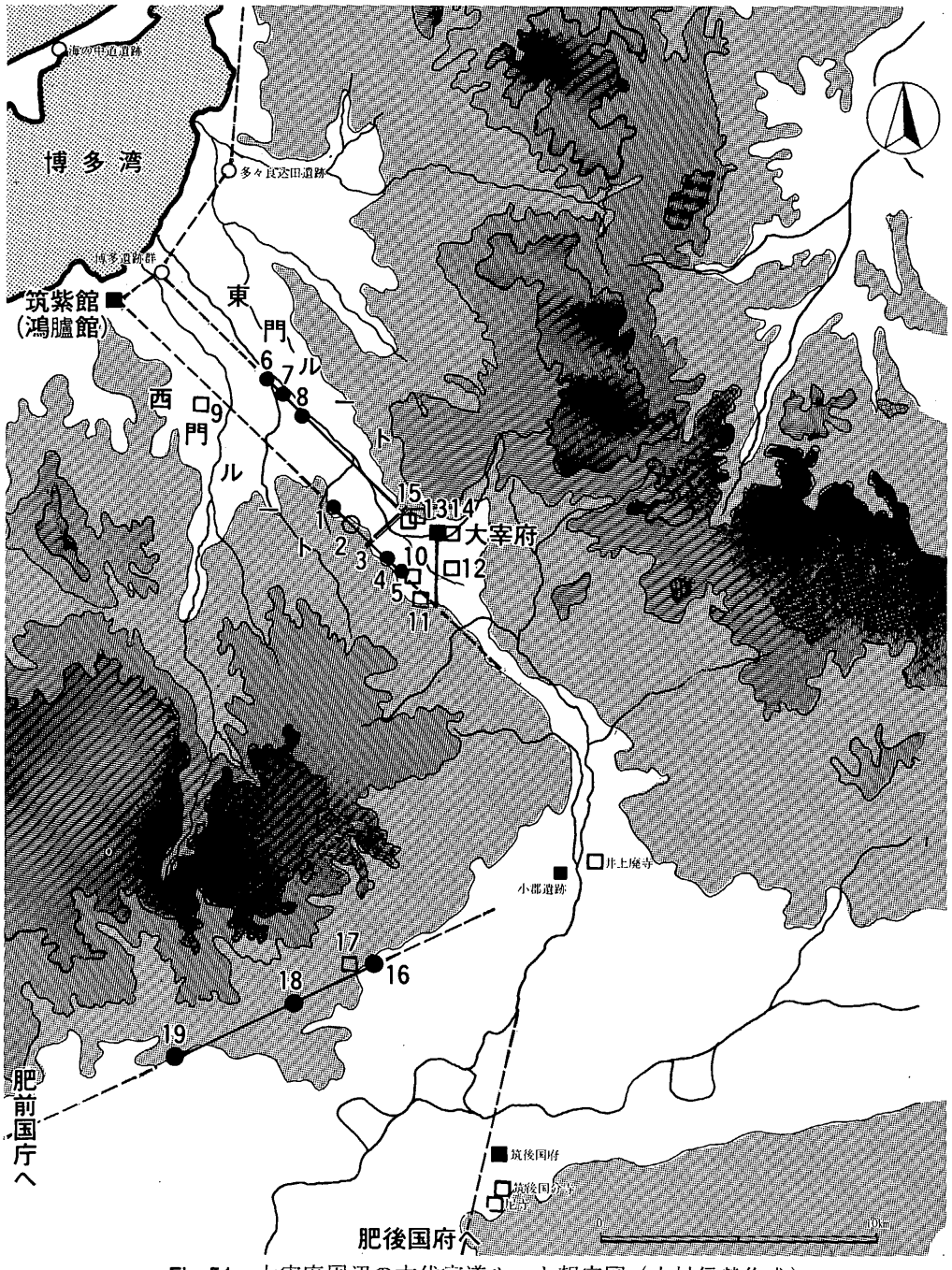


Fig.51　太宰府周辺の古代官道ルート想定図（山村信榮作成）

1．春日公園遺跡　2．池ノ上遺跡（九大筑紫キャンパス内遺跡）　3．水城西門　4．前田遺跡　5．剣塚遺跡
6．那珂久平遺跡　7．板付遺跡ＧＴｂ　8．井相田遺跡　9．三宅廃寺　10．杉塚廃寺　11．塔原廃寺　12．観若寺
13．大宰府政庁　14．観世音寺　15．筑前国分寺・国分尼寺　16．横田切り通　17．辛上廃寺　18．吉野ケ里切り通
19．祇園切り通

られる。

この官道については早くからその存在が指摘されていた（日野尚志「古代における大宰府周辺の官道について」『歴史地理学紀要』16 1974 他）が、考古学的な調査による確認は成されていない。しかし、水城の欠堤部のあり方はこの官道を示唆するものといえる。

水城には２つの門が推定されており、西門を通過する官道についてはかなり具体的に判明しつつある。概略を示せば、水城西門を中心として南側では前田遺跡で約158ｍにわたって直線の道路が検出され（Fig.48）、その後大宰府条坊跡第99次調査でもその延長とみられる道路遺構が発見されている。北側では池の上遺跡、春日公園遺跡で道路跡が知られており、これらはほぼ一直線上に並んでいる。このことから、この道を鴻臚館から大宰府に至る官道であるとする意見がある（山村信榮「佐野を掘る(5)－古代大宰府の官道－」『都府楼』10号）。遺構のあり方からしてこの官道の存在は確実であろう。

これに対して東門を通過する官道については、その推定線上に現在も機能している幅約３～４ｍの道路が存在する。これは国道3号線によって各所で分断され、またわずかながらに蛇行しているものの、水城を通過して福岡方面に向かっている。この道路は、明治26年の地図にも明確に記載されており注意されるところである。今回の調査地はこの道路のすぐ東に接する地点である。（Fig.49・50）

水城に東門の存在したことは、現在近辺の宅地内に礎石が保存されていることと、昭和44年の水道工事の際に礎石が発見されていることから確実である。さらにこの推定線上にかかる地点の調査において、官道の側溝として捉えても良いような遺構が、那珂久平遺跡、板付遺跡G7b 地点、井相田遺跡などで検出されている。この点を考慮して、東門を通過する官道を想定した意見（山村信榮前掲書）があり参考となる（Fig.51）。

今回の調査では、遺構の造営時期や廃絶時期を具体的に証明し得ていないだけでなく、調査面積があまりにも狭小で道路幅すら確定し得ていない状況であり、この資料だけをもって東門を通過する官道の遺構であるとは断定できない。結論は今後の調査に委ねることとして、ここでは可能性を指摘するにとどめておきたい。

(7) 筑前国分寺跡第11次調査

調査地は太宰府市大字国分74の一部である。調査は排土置き場の都合上、東西２区に分けて行った。調査面積は併せて248㎡である。調査期間は平成２年３月８日～４月６日までで緒方俊輔が担当した。

１．層位

両区とも表土を除くと全体に厚さ20～25cmの茶褐色土層があり、これを除去すると遺構面である淡灰色粘質微砂の地山に達する。

２．遺構（Fig.52 Pla.50～52）

溝

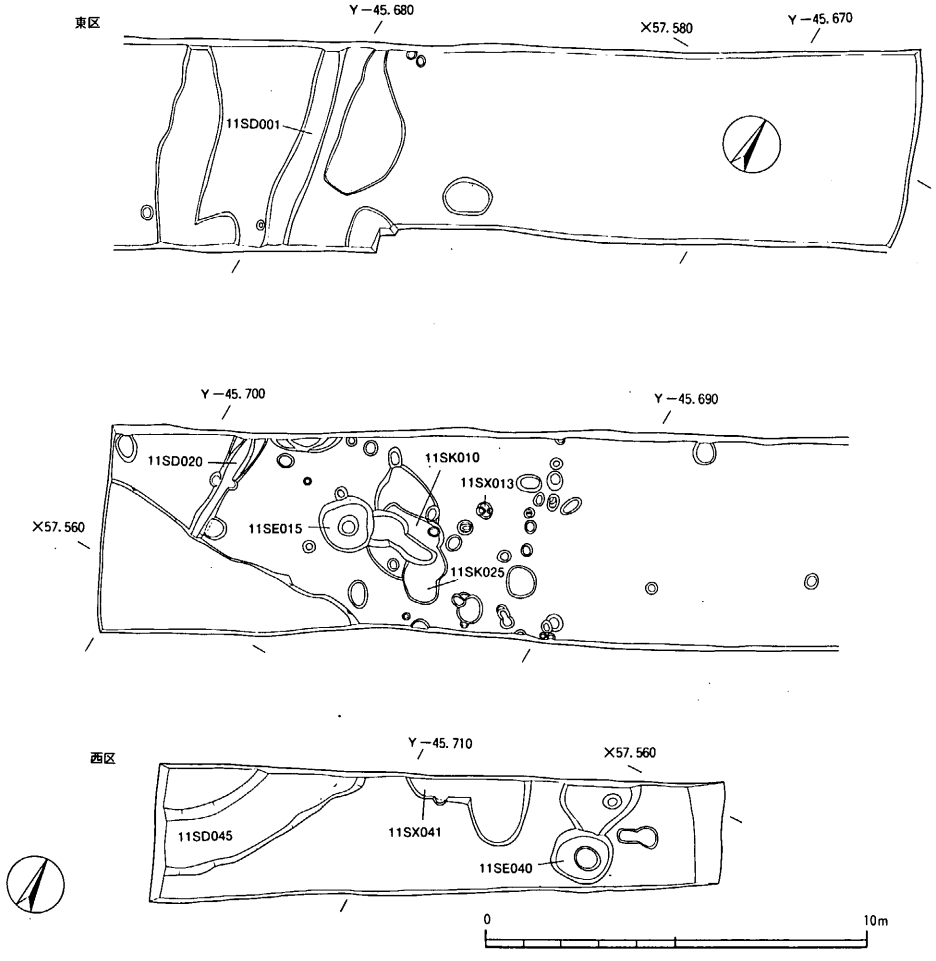


Fig.52　筑前国分尼寺跡第11次調査遺構配置図（1/200）

11SD001　幅0.7m、深さ0.3mの南北方向の溝で、5m分を検出した。方向はおよそN-17°10'-W振れる。埋土中に拳大の礫を多数検出した。東区。

11SD020　幅0.4～0.8m、深さ0.2mの南北溝で、2.8m分を検出した。方向はおよそN-4°-E振れる。東区。

11SD045　幅1.6m、深さ0.3mの溝で、4m分を検出した。方向はおよそN-43°-W振れる。土質の違いから上下2層に分かれ、上層は明乳茶色砂質土、下層は明乳茶色粘質土であった。西区。

井戸（Fig.53 Pla.51・52）

11SE015　掘り方が1.4m×1.5mの隅丸方形で、深さ0.6mを測る。井戸枠は残っていなかったが、径0.3m、深さ0.4mの水溜を作る。東区。

11SE040　掘り方が1.5m×1.6mの隅丸方形、深さ0.6mの井戸である。井戸枠は残っていなかったが、径0.3m、深さ0.3mの水溜を作る。西区。

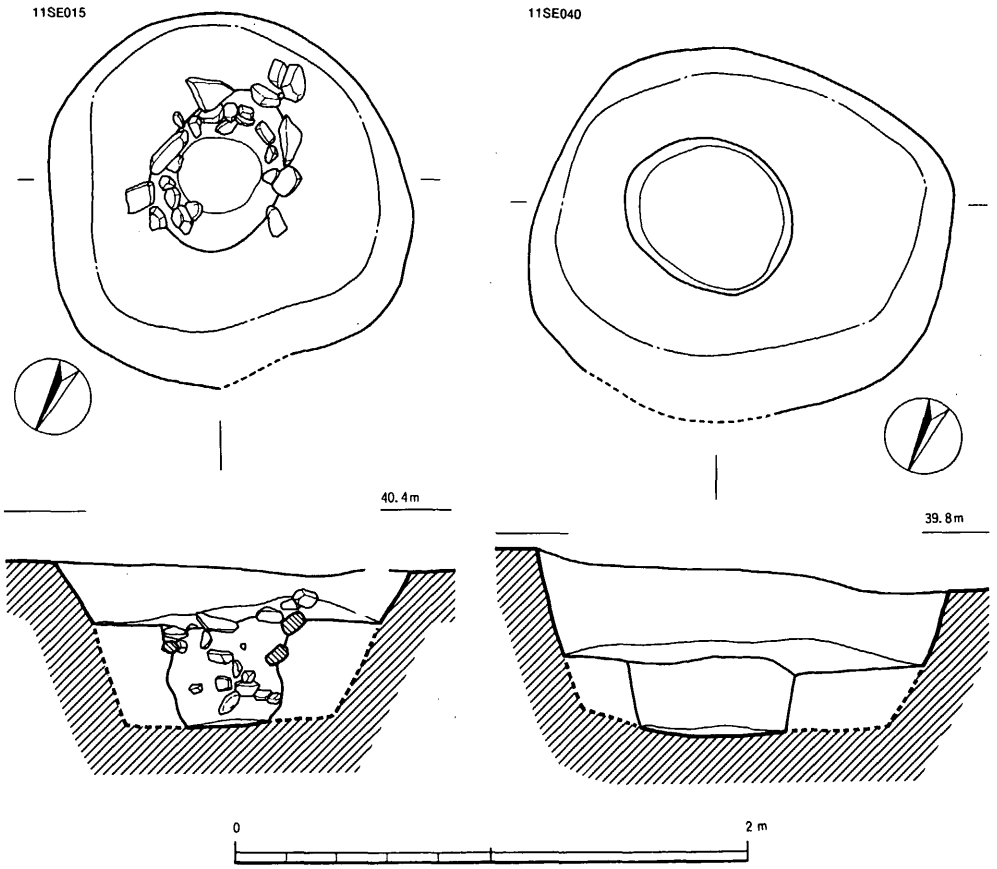


Fig.53　11SE015・040実測図（1/30）

土壙

11SK010　埋土中に焼土を多く含んだ土壙で、長さ1.7m、幅1.2m、深さ0.1mを測る。11SK025を切る。東区。

11SK025（Fig.54 Pla.51）　北側を11SK010に切られる土壙で現存長1.2m、幅1.1m、深さ0.1mを測る。土壙の床面上に径0.1～0.25m大の花崗岩礫50個ほどが検出された。石は焼けていない。東区。

その他の遺構

11SX013　直径0.4m、深さ0.2mのピットで須恵器坏蓋片、甕片、土師器片、瓦片などが出土した。東区。

11SX041　検出長3m、検出幅0.7mの窪みで調査区北西側へ延びる。西区。

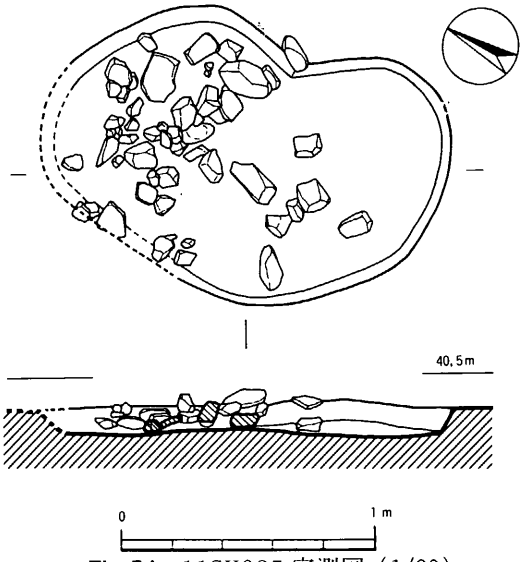


Fig.54　11SK025実測図（1/30）

3．遺物

11SD001出土土器（Fig.55 Pla.53）

土師器

丸底坏c(1)　口径16.0cm、器高5.9cm、高台径7.5cmを測る。体部内面上位にミガキbが残る。

越州窯系青磁

四耳壺(2)　口径9.8cm、現存高6.4cmを測る。釉は緑灰色で光沢があり、外面全体と内面の口縁付近にかけられており、一部は内面の体部上面まで垂れている。化粧土はなく、口縁は直口し、耳は横向きに付く。胎土は灰色を呈し、黒色粒子をわずかに含む。焼成は良好である。

11SD020出土遺物（Fig.55 Pla.53・54）

黒色土器A類

椀c(3)　現存高3.7cm、高台径8.3cmを測る。摩滅が著しいが、内面にミガキcの痕跡が見られる。

石製品

滑石製品(4)　長さ4.9cm、幅3.8cm、厚さ1.8cmを測る。長方形の箱形に2つの穴が穿孔されており、工具痕が認められる。一方の穴は平面形が1.9cm×1.7cmの隅丸方形で、深さ1.2cm～1.7cmを測る。底部に0.2cm×0.3cmほどの穴があり、貫通している。いま一方の穴は平面形が1.4cm×1.5cmの隅丸方形で、深さ1.0cmを測る。上面は大半が剥離している。

11SE015出土土器（Fig.55 Pla.53）

土師器

小皿 a(5)　底部はヘラ切りされる。

黒色土器A類

椀 c(6)　口径15.4cm、器高5.5cm、高台径7.5cmを測る。内面にミガキ c が施されており、底

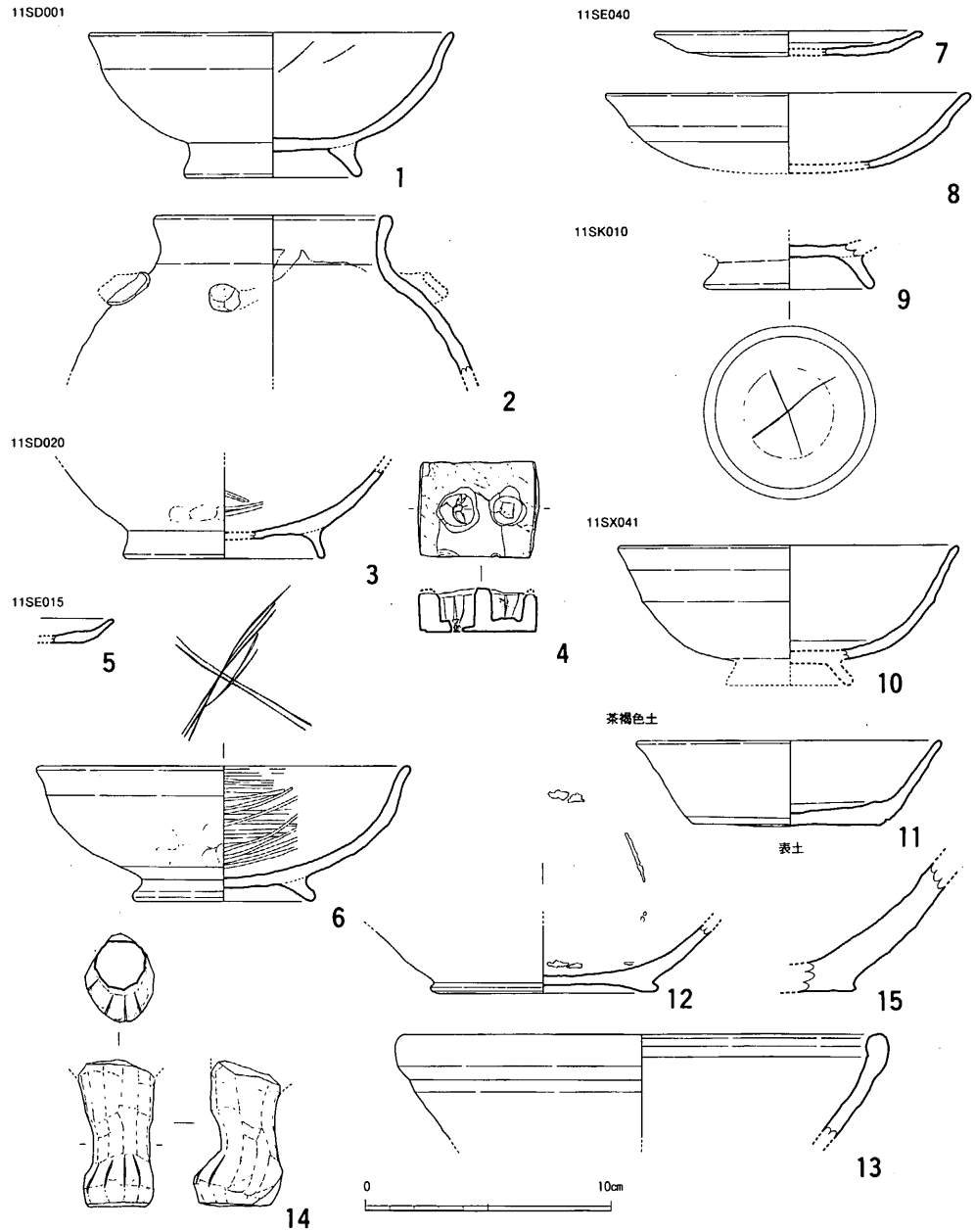


Fig.55　筑前国分尼寺跡第11次調査出土遺物実測図（1/3）

部内面には焼成後に施されたと見られる「×」形のヘラ傷がある。外面の体部下位には指圧痕が見られる。大宰府XI～XII期とみられる。

11SE040出土土器（Fig.55 Pla.53）

土師器

小皿a(7)　口径11.0cm、器高1.0cm、底径8.2cmを測り、底部はヘラ切りされる。底部内面にナデが施され、底部外面に板状圧痕が見られる。

丸底坏a(8)　口径15.0cm、現存高3.1cmを測る。

11SK010出土土器（Fig.55）

土師器

椀c(9)　現存高1.8cm、高台径6.8cmを測り、底部外面には高台貼り付け後に施した「×」形のヘラ書きがある。

11SX041出土土器（Fig.55 Pla.53）

土師器

椀c(10)　口径14.0cmを測る。体部下位に高台貼り付けに伴うと考えられるヨコナデが残っているため、椀cと判断した。

茶褐色土層出土土器（Fig.55 Pla.54）

土師器

坏a(11)　法量は口径12.5cm、器高3.5cm、底径7.2cmを測る。底部は糸切りであり、屈曲部外面は切り離し時の粘土の乱れが観察される。底部内面にナデ調整が見られ、底部外面に板状圧痕が残る。体部外面下位はヨコナデ、体部内面下位は複数方向のナデ調整が観察される。

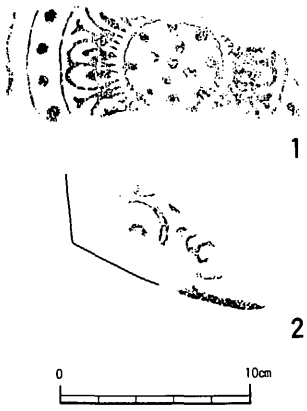


Fig.56　筑前国分尼寺跡第11次調査出土瓦類拓影（1/4）

越州窯系青磁

椀(12)　Ⅱ-2類。上げ底風で円盤状の高台をもち、高台径9.3cmを測る。色調は断面が暗灰色、外面の露胎部が赤灰色を呈する。胎土は粗く、混入物に径1㎜未満の黒色粒子を若干含む。釉は暗黄灰色に発色し、目跡部分以外の内面全体に施釉される。

須恵質土器

鉢(13)　口径20.2cm、現存高4.2cmを測る篠窯系の鉢で、色調は内外断面とも淡灰色を呈しており、胎土は密でほとんど目立った細砂を含まない。焼成は良好である。口縁は厚く丸味を帯びる。

土師質土器

獣脚(14)　現存脚部高5.9cm、足部裏面長2.9cm、足部裏面幅2.6cmを測る。ヘラ削りで成形され、ヘラ状工具による沈線4本で指を表現している。足部裏面は指押え調整を行っている。色

調は外面が黄橙色、断面が黄灰色～灰色を呈し、胎土は密で、径1㎜未満の長石・赤茶色粒を極わずかに含む。焼成は良好である。

表土出土土器（Fig.55 Pla.54）

須恵質土器

鉢(15)　現存高4.2㎝を測るいわゆる東播系と呼ばれる鉢で、色調は濃灰色を呈する。胎土はやや粗く、所々に径1～3㎜の石英・長石を含み、焼成は良好である。底部の切り離し方法は不明であるが、後に粗いナデを行っている。（緒方）

その他の出土遺物（Fig.56）

瓦類

1は鴻臚館式の軒丸瓦である。11SD045下層出土。2は鴻臚館系の軒平瓦で、茶褐色土出土。文字瓦は、「介」（Ⅻ類）が茶褐色土、11SD001から各1点、「天延三年七月七日」（ⅩⅩ類）の残欠が11SX013から出土している。（狭川）

4．小結

今回の調査地点は、過去に行われた筑前国分寺跡の調査結果から、西外郭線が通過すると推定される所であった。東外郭線については、昭和52年度に調査された7SD090が考えられており、7SD090の西岸と伽藍の仮中軸線との距離は、約96mと考えられている。

本次の調査において、これと対称になる位置には外郭線を思わせる遺構はなく、最も距離的に近いものが11SD020である。しかし、その埋没時期は出土した黒色土器A類から大宰府Ⅸ～Ⅹ期と見られ、7SD090の大宰府Ⅴ期とは大きくかけ離れている。また、距離の上でも仮中軸線から105.8m西側に位置しており、7SD029と対称の位置とするには、約10mの差が認められる。

このように、今回の調査では筑前国分寺跡の西外郭線を確認するには至らなかった。西外郭線の解明は、今後の周辺の調査に期待する他ない。

Ⅳ. 総　括

筑前国分尼寺跡推定地周辺に東西に長いトレンチを開けたような状況で調査した今回の成果を、この章において簡単に纏めておくこととする。なお以下の文中では筑前国分尼寺跡第＊次調査を尼＊次、筑前国分寺第◇次調査を国◇次のように略すこととする。

地盤の状況

まず地盤の状況からみてみると、最も古い花崗岩風化土が検出されたのは尼10次東端のごく一部であり、その東隣の尼５次（西半分は昭和40年代の氾濫）では検出されていない。これ以外のすべての調査における地盤は、小規模な扇状地形によって形成された沖積世とみられる堆積土からなる（尼11次において検出した黒灰色粘土層は洪積世のものと判断されるが、沖積世の堆積段階で大半が失われている)。尼10次において検出された花崗岩風化土は、現況の地形を観察する限りにおいて調査地のすぐ南側が国分寺の存在する低台地から西に派生した微高地の端部になっておりこの台地の地盤の一部が花崗岩風化土で形成されていることを物語るものと思われる（国分寺伽藍本体の地盤は花崗岩風化土および洪積世とみられる礫層地盤)。この地盤が削平された時期は明確ではないが、８世紀後半から９世紀前半に埋没したとみられる尼１次検出の 1SD001（今回検出した 10SD001 に同じ）が尼１・10次ともに花崗岩風化土と堆積土の境を意識するように穿たれているところから 1SD001 開削の頃には著しい削平はなかったものとみておきたい。

他の調査地は先にも記したとおり扇状地形において形成される沖積世の堆積土で形成されているが、場所によって遺構面を形成する土壌が異なっている。尼６次、尼11次西区では安定した黄色の粘土地盤であるのに対して、尼11次東区以東は大半が礫層（この下層に沖積世の黒灰色粘土層がある）である。この礫層中に土器は認められないが、弥生時代以降もあまり安定した地盤ではなかったようであり、尼11次東区でのピット群を除くと、検出した遺構は弥生時代では 7SD025 と 10SD020 の流れの早い流路程度で、奈良時代以降の時期に至っても遺構のほとんどは溝であり、なかでも 10SD016 は自然流路の氾濫を思わせるものである。なお住居空間を思わせる土壙や井戸は花崗岩風化土上に造営された尼10次 10SE005 以東の遺構である。これに対して尼11次西区や尼6次、さらには今回の報告ではないが、尼２次、尼４次、尼８次、尼９次といった地点では安定した粘土地盤が検出されると共に、弥生時代では尼８次において甕棺、奈良時代では尼４・８次において国分尼寺の伽藍を形成する施設の一部とみられる遺構が検出されている。

この事実から筑前国分寺は台地上のよく安定した高所を選び、筑前国分尼寺は国分寺の西側で最も安定した地盤が存在したところを確実に選地して寺を建設したことが窺え、尼４次以北でかつ尼８次以西に形成されているとみてまず間違いないであろう。さらに、安定した地盤の

存在する土地を求めただけでなく、国分寺と国分尼寺の中軸線間の距離が1400小尺で設計されている可能性の強いことは、安定した土地を求めたうえでかつ緻密な設計技術によって国分寺と国分尼寺を計画的に建設していることが窺えるのである。驚くべき古代人の能力である。

（狭川）

瓦について

次に、今回の調査で検出された大量の瓦について簡単に述べておきたい。これらの瓦群はどの寺に使用されていたものかが、今回の調査だけでは明確にし得ない。そこで各寺院の存続時期を検討してみると、国分寺では8世紀創建の後少なくとも11世紀代までは何らかの形で伽藍は維持されていたようであるが、国分尼寺の場合今日までの調査結果では、創建後余り時間を経ずに廃絶している可能性が強い。また国分尼寺の場合、古記録にみられる一部の礎石建ちの建物を除いては調査で検出されているものはすべて掘立柱建物であり、瓦が大量に使用されていたことを窺うにはやや疑問点が残る。これに対して国分寺の調査では、塔跡には瓦を廃棄した大きな土壙があったが、講堂跡の調査およびその背後に想定された僧房跡の調査では他の地点に比較して瓦の出土は少なかったという。さらに講堂跡の西半分はほとんどが失われていると共に、その西側は段落ちになってかなりの高低差がある。これらのことを総合的にみた場合、今回の調査で出土した瓦群は、国分寺所用のものであった可能性が強く、何らかの事情で整理され、現在の出土位置に運ばれたものと考えておきたい。

（狭川）

Tab.8　筑前国分尼寺跡出土石庖丁計測表

番号	遺跡	遺構	全長	孔端	幅	内径	外径	孔間	背孔	備考
1	尼3	S-2	11.9	5.3／4.5	4.8	0.3	0.7／0.8	2.2	1.5／1.6	輝
2	尼4	S-15下	(12.6)	4.9	3.0	0.4	0.7	2.8	1.2	
3	尼7	7SD009	−	(5.4)	−	(0.3)	(0.9)	−	−	輝　Fig.28-4
4	〃	7SD023	(11.2)	5.0	4.7	0.5	1.0	2.3	1.2	泥　Fig.28-1
5	〃	7SD025	−	5.7	−	(0.3)	(1.2)	−	2.0	輝　Fig.28-3
6	〃	7SD025	−	(4.1)	−	(0.4)	(0.6)	−	1.9	輝　Fig.28-5
7	〃	表採	−	7.0	4.8	0.2	1.0	−	1.8	輝　Fig.28-2
8	尼9	S-15	−	6.0	−	−	−	−	0.8	泥
9	〃	黄茶色土	−	5.4	−	−	−	−	2.2	泥
10	尼10	黄灰色砂	13.0	5.3	3.7	0.4／0.5	0.8	2.3	1.3	泥　Fig.39
11	尼11	11SX007	−	−	(3.8)	−	−	−	−	輝　Fig.43
12	〃	黒灰色土	−	6.3	−	(0.7)	−	−	2.2	泥　Fig.43
13	尼12	暗茶色土	−	4.9	(4.2)	−	−	−	1.9	泥　Fig.47

※（ ）…復原法量、　／…右／左値、　輝…輝緑凝灰岩、　泥…泥岩シルト岩
※尼3・4・9次調査は未報告のため遺構は仮番号で表示した。

石器について

〔プレ・縄文〕

市内の旧石器時代の遺跡についてはほとんど分かっていない。本報告では尼10SD001下層出土の**チョッピング・トゥール**を図示しているが、そのほかにもパティナが著しく進行した安山岩、黒曜石の不定形な剝片が複数見られ、該期の生活面がかつて存在したことを示している。

縄文時代の遺跡は本遺跡がある四王寺山の山裾に沿っていくつかの散布地があり、前、中、晩期の土器と共に石器も採集されている(1)。

本報告分の遺物中で確実に縄文時代に属すと考えられる土器は抽出しえなかったが、尼12SX008出土の**打製石斧**は後晩期に位置付けられる可能性を持つ。石材には肉眼観察によると玄武岩が用いられており、この時期には緑泥片岩が広く用いられる傾向があるなかで、福岡市早良区田村遺跡第3地点SX31にみられるように後晩期の段階でまとまった数の玄武岩製の打製石斧が消費される例もある(2)。本例が後晩期に位置づけられるなら玄武岩の産地が能古島や今山に限られる状況から、福岡平野西北部沿岸地域との交流を示すものといえる。また、弥生前期の「今山石斧」分布論の前史を考える上で示唆的な例となろう。

〔弥生〕

国分寺から西に広がる小規模な扇状地の上に展開する弥生時代の集落は、出土する土器より中期初頭の城の越期に始まり、中期終末にピークを迎え突然収束し、後期中頃以降から後半にかけて改めて活動する様子が窺える（この盛衰のパタンは周辺の複数の遺跡にも見られる現象である)。

今回出土した磨製石器は伐採・加工具、収穫具など複数種類が一定量出土しており、トータルな消費がおこなわれたこと（そういった集落があったこと）を示している。しかし、出土状況から時期を限定し得る資料が少なく、自然、個別的な説明に頼らざるを得ない。

石庖丁は最も多く出土する磨製石器の1つであるが、石材は輝緑凝灰岩と泥岩が半々の割で用いられている。凝灰岩は搬入素材である。尼9次調査では石鎌（泥岩製）が一点出土しているが、石鎌の出土量は石庖丁に対して1割程度以下で、根刈行為が恒常的になされていたか否かは使用痕検討を含む基礎研究が必要であろう(3)。石庖丁については近年細部法量による分析が行われているが(4)、今回はデータ不足の観がありコメントを控えたい。(Tab.8参照)

砥石も多く出土しているが、尼7次調査では青銅器を鋳造した**鋳型を転用したもの**が出土している。鋳型の出土が即、その遺跡での青銅器生産を示すものでないことは言うまでもないが、本遺跡の北に接する丘陵からは細形銅戈が出土しており(5)、これが墳墓に伴う可能性があることから、これを輩出した集落が青銅器を保有していたことは確かであり、鋳型の出土もまんざらではない。この時期の鋳型に使用される石材のほとんどは0.1㎜以下のきめの揃った白色の粒子からなるもので、中砥作業にはうってつけの石材であり、砥石に転用される率が高いと思わ

れる。近年、大野城市を中心とする御笠川流域という一定エリア内での鋳型転用の砥石の出土例が増えつつあり、搬入素材の可能性も捨てきれない。

このほかに注目される遺物として緑色片岩の小円礫を利用した打具がある。これと同様のものは福岡市西区今山を中心とする石斧を加工する工房[6]や、それに関連する集落で多く見つかっており[7]、石斧加工工程で敲打、粗砥に使用された工具との推定がなされている。この石は今山周辺の海岸に散在するもので、未製石斧とともに同地域より搬入されたものか。今後、類例に注目したい。（山村）

その他

水城東門を通過する官道については、本文中でも述べたとおり今回の調査成果だけでは決して断定できるものではないが、その存在の可能性が指摘できたことで今後の周辺における調査で、具体的な規模や時期が解明できる期待が高まったものと言えるであろう。

尼５次および国11次については沖積世とみられる堆積土上に遺構が形成されているが、奈良時代に確実に形成されたと考えられる遺構はなく、９世紀中頃以降にようやく利用が始まるようである。国11次 11SD020 は国分寺の中軸線から西へほぼ105ｍの位置にあり国分寺の西をかぎる遺構に関連する可能性も考えられたが、遺構自体の時期が国分寺造営よりもかなり下るものとみられこと、先述のとおりこの付近の土地利用が平安期に至ってからであること、国分寺本体がこの地点と比高差がありすぎることなどを考え合わせると、今回の調査の所見によるかぎり国分寺中軸線を挟んで西外郭線と東外郭線とを東西対称の位置に求めることは困難であるといえよう。

弥生時代の状況は未だ集落の本体を検出し得ていないが、尼３次で検出した中期の溝は今回調査の尼７次で検出された 7SD025、或は尼10次で検出された 10SD020 につながる可能性が

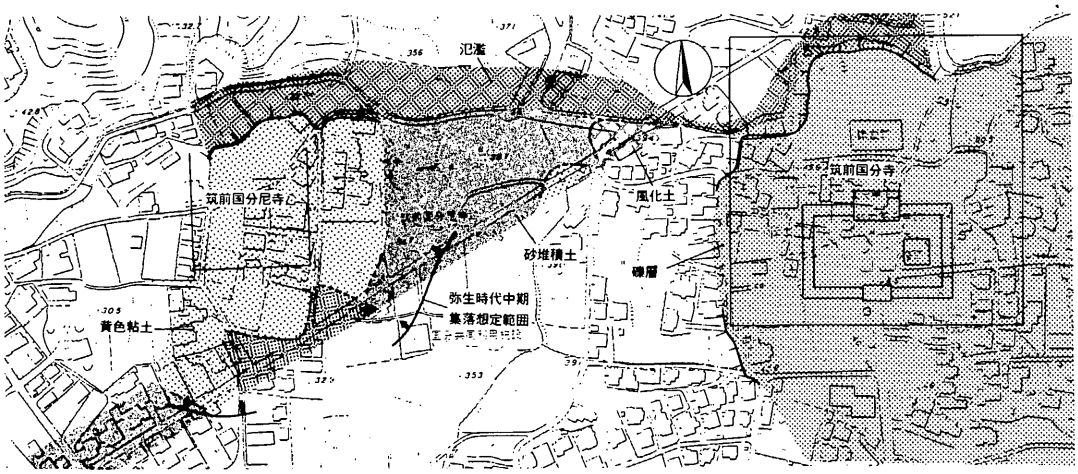


Fig.57　筑前国分尼寺跡周辺における地盤と遺構分布想定図（1/5000）

考えられる。埋土の状況や出土遺物の量などの点で積極的な意見とはいえないが、これより以南、あるいは以東では当該期の明確な遺構を検出していないこともあり、これらの溝が集落の外周を巡っていた可能性が考えられ、地盤の状況と併せて弥生中期における集落の本体が、国分尼寺に推定される付近から以西に広がっていたのではないかと考えられる。

今回の数次にわたる調査で検出し得た遺構は、国分寺、国分尼寺ともに直接それらを物語るものではなかったが、地盤の状況とそれに対する遺構の分布状況（Fig.57）から間接的ではあるが、国分二寺の選地に関わる問題を追求できたことは大きな意義があると判断している。さらに弥生時代中期における集落の位置も概ね推定できたことから、今後の周辺の調査に対する期待がより一層大きくなったことを認識して今回の報告を終わりたい。（狭川）

（註）

1．福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布地図』1980
福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－ⅩⅦ－』1977

2．福岡市教育委員会『田村遺跡Ⅲ』1987

3．出土した石庖丁にはいわゆる「穀物光沢（コーン・グロス）」様の光沢を持つものが見られるが、これを使用痕と認定するには同一素材（輝緑凝灰岩、泥岩）を用いた穂摘み作業等の実験によって得られる使用痕の認定基準を提示する必要があろう。
山田しょう「使用痕研究の現状と進路」『歴史』67号 1986　東北史学会
阿子島 香 『石器の使用痕』1989　ニュー・サイエンス社

4．武末純一「石庖丁の計測値」『東アジアの考古と歴史』 1987　同朋社

5．福岡県教育委員会『水城』 1979

6．福岡市教育委員会『今山・今宿遺跡』1981

7．福岡市教育委員会『青木遺跡』1987
福岡県教育委員会「福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集 1976

図　　版

Pla.1



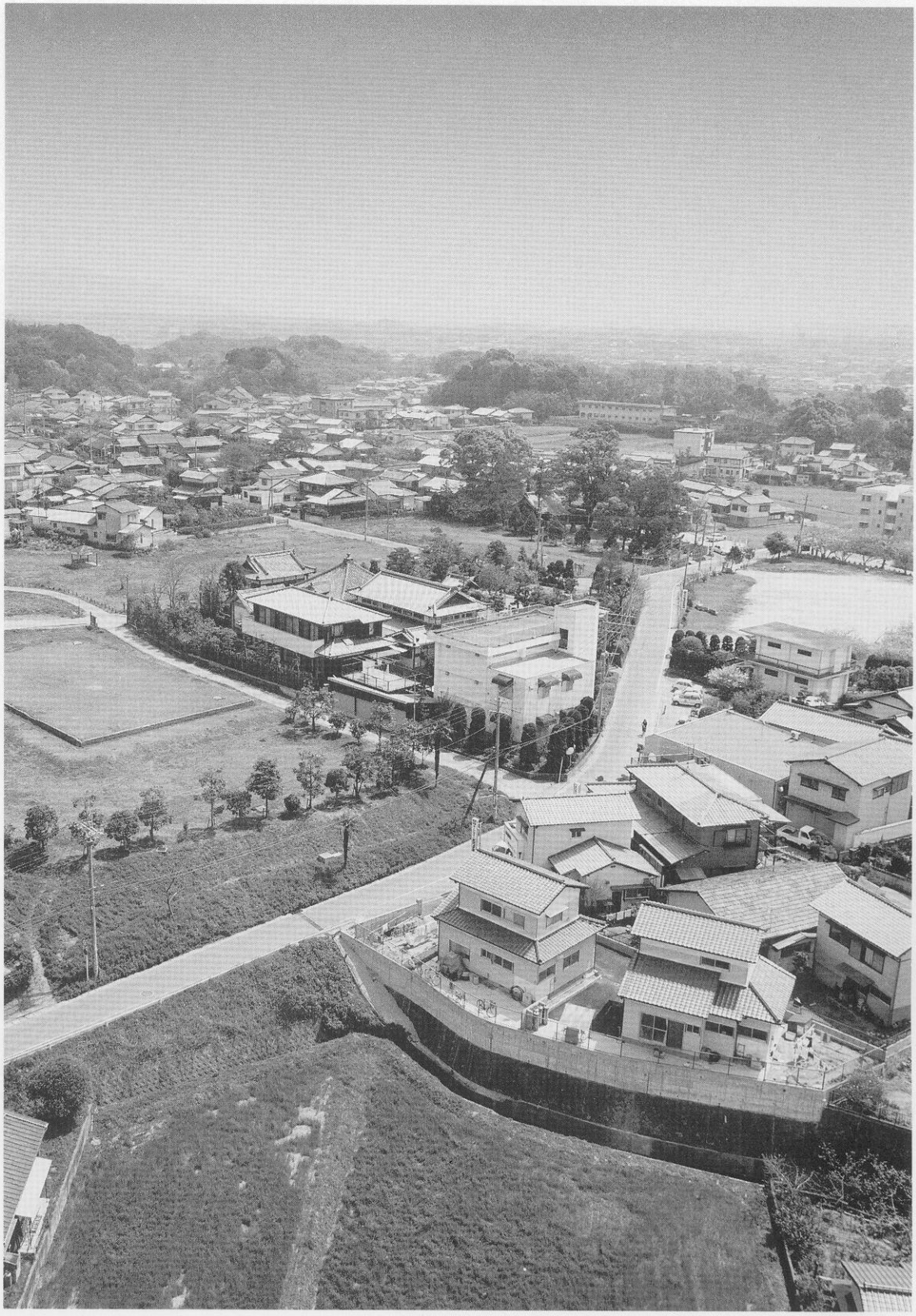
調査地周辺航空写真（約1/13,000 昭和59年 アジア航測撮影）

Pla.2



筑前国分尼寺跡（写真下半）と水城跡（東から）

Pla.3

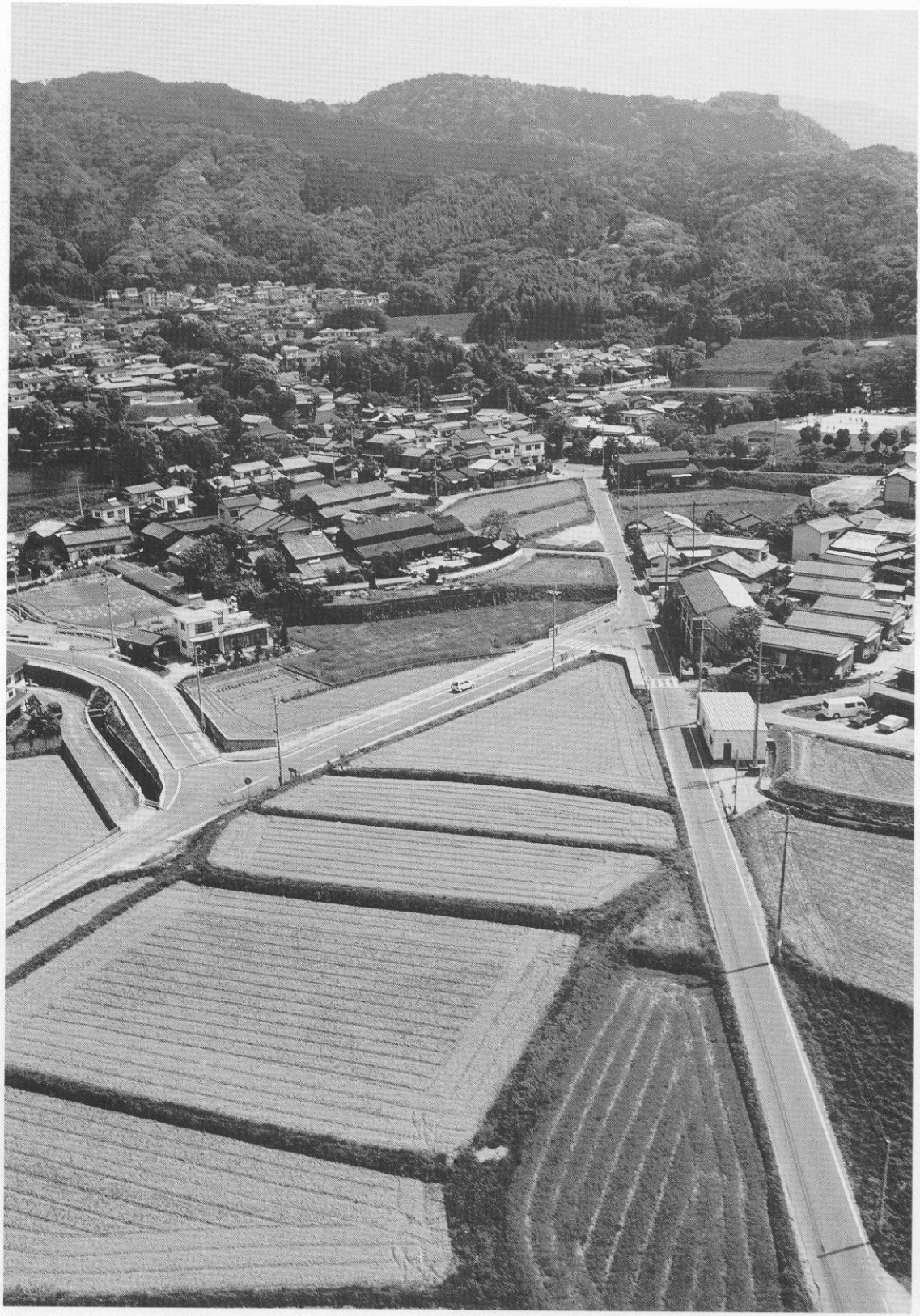


筑前国分寺跡（中央）と大宰府の平野（北西から）

Pla.4



調査前の状況（東から、写真上方に横たわる森は水城跡）



調査前の状況（西から、正面の山は大野城跡）

Pla.6



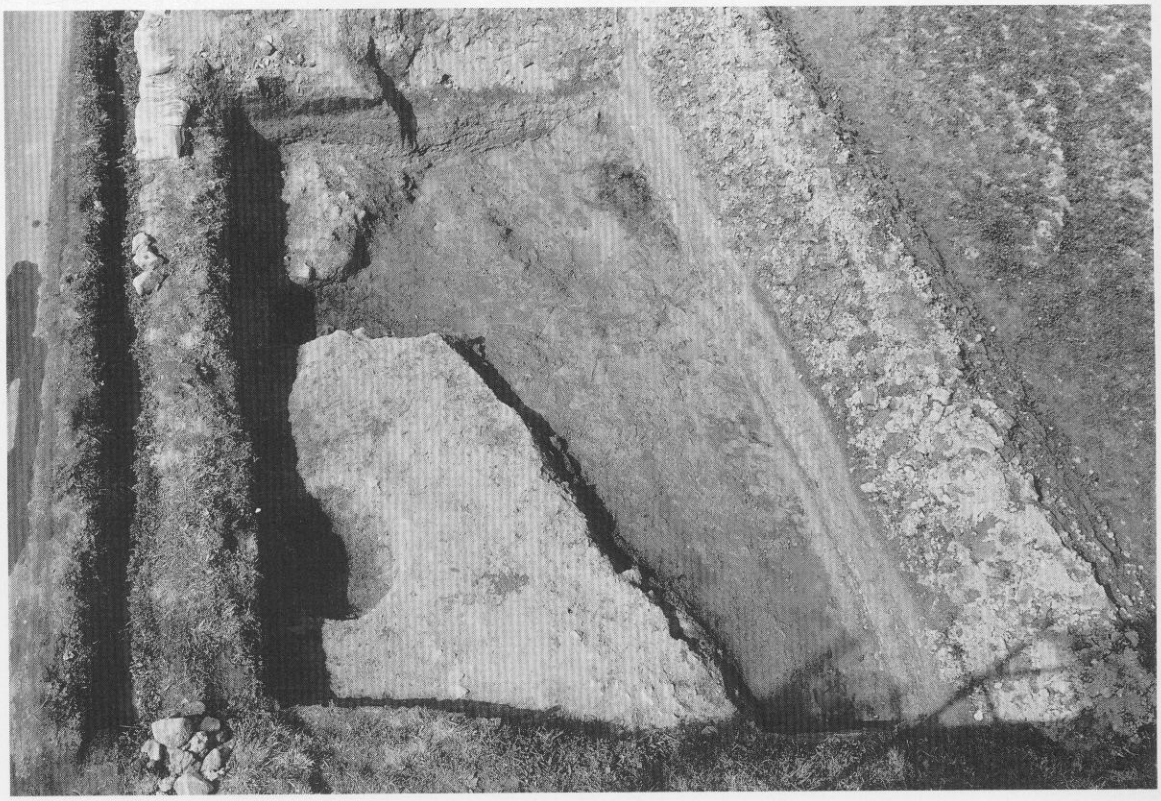
筑前国分尼寺跡第５次調査西区全景（東から）



筑前国分尼寺跡第５次調査東区上層遺構（西から）

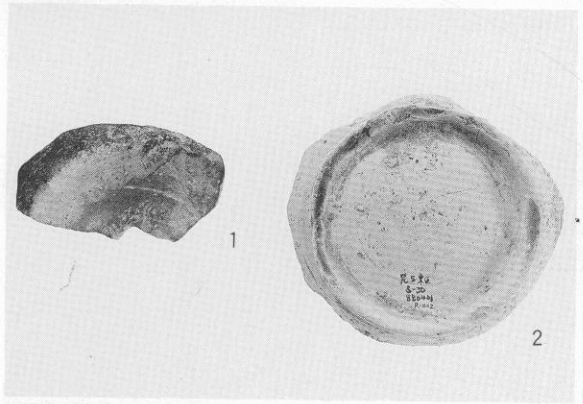


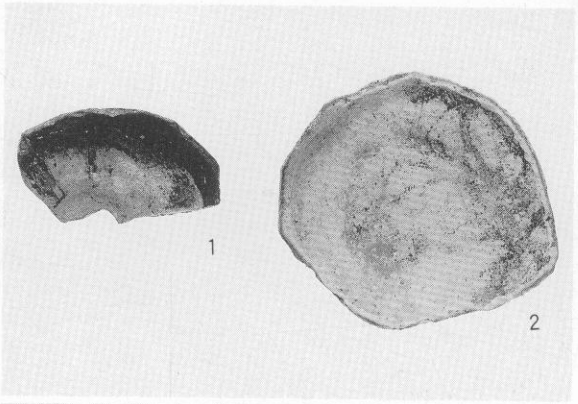
筑前国分尼寺跡第５次調査東区下層遺構（北東から）

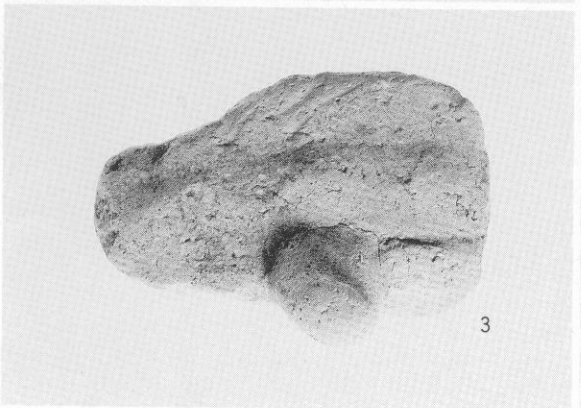


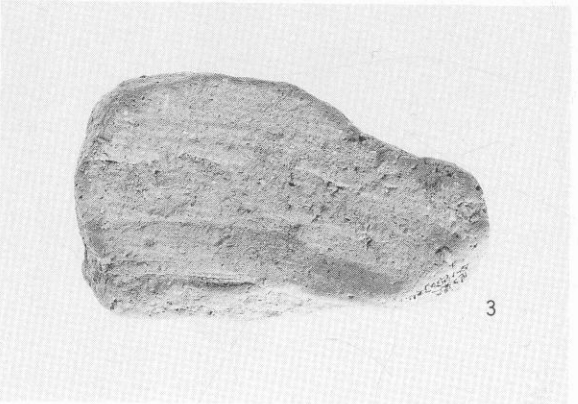
筑前国分尼寺跡第５次調査東区下層遺構（東から）

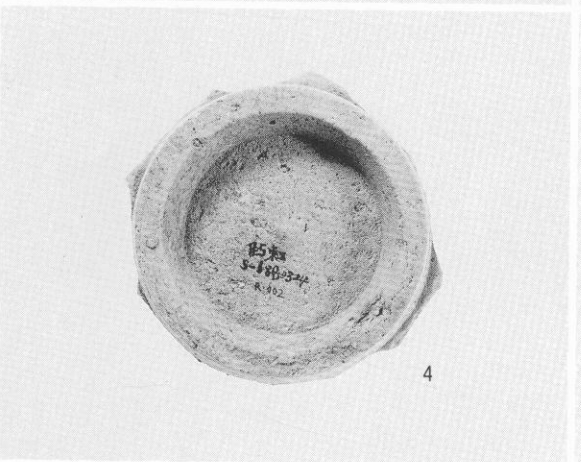
Pla.8

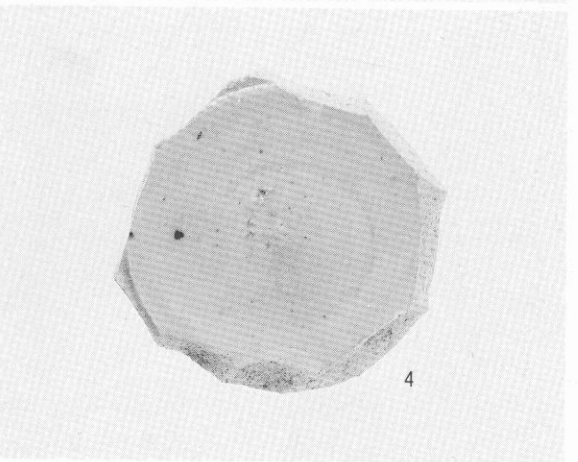


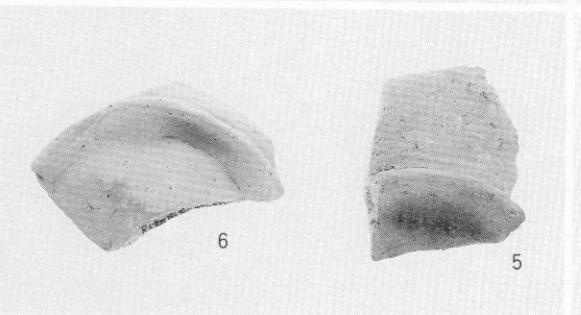


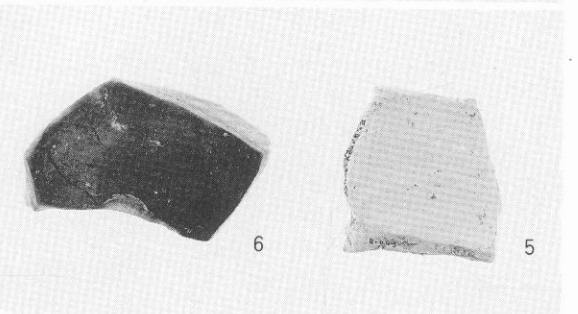




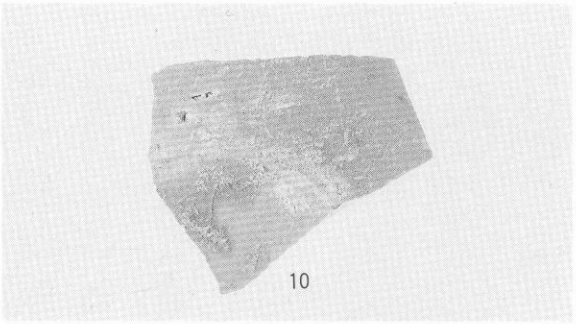


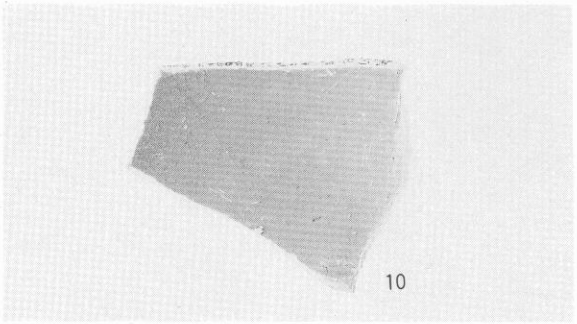


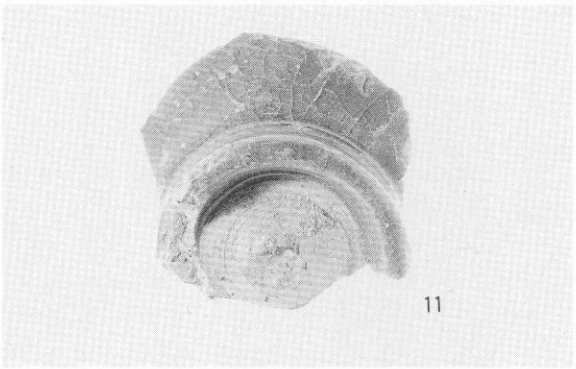


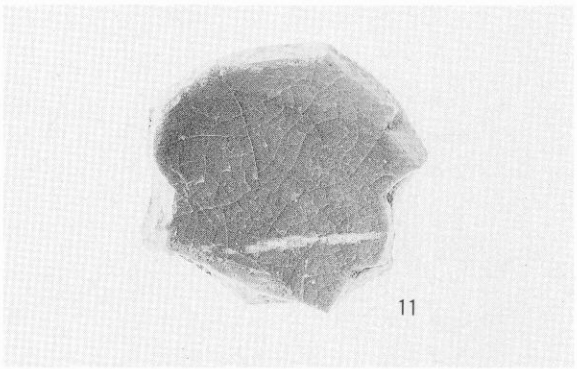


筑前国分尼寺跡第５次調査出土土器

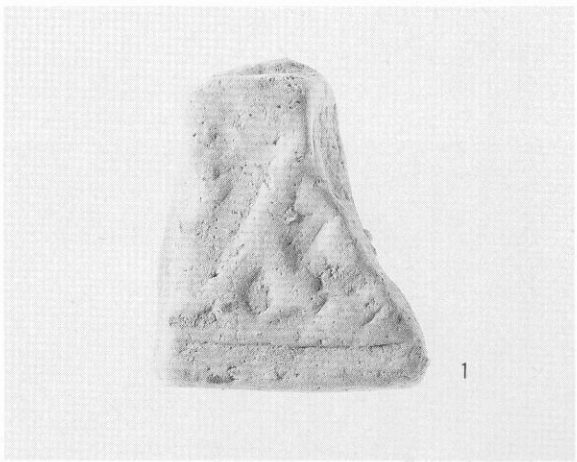


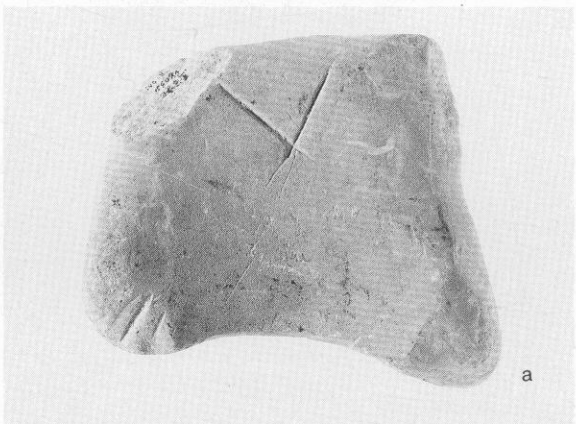


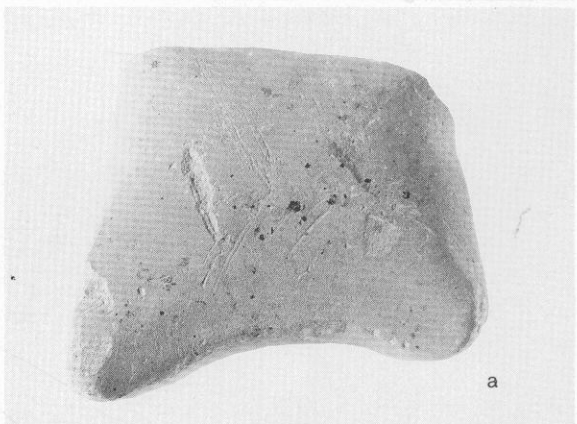






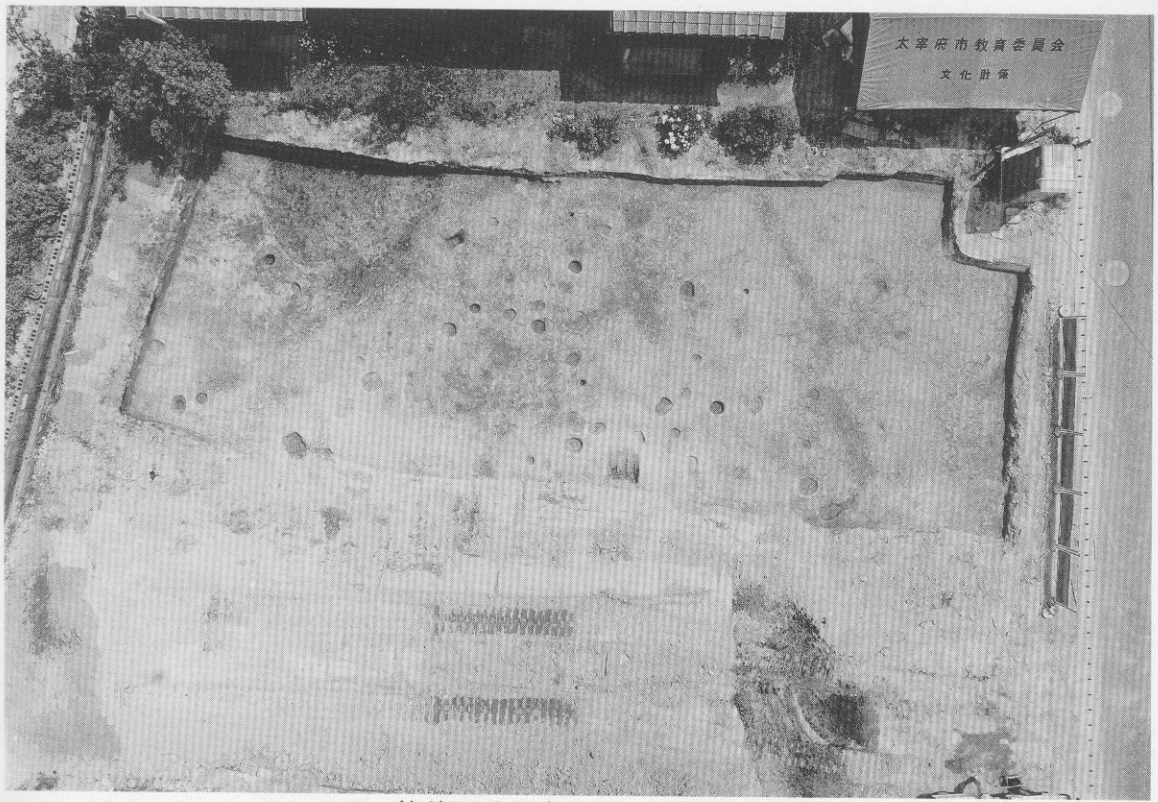






筑前国分尼寺跡第5次調査出土土器・瓦・石器

Pla.10



筑前国分尼寺跡第６次調査東半部全景（空中写真、上が東）



筑前国分尼寺跡第６次調査西半部全景（空中写真、上が東）



筑前国分尼寺跡第６次調査西半部全景（空中写真、北東から）



筑前国分尼寺跡第６次調査東半部全景（空中写真、上が南）

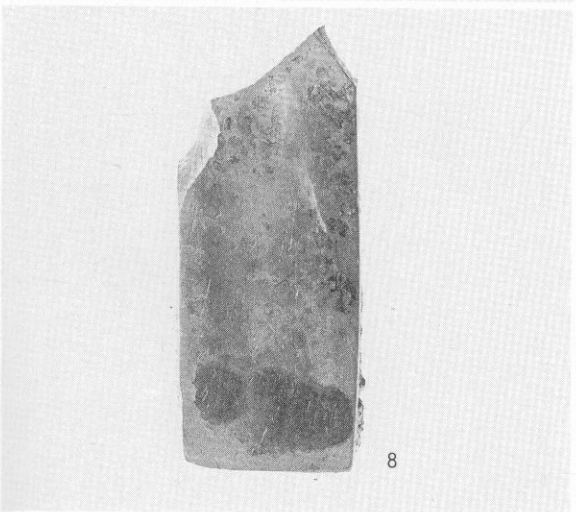
Pla.12

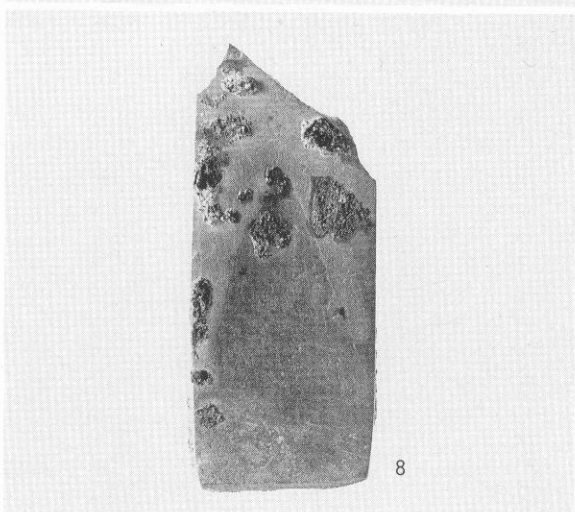


6SX035 土層観察状況（西から）

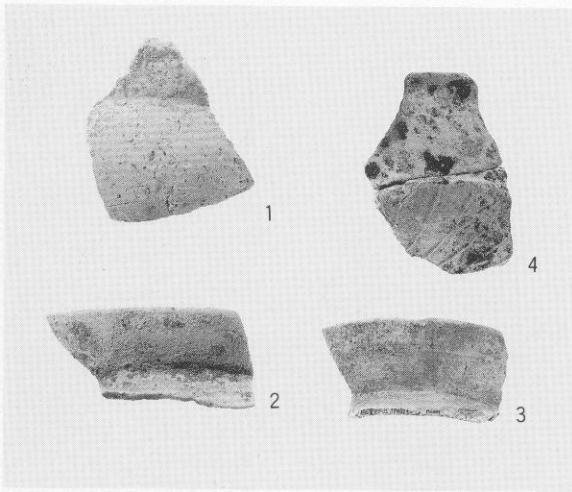


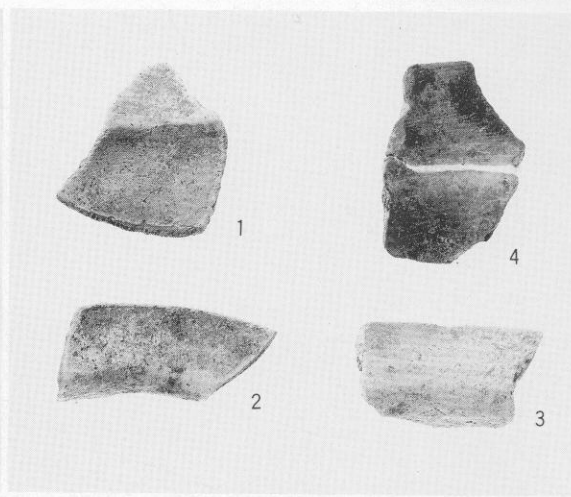


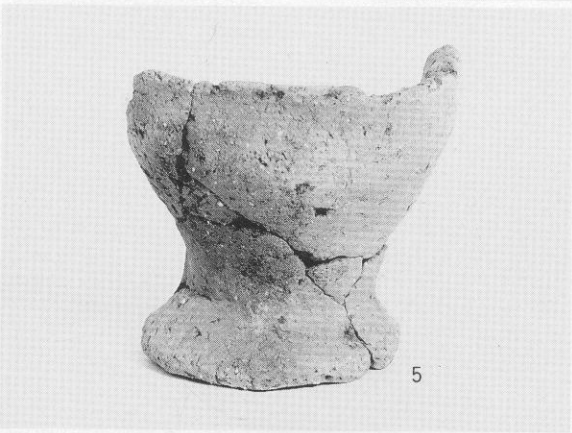


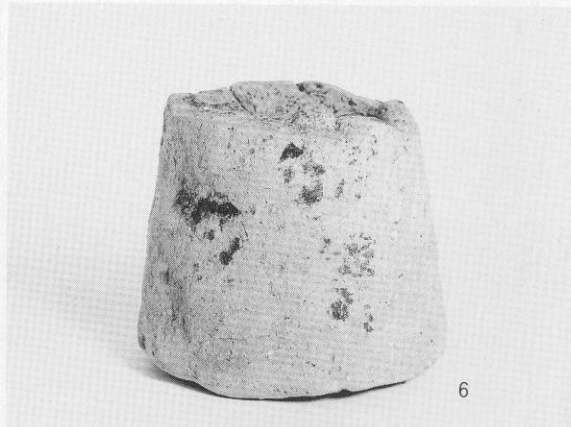


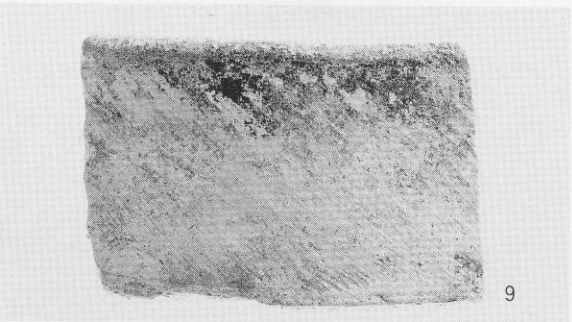
筑前国分尼寺跡第 6 次調査出土遺物

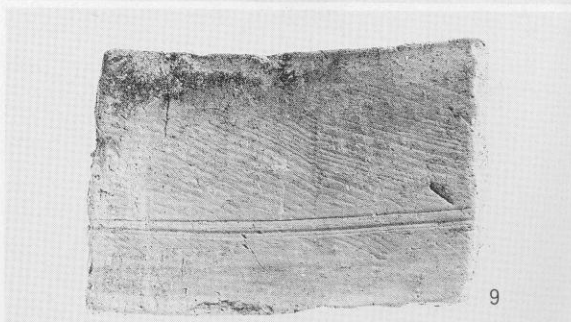


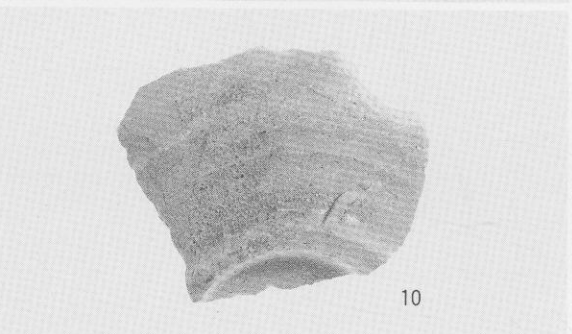


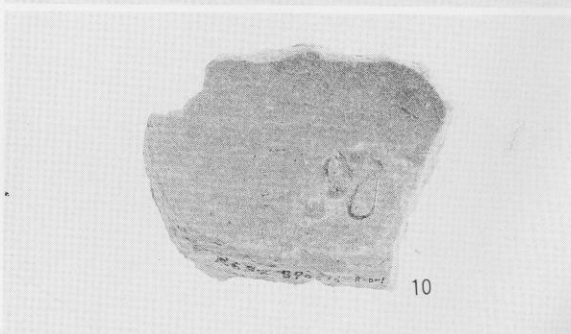










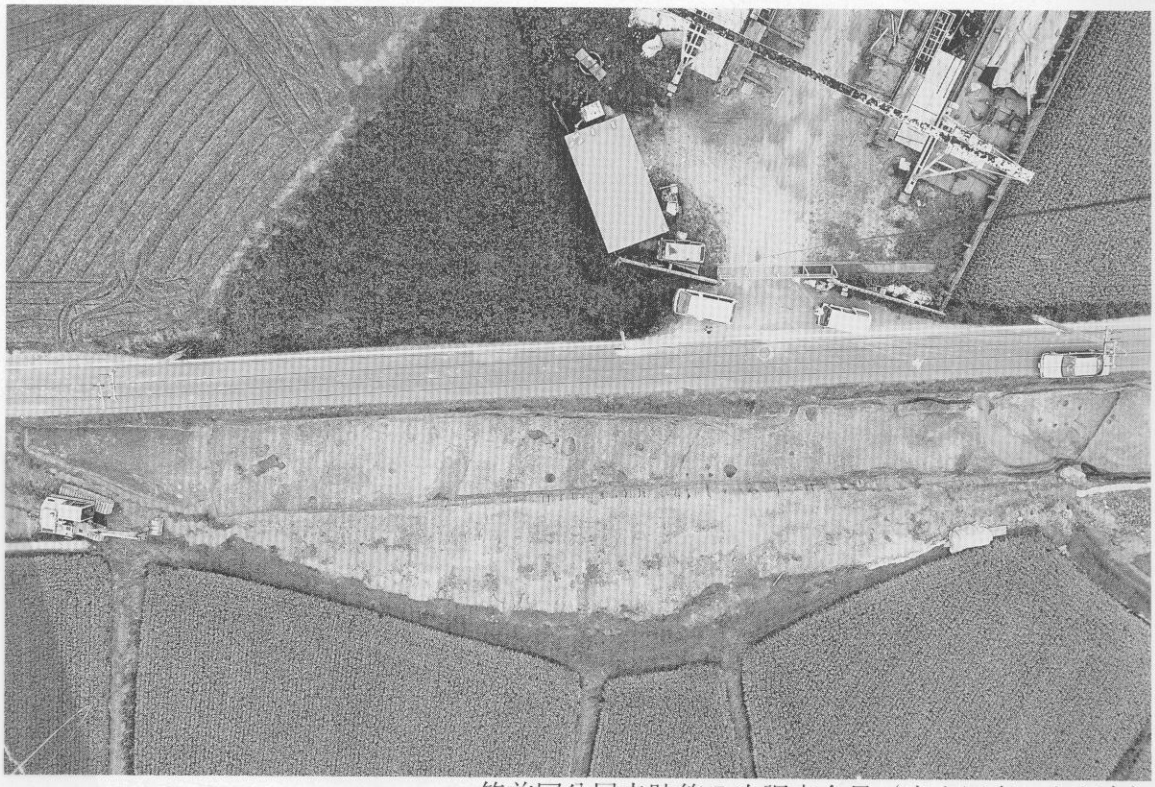


筑前国分尼寺跡第 6 次調査出土土器

Pla.14



筑前国分尼寺跡第７次調査全景（空中写真、東から）

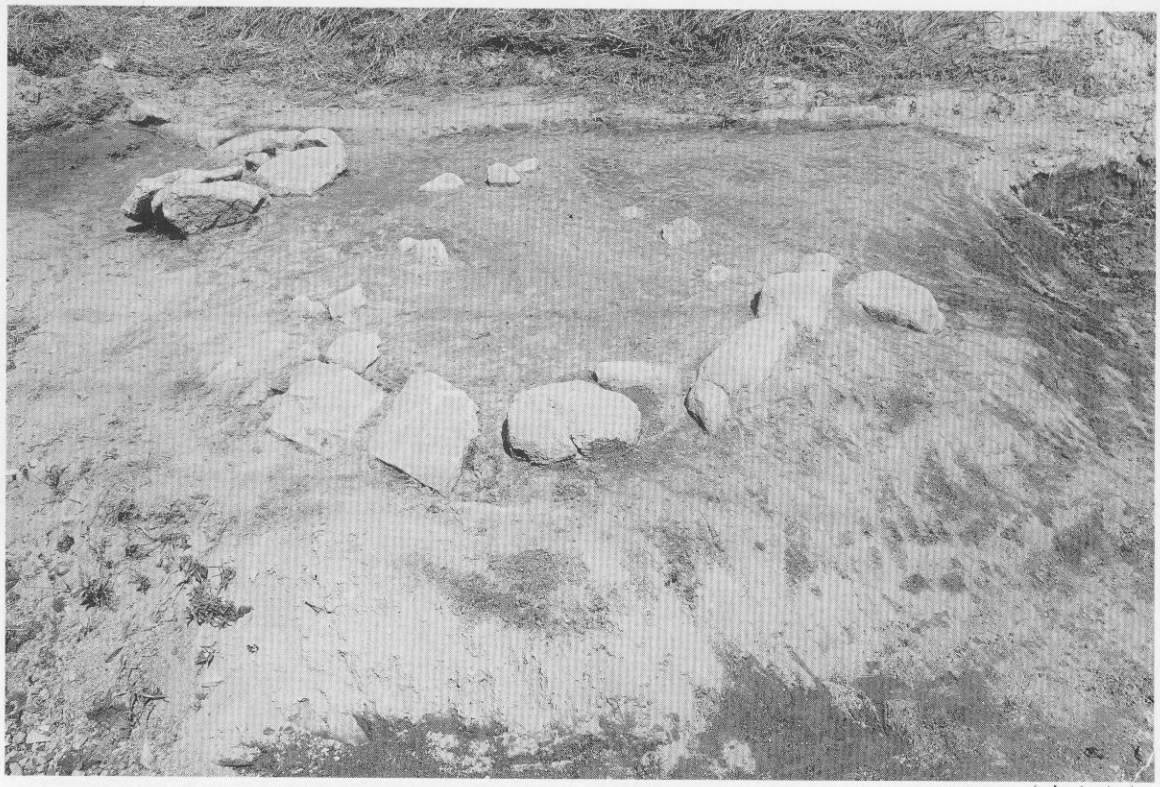


筑前国分尼寺跡第７次調査全景（空中写真、上が南）



筑前国分尼寺跡第７次調査全景（空中写真、西から）

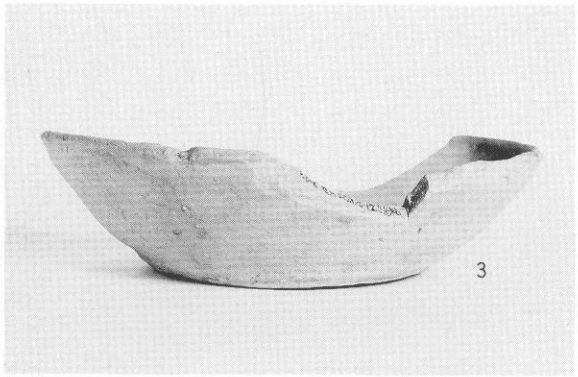
Pla.16



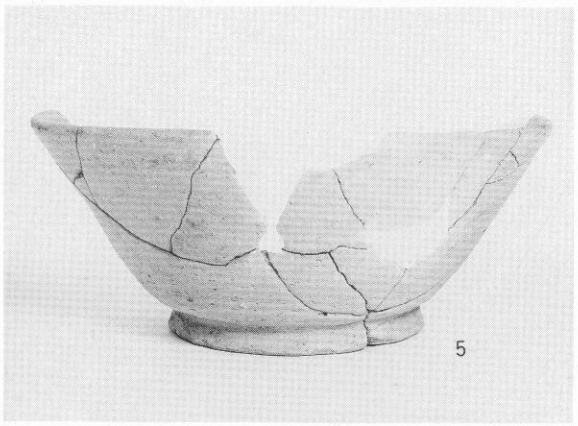
7SX002（南から）

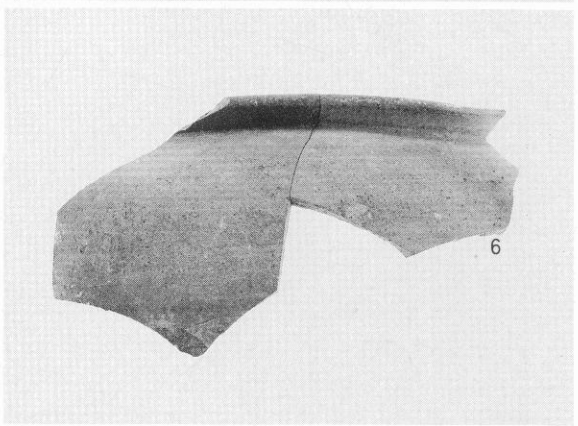


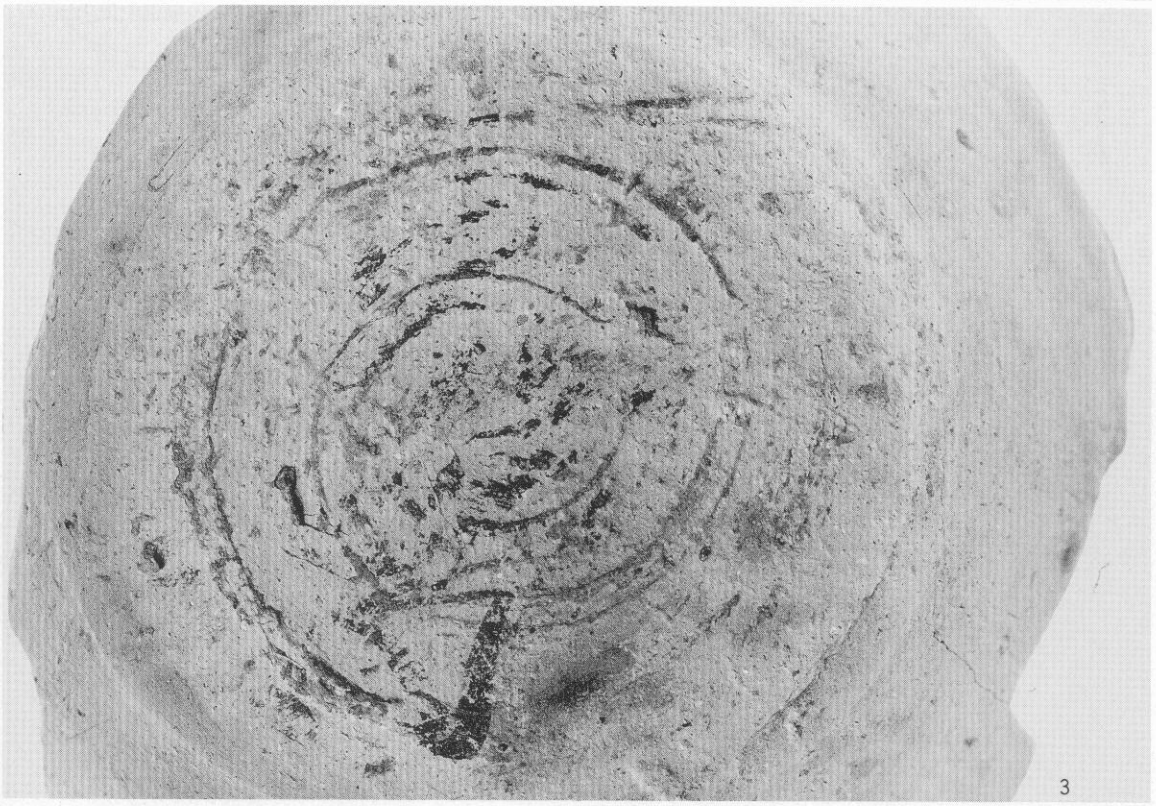
7SX015 検出状況（北から）





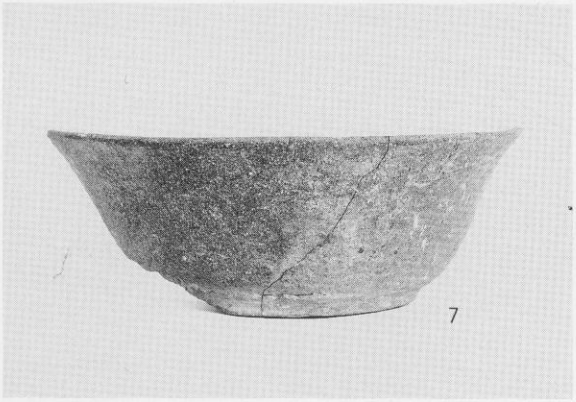


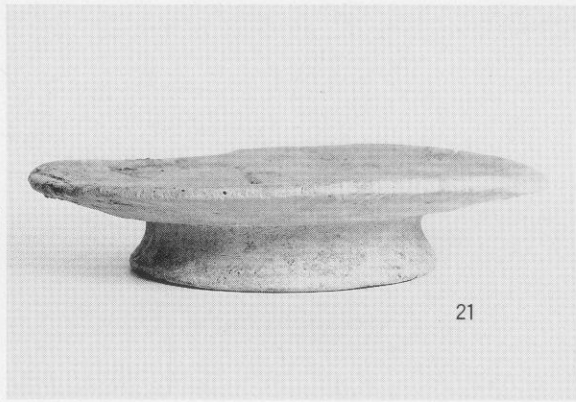


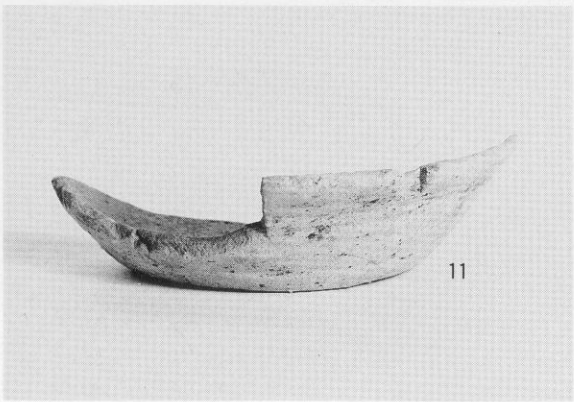


7SD009 出土土器

Pla.18

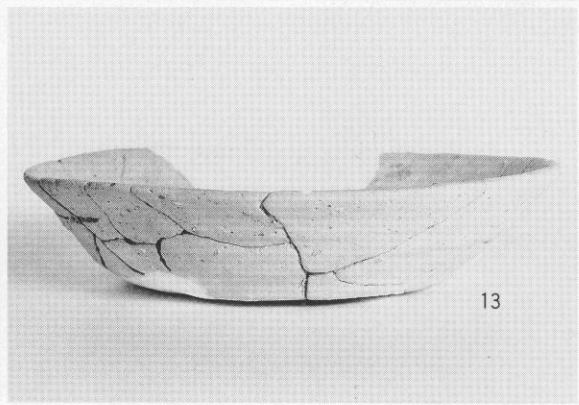

7


21

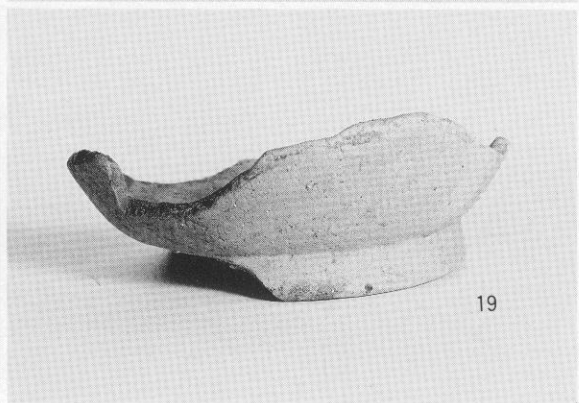

11


14

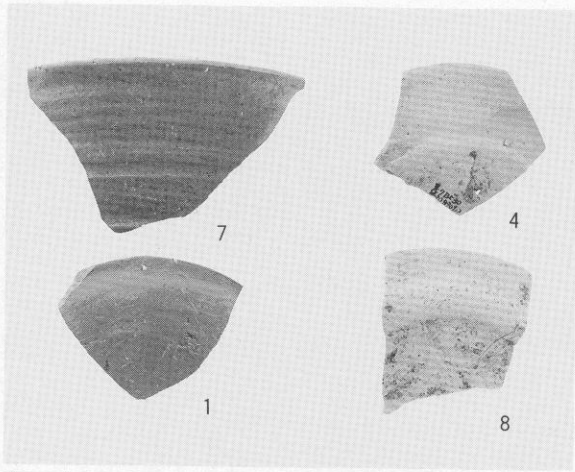

12

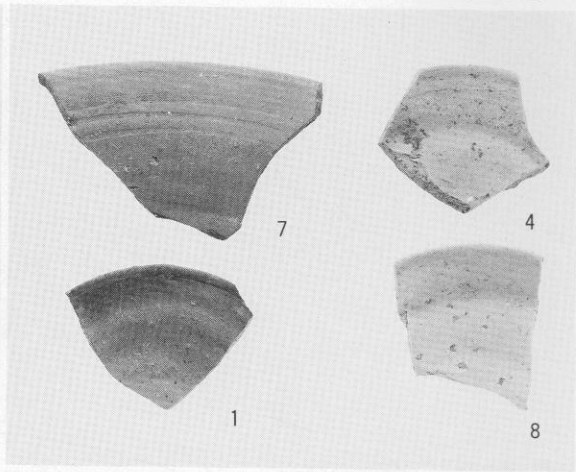

13

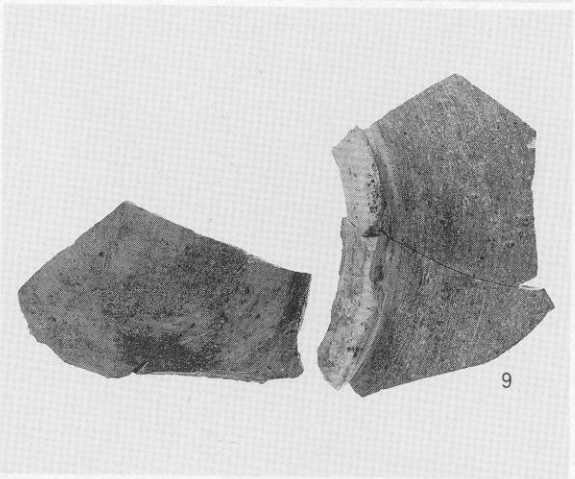

18

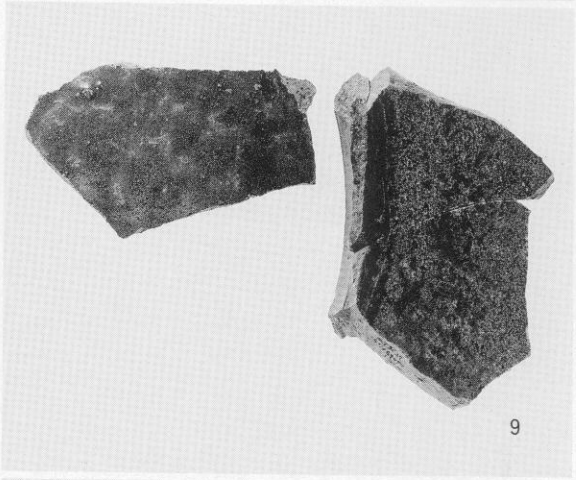

19

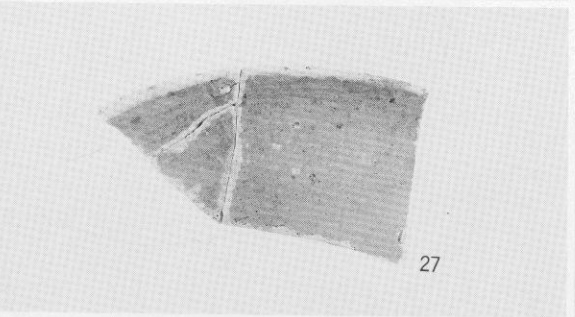
7SD010 出土土器

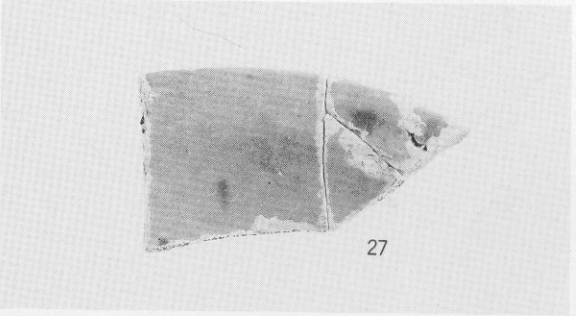


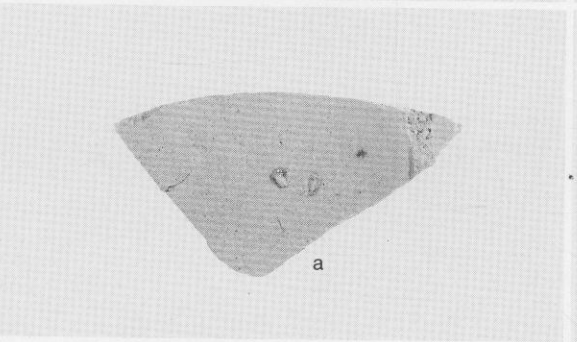


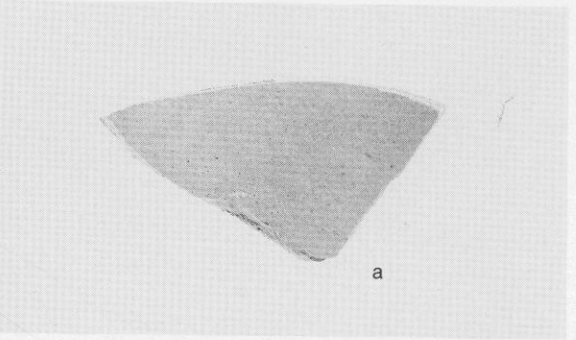






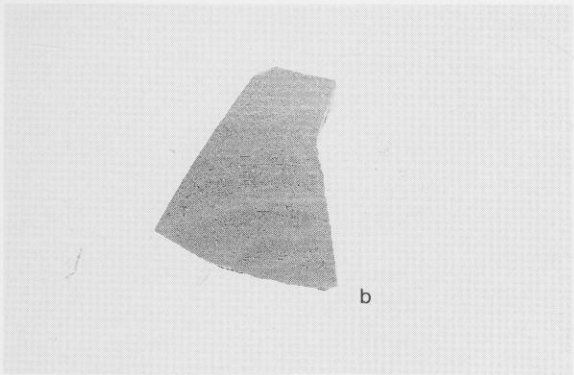


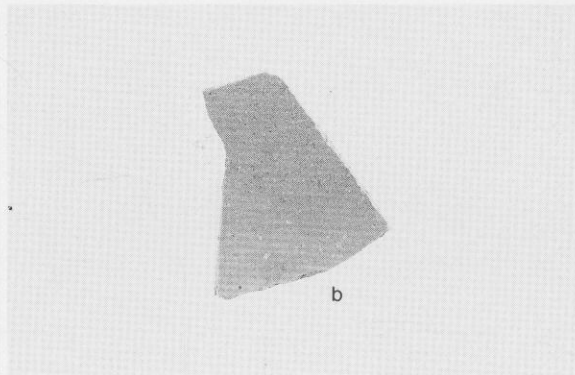


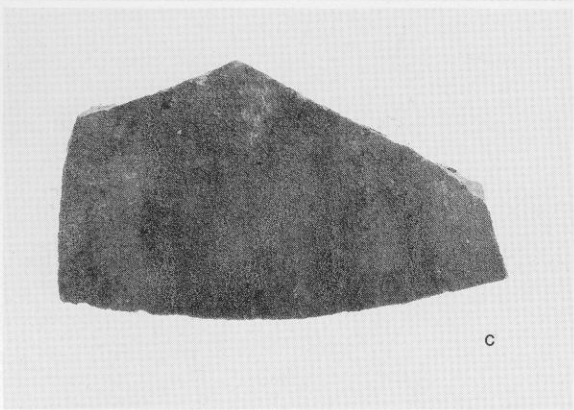


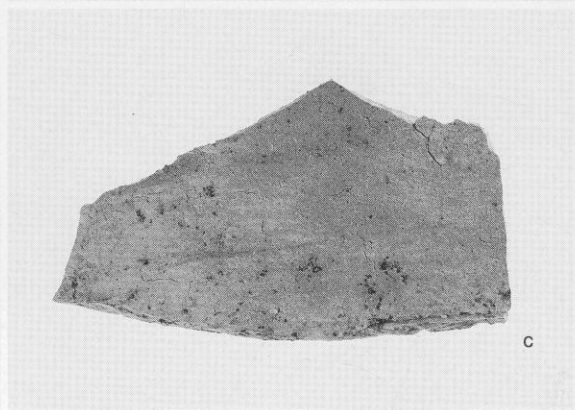
7SD010 出土土器・陶磁器

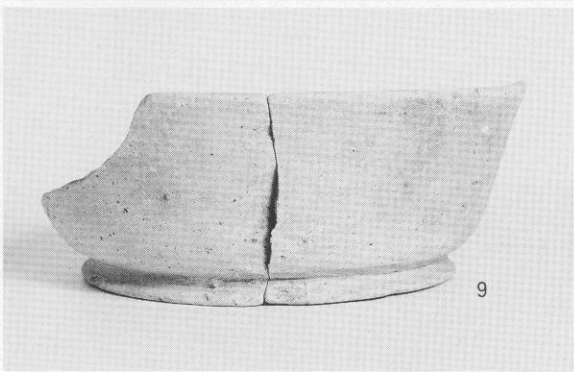
Pla.20

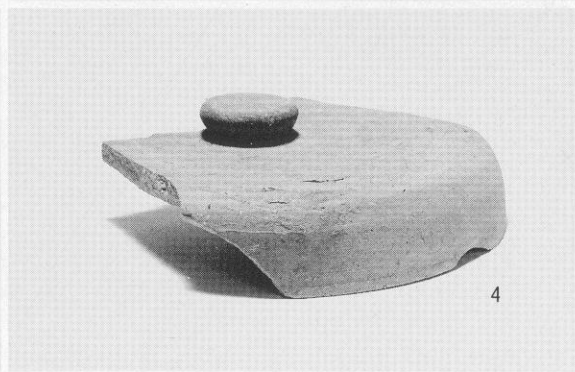

b


b


c


c

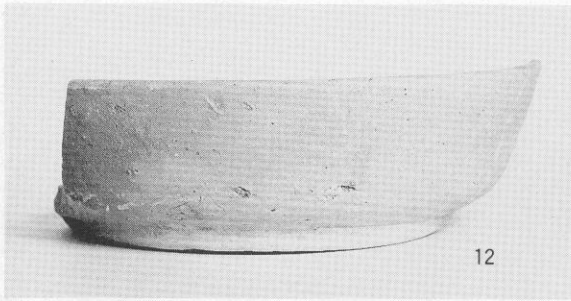

9


4

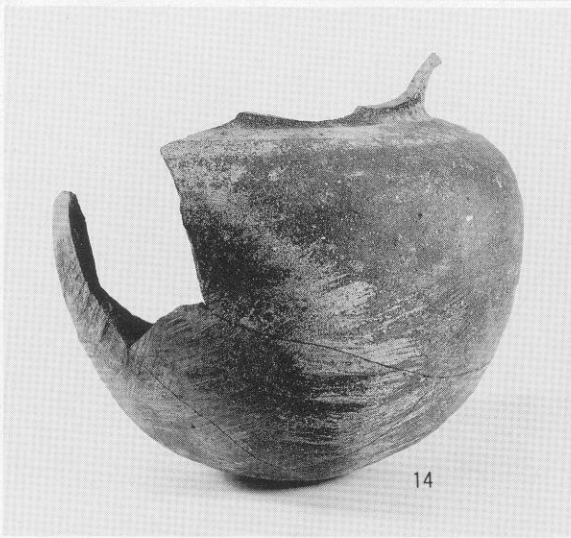

6

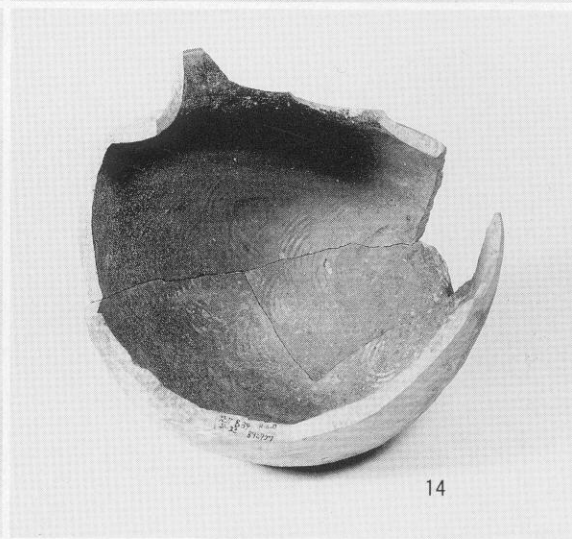

13

7SD010・023 出土土器・陶磁器

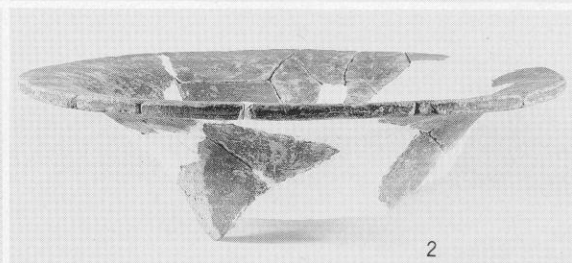

12

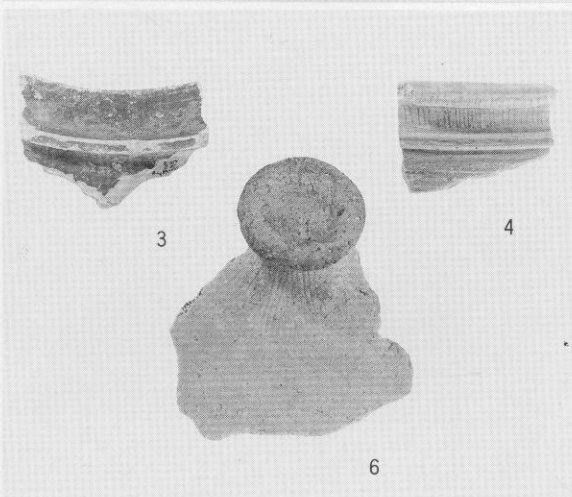

11

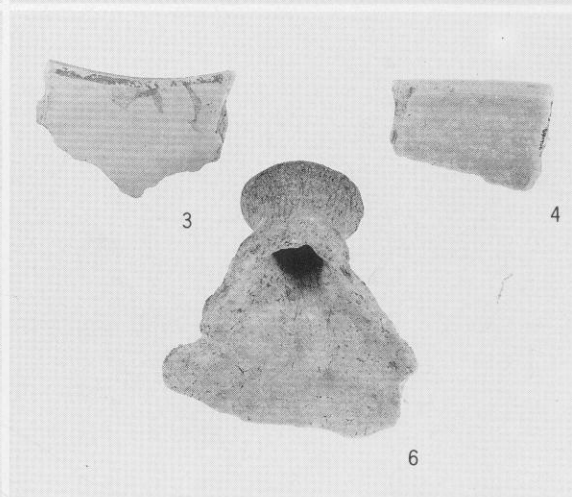

14


14


16

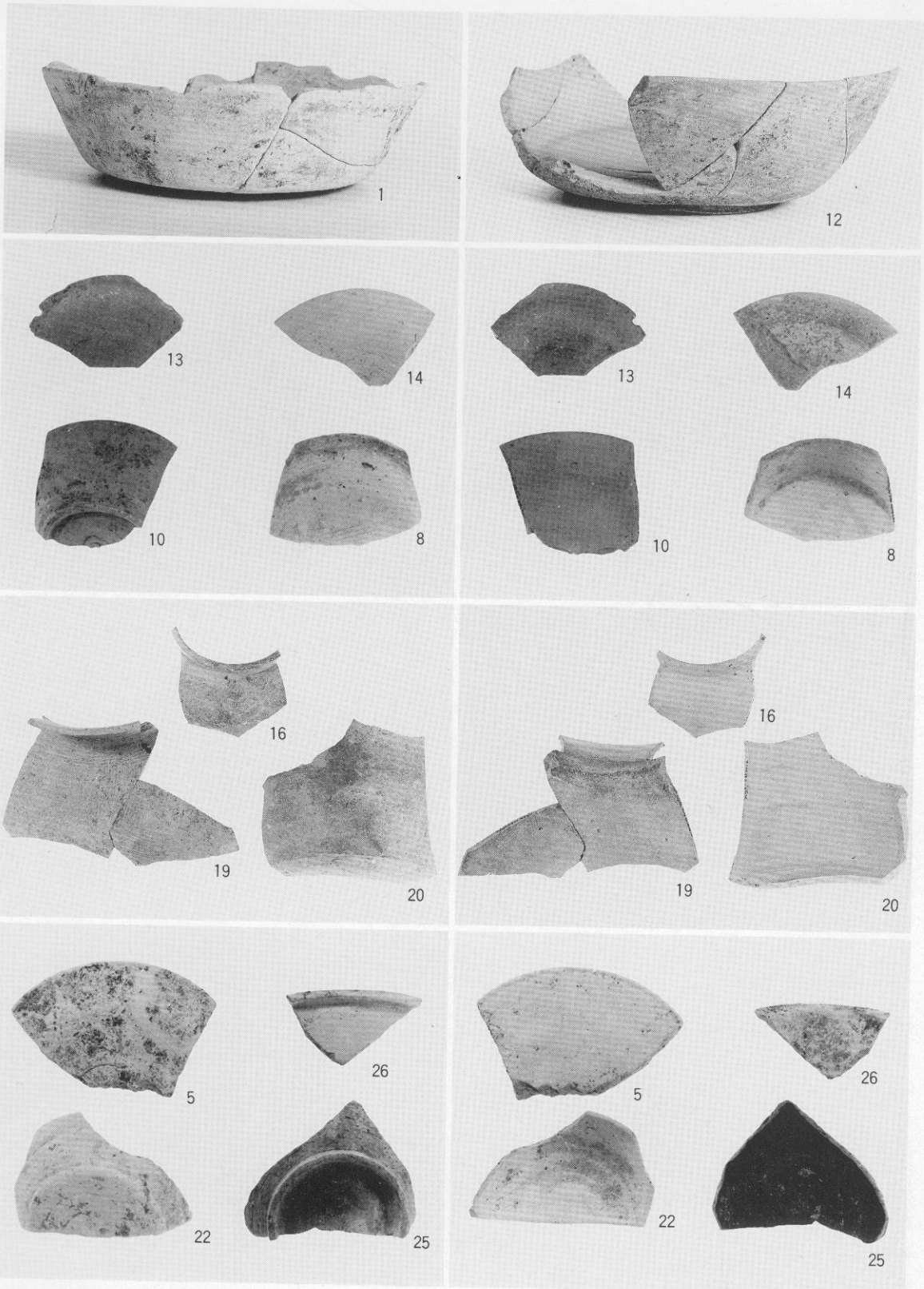

2


3
4
6

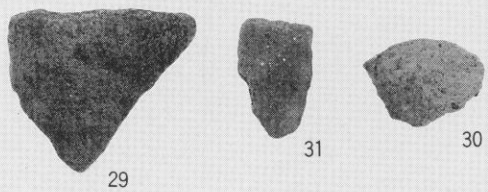

3
4
6

7SD023・025 出土土器

Pla.22

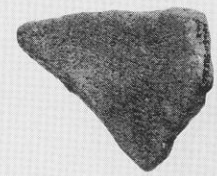


7SK029・7SX011 出土土器


29

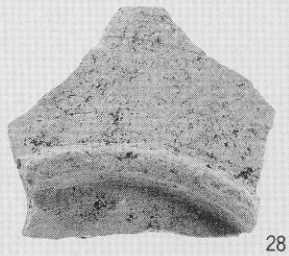
31

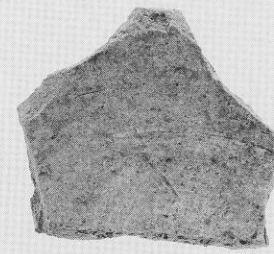
30

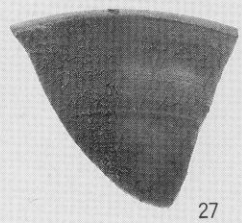

29


31

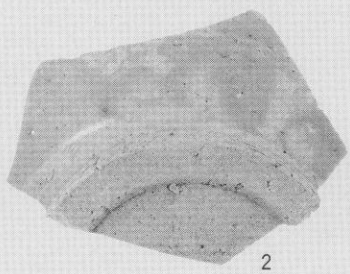

30

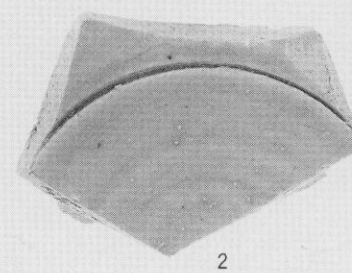

28


28


27

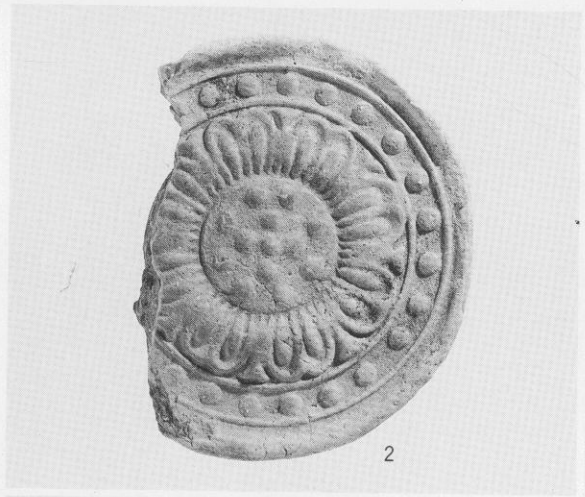

27

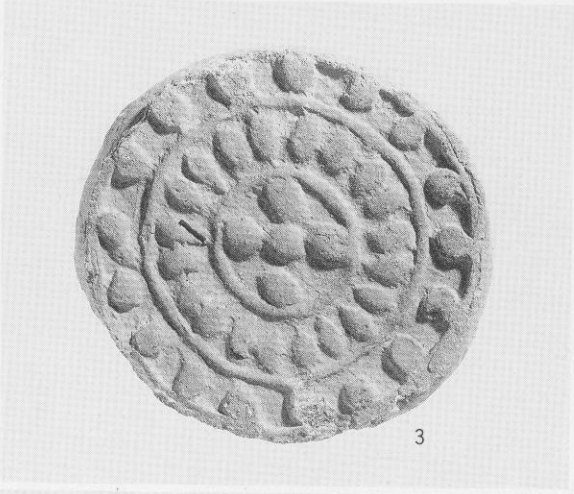

2


2

7SX011・015 出土土器・陶磁器

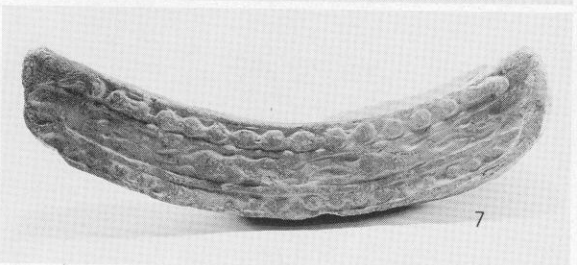
Pla.24



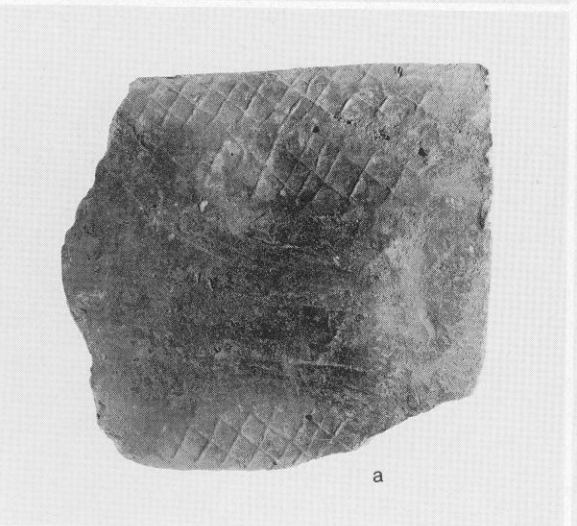


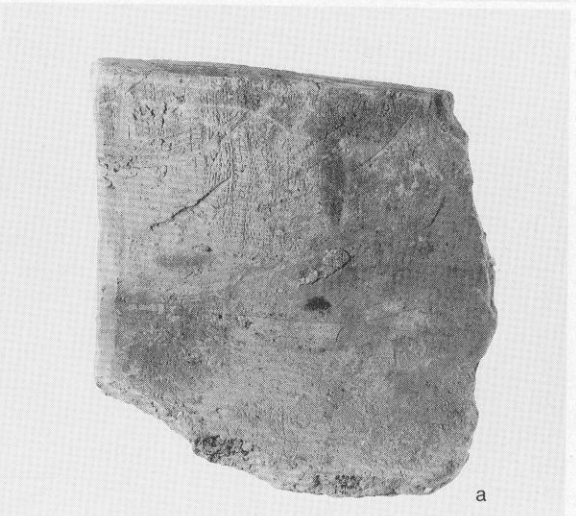




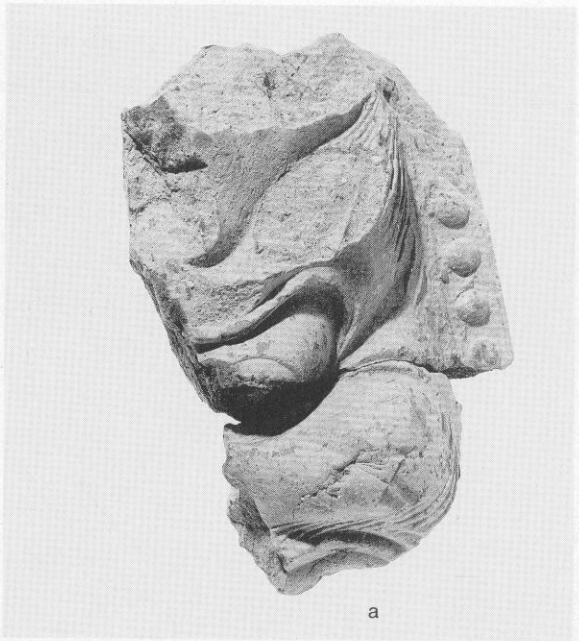


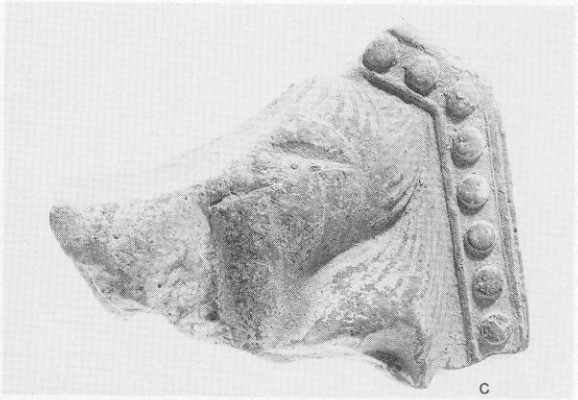




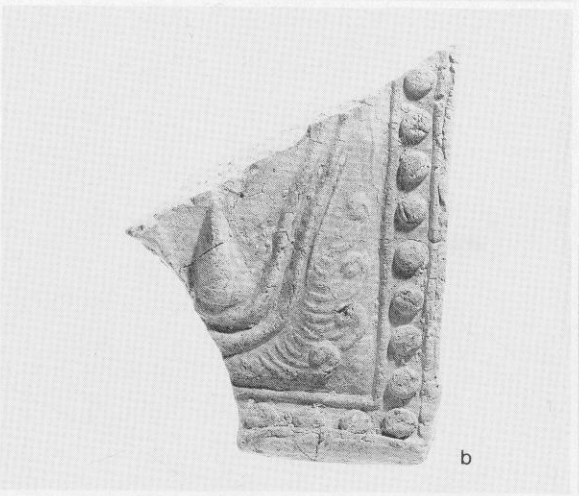


筑前国分尼寺跡第 7 次調査出土軒瓦・平瓦


a


c


d


b

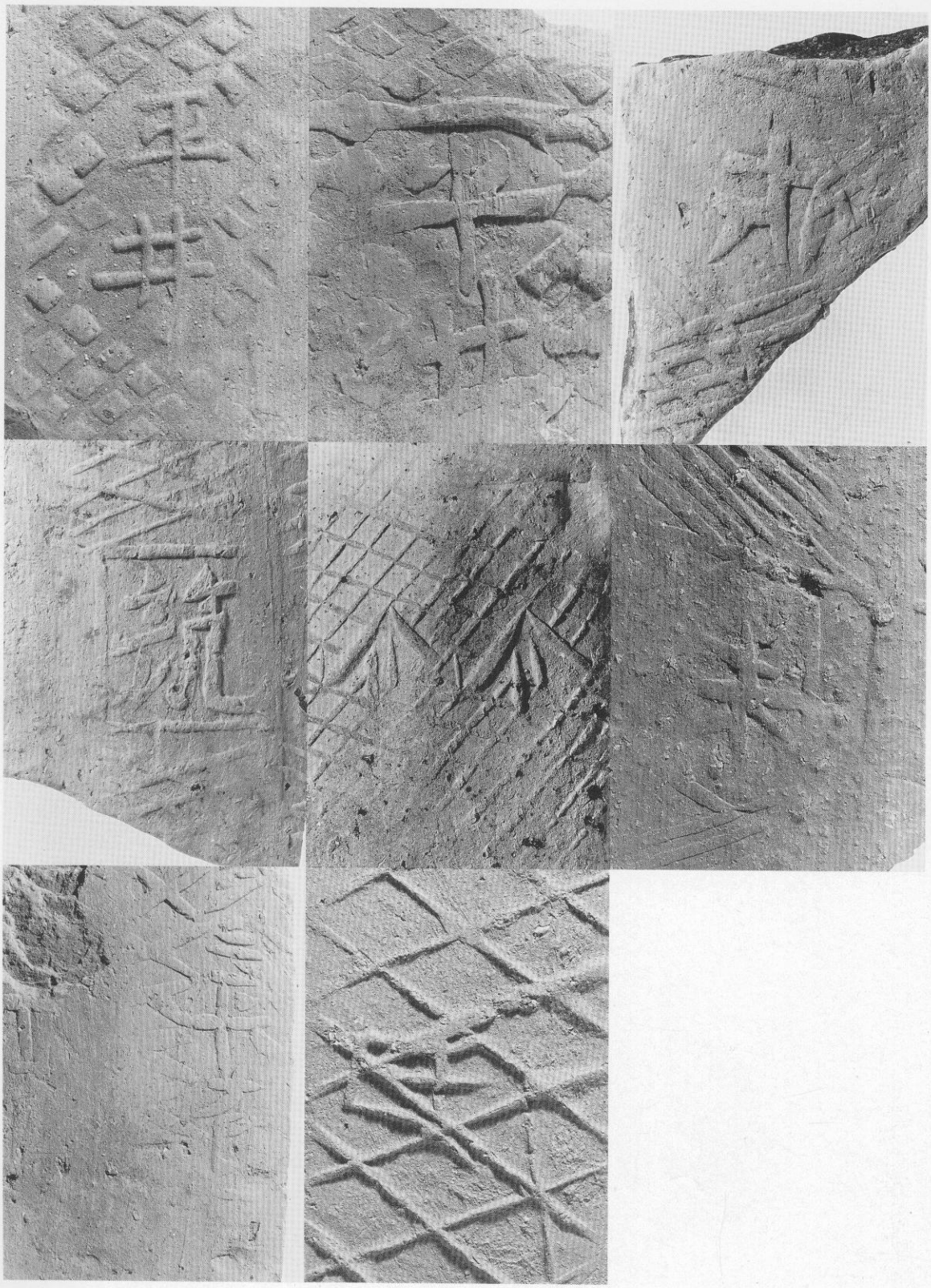

e


f

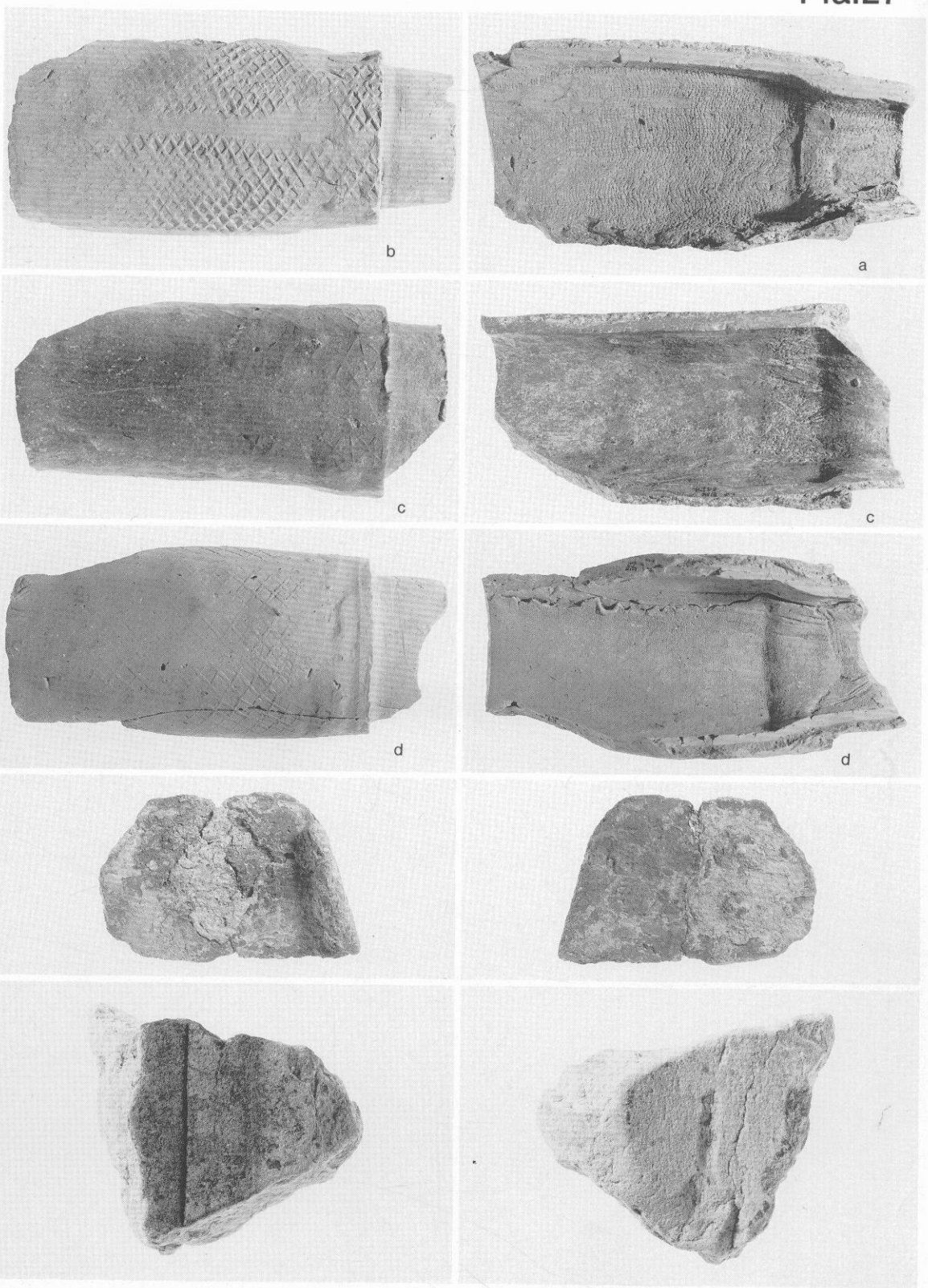

f

筑前国分尼寺跡第７次調査出土鬼瓦他瓦類

Pla.26

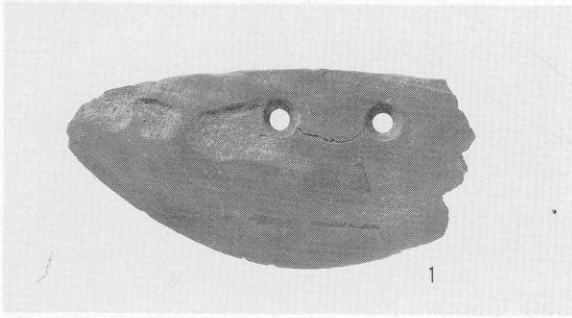


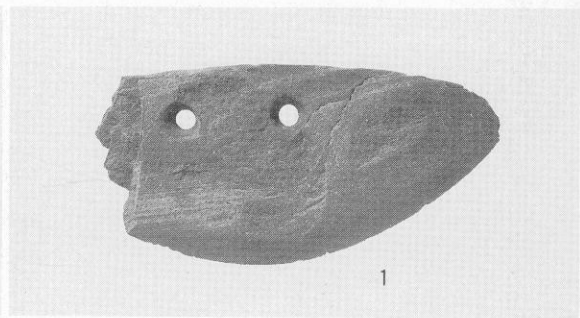
筑前国分尼寺跡第 7 次調査出土文字瓦

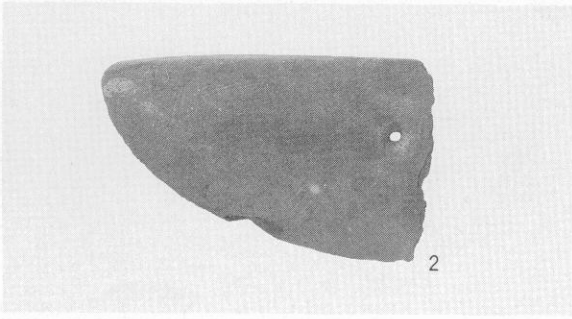


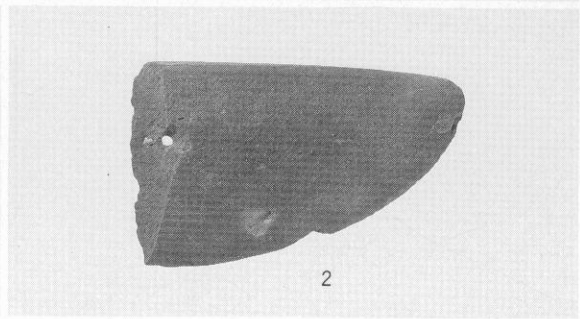
筑前国分尼寺跡第 7 次調査出土丸瓦・鉄器・鋳型

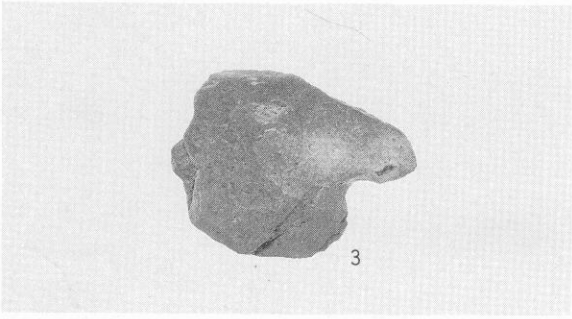
Pla.28

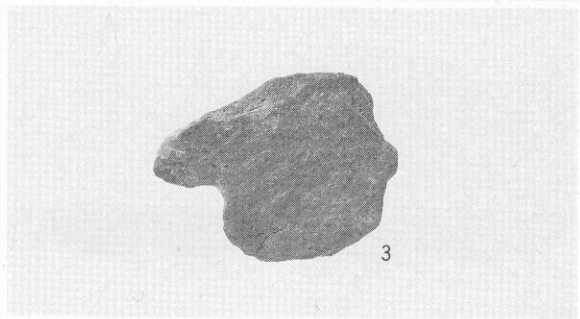


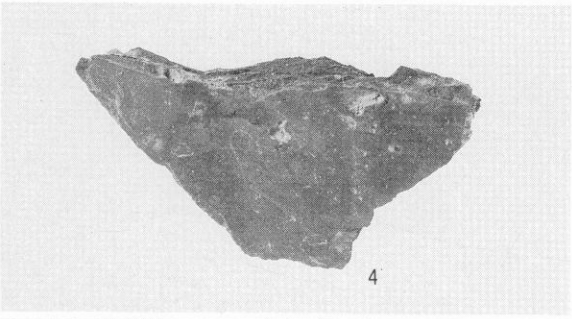


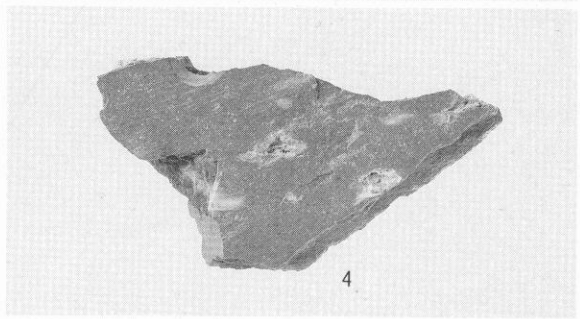


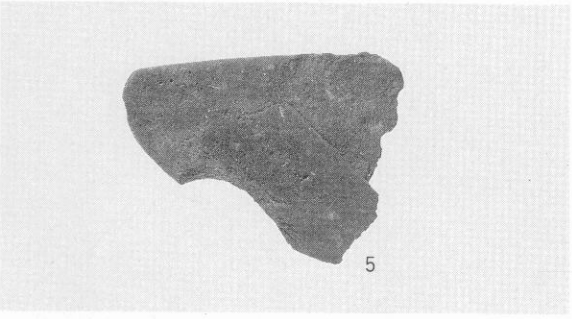


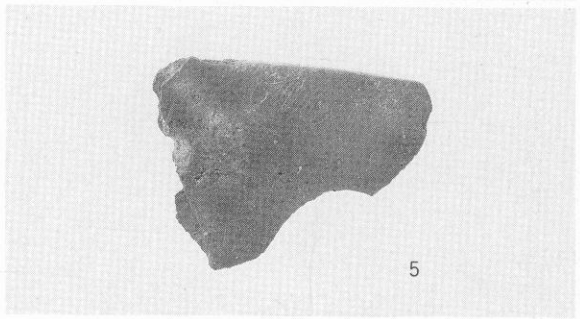




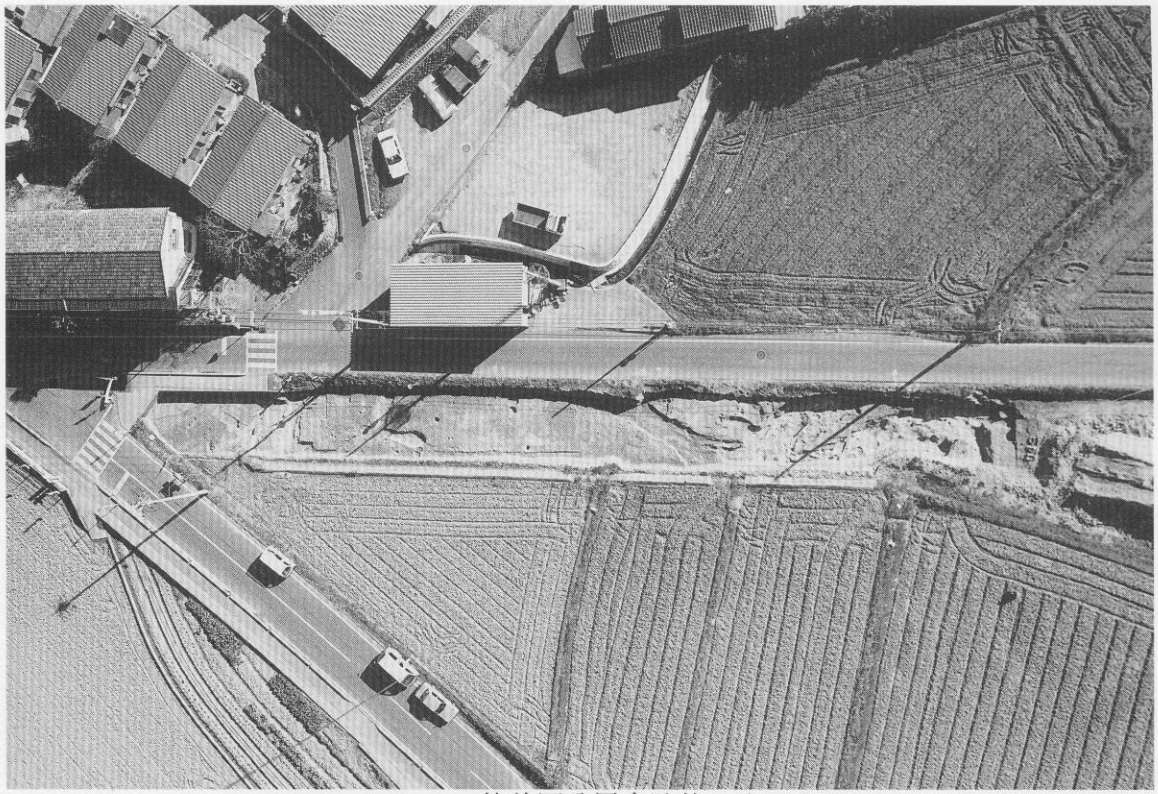








筑前国分尼寺跡第 7 次調査出土石庖丁



筑前国分尼寺跡第10次調査全景（空中写真、上が南）



10SE005（南から）

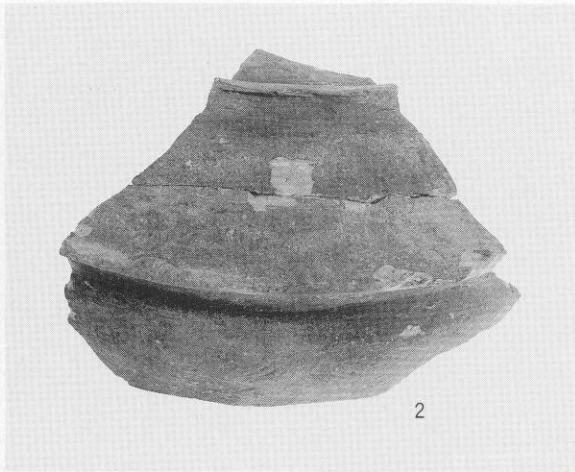
Pla.30

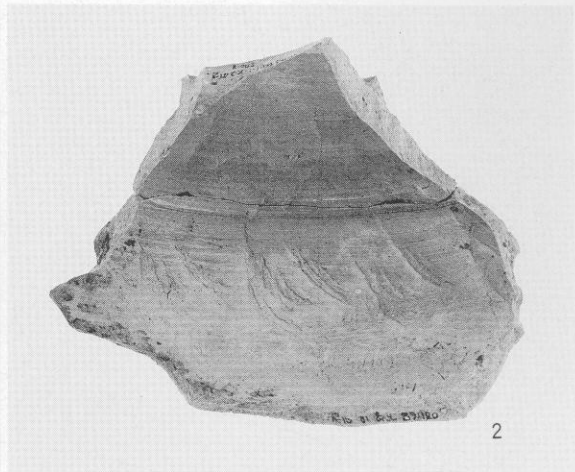


筑前国分尼寺跡第10次調査東半部全景（空中写真、上が南）

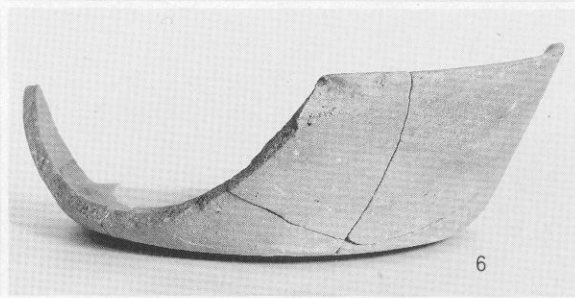


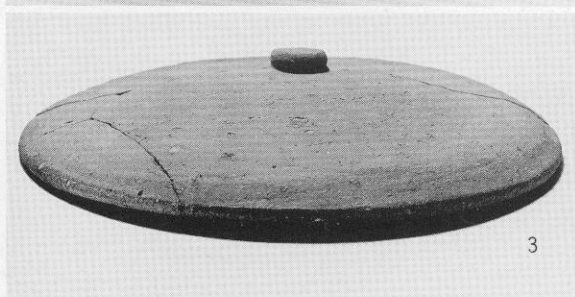
筑前国分尼寺跡第10次調査西半部全景（空中写真、上が南）



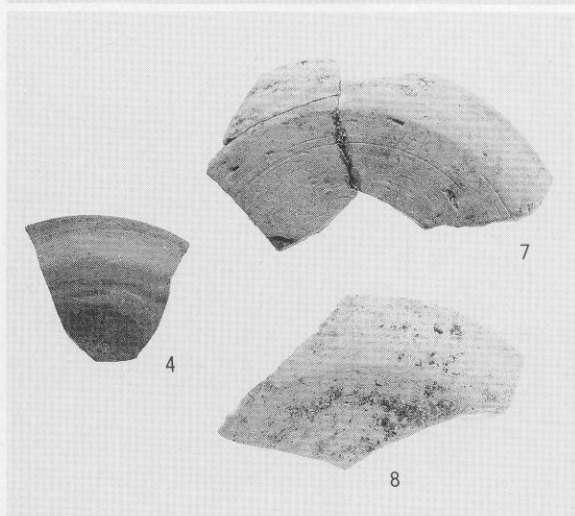


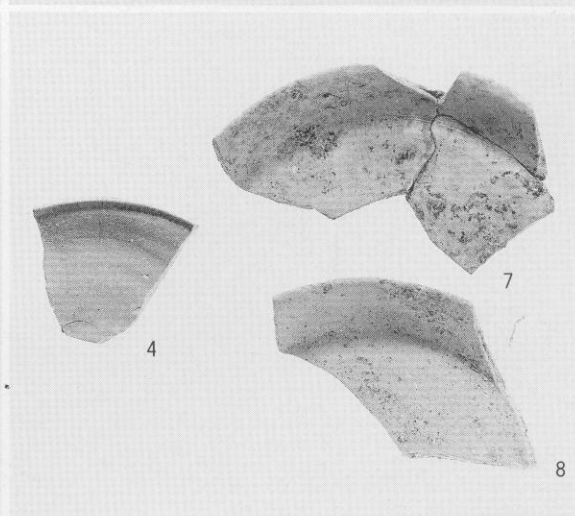






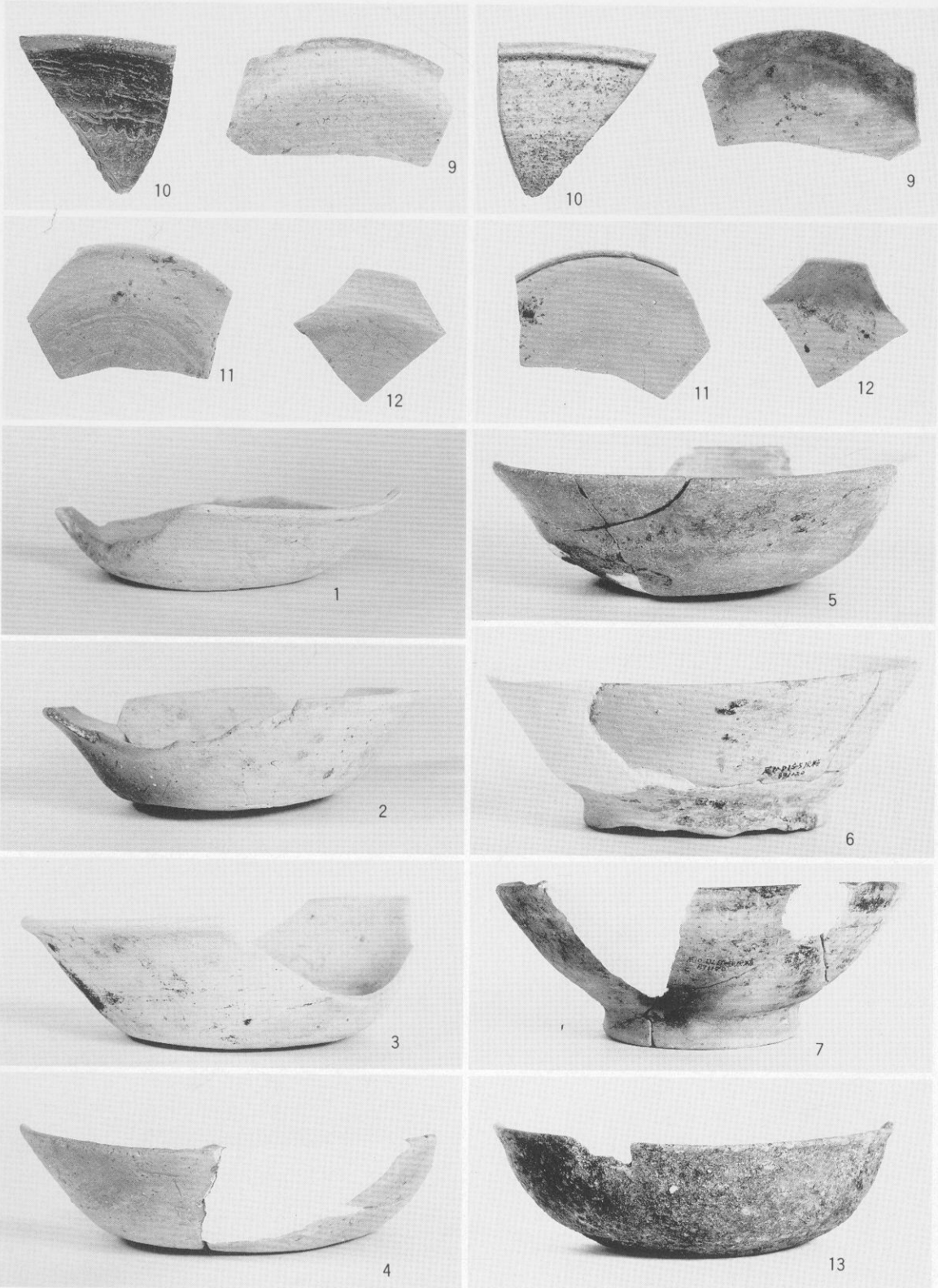




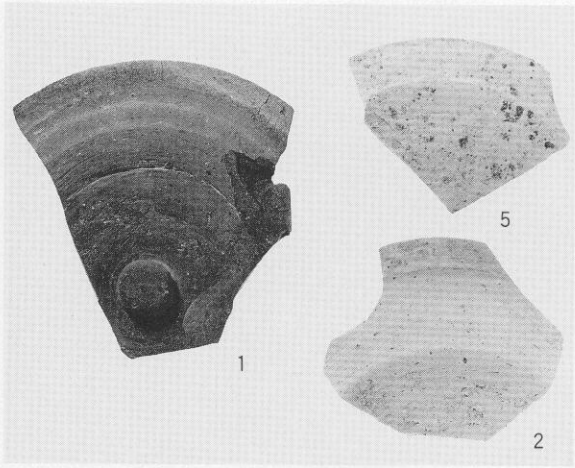


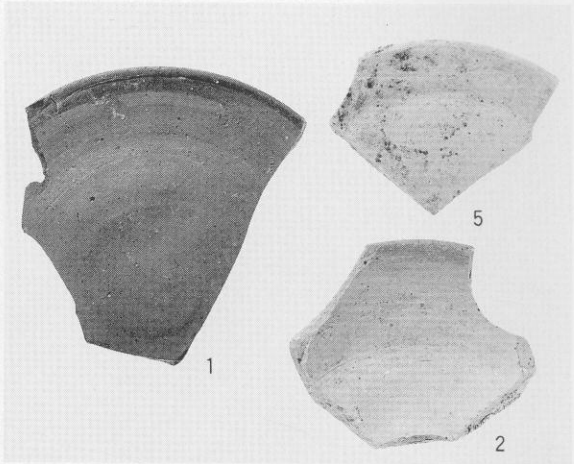
10SD001 出土土器

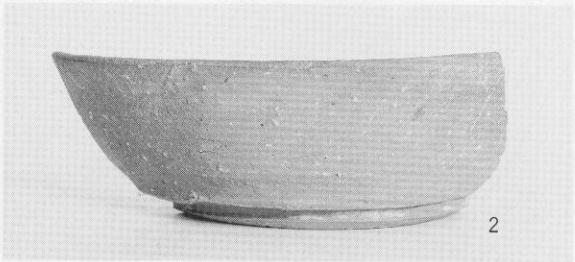
Pla.32



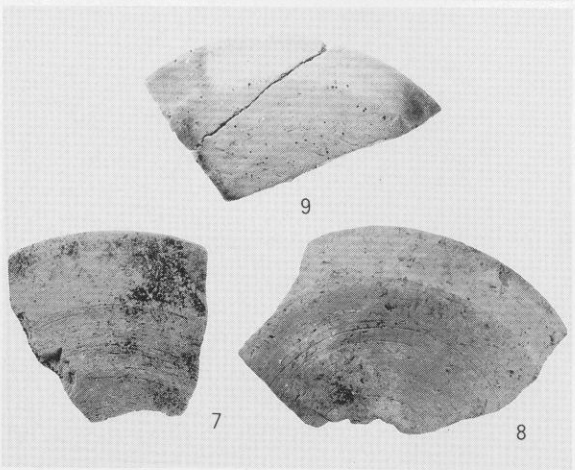
10SD002・004・10SE005・10SX012 出土土器

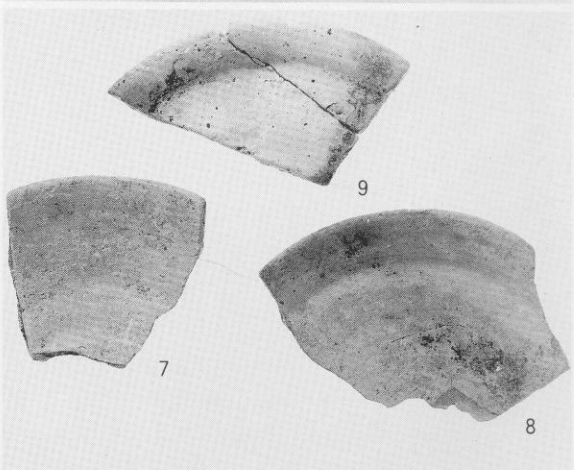


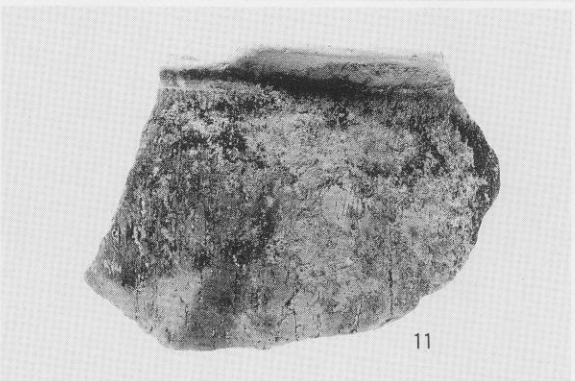


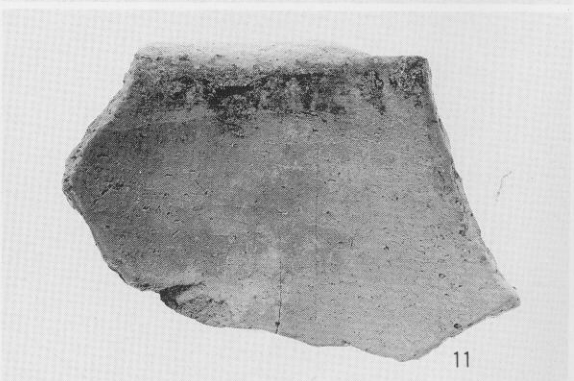






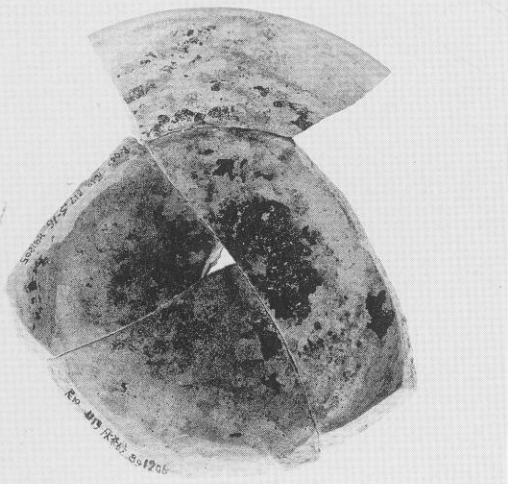




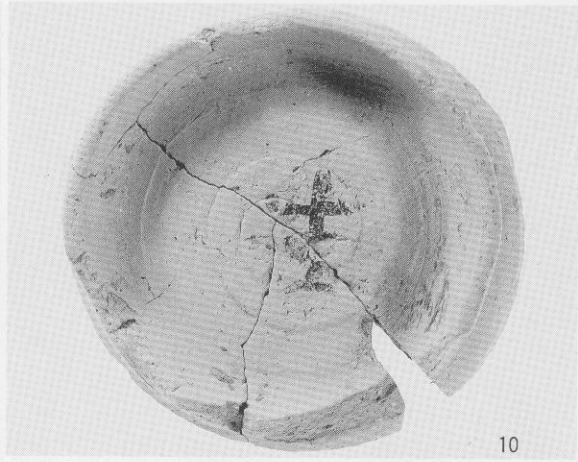


10SD016 暗茶色粘土層出土土器

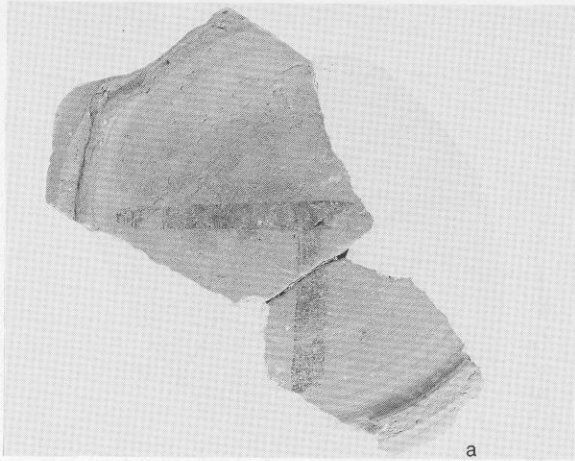
Pla.34



3



10



a



12



12

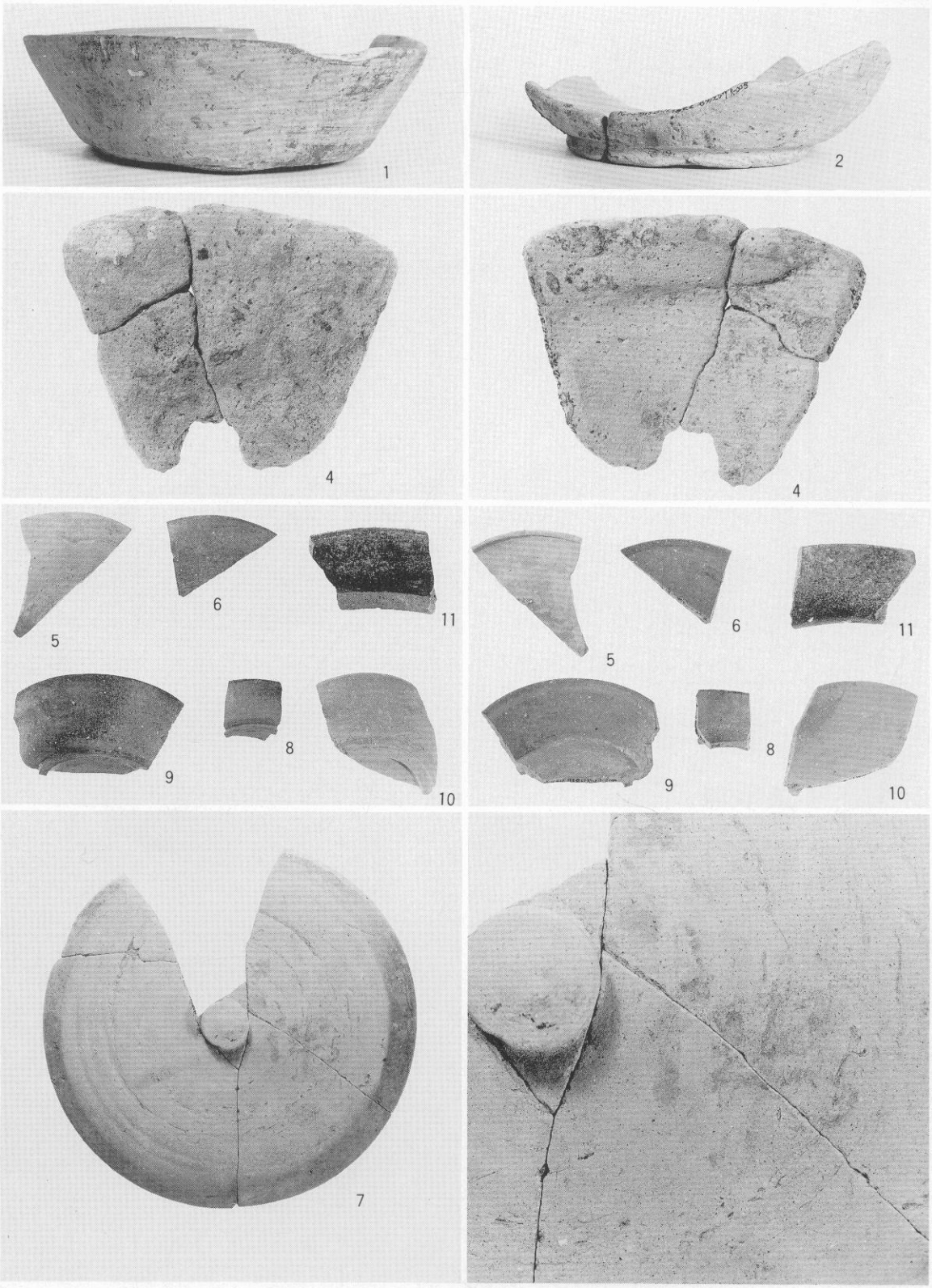


14



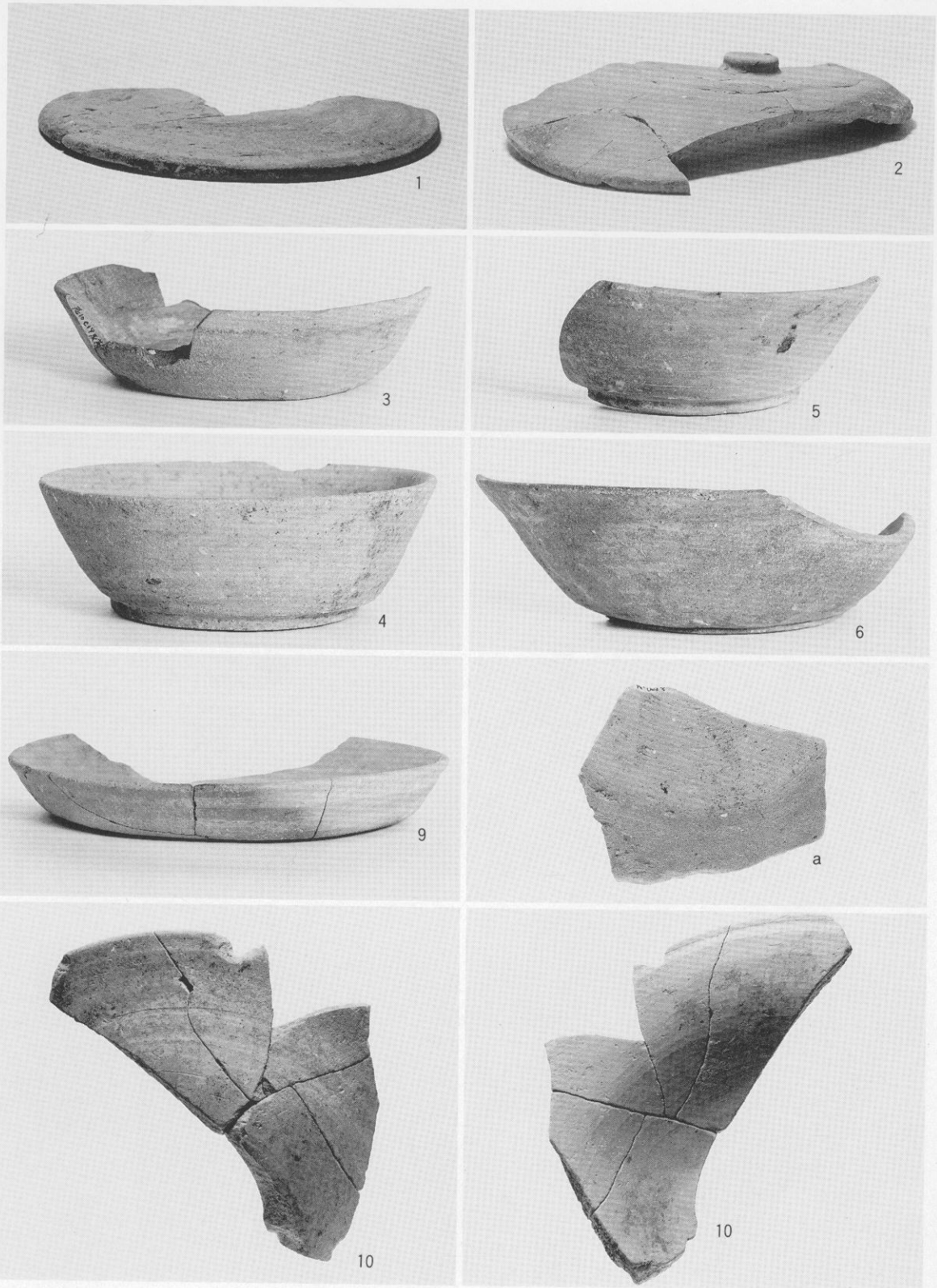
14

10SD016 暗茶色粘土層出土土器

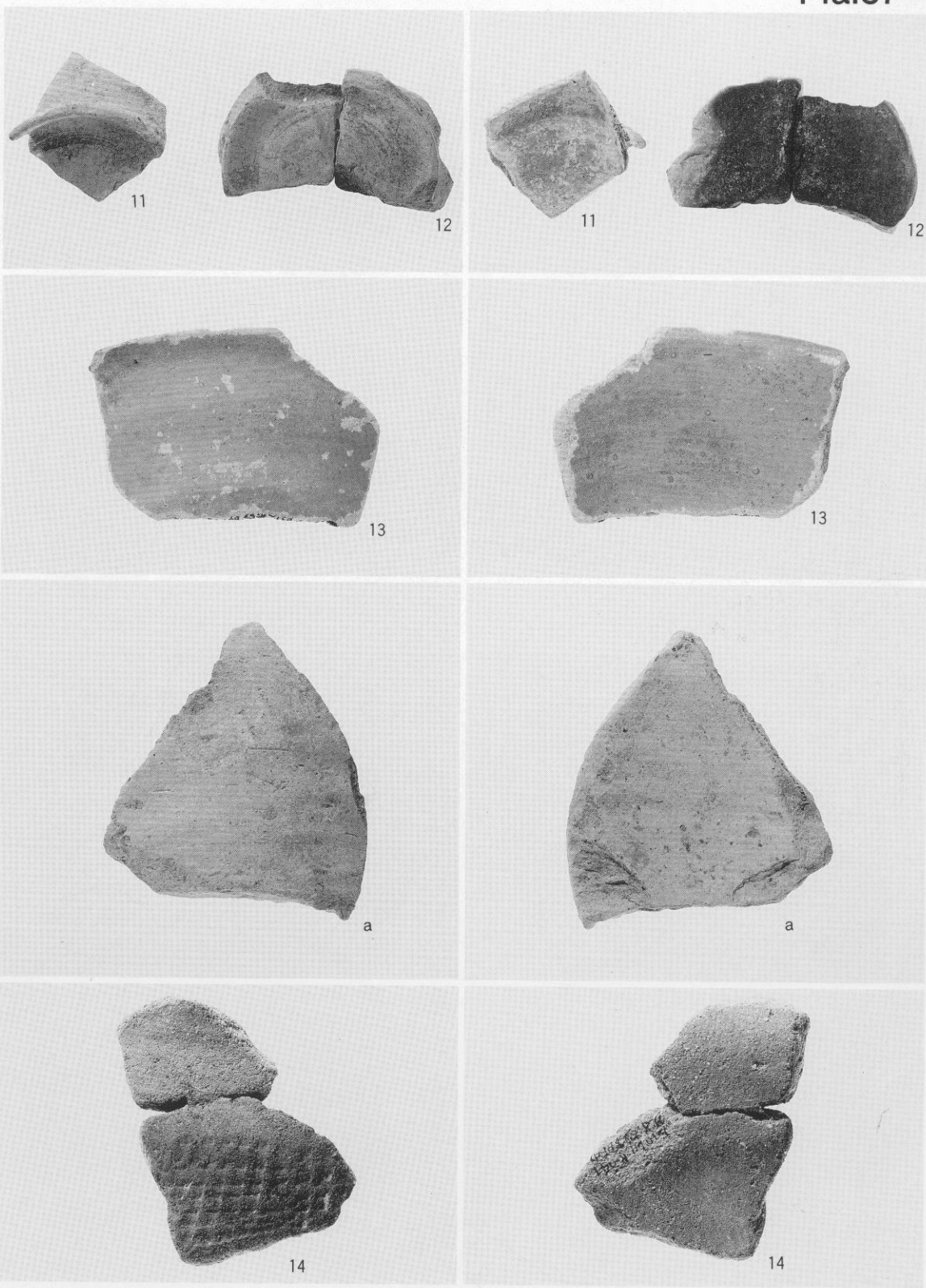


10SD016 褐色土層・10SD016 明灰色砂層出土土器

Pla.36

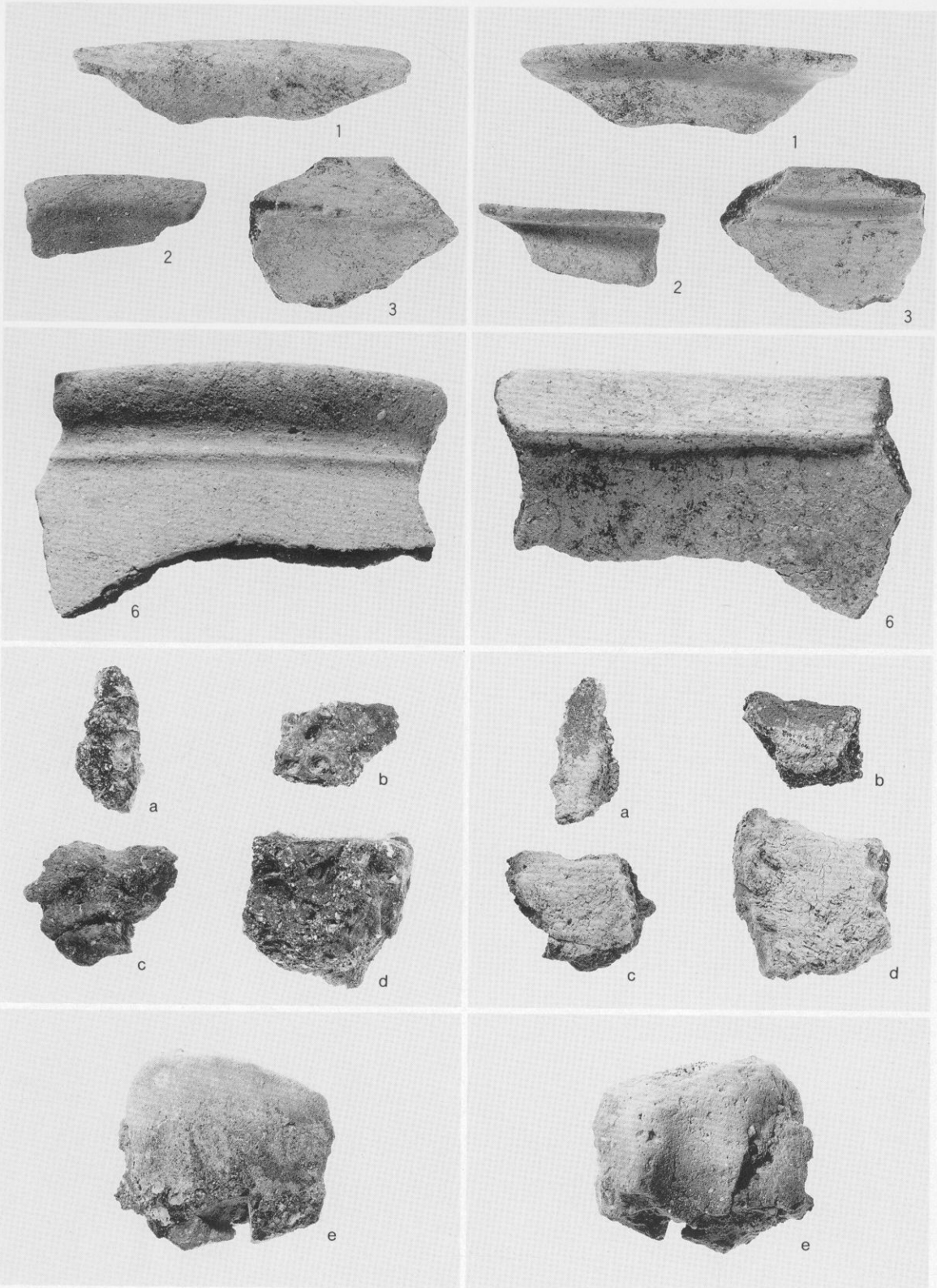


灰茶色砂層出土土器



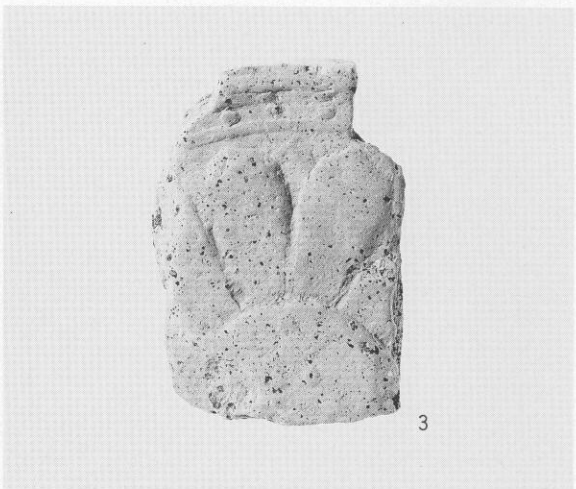
灰茶色砂層出土土器

Pla.38



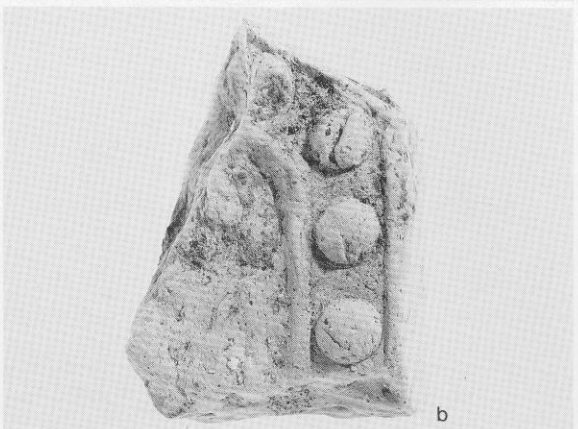
筑前国分尼寺跡第10次調査出土弥生土器・生産用具


1

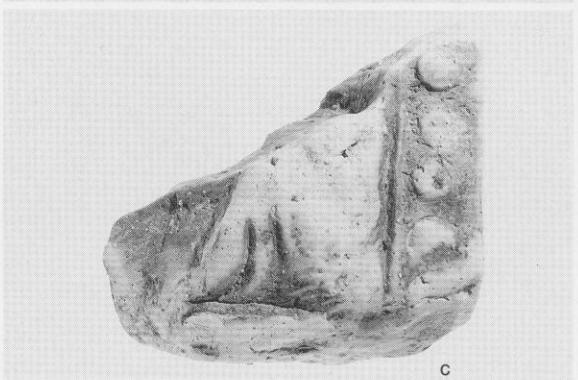

3


4


a


b

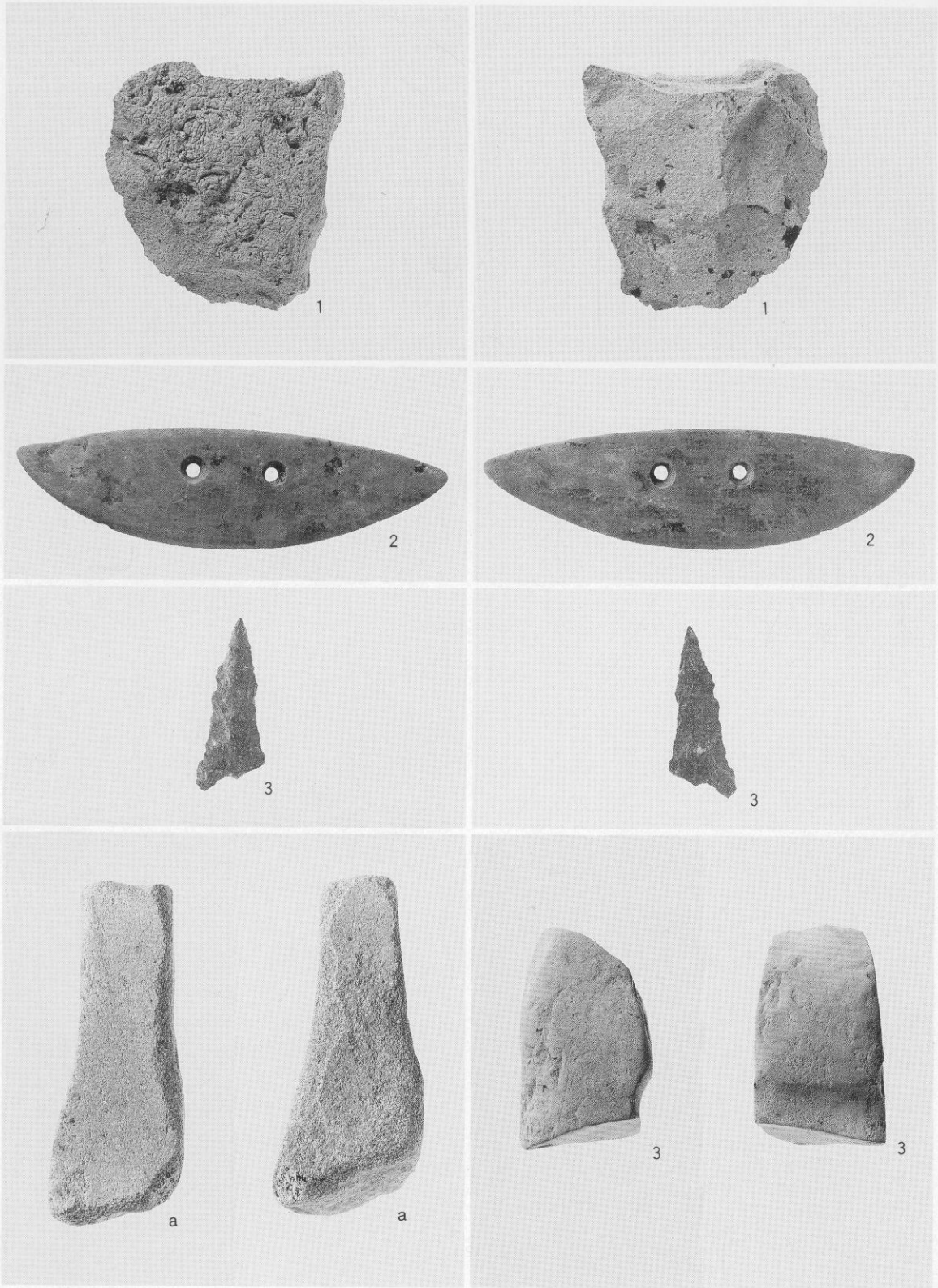

d


c


d

筑前国分尼寺跡第10次調査出土瓦類

Pla.40



筑前国分尼寺跡第10・11次調査出土石器

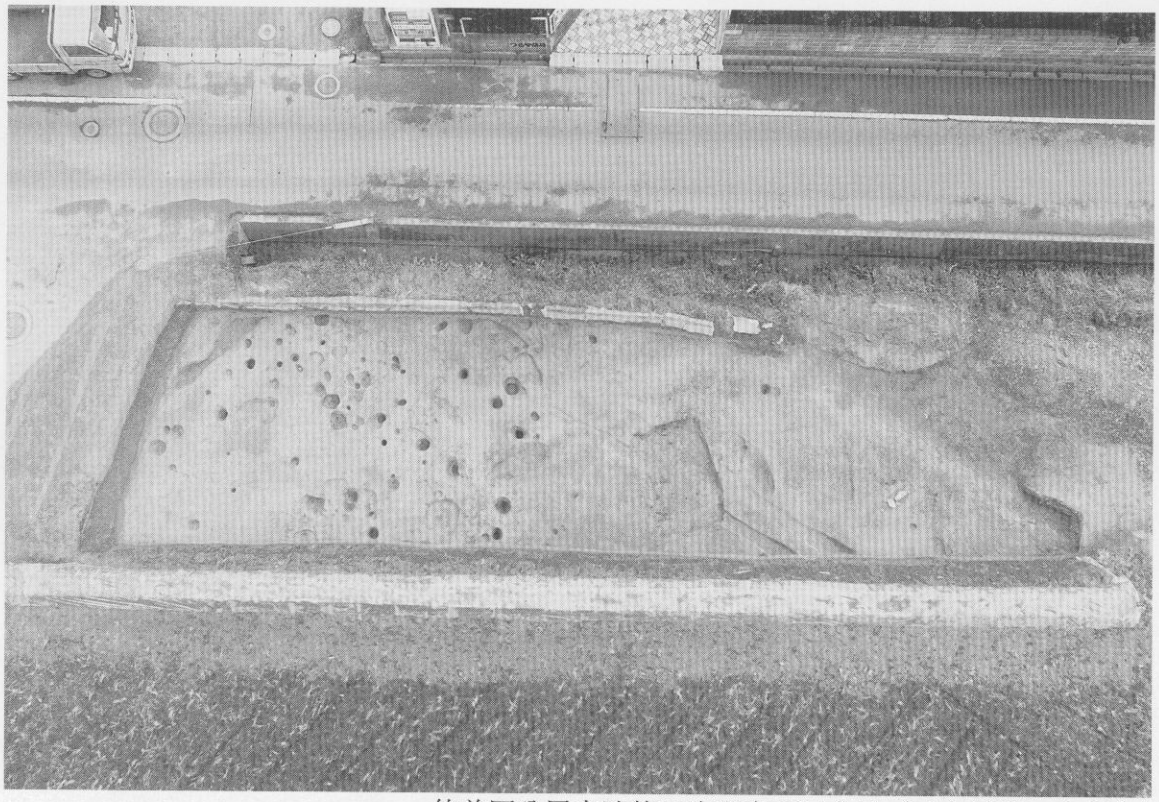


筑前国分尼寺跡第11次調査全景（空中写真、上が南）



筑前国分尼寺跡第11次調査地上空から国分寺の台地を望む（空中写真、西から）

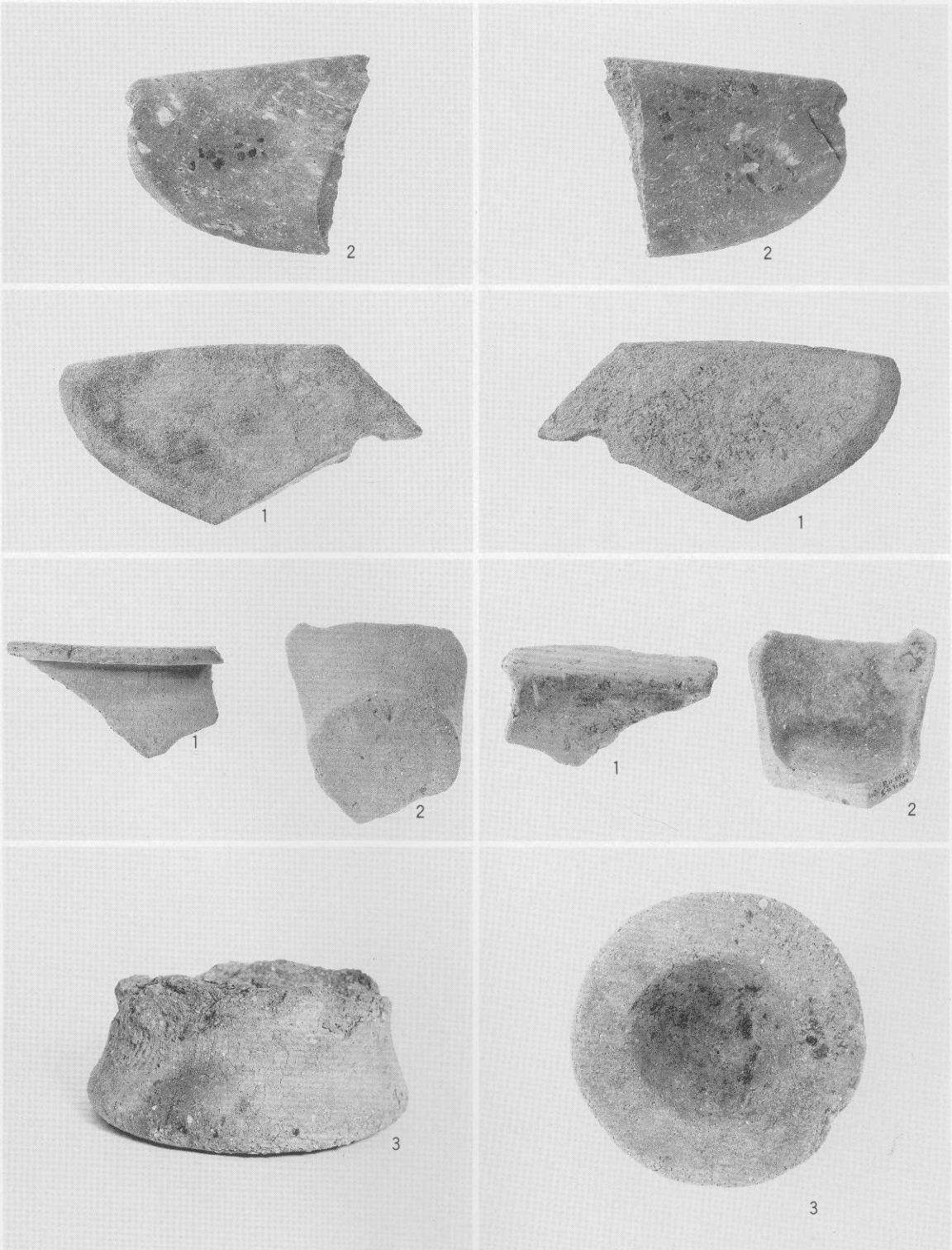
Pla.42



筑前国分尼寺跡第11次調査西区全景（空中写真、上が南）



筑前国分尼寺跡第11次調査東区全景（空中写真、上が南）

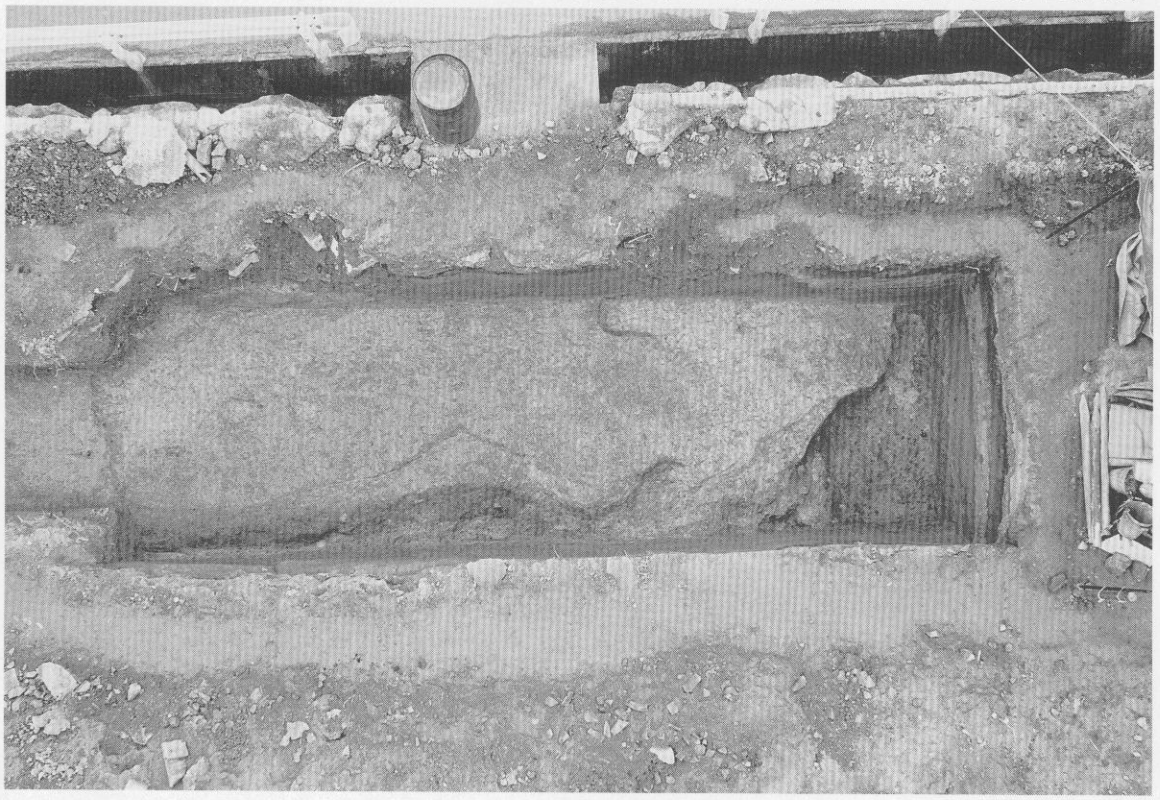


筑前国分尼寺跡第11次調査出土土器・石器

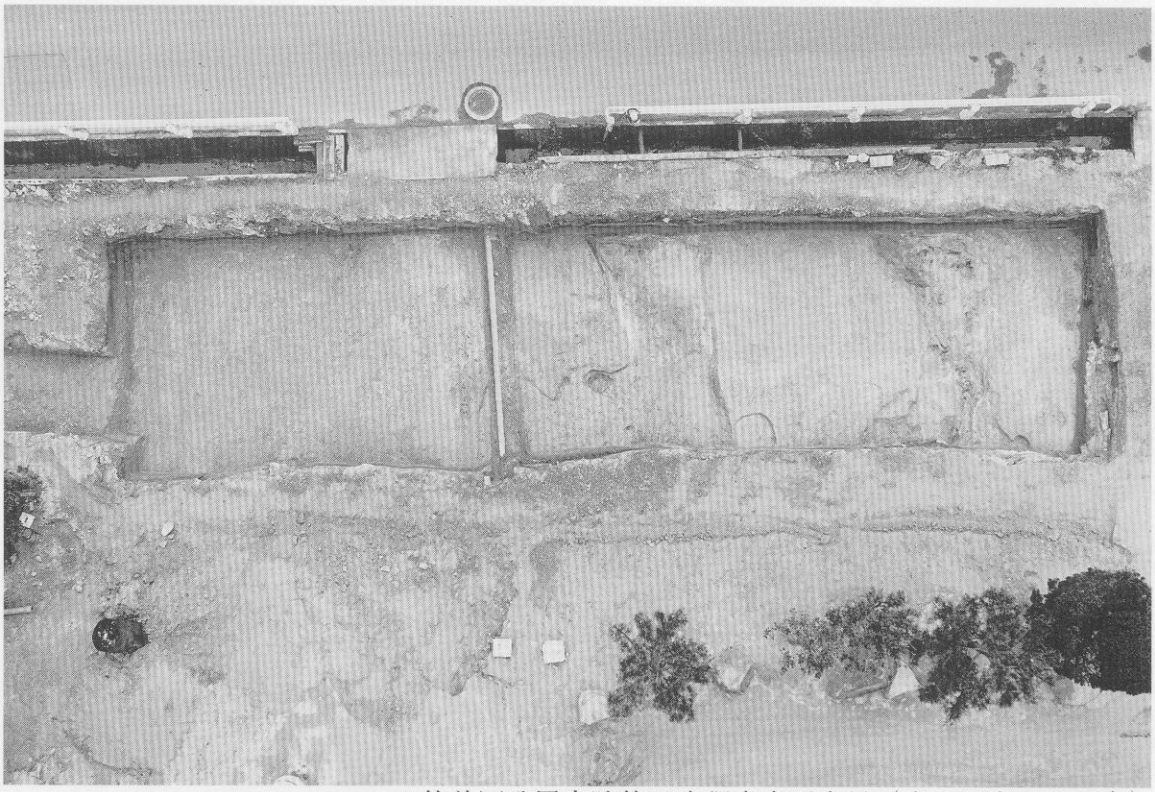
Pla.44



筑前国分尼寺跡第12次調査全景（空中写真、上が南）



筑前国分尼寺跡第12次調査西区全景（空中写真、上が南）

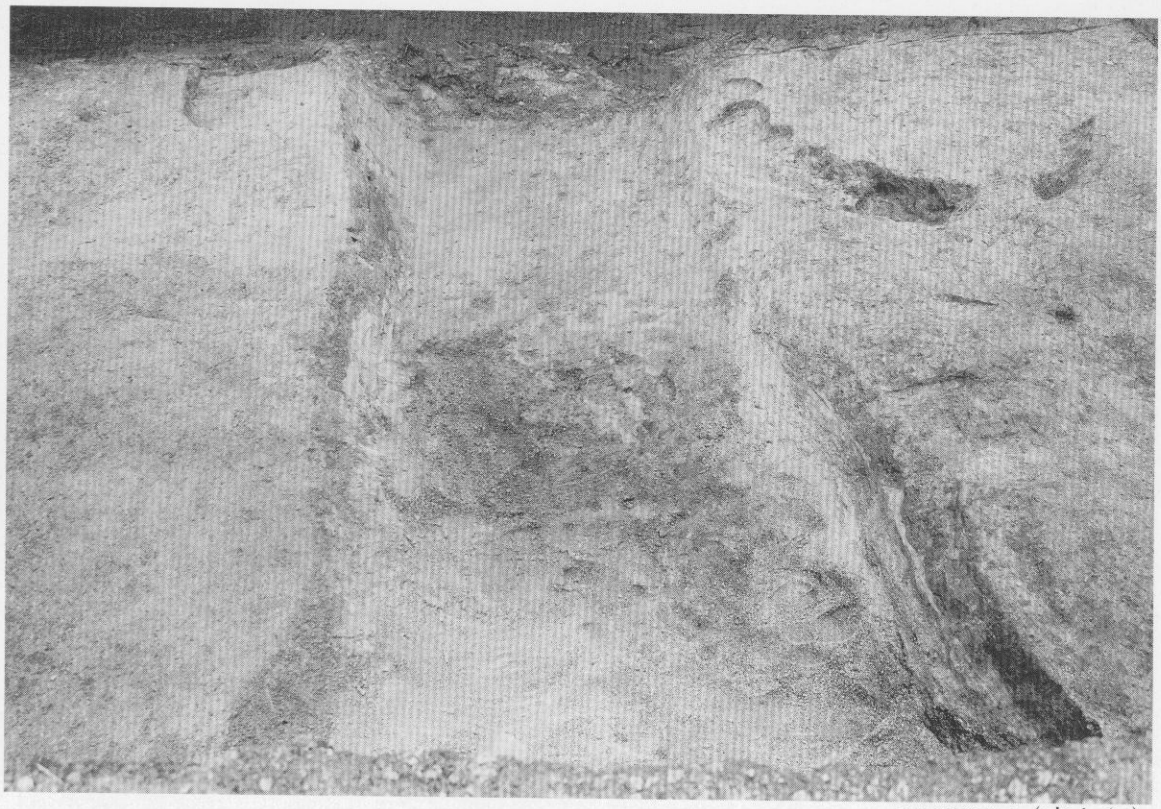


筑前国分尼寺跡第12次調査東区全景（空中写真、上が南）

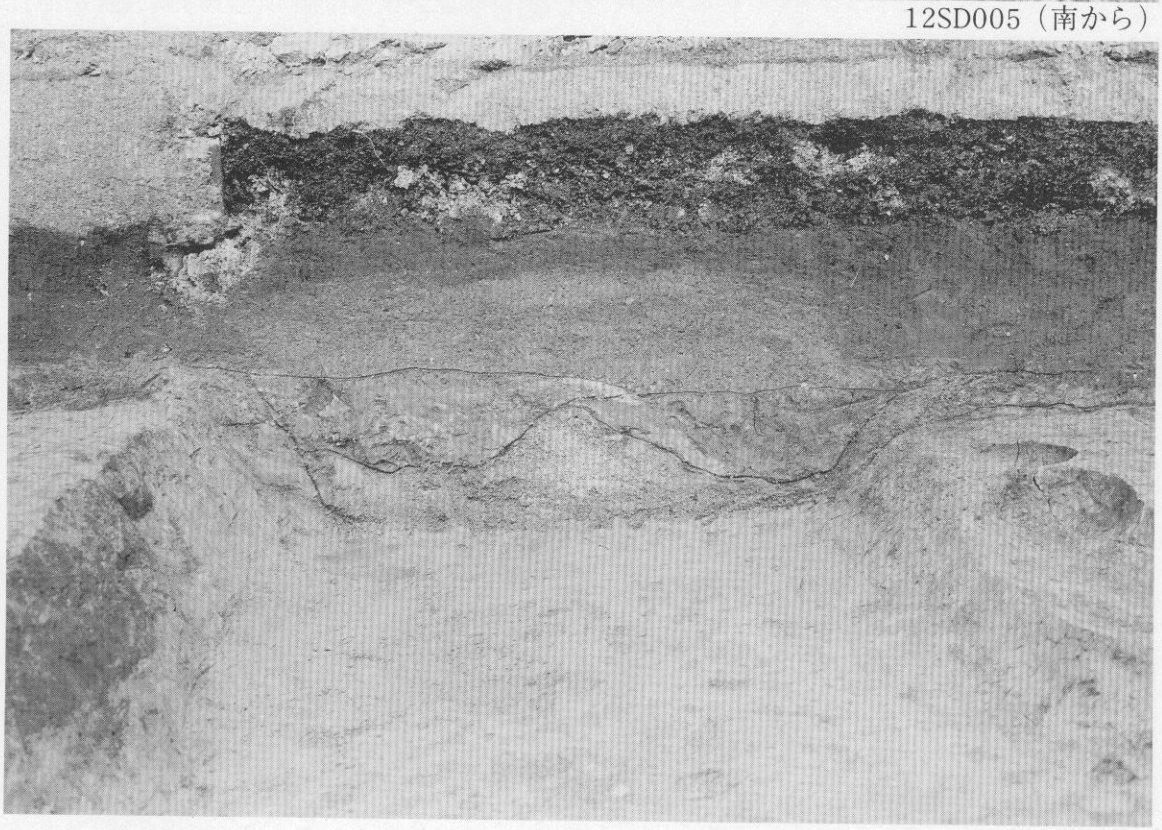


旧街道（写真右の南北路）と筑前国分尼寺跡第12次調査区（空中写真、上が南）

Pla.46



12SD005（南から）



12SD005 土層観察状況（南から）

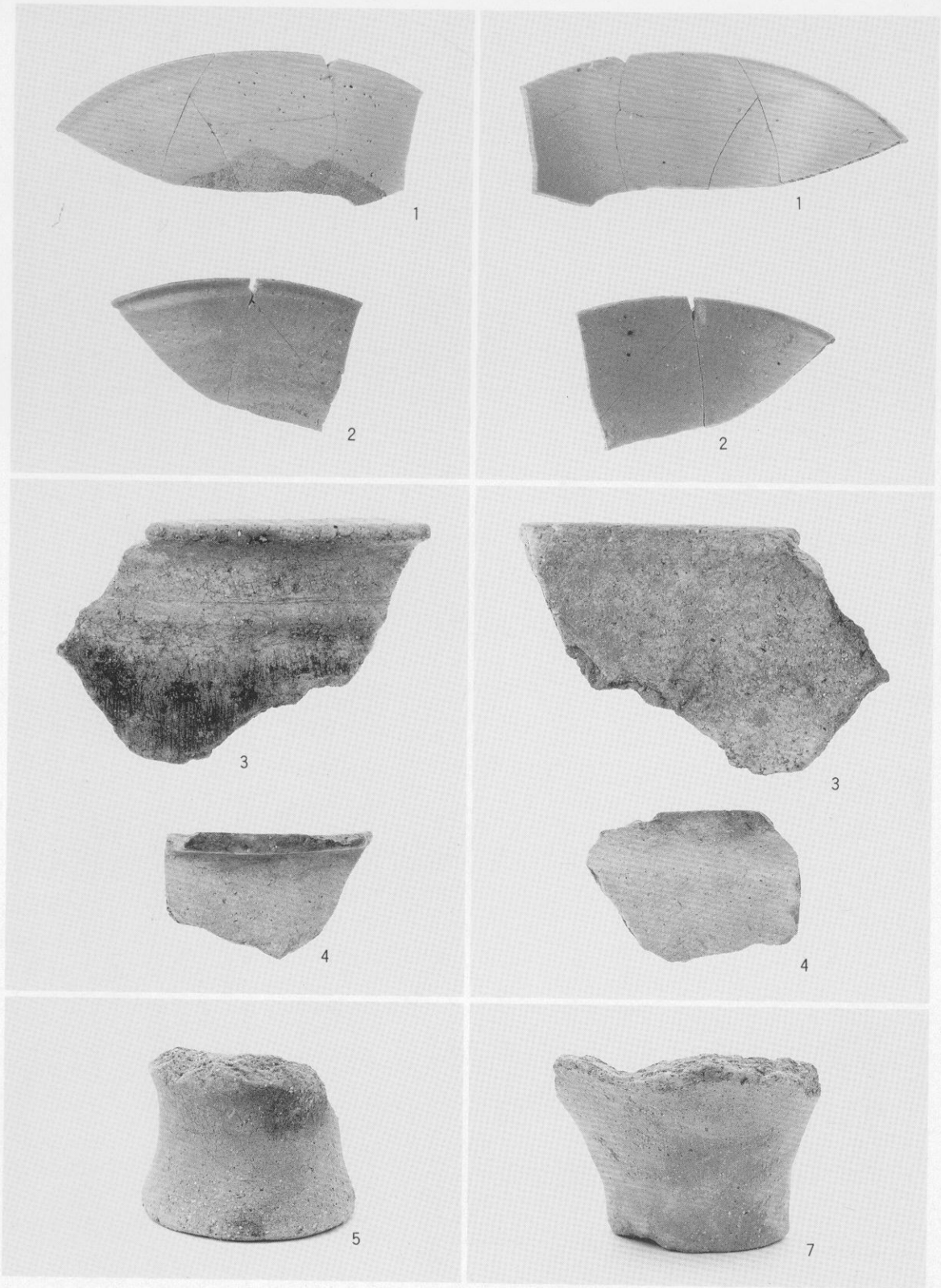


12SX010（写真右）・12SD005（北から）



12SD005・12SX010 土層観察状況（北から）

Pla.48



筑前国分尼寺跡第12次調査出土土器



1



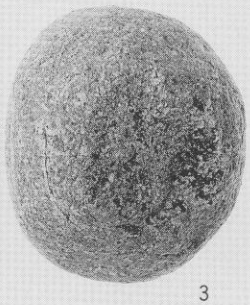
1



2



2



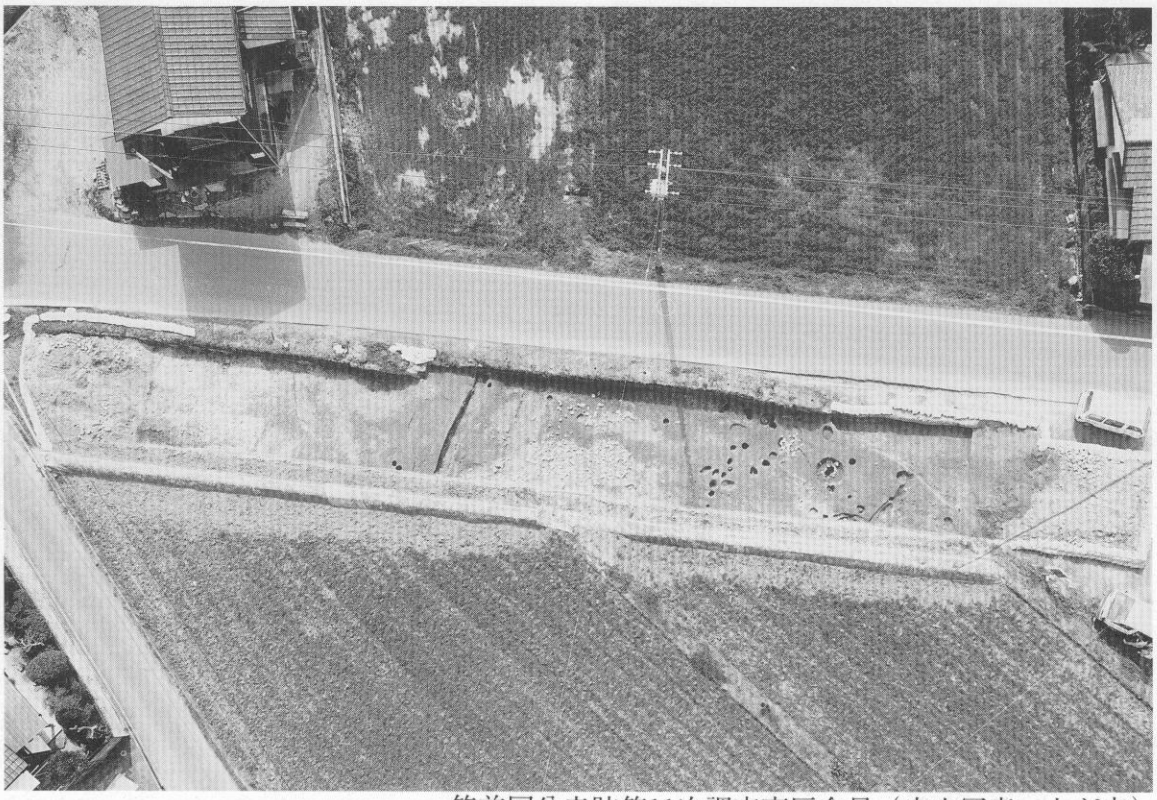
3



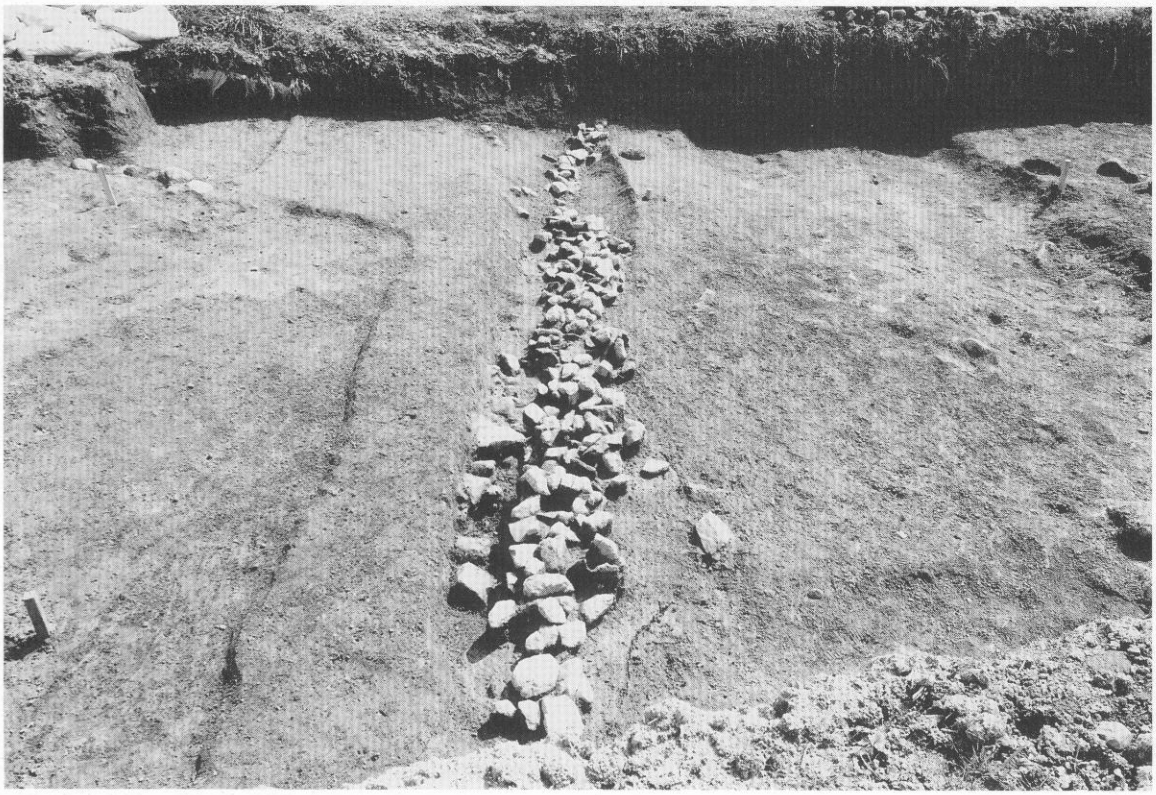
3

筑前国分尼寺跡第12次調査出土石器

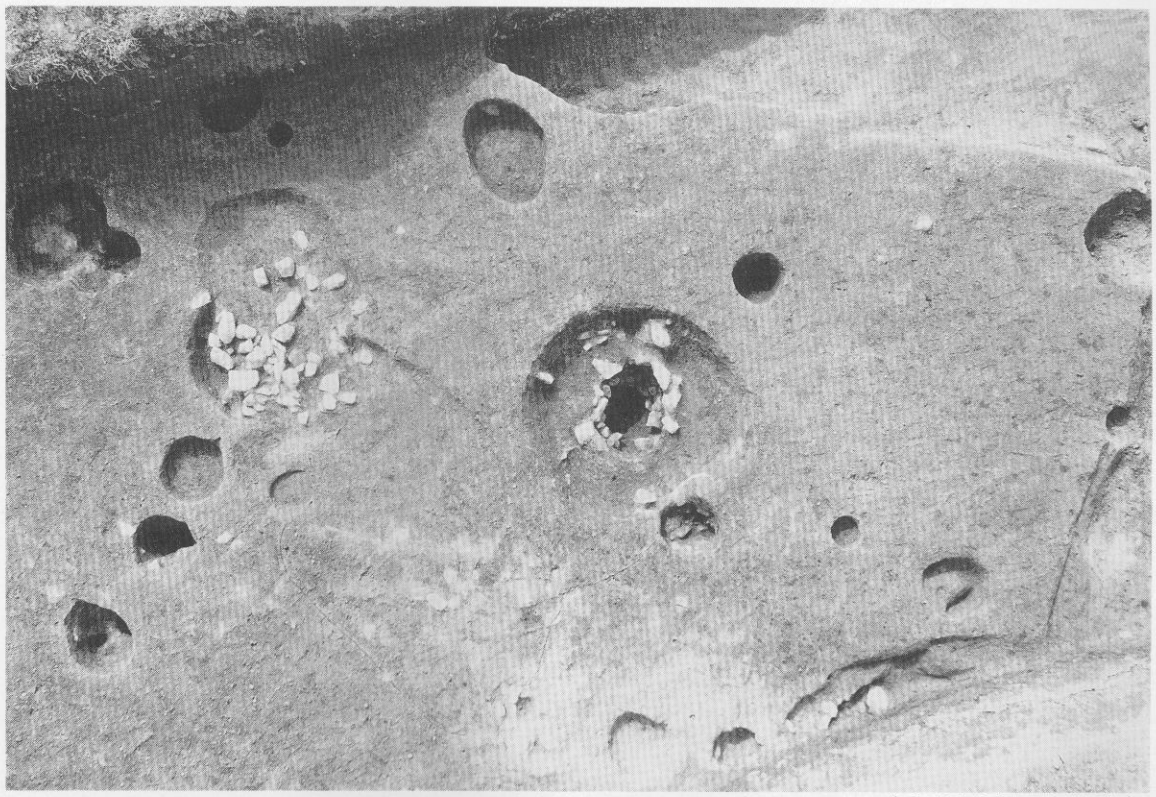
Pla.50



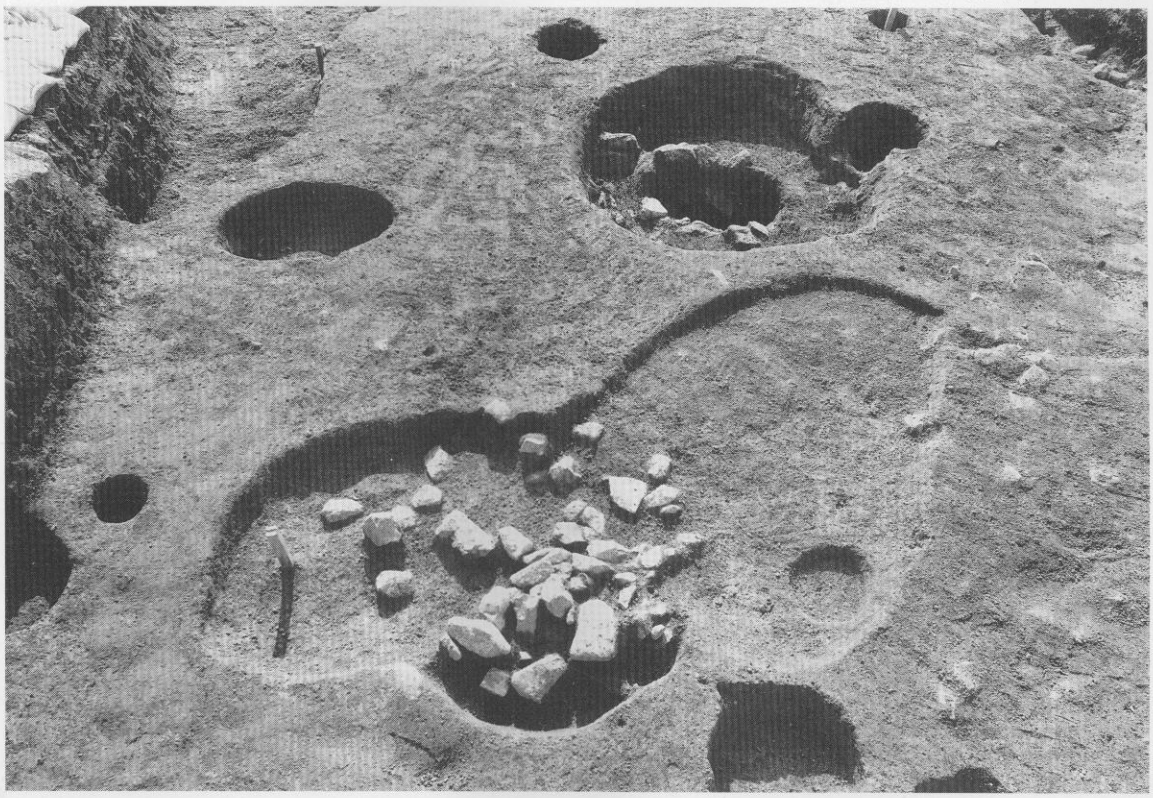
筑前国分寺跡第11次調査東区全景（空中写真、上が南）



11SD001 礫石群検出状況（北から）



11SK010・025・11SE015（空中写真、上が南）

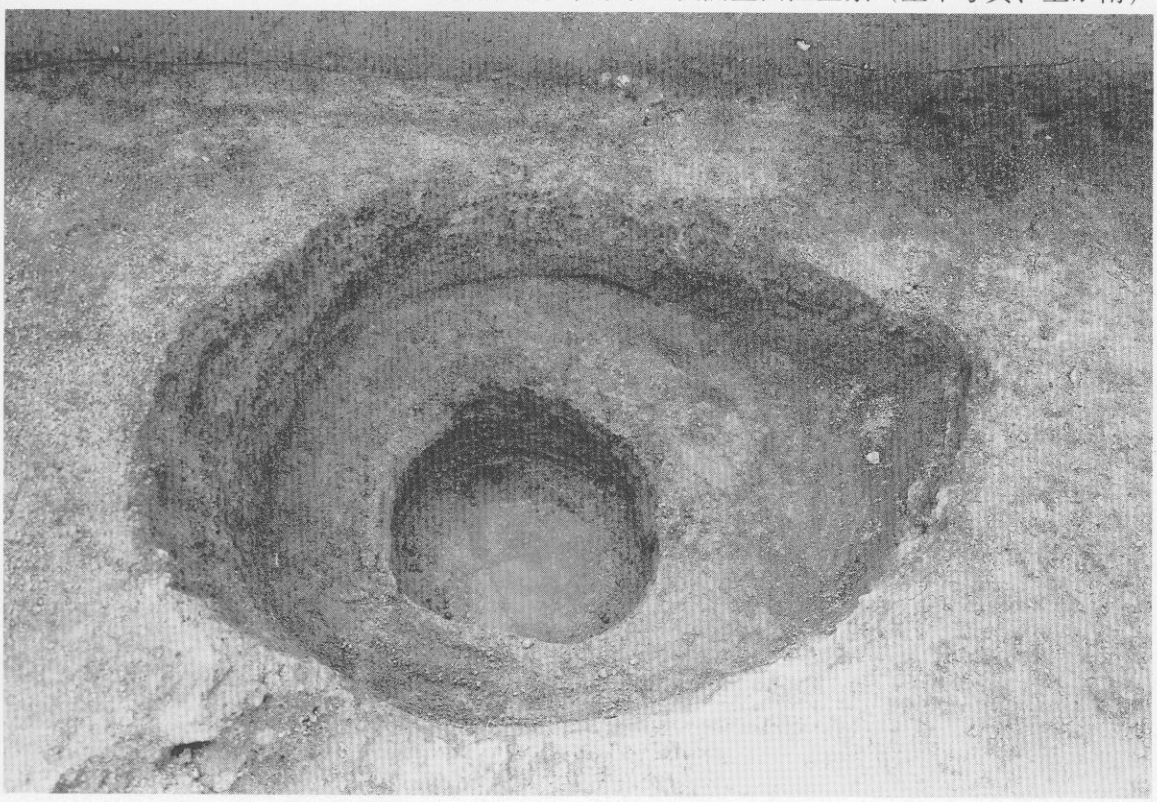


11SK010・025・11SE015（東から）

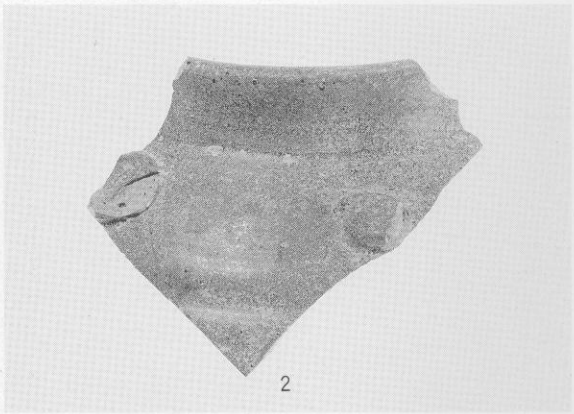
Pla.52

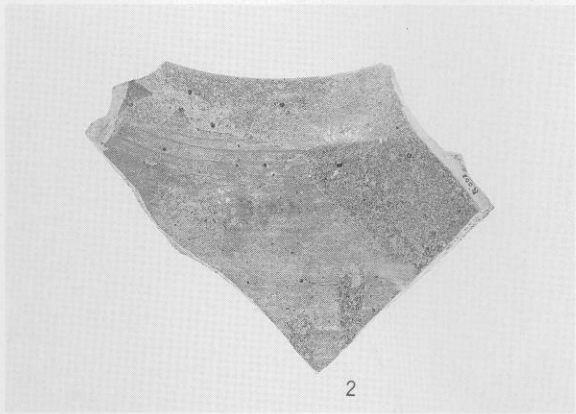


筑前国分寺跡第11次調査西区全景（空中写真、上が南）



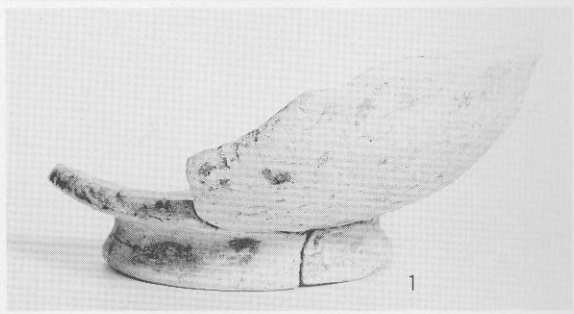
11SE040（北から）


2

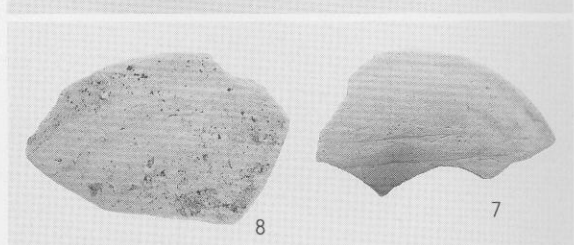

2

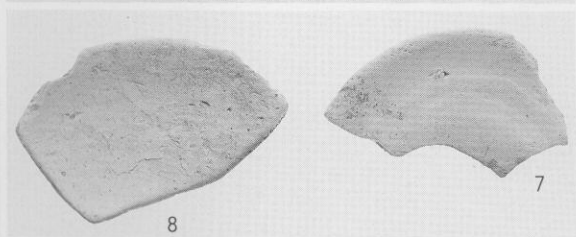

3

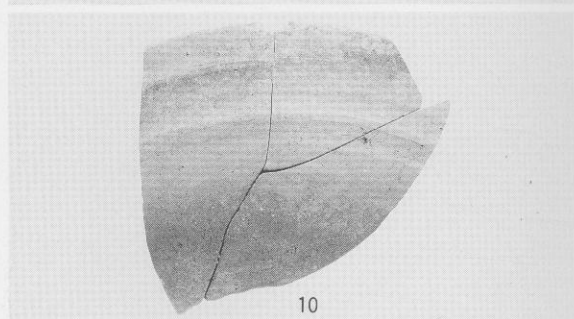

3

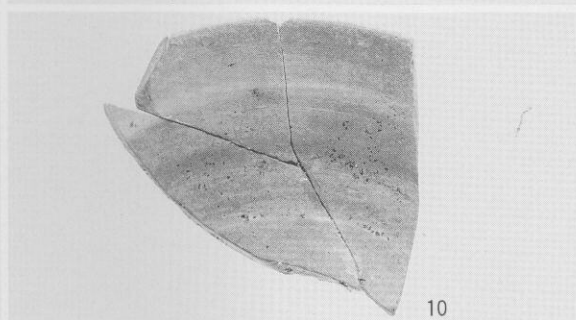

1


6


8 7

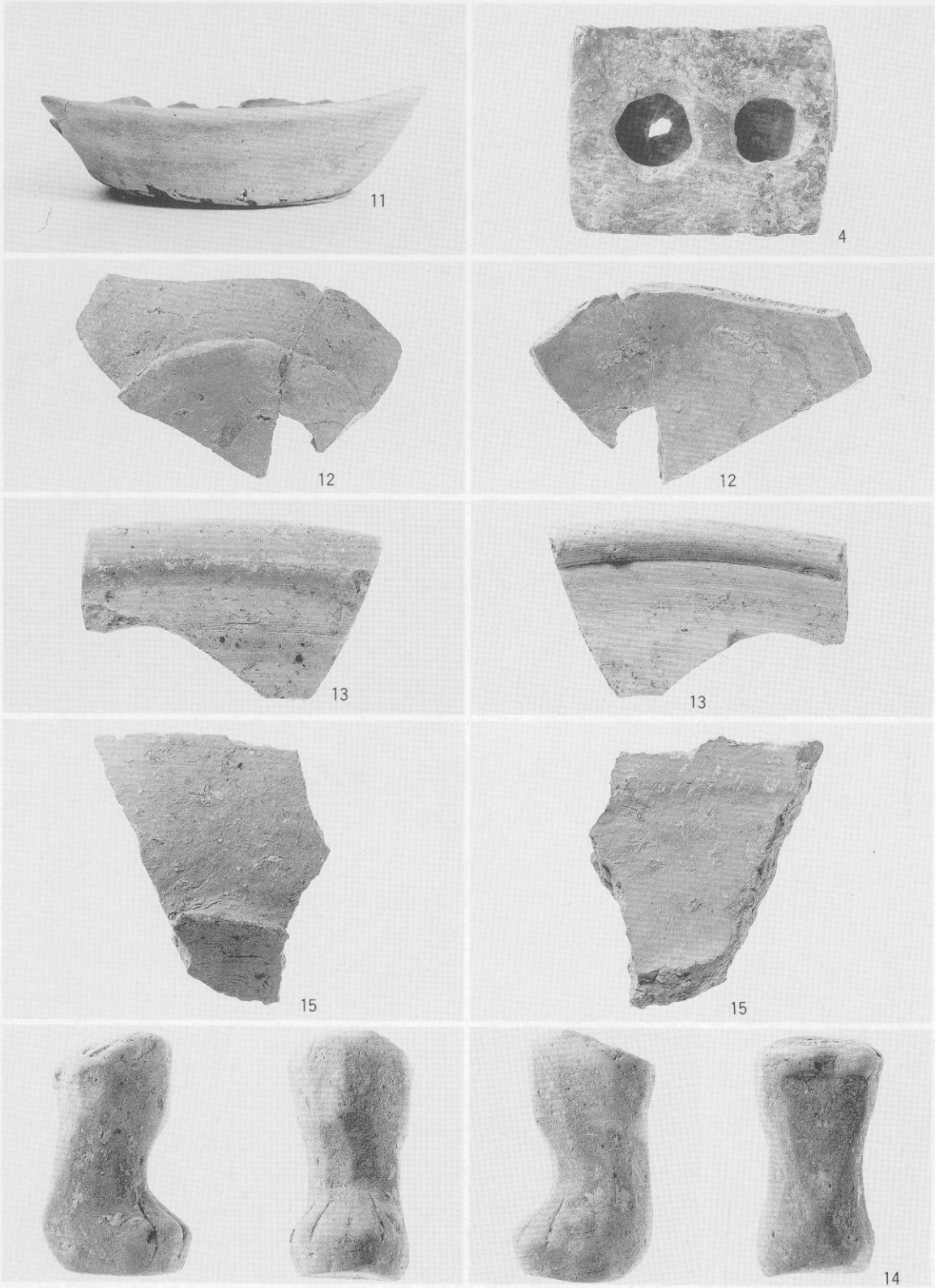

8 7


10


10

筑前国分寺跡第11次調査遺構出土土器

Pla.54



筑前国分寺跡第11次調査 11SD020・各層出土土器



発掘調査終了間近の市道田中―松本線（空中写真、西から）

筑前国分尼寺跡　Ⅱ

－太宰府市の文化財　第16集－

平成３年３月20日

発行　太宰府市教育委員会
太宰府市観世音寺86

印刷　瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神5-4-16